

東方天災手記

ベネト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷に存在する天狗の里には…

幻想郷の存在を脅かしかねない、とんでもない存在が封印されていた…

天狗の秘密兵器であり、高飛車で高慢な彼女の封印が今解き放たれる…

目次

第1章：天狗・・・幻想郷を知る

プロローグ 出所した問題児

人里の甘味と幻想郷

幻想郷の巫女と天狗の最終兵器

レイジング・クロウ

油断大敵

妖怪の山の暮らし

太陽畑にて

探索結果

人里へ

表は蕎麦屋

第2章：1stミッション 紅い霧を調査セヨ！

紅い霧

霧の湖と氷の妖精

紅い洋館

図書館と7つの属性

白黒と紅白

魔法使いと謎の力

運命とは

兵器の力

お仕事後の一服

新たな任務

潜入紅魔館！

潜入と異国の文化

153

146

139

134

124

117

106

97

86

79

72

64

58

51

47

37

31

26

22

17

11

1

紅魔館でのお仕事

幻想郷縁起・天逆

第3章：2ndミッション 異常気象を何とかせよ！

追憶

大雪注意報

早くもターゲット発見

THE猫

虹色の人形使い

漁夫の利

軍師と暗殺者のお仕事

嫌なデータ

妖怪の山でのルール

潜入白玉楼

白玉楼でのお茶会

臨時業務

新たな入隊

第4章：3rdミッション 宴会地獄の乗り越えヨ！

宴会？…それは仕事なのかしら？

お酒は程々に…

繰り返される惨劇

お酒に負けない！

大惨事会と大惨事大戦

宴もたけなわ

お酒の後は適度な睡眠

飛び入りと情報

竹林と積年の恨み

話し合いと未来の系譜

第5章：4thミッション 侵略を阻止せヨ！

歪んだ月

模倣&暗殺

ザ・テリトリー

ものまね暗殺者

ロンリースナイパー

司令官と参謀

ウエポンス・レイドバトル

存在意義

運命とは時に厳しいわん

月の兎

欠けた満月の夜に

不老不死の喧嘩騒ぎ

神社にて

暗殺者と狙撃手の一日

健康診断と話し合い

第6章：5thミッション 華の季節を取り戻せ！！

四季折々の華

鈴蘭畑とお人形

サンズリバー

観察にて

役所と書類

新聞の大暴落

344

352

361

369

382

392

399

410

418

426

430

439

446

452

466

479

487

493

499

507

515

520

530

太陽畑のティータイム	545
危険予知	551
第7章 : 6thミッション 守れ!山も同志モ!	
救難信号	556
潜入と現人神	562
本物の暴力	570
侵入	577
奇跡の軌跡	585
上には上がいる	592
暴れた結果	600
苦手な物と時間の経過	604

第1章：天狗・・・ 幻想郷を知る プロローグ 出所した問題児

幻想郷・・・

それは極東の地である国・・・ 日本にそれはあった・・・

人々から忘れられた者の訪れる最後の楽園・・・

幻想郷は全てを受け入れる・・・

その言葉は創始者である幻想郷の母・妖怪の賢者の八雲紫の言葉だ・・・

そしてここは幻想郷に存在する巨大な山こと妖怪の山・・・

天狗などの種族の妖怪が群れをなして暮らしている人にとっては危険な場所だ・・・

外部のよそ者の侵入を許さない天狗達の生活では妖怪の山がひとつの国として幻想郷に君臨している・・・

そして天狗の里の中にある。大きな屋敷のとある部屋ではそんな天狗社会に生きる天狗こと射命丸文が上司である大天狗に呼び出されていた・・・

side文

「来たな・・・ 射命丸よ」

「・・・ 何でしょう？」

上司である大天狗に呼ばれ私は執務室の中央に立つ・・・

何故私が呼ばれたのでしょうか？まだ昼食の途中だったのに急に呼び出すとは…

何か悪いことでもした？問題行動はやっていませんか？

せいぜい権を可愛がった程度です!!

…まさかセクハラで訴えられたのでしょうか？

上司は書類を見たまま話しを続ける

「今日の話というのはこの幻想郷の最近のことについてだ…」

「あや？」

良かった！問題行動の話ではないようです

これなら気楽に話が聞けるといいうものですね!!

「幻想郷の最近ですか？」

私の話上司は頷く

「幻想郷が出来て早数百年… 外の世界から様々な妖怪が出るようになった… それは知っているな？」

「ええ…」

確か情報では霧の湖に外界の館が出来たとか…

あれは確実に外の世界の妖怪が住み着いているとの噂です…

私は怖くて確かめる勇氣はありませんが…

「外の世界の妖怪の進出… 先週の会議で天狗の脅威になるとなつてな…」

「あやや… 確かに…」

天狗組織は妖怪の山の内部を起点に独自の生活を行っている閉鎖社会主義…

つまり外部から来た、よそ者に関しては特に警戒が強い傾向にあり

ます…

正直私は、その暮らしにはあまり良くは思っていないかもしれませんが仕方がありません…

上司は溜息をつきながら書類から目を離す

「儂はの？その会議での決議案には反対だったのだが…」

「決議案ですか？」

何の会議の決議案でしょう？

それが反対となると少し危機感が出始めましたね…

「ああ…」

上司は気乗りしないように話す…

少し話が長いです…

早く本題に入ってもらいたい…

私だって暇ではありませんから…

「その結果は何です？決議案とは？」

上司は腕を組む

「その会議で奴の封印を解くことが決定した…」

「!?奴!?封印ってまさか!!」

上司は頷く…

「天逆美羽… 奴の封印を解くことが決定した…」（あまさか みはね）

「天逆美羽ですって!!?」

天逆美羽…

遙か昔ふらつと妖怪山に住み着いた出生不明の天狗妖怪…

鬼の四天王を相手にして勝ったという伝説を持っています…

しかし… 自身が持て余す強すぎる力故に組織から危険視され、懲役900年天狗の里の中にある封印牢に幽閉されている…

まさか彼女の封印が解かれるとは…

「確か… 後200年くらいは封印されているのでは?」

「事態が変わった… 早い出所というわけだ… とりあえずこれを」

上司は私にごつごつした鍵を渡す…

「あの… これは?」

「奴の独房の鍵だ… 開けて来い…」

「!!?」

何を言っているんですかこの人は!!?

相手は鬼を倒せるほどの力を持っているのですよ!?

この私がどうかできるわけないじゃないですか!!

「何故私が?」

「たまたまお前が食堂にいたからだ… 別に誰でも良かった」

そんな! そんなことで私の人生を終わらせてしまうのですか!?

「いやいやいや!! 無理無理無理!!」

「給料… ボーナス2倍でどうだ？」

「うっ…」

… 正直喉から手が出る程欲しいですが
私の命は軽くない!!

ですが最近の文々。新聞の売り上げが下がりに下がっているので
お財布が寂しいのも事実…

少し交渉してみましよう…

「5倍で手を打ちましよう…」

「3倍でどうだ？」

「大負けに負けて4倍で…」

「… 3. 5」

「… 3. 8 (泣)」

「じゃあそれで良い」

上司は私が哀れにでも思ったのか3. 8で頷く…

勝った気がありますが…

胃が痛い

「行って来い…」

「… 逝ってきます」

私はその鍵を手に持ち封印牢へと歩を進める…

屋敷の地下へ続く階段を降り私は長い廊下を進んでいく…
石造りで無機質な風景…

その奥には札が貼られた鉄製の扉が佇んでいた…

「…う」

錠に手を触れるが濃厚な力を感じ手が止まる…

やらなくては…

ボーナスのため…

私の今後のため!!

「うぎに」

私は錠を開け中に入り目を開ける…

眼前には簡易ベットと机・トイレが置かれているだけのあいかわら

ずの殺風景な牢屋…

その部屋の中央に彼女はいた…

ボロボロの着物に手入れの届いていない長い灰色の髪、頭頂部のと
ころには湾曲した長いアホ毛がある…

黒い翼もイマイチ艶がない…

目は閉じていますが私の記憶だと青い瞳をしていたのを覚えてい
ます…

部屋の中央に座禅した状態の彼女は目を閉じたままこちらのほう
を向く

「予想通りの時間に来たわねえ… 射命丸文」

(天逆 美羽 (あまさか みはね) 通り名：????の司令官)

「目を閉じているのによく私だと気づきましたね?美羽…」

私の言葉に彼女はわずかに笑みを浮かべる…

「…ここに来た理由は分かっているわん…アタシの力が必要なのでしよう?」

「ご名答です…流石ですね天逆美羽」

「ふん…それを言われるの分かっているわあ…アタシは完璧なのだからねえ」

彼女が開眼すると青い瞳が現れる…

その瞳は怪しく光っている、まるですべての事を見透かすような雰囲気醸し出している…

これが天狗の最終兵器ですか…不思議な雰囲気です

私が観察していると彼女が座禅したまま浮遊する

「とりあえず!お風呂に入らせて!長い牢獄生活はアタシにとっては地獄だったのよ!」

「はいはい…とりあえずついて来て下さい!」

私は彼女を浴場まで先導する…

彼女は実力がありますがお嬢様気質で傲慢・高飛車・精神が子供に近いです…

一回ご機嫌を損ねたら私がとばっちりを受けかねません!!

少女?入浴中

「ふんふん」

扉1枚を挟んで彼女が大人しく入浴するのを観察する…

扉に彼女の女性らしいシルエツトが映る…

「…」ペたペた

負けていないと思います多分…
しばらく彼女を待っているとバスルームの戸が開く

「ふー！良い湯だったわ〜」

全裸で彼女が出てくる!?

「ちよつと！せめてタオルくらい巻いてくださいよ！」

「何なのよ… すぐ終わるわ…」

美羽は翼を軽く羽ばたいた後に目を閉じる

体に付着した水滴が消え、彼女の頭上に白の軍服のような衣装が現れる…

彼女は着たあと帽子をクルクル回しながら頭頂部のアホ毛を触る…

「やはりこの服装がしつくりくるわねえ…」

「あやや… では次は… 天魔様との話し合いでしたっけ？」

正直不安でしかありません…

美羽の傲慢な態度が天魔様の逆鱗に触れなければいいのですが…

彼女は呑気にキセルをふかしている…

時間が惜しいです… 早く向かわせないと

「次行きますよ！」

「ええ…」

私は美羽の手を引いて天魔様のいる部屋へと向かう

天魔様の屋敷についた私たちはアポをとった後、天魔様のいる部屋の前へ辿りつく…

「ここが天魔様の部屋です… 私は入れませんが失礼のないようにお

願いますよ?」

「はいはい... 指図されなくとも分かってるわ」

美羽は戸を開けて中に入る...

何とかなりますかね...

「やれやれ... とりあえずの事は一段落つきました...」

壁に寄りかかり一息つく...

何とかなりそうです... これは思ったより楽な任務かもしれないませ
んね...

「ふふふ... ボーナスイも弾みますねこれは!」

ぼこお!!

何やら部屋の中から鈍い音が...

しばらく待っていると戸が開き中から出てきたのは頭に大きなた
んこぶをつけた美羽の姿...

その表情は青筋が出ている!!

「ど... どうしました? 美羽!」

「... 頭が高いと殴られた... ふふ!!このアタシがねえ?」

美羽は拳を握りしめて歯ぎしりする...

うつすらと辺りの空間に歪みが!!!

マズイです! 早く彼女をコントロールしなくては!!

「み... 美羽? そういえば長い間牢屋にいたから幻想郷の事を良く知
らないでしょう?...これから説明しようと思ったのですけど?」

「幻想郷? 何? それは?」

美羽は私の話に食いつく...

彼女は900年も牢獄にいたんですから幻想郷のことを知らな

い…

幻想郷の話はこの話を逸らすには丁度良いですね!!

「ここではアレですし人里の甘味処へ行きますよ!」

私は彼女の手を引いて人里を目指す

早くこのことを忘れてもらわないと!!

はあ… 給料は上がりましたがけど心労も増えました…

人里の甘味と幻想郷

射命丸文と天逆美羽は人里の甘味処を目指す…

幻想郷の事を知らない美羽は天魔に殴られたことを忘れており、文も一安心といったところだ…

封印を解かれた天狗の最終兵器・天逆美羽が解放された現在…
幻想郷にもたらずのは吉か凶か…

それは誰にも分からない…

side文

「あやや… どうですか？ 幻想郷は」

「はくあ♪ 懐かしい青い空に澄んだ空気… 本当に久しぶりねえ」

美羽は嬉しそうに空を旋回し辺りを観察する…

無理ありませんか…

900年もあの封印牢で缶詰だったのですからね…

ご機嫌をとれたことは何とかなりましたが、彼女には制約がありません…

私は手元の書類を確認する

天逆美羽は強力な能力故に封印を施された云わば生きた爆弾みたいなもの…

それ故に彼女には色々と幻想郷のルール・自身の制約をしてもらわないと敵を作るきっかけになってしまうし、天狗としても危ない…

「美羽…？ 人里の甘味処にいたら色々と話があるのですが？」

「良いわよ♪ 後でならね」

彼女は私の話を流してそのまま滑空する…

… 本当に大丈夫かしら？

「… とりあえず里にいたら翼は畳んでもらわないと」

私は心の中で溜息をつきながら彼女を追う

人里に辿りつき私たちは翼を消して里の中へ入る…

ここは幻想郷で唯一の人が住んでいる場所であり、我々妖怪は姿を隠さないと大混乱になりかねません…

人と妖怪は食べられる立場・食べる立場となっています…

それにより人里では人を襲ってはいけないというルールが課せられていますのでこれをやぶることはご法度です！

まあ… 美羽に関しては人を襲うようなことはまず無いでしょう…

「中々の活気ね！」

「ええ！中々良い感じでしょ？すぐに好きになれますよー！とりあえず甘味処へ参りましょうー！」

美羽は人里の様子を興味があるように見回し私は彼女の手を引って張って甘味処を目指す…

甘味処についた私たちは席に座る…

美羽は店内を見回す…

「何か甘い匂いがするわね…」

「それはそうですよー！甘味処ですからね！甘い物でも食べながら貴女の今後のことについてのお話をしますよー！」

「できればもう少し観光をしたかったわ…」

彼女は残念そうな顔をするが不機嫌な雰囲気は出していない…

機嫌を損ねてはいないようだ…

「はいはい！注文をしてから始めますよ！お茶とケーキにしましょうかね…」

「…じゃあアタシは団子とお茶で」

各自注文を取った後、私は書類を机に広げ、美羽はキセルを取り出しそれを啜える…

「では始めますよ！まず今後の貴女の方針ですが…」

「はいはい…何かしら？」

彼女はキセルの煙を吐いて淡々と答える

「今後の貴女の役目は、我々天狗組織の剣となってもらいます…あらゆる問題の対処…それが貴女の仕事です…」

「何となくそんな事だろうとは思ってたわ…」

彼女はつまらなそうに煙を吐く…

「どうやら予想はついていたみたいですね…」

「理解はしているみたいですね…」

「ええ…元々そんな感じの役目だったし」

「とりあえずこの問題は通過完了…」

「ですが次が鬼門です！」

「なら…次…今度は貴女の能力ですが…」

「アタシの能力？」

「ええ…貴女の能力は極力使用は制限してください…」

「はあ!?問題の対処の他にアタシの力まで使用禁止なの!？」

彼女は私の言葉にやや不機嫌な顔をする…

「そればかりは我慢してください…貴女の能力は危険すぎますので対策をとらせていただきます…それに使用の禁止ではなく制限です…±20%ぐらいなら出しても問題はないでしょう」

「…仕方ないわね」

美羽は諦めたかのようにキセルをしまい溜息をつく…

「天狗組織のために諦めてくださいな…」

「ふん… その気になれば組織ごと潰すことだってできるのよ？あま
り舐めないで頂戴…」

彼女は僅かに妖気を流すがすぐに消す…

それもそう… ここは人里…

妖怪であることを人間にばれるわけにもいかないので彼女もあま
り公に事を荒立たせることはできない…

ちゃんと言う事は聞いてもらえていますね…

「では次のお話で最後です… この世界幻想郷について少し知っても
らいましょう…」

「幻想郷ね… 昔とどう違うのよ？日ノ本の情景と大差ないように思
えるけど？」

彼女は不思議そうに運ばれてきたお茶を啜る…

流石の彼女でもこの世界のことは知らないみたいね…

「ええ… 確かにここは日本… でもここは結界の中… 博麗大結界
によって外部から遮断された1つの世界なのですよ」

「結界の中ですよ!?そんなことが!」

「ええ… 結界の中ですよ？外の世界は我々妖怪にとっては住みづら
い世ですからね…」

「牢獄生活中にそんなことになっているとはね… ふふ！面白いじゃ
ない！」

美羽は笑みを浮かべて団子を口にする…

うーん… やはりこれくらいではそんなに驚きませんか…

「まあ… ここが結界の中の世界であるということ覚えてもらえば
幸いです… 後はそうですね…」

… せっかく博麗大結界のことを教えましたし、彼女のことも教え

ておきますか

一応この世界の必要な存在ですし…

「ついでに博麗の巫女について教えときましようか…」

「博麗の巫女？」

美羽は団子のクシを啜えながら私を見つめる…

「博麗大結界を守る幻想郷の守護者です！人間ですがね…」

人間と聞いた美羽は興味が無くなったのかクシを回している…

「ふん…この世界の結界を人間に任せるとは危ないわね」

「いえいえ…これが人間にしては強いんですよ…一応数多の妖怪が彼女によって退治されています…」

「…へえ」

「貴女でも危ないかもしれませんがねえ…」

書類を鞆に戻して私は再度彼女の方を向く…

「あや!?」

美羽の方を見るとさつきまでいた彼女がいない!?

「あやや!!どこへ行きましたか!!!」

まずい!彼女が勝手な真似をしたら私の立場が早くも危うくなる

!!!

私は甘味処を後にして彼女の行方を追う

同時刻…

ここは博麗神社…幻想郷の守護者である博麗の巫女の住居…

その境内にはその博麗の巫女である博麗霊夢がおり、彼女は日課である境内の掃除と賽銭箱のチェックを行っていた…

side 霊夢

「今日こそ… 今日こそ!!!」

私は意を決して賽銭箱を開く…

「…」

中身はカラ…

何ということなの… このお賽銭こそが私の収入源なのに!!

こんな山奥だから人が来ないのはわかって…

でも少しくらいはいい思いましたっけいいじゃないの!!

「はあ…」

お賽銭箱に寄りかかり私は石段の方を見つめる…

本日も人が来る気配はないみたいね

「空からお札でも降ってこないかしら? きゃ!!」

変な妄想をしていると突風が吹き込み私は目を閉じる…

「う…!?!」

「こんにちわあ!」

「!?!」

目を開けるとそこには灰色の長い髪をし黒い翼をもった女性が立っていた…

彼女は私を見つめて笑みを浮かべる…

幻想郷の巫女と天狗の最終兵器

side 霊夢

私の目の前には白い軍服を身に着けた女性がいる…
背中につけた黒い翼を見る限り妖怪みたいね…
しかし妖気とは違った力を感じるわ…

「アンタ何者？」

私がお祓い棒を向けると彼女はキセルを啜えて恐れることなく近づく…

彼女は私を観察するようにじろじろ眺めた後距離をとる…

「へえ… 聞いていた話よりは若いわねえ… 人間ながら中々の力を
感じるわ…」

「質問に答えなさいよ！」

彼女は一瞬不機嫌そうな顔をするがキセルの煙を吐き出す…

「天逆美羽… 一応妖怪の山天狗の組織に所属… 年齢は不詳… 趣味は剣道… 好きな食べ物は植物系の食べ物・嫌いなものは動物系の食べ物… これでいいかしら？」

彼女は面倒臭そうに頭を搔く…

天狗？

文の仲間かしら？

しかし天狗にしては違和感があるわね…

私が怪訝そうな顔をしていると美羽は溜息をつく…

「この人間は気が強いみたいね… アタシを見て驚かないとは…」
軍服の袖がめくられて彼女の左腕があらわになる…
彼女の手首には痛々しい傷があり、雑な縫合の痕が残っている…
美羽は片目を開けて私を見据える…

「しかし… 子供だとは思わなかったわあ… 何というか… 残念

ね…」

美羽は明後日の方向を見つける…

こいつ… 私をなめているみたいね…

博麗の巫女を怒らせたらどうなるか見せてやるわ…

「油断大敵よ!!」

私は彼女に向けて光弾を放つ…

美羽はその光弾を避けることなく見つめる…

「貴女がね…」

美羽が太刀を出現させて光弾を薙ぎ払い光弾を弾く!

光弾はそのまま私に向けてかえってくる!?

「っ?!二重結界!!」

結界を展開させ光弾から守る…

私の光弾を打ち返すなんて!!

「只の弾はじきよ… 別に驚く必要はないわよ」

彼女は欠伸をしながら太刀を納刀する…

油断しきっている感じだが実力は本物みたいね…

彼女は片目を開けて私を見つめる…

「しかし人間にしては実力はあるみたいね… アタシの方も本気が出せそうね…」

美羽は体から薄っすら力が沸かせるが彼女は何か思い出したかの
ように胸に手を当てる…

「ああ… 力は30… いや20%くらいをキープしないとね」

美羽の力が急激に弱まる…

「何で力を弱めたのかしら?」

「… 組織に属していると思う様にいかないのよ… まあアタシならこの程度で充分だけどね」

彼女は小太刀を出現させて背中にさし、私に向けて太刀を向ける…

「20%のアタシを止められるかしら?」

「なめんじゃないわよ!」

私は彼女の周りに光弾を大量に出現させる!

死角にも展開したわ!

私の力を持つてならこのくらい!!

「ふん!」

彼女が太刀を薙ぎ払うと光弾が全て弾かれる!!

「くっ!」

私はそれを避けて美羽と対峙するが彼女は笑みを浮かべるだけ…
退屈そうに太刀を担ぎキセルを吹かすだけ…

あきらかに本気を出していないのにこれとは!!

(… 何とかして彼女の隙を見つけないと!)

私は彼女を観察する…

特に攻撃するような素振りを見せないが隙らしいものは全く見当たらない!!

でも油断しきっていることを入れれば私にも勝機はあるわ!!

「アタシは攻撃はしないわよ? さあ! 1つくらいは当ててみれば?」

「ぐぐ…」

我慢よ霊夢!!

完璧なんて存在しない! 絶対に穴があるわ!!

「… ん?」

私は彼女のとある部分を観察する…

恐らく彼女が見えていない綻びかもしれないわ…

なら私にできることはただ1つ!!

「その綻びを崩すだけよー!」

私はスペルカードを宣言する…

「宝具（陰陽鬼神玉）」

私は巨大な陰陽玉を出現させて美羽に向けて投げる…

彼女は避ける素振りもせずにはせせら笑うだけ…

「ふん… 切断すれば終わりよ…」

太刀を抜刀し彼女は陰陽玉を切りつける…

陰陽玉は真つ二つに切られて境内に転がっていく…

カラン!!

金属音が響き境内に割れた太刀の刀身が突き刺さる…

美羽は刀身のない太刀を青い顔をして見つめている

「ア… アタシの刀が…」

「アンタの抜刀術は驚きよ… まさか私の陰陽玉まで切ってしまうん

だから… でも油断したわね」

「ゆ… 油断ですって?」

美羽はわなわな震えながら答える

「私の光弾を弾き返したときのアンタの刀の少しだけどヒビが入ったのよ… それに気づかないで鬼神陰陽玉を切ればそうなるわよね…」

「…っ!」

「さあー!反撃開始よー!もう一度鬼神陰陽玉!!」

私は再度陰陽玉を投げつける!!

美羽は空いた左手で背中に刺した小太刀を取る…

「だからって！勝負が決まったわけではないわ！」
彼女も陰陽玉を弾こうとする…

「ぐっ!!」

陰陽玉に小太刀が触れると陰陽玉ではなく彼女の小太刀が弾き飛ばされる…

そして陰陽玉は彼女の方に…

「うそでしょ…ぶっ!!」

陰陽玉は美羽の横頬を張り倒して美羽はそのまま後ろへ倒れる…

レイジング・クロウ

side 霊夢

神社の境内には倒れている美羽がいる…

かなりの力を感じたけど…

陰陽玉1発でダウンとはうたれ弱いようだ…

まあ… 実力を過信しすぎていたことが彼女の敗因であり私の勝

因ね…

「ふう… 妖怪退治完了…」

「ぐぐ…」

美羽が立ち上がる…

彼女は左腕を抑えている…

確かあそこの部分は大きな傷があつたわね…

「アンタの負けよ！大人しく天狗の里に帰りなさい！」

「ぐぐぐぐぐっ！」

美羽はうつむいてうなり始めている…

ばき!!

何かの破砕音が響く…

境内に落ちたのは美羽が啜っていたキセルの破片だった…

「面白く… ないわっ!!」

彼女はキセルを吐き出して私をにらみつける…
どどん殺気じみてきているわね…

「何よ？慢心して私の攻撃食らったのはアンタが悪いじゃない…
つまり敗因はアンタ自身つてわけ！」

「うっさい!!… こうなったら本気で潰してあげるわっ！」

美羽の体から濃厚な力があふれてくる…

「っ…」

かなりの量の力ね…

先ほどの戦いは美羽にとっては遊びに過ぎなかったみたいね…
彼女は力を高めながら高笑いする

「さあ…ここからが本気よおく！沢山虐めてあげるから覚悟…ぐっ
!!!」

急に彼女は笑みを崩して蹲る…

「…？」

何か様子がおかしいわね？

「… あ… アタシはまだ… 戦えるわよ？余計なことをするんじゃないわ！」

そのまま美羽は倒れる？

「… 何が起きたのよ？」

見た限り完全に気絶しているようだ…

しかし… これをどうしようかしら？

退治することもできるけど…

のちのち面倒なことが起きそう…

境内に寝かせとくわけにもいかないし…

「…はあ」

私は美羽の足を掴んで神社へと移動する…

「… 案外軽かったわね」

美羽を布団に寝かせる…

「すう…」

気絶しているというより寝ているといったほうがいいかしら？

何をしようとしたかは分からないけど彼女の自爆ということではないのかしらね？

「すみませーん！失礼しますよ!!」

「あ？」

突如居間に飛び込んできてのは天狗である射命丸文…

どうやら慌てているようだ

「ここにうちの天狗がきてませんか… って！居た!!」

「アンタのところの天狗よね？とっとと持って行ってくれないかしら？」

「え… まさか霊夢さんが美羽を？」

文は青い顔をする…

「… 途中までよ… 最終的に彼女が自滅したのよ… 何でかわからないけどね」

「… 美羽に勝つなんて… とりあえず！お邪魔しました!!」

美羽を抱えて文はその場から消える…
全く目まぐるしい一日だったわね…

「…」

しかし…

本気を出していないにしても美羽の實力は確かなものだった…

これが本気のものだったら…

「…見た限り天狗が一枚噛んでいるわねとりあえず彼女のごことは警戒しておくべきかしら」

私は布団に寝っ転がり情報を整理する…

油断大敵

博麗靈夢に敗北した天逆美羽は射命丸文に連れられて妖怪の山へと帰還する…

ダメージが大きかったのか？彼女は目を覚ますことなく深夜まで時を刻む…

side 美羽

「…ん」

目を開けると… 長年見慣れた無機質な牢獄の風景が目映る… 身を起こして記憶を整理すると、忌々しい現実がにじみだしてくる…

アタシは… あの巫女に負けたということ…

能力を使っていないとはいえ、地に伏したのだから…

この完璧だったアタシが敗北…

「…」

人間に負けたということは悔しいけど… あれは完全な敗北ではない…

あの子の邪魔さえ入らなければこんなことには!!

「柚神！出てきなさい!!」

アタシが暗い牢獄に向けて言い放つと声が響く…

(ええ… 畏まりましたとも… しかし… ワタシは… 貴女の為を思っただけのことなのですか?)

アタシの胸が光りだして牢獄の隅に光が照射される…

その光は人型へと変化していく…

灰色の長い髪にアタシと同じ黒の軍服…

緑色の目に片方の目にはスコープをつけており、彼女はアタシにお辞儀をする…

「…天逆柚神… 参りました… おっと！スコープに曇りが」（あまさか ゆうがみ）（通り名：パーフェクト・ミリタリースタッフ）
柚神はスコープを取り外して悪びれもなくハンカチでそれを磨いている…

「反省することはないの!?アタシの戦闘を邪魔して!!」
彼女はスコープのレンズを光に透かして眺めている…

「…反省？いえ？ワタシは貴女がやりすぎないように止めただけです… 落ち度などありません、昔と変わらず手加減を知りませんからね… ワタシがすっかりしないと貴女は破滅しかねませんから」
「アタシが… 破滅ですって!!」

「…ええ… 幻想郷の守護者である、博麗の巫女を貴女が相手するとなると幻想郷が滅びかねません… ですからワタシが止めたままで…」

柚神はスコープをつけてアタシを見つめる…

「後先のごとはよく考えた方がいいですよ？貴女の力は強大すぎる…」

「小言はいいわ！貴女の力の方もどうだと思っただけね!!」

柚神はハンカチを出して再度スコープを磨く…

「やれやれ… 困りますね…」

昔からの付き合いだけど、どうもこの子は気に障るわ…

「…とりあえず貴女はこの状況を理解しているのかしら？」

「ええ… 体を通して大体の話は頭に入りました… 説明は要りませんよ…」

「それならいいけど…」

まあ、頭は良いし余計なことは言わなくともいいかしら？

柚神は今度は部屋を見回す…

「… 以前から気になっていたのですが… 掃除してます？」

「うっさい!!乙女の事情に詮索するんじゃないわ!!」

「… お互い乙女という年は過ぎましたが？」

「ぐぐぐっ!!柚神〜!」

柚神は薄ら笑いを浮かべて壁に寄りかかる…

「… しかし… 今後の貴女の任務はこの幻想卿での荒事に着手することになりますね… 体はなまっていますませんか？」

「… 制約がかかっているけど問題はないわ… どんな問題でもアタシにかかれば…」

「油断大敵です」

「は？」

柚神は真剣な面持ちでアタシを見つめる

「… 先ほどの博麗の巫女との闘いを見ましたが、これがもし本当の殺し合いなら貴女は死んでいますよ？長い封印で勘が鈍ったのですから慢心は控えませんか…」

「貴女が邪魔しなければ!!」

「ワタシが着手する前に戦いの結末が決まっています… 貴女の負け… それを認めてください…」

「能力に制約が!!」

「… 自身の力を過信しない!」

「…」

… 負け… 負け… 負け

アタシの負け？

side 袖神

「そして… その左腕も本調子ではないのですし… もう少し控えめに行動を…」

「…」

黙り込んでしまいましたね？少し小言が過ぎましたか？

「ふう… これ以上は何も言いませんよ？自身の敗北をちゃんと受け止めてください…」

牢獄の外を見ると誰かがこちらにやってきましたね…

「ふむ…」

空間にホログラム画面を映し出すと、こちらにやってくるのは天狗の文の姿が見受けられる…

「まだ… 正体を知られるのは宜しくありませんね」

能力を発動してワタシの体を透明にしてその場をやり過ぐす…

そして牢獄に文が入ってくる…

「… 美羽？目が覚めましたか？驚きましたよ？まさか霊夢さんに挑んで敗北するなんて…」

文が美羽に近づき、様子をみると美羽の方は体を震わせる…

「… うつく!!」

「あや？」

「ぐやじいよー文ー!!何でアタシが人間に負けるのよー!!」

(… うわ)

まさかの大泣き… 余程負けたのがショックだったのでしょうか？

全く… これがワタシと…

（…文に任せましょう…とりあえず…データの収集でもしま
しょうかね）

美羽に任せるとなると些か不安が残ります…

ワタシに出来ることはワタシがやることにしましょう…

その場を後にして外へと向かう…

屋敷の外を出ると真つ暗な空が眼前に映る…

空に瞬く星たちはワタシと深淵の闇に光を照らす…

「…」

幻想卿ね…

幾多数多の犠牲の下に誕生した楽園…

うまくやっていけるといいのですがね…

「…杞憂ですかね？とりあえず一日使うとしますかね」

暗い森の中をワタシは歩を進める…

妖怪の山の暮らし

side 美羽

一晩が経過し、いつもどおりの朝の日差しが牢獄を照らす…
ベットから起きてアタシは昨日のことを思い出す…

「…はあ」

まさか泣くとは思わなかった…

負けたことはあるけど人間に負けたことなど今までなかったから、
それなりにシヨツクだったかもしれないわ…

「…はあー」

それどころかこの先、この幻想郷でやっていけるか心配になってき
た…

人間に負けるとなると…ほかの妖怪にだって負けてしまうかも
しれない…

アタシの実力が通用しないかも…

「… 柚神く？」

声をかけても柚神の返答はなし…

あいつ…どこかほっつき歩いてるわね？

余計な時に出てくるくせに肝心な時はいないんだから!!
アタシよりは頭が良いのだから… 傍にくらいいてよ…

「はあ… うだうだ考えても仕方ないわ… 気晴らしにでもいきま
しょう…」

牢獄を出てアタシは麓へ降りていく…

地理を把握してはいないけど、そのうちどこかに出るでしょ…

しばらく歩いていくと大きな滝が流れ落ちるポイントに到着する…

「… 絶景ね」

アタシは近くの岩に座り、その光景をぼーっと眺める…

牢獄ではこんな光景は見られない… こうやって色々眺めるのもいいかもしれないわ…

時間は余りに余っている…

こういうことに時間をつぶすのも一興ね…

アタシはキセルを取り出し啜える…

「… ふう… これで気分が晴れていけば… 心の底から楽しめるのにねえ…」

そして… 邪魔も無ければもつと良いのだけど…

後ろを見るとアタシに向けて大剣を向けている者がいる…

白い髪に天狗装束…

この子天狗かしら？

「何かようかしら？」

「… 貴様！何者だ!!ここは天狗の領域だ!部外者が入っていないものではない!!」

白い天狗はアタシに向けて言い放つ…

天狗の領域ね… 確かに里からあまり離れてはいないけど…

「それは知っているわ?そして部外者でもないのよねえ…」

アタシが翼を広げるとその子は怯む…

「翼?ですが!!貴女のような!天狗は今まで見たことがない!!正体を

明かしてください!!」

少し口調が柔らかくなっただけで警戒されているわね…

アタシの存在は末端に知らされていないのかしら?

キセルの煙を吐くと、その子は嫌悪感丸出しの顔でアタシを睨む…

「こ…こら!説明に答えなさい!!」

「二応…天狗組織のメンバーよ?一応紛い物だけど立場も上の方…天逆美羽…それがアタシの名前…貴女の名前は?」

その子は息を整えながら剣を握りしめる…警戒は怠らないようね…

「犬走権です…こここの哨戒天狗です」

哨戒天狗ね…

天狗組織のことなど興味なかったから分からないけど…階級的には下から数えた方が早いみたいね…

こここの警備をしているとなると何となく察しがつく…

「とりあえず…剣を下げてもらえる?」

「駄目です!侵入者の可能性もありますし!」

融通の利かない子ね…

しかし、このまま押し問答をしても悪戯に時間を浪費するだけね…

柚神の奴がいれば!丸く収まるというのに!!

しかたない!!

アタシは立ち上がり彼女と対峙する…

「気分じゃないから、こういうのはやりたくなかったけど…火の粉を払うにはこれよね?」

太刀を出して権に向けると彼女は殺気を出し始める…

「抵抗する気ですか… ならー！」

権はアタシに剣で切りかかるがアタシは後退してそれを避ける…

太刀筋は中々の腕前ね…

末端とはいえども実力は充分ね…

アタシは太刀の刃先を確認する、異常はなし!!

これでOK!!

「ちよいとー本気いくわよー！」

20%のところ今回は35%くらいにしましょうか…

side 権

… 彼女からの感じる力が強くなってくる

私だけで止められるでしょうか？

援軍呼んだほうがよかったかなあ…

「…む」

「じゃあー行くわよー！」

美羽は太刀を軽く振った後、納刀する!?

綺麗な太刀筋ですが、私までは届かない！

「… 攻撃しないんですか？」

「もう終わったわよ？」

美羽は髪を靡かせた後、私に近づく？

「これ以上近づくなら… 切りますよ？」

「その剣で？」

「!？」

剣を見ると先っぽがない！

少し遠くに目をやると、地面に突き刺さっている剣の先端が!!

「先っぽがないー!？」

「これで戦えないわねん？」

美羽は私に近づく…
… やられる!!まだ死にたくない!!
私は蹲り目を閉じる…

が… いつまでたつても彼女からの攻撃がこない?

「…?」

「あらあら… 別に怖がらなくてもいいわよ?」

しゃがんで頬杖をついている彼女が目映る…

敵意を全く感じません…

そして彼女は私を観察するように見つめる

「しかし、貴女は見込みがあるわね… 剣の腕前があるならアタシが教えてもいいわよ?」

「し… しかし… 貴女をまだ認めただけでは…」

「… はあ… なら!文にでもアタシの事を聞きなさいよ… それではつきりするわ」

!!文さんが?

… 文さんの名前を出すということは、この情報は確かな物と捕らえて良いのでしょうか?

本当の事ということは…

「も… 申し訳ございません!!」

私は彼女に土下座をする…

天狗組織の者を襲うとは!それも立場が上の者となると、始末書以上のモノです!!

「あらあら… 畏まらなくてもいいのよ?誰だつて過ちはあるものだし…」

彼女は遠い目をする…

何かあったのでしょうか?

「とりあえず？いいかしら？見なければいけないことが沢山あるからね…。」

「すみません！どうぞ!!」

頭を下げ、美羽さんの方を見ると、すでに彼女はいない？

「… 今度謝らないと」

私はそう思いながら、いつも見慣れた滝を眺める…

side 柚神

「あらら… すこしは大人になりましたかね？」

木の枝に座り、人里でもらった野菜を齧りながらワタシは美羽の方を見つめる…

あの粗暴で雑な彼女が、慎重に戦いを行ったというのは成長が見られたという証です…

これでワタシの肩の荷が下りるといふものです…

「… もう少し観察と行きたいですがね」

ワタシの横にはザルに沢山入った野菜が並々と置かれています…

少し貰い過ぎましたかね？

しかし新鮮なお野菜ですし、早く食べないと…

しかしそれには時間が…

「… 彼女は大丈夫でしょう！ワタシはワタシで楽しむとしましょう♪」

美羽を放っておいてワタシは自分のすべきことに着手することにしませうか♪

太陽畑にて

side美羽

「…しまった…迷ったわね…これは…」
山を下山した後、適当に草原をぶらぶらしていたら方向が分からなくなってしまうたわ…

人里を目指していたのに何てこと…

「…ちよつとまづいわねえ」

初めての幻想郷にて迷子となると、アタシの完璧なる功績に泥を塗ることになるわ…

何としてでも、人里にたどり着かなくては!!

「あらん?」

遠くを見ると何やら黄色い何かが見えるわ!!

あの方向が人里かしらね?

「…善は急げって奴かしら?」

アタシはその方向に足を進める…

「…違ったわあ」

目の前に映るのは咲き誇る向日葵達…

見た限り、畑といってもいいほどの量…

ここまで咲いていると、迷路ができるわね…

「目的の物とは違うけど…まあいいわ」

アタシはその花畑に侵入する…

幻想郷の事を知るにはちよつど良い機会だし何が起ころうとも問題はないわ…

向日葵畑を進んでいくと一軒の民家が目に映りアタシは歩を止める…

「この畑の主の家かしら？」

勝手に入っているわけだし、挨拶くらいはしたほうが良いわね？

「この世界で常識が通用するか分からないけど…」

アタシは戸をノックするが応答はない…

留守かしら？

「私に何か用かしら？」

「…？」

後ろを振り向くと、そこには緑色のショートヘアの女性がいた…

白のブラウスに赤のチェック柄のベスト・スカートを身に着けており、白い日傘を差している…

「どうやらこの主のようね…」

笑みを浮かべているけど、すごい嫌な感じがする…

薄っすらと殺気も感じるし…

「こんにちは… といったところかしら？この向日葵畑に入っちゃったから許可を貰おうと思ってね…」

「別にいいわよ？好きに見なさい」

女性はくるくると日傘を回しながらアタシへ近づく…

そしてアタシを観察する…

「… 貴女天狗かしら？それにしても変な力を感じるけど？」

「そうね… 天狗には違いないわね… 変わっているとは良く言われるわあ」

「そう…」

女性はアタシから距離を取り、向日葵畑を眺める…

「この向日葵達… 綺麗でしょ？」

「…確かに手入れするの大変じゃない？」

女性は頷く…

「大変よ…この沢山の向日葵達に栄養を均等にあげるのは骨が折れるわ…養分の素だって…そう簡単に手に入るわけではないからね…」

「…素？そんなに大変かしら？」

…植物って…日光と土からの栄養・水が必要だったわね？

ここは見た限り、それらに関して充分恵まれている気がするけど？

彼女は私に近づく…

「大変よ…だって…」

「ここに来る養分の素は滅多にこないんだもの！」

「!?」

彼女から距離をとると、さっきまでいた場所に小規模なクレーターができる…

「あら？速いわね？」

彼女は地面に突き刺さった日傘を抜いてアタシを見つめる…

笑みを浮かべているというより、威嚇かしら？

本来笑みというのは威嚇を意味するとどこかで聞いたわ…

「何をするのかしら？アタシは無抵抗だというのに？」

「無抵抗も関係はないわ…私の花畑に来てくれたのだから肥料になりに来てくれたのでしよう？」

彼女はアタシに傘を向ける…

ああ… トラブルに巻き込まれた感じね…
今度は地図を持ってきましょう…
しかし… この人は見た限り、かなりの実力者のようね…
力を抑えて戦うのは骨が折れるわ…
どうしょ…

「やめときなさいよ… アタシそれなりに強いわよ？」
「それでも全く構わないわ！最近骨のある子がいなくて退屈してたのよ… 貴女なら退屈はしなさそうね！」

彼女はアタシに近づき、傘を振り下ろす…
さっきのクレーターを見た限り、力がかんりの者…
防ぐのは得策ではないわ…

アタシは後退してそれを躲すが彼女は更に距離を詰める…
「破壊力を見て防ぐのは諦めたみたいだけど！それくらいは読めてい
るわ!!」

「!？」
傘がアタシのお腹に突き刺さる！

「ぐ…」
白い軍服が赤く染まっていく!?!
アタシがダメージを受けたというの？
「ああ…もう!!」

傘を引き抜き、アタシは彼女から距離をとる…
少しずつ痛みが増してきたわ…
ちよつと… 抑えないと…

「あら？まだ動けるのね？」

彼女は驚いた表情を浮かべてアタシを見つめる…
確かに深い傷を受けたけど、軟な鍛え方はしていないわ…

「… ええ… 気分は最悪だけどね！」

… やばいわ… イライラする

抑えなくてはいけないのに歯止めが利かないわ

彼女の方は黒い笑みを浮かべて傘についた血を払う…

「中々の殺気ね… 貴女のような血気盛んな天狗は初めてよ？最後に名前を覚えてくれるかしら？」

「天逆美羽よ… 最後つて何よ？最後つて!？」

「その怪我では私から逃げることはもうできないわ？だから最後に聞こうと思っただけよ…」

彼女はアタシの前に立ち傘を振りかぶる…

「そして私の名は風見幽香… おやすみなさい！無謀な天狗！」

side 幽香

私は美羽の頭めがけて傘を振り下ろす…

幾ら天狗とはいえ、重症を受けている！もう逃げることはできないわ！

ばきや!!

傘が彼女へと当たる…

手ごたえはあったわね…

少しは良い養分になつてくれそうね…

「…？」

傘を動かそうとすると傘が動かない？

良く美羽を見ると私が放った傘の打撃を手で握りしめていた！

「…中々の力…手が痺れるわね」

美羽は刀を出して私に切りかかろうとするが、私はそれを防いで後ろへ下がる…

「…おかしいわね？手加減はしていないはずだけど？」

さっきの彼女は私の力量を判断して受けるのではなく、避けることを選んだのには？

今の彼女から感じるのは力という力…

まさに彼女自身がエネルギー体のような…

「…ちよつと本気だただけよ…70%出せば大体の攻撃は防げるわ…」

美羽の体から力があふれだしてくる…

先ほどとは違い…濃い力が！

「…本気を出していなかったのかしら？」

「…そんなところよ…組織から本気は出すと言われてるからね…でも」

更に彼女の体から力があふれだしてくる…

「100%…貴女になら特例でやっても問題ないわよね？」

そう言い放つと美羽の姿が消える!?

馬鹿な！あれだけの傷を受けていたというのに!!

この私の目をもってしても姿を捕らえないなんて!!

「アハハ！」

「アハハよ…アハハ…」

美羽は私の背後に現れる…

私はとつさに反撃をしようとするが腹部に激痛が走る！

「うぐー！」

私の体に大きな衝撃が走る…

今まで受けたことが無い程の重い一撃…

まさか、この僅かな時間に彼女の攻撃を受けたというの？

裂傷はない…

ということは私が受けたのは打撃か…

「気づくのが遅いわ… アタシが現役だったら死んでるわよ？」

美羽は溜息をつき、自身の服についた血痕を眺める…

「… あゝあ… 全くアタシの一張羅が…」

美羽が軽く手を振ると軍服についた血痕が跡形もなく消える？

何かの能力かしら？

それなりにダメージは受けたけどまだいけるわ…

「… まだよー！」

私が立ち上がると美羽はキセルを吹かす…

「これ以上はやめときなさい… アタシの本気の一撃を受けたのだもの… 逆に生きている今に感謝したほうがいいわよ？」

虚空に彼女は煙を吐き出して首を鳴らす…

そして沈む夕日を眺めている

「… 今日はいこまでね… 明日は地図でももってこようかしら？」

独り言を言い終えると彼女の姿が消える…

見た限りだと、そこらへんにいる妖怪なのに中々の力をもっているみたいね…

でもあの力の量を見て、私の経験上から考えるに相当な数の命を殺めている… 同類だから… 嫌でもわかるわ…

でも天狗にあんな子いたかしら？

「…ちっ！」

体を動かそうとすると体に悲鳴が走る…

思ったよりダメージが大きい…

逃がした獲物も大きいけど、それ以上に私に対するリスクが大きかったみたいね…

「…あらあら… 美羽は本気を出しましたか」

「!？」

声のする方向を見ると、そこには美羽と同じ灰色の長い髪をした女性_性がいた…

黒い軍服を身に着けており、片目にはスコープをつけている…

両手にはザルを抱えており、沢山盛られた野菜にかじりついている…

「ボリボリ… 本気は出すなど言われているのにいけませんね… ボリボリ… まあバレることはありませんが、ボリボリ… 自重して頂きます」と…

独り言のように小言を言う彼女は私の方を向く

「シヤク… 大丈夫ですか？美羽の100%の攻撃を受けて、シヤク… まだ生きているなんて驚きですよ…」

「貴女何者？」

彼女は迷ったような表情を浮かべるがすぐに消す…

「… 柚神と申します… 只の美羽がやり過ぎないように見ているだけですよ」

そして柚神は私の体を眺める

「…ダメージが大きいみたいですね」

柚神が手を当てると光が私の体を包み込む…

温かい感触が体を巡るとさつき受けた痛みが引いてくる…

「…?」

「軽い応急処置です…しばらくは安静にしていたほうがいいですよ？」

柚神はそう言うのとトマトを齧りながら向日葵畑を眺める…

「良い風景ですね…これは良いデータになりますよ…」

「…」

物腰柔らかかそうな雰囲気醸し出しているけど、美羽と同じく数えきれないほどの命を殺めた者と同じ空気を醸しだしている…

彼女の仲間かしら？

「貴女…美羽の仲間かしら？」

「…仲間ですか？ん？戦友といったほうが近いですかね？」

柚神はナスを啜えながら空間をいじり出してホログラム画面を出す…

それをしばらく見つめた後、啜えているナスを齧る…

「ふむ…天狗の里に戻るみたいですね…今日の監視はここまでにしときますようか…」

そして彼女は私を見つめる…

「では！お疲れ様です！さつきも言いましたがしばらく安静にしていたほうがいいですよ？ワタシが施したのは簡単な応急手当ですのでね…」

そう言うのと柚神は野菜をかじりながら向日葵畑の奥へと消えていく…

「…」

強力な力を持っているみたいだけど、そこまで過激な方ではないみたいね…

何というか不思議な存在に会った気がするわね…

負けたというのにあまり悔しくないわ…

沈む夕日を眺めながら、私は体に鞭を打って自宅へと戻る…

探索結果

side美羽

「ふう〜♪久しぶりに本気がだせたかも♪」

アタシはスキップしながら、自室である牢屋を目指す…

幽香も中々強かったし！

この幻想郷には興味が尽きないわ！

他にどんなものがあるのかしらね？

牢屋の戸を開けてアタシは中に入る…

「おかえりなさい… 楽しかったですか？」

「…」

牢屋のベットのの上には柚神が野菜を齧りながら笑顔で待っていた…

こいつ… 今までどこをほっつき歩いていたのよ!!

明らかに手に持っている野菜はお土産っぽい!!

「… アンタどこにいた？」

「ん？人里でお野菜を頂いた後は… そこらへんを探索していましたね？貴女もどうぞ！」

柚神はキュウリをアタシに投げ、アタシをそれを受けとる…

「… ぽり… アンタも中々充実した一日を過ごしたみたいじゃない？」

「ええ！おかげで運動不足も解消できましたし…」

… 運動不足ねえ

デスクワーク型が何を言っているんだか…

「まあ… アタシも中々楽しかったわ… 強い妖怪にあってそれなりの力で戦って…」

「100%の力でしよう？」

「柚神はスコープを外して軍服にしよう…」

「こいつ…見ていたのね…」

「探索って…アタシのことは見ていたの？」

「ええ！100%の力を出した貴女は輝いていましたとも！意外に…腕は落ちていないみたいですね」

「…それはそうよ…出所して±20%を制限されていたからね…」

「100%何ていつぶりかしら？」

「何？100%出したことを咎めようというの？」

「アタシが言うが柚神は首を横に振る」

「これはいいじゃないですか？相手も相手でしたし…良い判断だと思いますよ？天狗の方は何も知らないでしょうね？ワタシが少し手を加えたので…」

「…アンタお得意の隠蔽ってやつ？」

「隠蔽とは失礼な！」

「柚神はムツとするがアタシは正しいことを言ったままでよ…」

「こいつの能力はアタシより性質が悪い…」

「じんわりじんわり… 鬻り殺していく悪魔の能力といったほうが正しいわね…」

「… まあいいです… それより！こちらはいかがです？」

「ベットの下に手を伸ばし酒瓶とおつまみを次々と床に置いていく…」

「… 随分と豪勢じゃない？お酒何て久しぶりよ！」

「一杯やりましょう！ワタシ達の門出を祝ってですがね」

「柚神はおちよこをアタシに出してお酒を注ぐ…」

「アタシもついでに彼女のおちよこにお酒を注ぐ…」

「まあこういうのも悪くないわ…」

「では乾杯！」

「はいはい！乾杯〜！」

おちよこで乾杯しアタシは格子の外を見る…

真つ暗になった夜空に、静まった山の風景が見える…

思い返してみれば、今日は本当に面白かったわ…

できることなら… 平和に過ごしてみたいかも…

(… 無理よね)

アタシたちは兵器そのもの… 戦うことが存在理由だものね…

そろそろ任務も入りそうだし、だらけてはいられないわ…

(美羽様… 貴女の部下で幸せでした…)

(貴女の… ために死ねて本望です)

「っ…」

「どうしました？」

柚神が首をかしげる…

「あく… 嫌なこと… 思い出した…」

アタシはキセルを啜えて思考をリセットする

もう… ああいうこと沢山だし、アタシが頑張るしか道は残されて

いない…

黒い煙と死臭で満たされた過去は… 明るい未来で払拭しない

と…

「柚神… これからも宜しく…」

「はい…(ちら)こそ…」

アタシとこいつが居れば任務はミスせずにできるでしょう…

過ちは繰り返してはならないわ…

夜空に浮かぶ月を眺めながらアタシは酒を飲む…

side 袖神

(あらあら…昔のことを思い出して荒れ始めましたかね?)
少し不機嫌になった美羽を眺めながらワタシは酒をすす…
あの血生臭い惨劇から、もう何百年経過したのででしょうか?
ワタシとしてもその光景はデータに入っています…
忘れてはいけません…あのことはね…

「…」

しかし美羽が無理しないようにキープするのもワタシの役目です…

大体の荒事は彼女にやってもらいますが、そのバックアップはワタシにお任せください…

貴女が破裂しないように…ワタシも頑張りますから…

人里へ

side美羽

翌日となり、アタシは地図を持って天狗の里から人里へと移動する…

昨日は地図から考えて… 反対方向に進んでいたみたいね…

「… あら？ あれかしら？」

遠くにはこの前向かった人里が見える…

今日はあれを探索して終えるとしますか…

「つとーストップ！」

アタシは人里に入る前に自分の姿を確認する…

翼は畳めば問題はないけど、この軍服目立つかしら？

確か五月蠅い上層部は目立つことはやめるとか言っていたし、目立たないようにしないとねえ…

「仕方ないわねえ…」

牢獄で拾った外の世界のファッション雑誌を眺めた後、アタシは気に入った服を出現させてそれに着替える…

深緑のジャケットにTシャツ・迷彩柄のズボン…

とりあえず問題はないわね！

「これで一安心… というわけにはいかないか…」

人里の方を見ると何やら騒がしいわ、何か嫌な予感がするわね…

「こちら… お忍びだというのにね」

アタシはそのまま人里の中へと入っていく…

「ぎしやあああああ!!」

「子供を返して!!!」

「…駄目だ！近づいたら危ない！！」

里の中は混乱に陥っていた…

里の中央には大きなムカデの妖怪が人里の子供を捕らえていたからだ…

確か文の話だと人里の中の人間を妖怪が襲うことはタブーだったような気がする…

詳しくは覚えてないけど、こうもあっさり不干渉が破られるとなると条約の意味をなさないわ…

アタシはキセルに火をつけて辺りを見回す…

ムカデの妖怪の近くには捕らえられた子供とその親であろう女性が一人…

そしてその女性を止めている。もう一人の女性がいるくらいで辺りの大人の姿が見えない…

流石の人間でも妖怪の退治はできないようみたいね…

「ふー… お忍びできたというのに… まあアタシには関係のないこと…」

「きしやー！！」

「あ？」

ムカデの方を見るとアタシの方を見つめている…

何か… すごい嫌な予感がするわ…

そして母親を止めていた女性がアタシに向かって叫ぶ

「そこのお前！キセルの火を消せ！！それで奴が反応しているんだ！！」

「…キセル… ああ…これが原因なのね…」

…アタシ自らが厄介事の原因をつくるとは

ただ… 観光がしたかったただけだというのにね…

side?

「きしやー!!」

ムカデ妖怪は子供を離して、女性の方へ向かっていく!

「ふー!」

「おい!聞いているのか!!」

ムカデが近づいているというのに女性がキセルを咥えてムカデを見つめているだけだ!!

長い灰色の髪をしているが服装からして外来人!妖怪の恐ろしさを知らないのか!?

「きしやああ!!」

「ふー... 20%でいいわね... これくらいなら」

「拳1つだけで充分よね!」

「ぎしやああああ!!」

女性がムカデ妖怪の頭部を殴り飛ばしてムカデ妖怪が吹き飛ばす!

「馬鹿な!」

見た限り10代中盤か後半くらいの人間の女が妖怪を殴り飛ばすだど!?

只の外来人ではないのか?

女性はキセルの煙を吹きながらムカデ妖怪に近づいて頭部に片足を乗つける...

「はい!終了!!」

ぐちゃ!!

女性が足に力を込めて踏みつけを行うと嫌な音を立てながらムカデの頭部が地面へ埋没する...

そして辺りにはムカデ妖怪の血があふれている...

「…あ… 返り血が…」

女性は嫌悪感丸出しの顔をした後、ズボンについた血を払っている…

それは… あんな勢いで踏んづければそれは返り血の1つはつく…

「!?」

一瞬の光景だが、血を払っている彼女の左腕が発光しズボンに付着した血を消滅させていた…

そして少し感じた力のようなもの… 何かの能力なのか？

「全く… お忍びだというのに… この服だって、おにゅーだというのに」

ぶつぶつ言いながら彼女はムカデを背にしてキセルの煙を吐く… 「!?」

彼女の背後を見ると先ほど倒されていたはずのムカデ妖怪が頭部のないまま再び起き上がる!!?

そしてムカデ妖怪は尾の針を彼女へ向ける！

まずい！彼女は気づいていない!!

私は彼女のもとへ走る！

「おい!!まだ生きてるぞ!!」

「… あらん？」

彼女はムカデ妖怪の方を振り向くが、すでにムカデ妖怪の方は攻撃準備に入っている!!

間に会ってくれ!!

私はスペルカードを取り出す！

「国符！」

「油断はいけませんね…」

私の背後から声が響き、ムカデ妖怪は光帯びた檻に閉じ込められる！！

背後を見るとそこには、水色のダウンジャケットに白のキャミソール・黒のミニスカートの外來人風の服装に身を包んだ灰色の長い髪の毛の女性がいた…

何やら彼女は空間に何かを出現させて、それを指で突いている…

「… 何だ… 貴女も来てたの？」

「ええ… ワタシもこのことは知りたいですし」

どうやら互いに顔見知りのようだ…

しかしこの2人…

服装と少しの違いを除けば瓜二つだ…

キセルを吸っている方はムカデ妖怪を眺めている…

「貴女がいなかったら危なかったかも…」

空間をいじっている方はそれを笑みを浮かべて眺めている…

「早く終わりにしましょう？時間は有限ですし…」

「分かったわよん… 今度は… 60%くらいで!!」

キセルを啜えている方は飛び上がりムカデ妖怪の体に掌底を放つ！

ムカデ妖怪の方は嫌な音を立てながら地面にめり込むように地面に沈んでいき、その姿を消す…

人里に残ったのは大きな大穴…

ムカデ妖怪の墓穴というべきだろうか？

キセルを啜えている方は墓穴にしゃがんで、それを眺めている…

「柚神？隠蔽できる？」

「はいはい… できますよ〜」

柚神と呼ばれた方が空間をいじると墓穴が徐々に狭まっていき、綺麗さっぱり元通りの地面になる…

こつちの方も何かの能力者なのか？

あまりにも戦い慣れし過ぎている…

キセルを啜えている方は伸びをしながら立ち上がる…

「ん〜！… しかし… 簡単とはいえ、こんなことに巻き込まれるなんてねえ」

「ついていなかった… それだけですよ…」

そしてキセルを啜えている方は、柚神と呼ばれた方を眺める…

「しかし… 貴女その格好は何？」

「… 変ですか？ 一応普段の物では目立つので… 参考資料に目を通したのですが？」

「いや？ 変じゃないわ… 新鮮な感じよ…」

キセルを啜えている方は明後日の方向に煙を吐き、柚神と呼ばれた方は顔を赤らめている…

そして彼女たちは人里の方へ歩を進めていく…

「とりあえず… この後どうする？」

「… そうですね… お昼も近いですし、どこかでお食事といきたいですね…」

まずい！ 何もしないうちに彼女たちがいなくなってしまう！！

「待ってくれ!!」

「あらっ？」

「何でしょう？」

私の言葉に彼女たちが反応する…

「妖怪から子供を救ってくれて感謝する！私はこの里で寺子屋を開いている上白沢慧音という者だ！」

キセルを啜えている方は半目で頭を掻きながら、私の方を振り向く…

「ただ…火の粉が飛んできたから消しただけよ…感謝されることはないわあ」

「ワタシの方は美羽が危険だったので…助太刀に」

「…その話はいいでしょ」

美羽と呼ばれた方は柚神と呼ばれた方を向いてバツの悪い顔をする…

美羽と柚神か…

まあ…今回の事は偶然だったにしろ、彼女たちが子供を救出してくれたことは事実！

私としても何かしないと気が収まらない！

「まあ…そう言うな！お昼がまだなのだろう？私が人里のそばをごちそうするから！礼をさせてくれ…」

2人は顔を見合わせる…

「…どうしようかしら？」

「ワタシ達もこの事は知りませんし…この際お世話になるのもいいかもしれませんよ？」

彼女たちは頷いた後私の方を向く…

「それなら…うん…」

「お言葉に甘えて…」

決まりだな！

「では案内する！ついてきてくれ!!」

私は彼女たちの手を引っ張り蕎麦屋の方へ向かう…

礼もかねてだが、彼女たちの経歴のことも気になるしな…

表は蕎麦屋

天逆美羽と柚神は人里での軽い問題を解決し、人里の守護者である
上白沢慧音と出会う…

慧音の提案により、人里で蕎麦をごちそうになる2人は内心は心を
躍らせていた…

慧音の方は圧倒的力を持つ彼女たちの正体に興味を持っており、食
事の際に色々と聞いてみようと考えているようだ…

side 慧音

「ずるるる…」

「ずるるる…」

蕎麦屋にて美羽と柚神の2人は、私の目の前で蕎麦を啜ってい
る…

昼食前だったため、お腹を空かせていたのか良い笑顔をしてい
る…

まあ… この蕎麦屋も中々人気な店だからな…

今でも他の客が入っているし、席も混み始めを見せている…

初見の人でもこの蕎麦の美味しさは分かるだろう…

しかし… 随分とこの二人は似ているな？

違うのは、目の色だけでありそれ以外はすべて一緒だ…

服装からして外来人のようだが？

「貴女たちは外来人なのか？」

「がいらい？」

「じんですか？」

二人は言葉を分けて話す？

「どうやら外来人という言葉を知らないようだ？」

「簡単に話すが？この幻想郷が外の世界から隔離されている世界ということは知っているな？」

「ああ…聞いたわね…そんな話」

「ええ…確かにその様ですがね…」

「幻想郷の事は知っているみたいだ…」

「つまりだ！外来人の事を簡単に言うとなりの世界から幻想郷へ来た人間ということを指すんだ…つまり貴女たちは…」

「いや？気づいたらここにいたねえ…外の世界がどうなっているか知らないし…」

「右に同じく…」

「美羽たちの言い分では外来人ではないみたいだ…」

「そうなのか？服からしてそんな感じだと思ったのだが？」

「牢で拾った雑誌通りにしただけよ…」

「美羽は蕎麦を食べ終わったのか蕎麦汁にお湯を入れている…」

「牢？」

「何で牢屋が出てくるんだ？」

「今の失言に気づいた美羽は口を押える…」

「おっと…しまったわ…」

「自分の情報をべらべら話すからこうなるんですよ…」

「柚神は蕎麦汁にお湯を入れずに啜っている…」

「外来人じゃないとしたら？お前らは一体？」

「ごちそうさま…」

「美羽は両手を合わせた後、隣の柚神を見る」

「いつも通りのお願いね？」

「はいはい・・・」

柚神が空間に何か出現させ、それを弄っている・・・

「ん？」

「う？」

「・・・」

辺りの客や店の者を見ると全員が倒れてはじめている!?

「どうしたんだ？」

まさか！里の者達は柚神の能力で？

「貴様!!里の者に手を出すとは!!」

私は席から離れて彼女たちと対峙するが、双方とも私と見つめるだけだ・・・

「話ができる環境を作っただけだよ・・・」

美羽はキセルを吸いながら答える・・・

「貴様らー！」

いきり立つ私を柚神は止めに入る・・・

「ご安心を・・・ただワタシの能力で眠らせただけです・・・何も心配はいりません・・・」

「!？」

柚神の言葉に私は近くの里の者の体に触れる・・・

規則正しい寝息をしている・・・

本当に眠っているのか？

「ねっ？」

柚神は残ったお新香を食べている・・・

どうやら本当に話し合う環境を作っただけらしい・・・

しかし何故？こんな面倒なことを？

「そうみたいだな…」

私は席に座りなおしておいてある水を飲む…

さて何から切り出すべきか…

「… お前らの正体は何だ？」

私の問いかけに頬杖をついた状態でキセルの煙を明後日の方向へ吐いている美羽が答える

「天逆美羽… 天狗組織所属… 年齢不詳… 以上」

「天逆柚神… 以下同文です」

美羽と柚神が黒い翼を出してそれを軽くさする…

天狗だったのか…

「天狗が何でここに？」

「只のお忍びよ… 上層部が五月蠅いから人間のふりをしていただけね」

「ワタシに関しては上層部に存在すら把握されていませんし…」

どうやら里の者に被害を加える気はないみたいだ…

しかし… 何かが引っかかるな…

「まさか… あの記者以外にも人里に天狗がいるとは…」

「文のこと？ まあ… あの子は他の仕事もあるからねえ… アタシたちもお忍びで来ただけだし…」

美羽は立ち上がり私の方へ来る…

「な… なんだ？」

「… 貴女？ 人間よね？ 何やら他の力も感じるけど？」

「!?… っ」

私の反応を見て美羽は翼をしまい入り口の方へ向かう…

「まあ… いいけどね… とりあえずお蕎麦ごちそうさま… 柚神元に戻しておいて…」

「はいはい…」

柚神が空間を弄ると彼女たちの姿が消えて、倒れてい里の者は起き上がり始める…

「ふああ… あれ何してたっけ？」

「いかん!!蕎麦打ちが途中だというのに!!」

里の者達は何事もなかったかのように仕事をしたり、話をし始める…

どうやら本当に寝ていただけみたいだな…

私は安堵した後、彼女達について考える…

柚神の強力な能力に美羽の私の正体を見破る程の洞察力…

そして妙に何か引つかかる彼女達の正体…

分からないことばかりだが… 危険は無いみたいだ…

「… いかん!そろそろ授業の時間だな!!」

私は代金を払い寺子屋へ急ぐ…

色々と忙しいが授業だけは欠かすことはできない!

私を思ってくれている生徒のためにも!!

人里（外）

人里から出た美羽と柚神は満足そうに妖怪の山を目指して空を飛

ぶ…

「お蕎麦中々美味しかったですね…」

「ええ… 一応あそこの場所だけでも覚えておこうかしら？」

美羽がキセルをしまうと柚神は目をこする

「しかし… それ控えておいた方がいいですよ？○○」

その言葉を聞いた美羽は顔を引きつらせる

「… 禁句」

「失礼しました… つい昔の癖で」

「…」

「…」

どこか気まずい雰囲気の中、彼女達は妖怪の山へと帰還する…

第2章：1stミッション 紅い霧を調査セヨ！ 紅い霧

妖怪の山の牢屋の中では、天逆美羽がいつも通りにベットで寝っ転がり、外の世界の書物を読み時間を潰していた…

いつもの事だが今日は違う…

本日は彼女にとって初めての任務が言い渡される…

そのことを彼女はまだ知らない…

side 美羽

「ふーん… 外の世界にも色々あるのねえ」

雑誌を見ながらアタシはキセルを啜える…

今ではこんなにも、ひらひらな服があるのね…

まるで餃子みたい…

アタシには到底似合いそうにない…

「… 何かいいイメージはないかしら？」

雑誌をめくりながら考えていると…

どたどた!!

何やら騒がしいわ…

誰かがこちらへ向かってくる？

「あやや!! 美羽！ お仕事ですよー！」

牢屋の戸を開けて現れたのは文…

汗だくになっており、息を切らしている

「お仕事？」

「ええ！上層部からのお仕事です！受けてくださいいな？」

アタシは文が突き出す書類に目を通す

(謎の紅い霧が発生…その原因の調査をせよ)

「…」

紅い霧？

とうとう目でも悪くしたのかしら？

紅い霧なんて…自然界にあるわけないじゃない!!

アタシは書類をばら撒く

「あや!?なんてことを…」

「夢でもあるまいし…こんな奇想天外な事起きるわけないでしょ？」

「外を見てくださいよ！本当ですから！」

「…」

嫌々アタシは格子の外を見る…

「…うそでしょ？」

いつも見る妖怪の山の風景は紅くなっていた

まだ夕方でもないのに、紅いとは…

どうやら紅い原因は俟っている霧のようね？

「…うそではないことは分かったわ」

「でしょ？お願いできますか？」

「分かったわよ…とりあえず原因突き詰めてこれをやった奴を取っ
ちめればいいんでしょ？」

「そういうことです…って!?何してるんですか？」

「ん？何って着替え？」

「この前の服を脱ぐと文は両手で顔を覆う
別にいいじゃない？女同士だし？」

「も…もう！とりあえずお願いしますね！後これを渡しておきます
から!!」

文は白い紙の束を置いて鼻血を垂らしながら牢屋を出る…

「何で鼻血なのよん？」

アタシは軍服に着替えて後、文が置いた白い紙の束を見る…
なにこれ？

何の説明もなしに置かれては困るわね？

「それはスペルカードというやつですね？」

「!?」

後ろを振り向くと柚神が覗き込むように立っていた？

「…貴女！びつくりするじゃない!!」

「失礼しました…文がいたので姿を隠すしかできませんでした
が故に…」

柚神は白い紙を観察する？

そういえばそれについて知っているような感じだったわね？

「それ…何よ?」

「ん? 幻想郷の戦いにはルールがあるみたいですよ? 弾幕ごっこというもので…それで争いを丸く収めるとか?」

弾幕ごっこねえ?

アタシらが現役だったころと比べてぬるくなったわね…

「もしかして今回の任務…それやらなきやダメ?」

「ええ…書類の隅に小さく書いてありますよ? それと貴女の力は±40%までと…」

はあ…緊急事態だというのに制約はかけられるのね…

「…貴女有能力で隠蔽できない?」

「こちらとしても隠蔽はあまりしたくないんですよ…諦めてください」

うぐぐぐ…制約かけられていない癖に!!

「アタシとしてもやり辛いのがねえ…まあいいか…とりあえず…原因のところまで行くわよ…」

柚神はホログラム画面を出して、それをスライドさせる

「ええ…場所は何となく分かっております…少し遠いですが半日あれば終了かと…」

「バックアップ頼むわよ? アタシは制限かけられているんだから…」
「ええ…では参りましょう…」

柚神が牢屋を出てアタシはその後を追う…

40%ね…

半分の実力も出せないとは…

羽根を伸ばせないとはこのことを言うのかしら?

外に出ると外は紅い霧に包まれている…
これはどつきりとかそういうものではないわ…
薄っすらだけど、変な力も感じるし…

山を出て深い森にたどり着く…

空が見えない幻想郷の森の中にたどり着くが、相変わらずここも紅い霧に覆われている…

「奇想天外というやつ？」

「ええ？… 科学では解明されませんね…」

アタシと柚神は道中現れた妖怪・妖精をなぎ倒しながら目的地に急ぐ…

何故かは知らないけど、普段より狂暴化している気がするわ…
まあ… この程度なら問題なく倒せるけどね…

「… 距離はどれくらい？」

「ざっと… 7kmくらいですかね？」

柚神はスコープの曇りが気になったのかそれをハンカチで拭きながら答える…

7km…

地味に距離があるような… ないような…

「… 先が遠いわね」

柚神の方を見ると、彼女が映しているホログラム画面にDENGGE

Rと書かれた文字が出現し彼女は動きを止める？

「…む？何か近づいています!？」

「何が？」

アタシが確認すると前方から黒い巨大な球体がこちらへとやってくる？

「貴女たちは食べられる妖怪？」

黒い球体は私達に声を発する…

声からして子供…それも女みただけ？

第一声がそれとは…

「アタシがやろうか？」

前に出ると柚神はアタシを止める…

「ここはワタシにお任せを…

柚神はアタシの前に出て黒い球体を対峙する…

「大丈夫なの？貴女みたいなインドア派が？」

「大丈夫です…少し脅かすだけですからね」

柚神がホログラム画面を動かすと辺りの空間がゆがみ始め、黒い球体が震え始める…

「ひびく…」

球体から何か飛び出してそれは地面に落ちる…

地面に落ちたそれは妖怪の少女だった…

金色の短い髪をしており、白のブラウスに黒のベスト・スカートを身に着けている…

少女は地面を這いながらアタシ達から距離をとる…

「何なのだ!?!あれは!!ば...ばけもの!!」

すごい怯えている様子を見る限り、柚神の奴能力で相当酷いのを見せたようね?

当人もやり過ぎたのが分かったのかあたふたしている...

「あらら?やりすぎましたかね?」

「ひいいい!!」

柚神がその少女に近づくと彼女は更に怯え、柚神は傷ついたような顔をする...

「えっと...えっと...」

柚神は懐を探り中から飴玉を出して少女へと見せる...

「?」

「どうぞ?...あげますよ?」

「ほんと?」

「ええ」

「やったー!!」

柚神の手から飴玉をもって少女は消える...

柚神はその後ろ姿を見て寂しそうに見送るだけだ...

「...」

「...どうしたのよん?」

彼女はスコープを外してそれをハンカチで拭く...

「少し昔を思い出しただけですよ... ○○... あのお方との思い出を少しね...」

「それは禁句だと何回言った?」

柚神はアタシの言葉を気にせずにスコープを拭くだけだ...

あのお方ねえ…

「… 面白いえば… 貴女の方がアタシより、あの子と会うの早かったわね？」

「… ええ… 半年くらいですかね？身の回りのお世話をさせていたできました…」

彼女はスコープをつけて先を見つめる…

「残り6. 5 km… 目的地まで遠いですよ？」

「… 分かってるわ」

先へ進む柚神を見てアタシは過去を思い出す…

戦いだけの毎日…

血の臭いに飽き始めた頃にアタシはあの子にあつた…

そして… 兵器としては未完成品だったアタシに…

「… はあ… 思い出すだけで辛くなるわ…」

柚神を追って森の奥へと進む…

まだ任務は終わっていない…

感傷に浸るのはその後よ…

霧の湖と氷の妖精

任務中盤…

天逆美羽と天逆柚神は紅い霧の発生源を目指して森の奥へと進む。

美羽達が進むにつれて、霧と謎の力が濃くなり始め、彼女達の警戒も高まり始めている…

そして森を抜けた彼女達を待ち受けているものとは？

side 美羽

「… あら？」

「妖怪の山にはこういうものはありませんでしたね…」

アタシたちの眼前に広がるものは、大きな湖だった…

霧に覆われていて詳細は不明だけど、蓮の葉が水面に浮いていることが分かるわね。

「見た限りかなりの面積ね…」

「ええ… まだ発生源までの距離はあります… これを超えた先でしようかね？」

柚神の言葉を聞いてアタシは内心溜息をつき、キセルに火をつける…

まだ元凶の場所はずっと先… 早く任務終わらせて帰りたいのになえ。

「… アタシの能力が最大限に使えればいいのに」

「何度も言いますが諦めが肝心ですよ？」

柚神はキセルの煙を嫌そうにして離れる。

「分かってるわよ… とりあえず進めばいいんでしょ？」

湖の畔に降りてアタシは水面を歩く…

距離があるとはいえ、敵本拠基地の近くだし見つからないことに越したことはない。

柚神もアタシの後についてきて、ホログラム画面を見る。

「… 特に強力な力を持つ者は近くにはいないみたいですね？」

「何で疑問形なのよん？」

柚神は画面を見ながら、首をかしげる。

「いえ… 力はそれほどでもなさそうなのですが… 何か近づいてきます…」

「それを早く言いなさいよ…」

… 確かに柚神の言う通り、何か微弱な力を持つ者がこちらへとやってくる。

向こうはこちらに気づいているみたいだ

「どうしましょ？」

「今度はアタシがやる…」

柚神を下がらせて、一歩進むと気温が少しずつ下がり始めている。

「… うっ」

夏だというのに肌寒いとは何よこれ？

何か変な力も感じるし。

「あーははは!!サイキョーのアタイがサンジヨウ!!」
「…」

変な高笑いが聞こえたかと思うとアタシの目の前には水色の髪・青い服を着た少女がいた。

背中には6枚の透明の羽根があるけど、妖怪ではなさそうね？

「どちら様かしら?」

少女は得意顔でアタシを指さす。

「アタイはサイキョーの氷の妖精!チルノ!アタイの縄張りに来たお前らを倒すものだー!」

「氷の…妖精ねえ…」

あの羽根はよく見たら氷でできているみたいだ。

妖精ねえ…戦ったことはないけど、アタシにかかれば何とやらよ。

「どいてくれないかしら?その奥に用があるのだけど?」

アタシの言葉にチルノはほほを膨らませる。

「やだ!この先を通りたければアタイを倒していけ!!」

「はいはい…分かったわよ…」

面倒くさいけど、さっさと終わらせましょ…10%出せば何とかなる…

「…ん?」

足が動かずアタシは目線を下に落ちす。

アタシの目が移した光景は、カチカチに凍った水面とそれに便乗して凍り付いているアタシの足!!

何時の間にこんなことに!!

「ええ?」

上昇しようにも全く足がびくともしない!!
それどころか!今の季節は夏!湖の水面が凍ることはありえない
わ!

「…はっ!」

アタシはチルノを見る。

この子は氷の妖精!近づいただけで気温が下がったのだもの!湖
の水面が凍り付くのも頷けるわ!!

「ほら!いくよ!電符(ヘイルストーム)」

氷の弾幕がアタシの方へ!!

「ちよつと!待ちなさいよ!!」

もがくアタシの脳裏に言葉がよぎる

柚神の(油断大敵)という言葉と博麗の巫女の(つまり敗因はアン
タってわけ)という言葉が…

油断大敵?

敗因はアタシの所為?

「ひゃああああ!!!」

それをもろに受けてアタシは湖の底へ沈む…

side 柚神

「あーあ…ぼりぼり」

美羽が湖の中に沈んでしまいました…

全く悠長に会話しているからこうなるんですよ…

というより、凍っている足に気づかない方もどうかと思いますがね？

「困りましたね… ぼり」

セロリを食べえ終えて妖精を観察する。

データを見た限り、力は弱い方ですが普通の妖精にしては強い方かもしれませんね？

ワタシの目測が誤りでしたか…

チルノはワタシの方を向く…

「次はお前だぞ？」

「… 次はワタシですか… ですが？ 倒した相手はちゃんと見ませんか？」

「何!？」

チルノが後ろを向くと、そこにはびしょ濡れになった美羽の姿があった…

すでに額に青筋を立てていますし、これは…

「お… お前！ アタイの攻撃を受けたのに!？」

チルノは再度氷弾を美羽に放つが美羽は高速でそれを避けて水面に立ち拳を構える。

「… そよ風みたいなものよ… とつとと！ ぶつとべ!!!」

美羽が水面は殴りつけるとその水面を振動する。

その波紋はどんどん勢いを増して大津波と化して上空にいるチルノを襲う。

チルノは避けようと津波を避けていくがもう遅い…

軽く本気を出した美羽の攻撃は妖精ではどうにもなりません…

「わぷ!!!」

水面の波の飲まれてチルノは湖の中へと消えて事態は収束に向かう。

ワタシは美羽の方へ向かうが彼女は辛そうに足を抑えている

「… いかげなさいました?」

「… ごめん… 少し陸にいかせて」

「ええ?」

美羽に肩を貸して陸へ上がると彼女はブーツを脱ぎ捨てる…

「ぐっ!!」

「あらら…」

美羽の足は赤く腫れていた。

これは軽度の凍傷の症状ですね…

先ほどに凍らされたことが原因ですかね?

妖精とはいえど、ここまでの力をもっているようですね…

「大丈夫ですか?」

「… 平気よ… とりあえず… アタシの力を使えばね…」

美羽が足に手をかざすと凍傷はあっという間に消えてなくなる…

「ふう…」

「能力を抑制しているのにその回復量は驚きですね？」
美羽は足をさすりながらキセルに火をつける…

「…アタシの力は完璧よ…どんな力でもアタシを屈することはできないと思うわ」

自身満々に答える彼女ですが、ワタシは知ってます…

美羽とワタシより強力な能力を持っている方をね…

美羽は立ち上がりワタシの方を向く

「さて！残りはどれくらいかしら？」

美羽の言葉にワタシはホログラムを出す…

目的地まで後、2.5 km…

かなり近づいたみたいですね。

「残り僅かですね…」

「そう…なら！早く終わらせましょう？」

美羽はブーツの紐を結びながら答える…

やる気があるのは結構ですが、あまり無理はしてもらいたくはあり
ませんけどね。

「…無理はしないでくださいよ？」

「分かってるわよ」

美羽は霧の奥へと進みワタシもその後を追う…

ワタシも美羽が心配です…本気で取り組むとしますかね。

紅い洋館

美羽と柚神は霧の湖を抜けて、霧の発生地点へと急ぐ。進むにつれて濃くなっていく霧に彼女たちは異変の首謀者へと近づいている手ごたえを感じていた。しかしまだ物語は始まったばかり…。まだこの異変は終わらない。

side 美羽

霧の湖を抜けてしばらく経過する。進むにつれて霧が濃くなり謎の力も強くなっていく…。異変の首謀者まで近づいていることが実感できる。

「柚神！後どれくらいなのよお？」

柚神はスコープのレンズをハンカチで拭いている

「…ん？何か言いました？」

こいつ！話を聞いてなかったわね！！

アタシは後ろを向いたまま移動し柚神と対峙する。

「だから！敵の本拠基地まで後どれくらいよお！！」

「…目の前ですが？」

「はっ。」

後ろを振り向くと紅い洋館がアタシの眼前に映る…

でも！すぐ目の前には窓が！！

もう無理…避けられない…

「大事なことは先に言いなさいー!!」

アタシは窓に突っ込み内部の壁に激突する。

床に無様に倒れこみ、壁に掛けてあつた絵がアタシの頭部に落下する…

「いぎやあああああ!?痛い!痛いっ!!」

「ああ… ですから油断大敵と何回も…」

悶絶して床を転がるアタシを見下ろす柚神はスコープをもとに戻す。

「ゆ… 柚神… 絶対今のはアタシの所為じゃないわあ…」

「ワタシの所為でもありません…」

彼女は窓の外を眺めている…

こいつ… アタシがこんな目にあっているのに!!

少しは心配したらどうなの!!

「あらら… これはすごい…」

「何がすごいなのよ!!」

割れたガラス片を払いながらアタシも窓の外を見る… 一体何がすごいんだか!!

「… あらん?」

窓の外にはいつぞやの博麗の巫女こと、博麗霊夢が誰かと戦っている光景が目映る。

「あの子が… あの」

「ええ… そうね…」

アタシを初めて倒した人間の一人博麗霊夢…

あの時の勝負の光景が脳裏にちらつくがここは落ち着きましょう。

「ぎぎぎぎ!!」

落ち着きなさい!落ち着くのよん!!!

幾ら屈辱でも!幾ら悔しくてもここは敵地!!平常心で行かないといけないわ

「爪噛むのやめましょうよ...」

「五月蠅いわあ!!」

落ち着いて戦いを見ると霊夢の相手は... 紅い髪をしており、緑色の中華服をつけている。

どこからどうみても劣勢を強いられているみたいね...

窓から眺めているから会話までは聞き取れないけど、見ているだけで戦いの行く末は分かった気がするわ...

キセルを取り出して火をつける。

「... 本当に人間の割のよくやるじゃない」

霊夢の体が光り出し光弾の嵐が相手方に降り注ぎ、霊夢の相手は避けることが出来ずに吹き飛ばされる...

人間の身でありながらあの戦闘スキルの高さ才能...
生まれながらの天才というべきかしらね?

「あらあら... もう決着ですか...」

柚神の方は残念そうに霊夢を観察している。

柚神だし... 恐らくは霊夢のデータを取ったのでしようけど、過ぎたものは仕方がないわ。

アタシは館内を眺める。

館内は洋風な造りの物が所せましと置いてある...

日本の物というより、海外の文化に似ているわね…
アタシはこの手のものに理解はないわ…

「柚神… ここが目的地よね？」

「ええ… そうです… えーと」

柚神はホログラム画面を眺めている。

「ざっと危険な人物は4人といったところでしようか？ワタシ達なら
すぐに片付くでしょう」

「4人ね…」

案外少ないわ

なら早く終わらすことが最重要条件ね…

「あらあ？」

考えてみれば… 何で霊夢がここにいるのかしら？

あの子は博麗結界の守護者のはず？

こういう問題の解決にも来るのかしら？

「敵の敵は味方というものかしらね？」

「何がです？」

柚神はアタシに尋ねるがそれはどうでもいいことね…

アタシ達の任務は早急にこの霧を止めることなのだし…

「散らばるわ… 二手に分ければすぐに終わるから…」

「ええ… では」

柚神と別れてアタシは反対の方向へ向かう…

こつちのほうが強力な力を感じる気がするわ…

本気を出せない分楽しめれば良いのだけどね…

「…さてどうなりますかね？」

ホログラム画面には館内の要注人物は4名と書かれています、外からの侵入者までは計算にいれていませんでしたね…

外から二名ほど館内に侵入したみたいです…一人は博麗の巫女として、もう一人は？

「…計算が狂いますね？」

余計なイレギュラーは計算を狂わせる原因です。

早急にこの異変を解決しないとどんどん拗れていく可能性も考えられる。

「ですが…その問題の前に目の前の問題を片づけることにしましょうか？」

ワタシの目の前にはホログラム画面に映った要注人物がいる…

銀色の髪に海外のメイドのような恰好をしていますね…

しかし…人間が要注人物とは…世の中も変わりましたね。

しかし油断大敵…何の力を持っているのか不明ですが慢心はいけません…観察して動向を探る…能力も時機に分かることです…

そのメイドはワタシにナイフを取り出して向ける…

「霧で誰かここへ来るとは思っていたけど…予想以上に早かったわね…」

「霧ですか…この紅い霧ですかね…」

ワタシは窓の外を眺める…

話の内容からしてこの紅い霧の事を言っているのでしょうか…

彼女は頷きワタシに向かってお辞儀をする。

「ええ… 申し遅れました… 私はこの紅魔館でメイド長をしている十六夜咲夜と申します… どうぞお見知りおきを…」

「ご丁寧にも… ワタシは天逆柚神… ただのサポート役です」
ワタシも会釈をすると咲夜は手に持ったナイフを回す。

「貴女の言う通り、この紅い霧は私の主が命じたもの… これでならお嬢様が嫌う日光も照らすことはないわ」

「主… お嬢様… どうやらそのお嬢様という方がこの異変の首謀者というわけですか」

「ええ… またもご名答よ… でも貴女をお嬢様に会わせるわけにはいかないわ！」

咲夜が指を鳴らすと空間が歪む…

「…これは？」

ワタシの周りを見ると幾多の妖精に囲まれている？

先ほどのチルノよりは力は無いみたいですが、いつの間にこの数を？

ワタシの力なら辺りに敵がいれば気づくはず、なのにこの数に囲まれて全く気付かないとは!!

「何かの能力ですか？」

咲夜は微笑む。

「種のない手品みたいなものよ… でもそれは教える必要はないわ… さあ！あの侵入者を片づけなさい！」

「了解です！メイド長!!」

咲夜の号令で妖精たちがワタシに飛びかかってくる…

これは… 少々苦戦を強いられるかもしれませぬ…

「… 戦闘は専門外なのですがね」
辺りにホログラムを展開する…
久々な戦闘ですが… 何とかなるでしょう…

図書館と7つの属性

柚神と咲夜が戦闘中… 場所変わって美羽は大きな図書館にいた…

彼女は図書館の棚から本を取り出してそれをしばらく眺めていたが、興味がなくなったのか本を元に戻す。

「… 海外の文字ねえ… 全く読めないわあ」

美羽は歩を進めて図書館の奥へと進む

そしてしばらくすると柚神の異変に気付いて歩を止める。

side 美羽

「… ? 柚神の奴が押されてる?」

あの子が苦戦をしているというのは珍しいものね?

追い詰められまくって地が出ないといいいけどね?

「… まあ… アタシもテリトリーに入ってしまったみたいだし」

図書館の奥を見ると本棚から大量の本が抜けだし、宙に制止している。

一冊一冊からは力のようなものを感じるわ?

「力だけではなく殺気も感じるわね?」

ヴィイイン…

空中の本が光り出すと大量の光弾がアタシに向けて放たれる。

アタシは翼を広げ空中へと避難するが本達は追尾を開始しているみたい…

「質は上々… 精度も中々といったところかしら? でも…」

所詮は遠隔操作の武器に過ぎない… アタシ相手にこれはお粗末ね…

「20%で充分ねん…」

右腕に力を入れて薙ぎ払う。

大気の刃が本を切り裂き本の大群は全滅する。

「…早く終わらせてお風呂入りたいわん」

アタシは図書館の奥へ進んでいく、進むにつれて謎の力を感じるわね？

しばらく進んでいくと広い空間に出る。

「ここが最奥部かしら？」

「ええ…そんなところよ」

声がしてその方向を向くと、本棚の影から紫色の髪をした少女が現れる。

着ている者も海外の魔女のような服装をしているわね？

…この世界には色々な子がいるのねえ

アタシが観察しているとその子は怪訝な目でアタシを見つめる。

「何よ？」

「いえ？別に…」

しかし…この子を観察して分かったことと言えば、外の紅い霧とこの子から感じる力が同じということが分かったわね？

つまりこの子が異変の首謀者かしら？

「ねえ？貴女が外の紅い霧を出した黒幕かしら？」

少女は悩むように目を背ける

「…紅い霧を出したのは私よ…でも黒幕ではないわ…やれと言われたからやっただけよ」

…別に黒幕がいるというわけね

任務は紅い霧の調査をすること…。この子を止めればお仕事は終わり!!

アタシは一步進んで彼女に問う

「紅い霧を出すのやめてくれない？アタシとしては楽な道を進みたいの」

「駄目よ…。止めてもいいけど…。あの子に後で文句を言われるから」

少女は本をめくり辺りに術陣を大量に展開する。

その術陣には様々の属性の力を感じるわ

「あら？やる気かしら？」

「ええ…。形式的にはやるわ…。私の名はパチュリーノーレッジ…。貴女の名前は？」

パチュリーと名乗った少女は術陣を点滅させながら問う…

一応礼儀だし答えとこうかしら？

「アタシは天逆美羽…。一応天狗の組織に所属しているわ…。最近の趣味はトレーニングついでにモミちゃんの剣のコーチをすること…。後そうねえ…。外界のファクションについても興味が出てきたよう…」

「長いわ…」

パチュリーは飽き飽きしたように術陣から弾幕を飛ばす…

まだ…。こちらは自己紹介中だというのに…

アタシは宙に飛びスペルカードを宣言する

「あまりこのやり方は得意ではないんだけどねえ…。やれというのだから仕方ないわ…。土符（シヨックウエブ）」

拳を突き出すと空気を伝わって振動の波が彼女に飛ぶ…

彼女はそれを飛んで避ける

「… 振動がそのまま弾幕に？ 貴女的能力は振動を操る能力かしら？」

彼女の問いにアタシは首を横に振る…

そんな力では最強を名乗れないわ

「… 違うわねえ… アタシ自体はまだ本気だしてないわあ？」

「アタシはもう1回振動を飛ばす…」

パチユリーは何やら壁のようなものを作りだしてそれを防ぐ。

「本気出してない… ね… なら私は本気で行くわ… 日符（ロイヤルフレア）」

彼女が何かを詠唱すると辺りに光が生み出されてアタシの方へ飛ぶ！

「いきなり大技!? ちょっと…」

爆発的に光が次々と量産されていく！人間にしては… 確かに実力を持っているみたいね…

「あは… やるじゃないの… ん？」

刹那… 光がアタシの頬を掠る…

予想以上かもだわ…

「余裕ぶっていると怪我では済まなくなるわよ？」

パチユリーは澄ました表情をする…

霊夢の時とは違った面白さがあるわ…

頬から垂れた血を舐めアタシは帽子を二元に戻す

「面白いじゃない！ もう少し本気だしてもいいわね!!」
アタシは力を開放する…

考えてみれば柚神の奴は今はいない…
邪魔も入らないわ…
大丈夫よ… 節度は弁えるからねえ…

一方その頃…

柚神は咲夜と屋敷妖精の軍団と戦闘を行っていた…

「…はあ… はあ」

柚神の周りには虫の息の屋敷妖精がそこらじゅうに倒れている…
屋敷妖精を全滅することには成功したが柚神だが、まだ謎の力を持つ咲夜が残っていた…

side 咲夜

「中々の力ね…」

満身創痍の柚神を見ながら私は辺りを見回す…

用意した屋敷妖精を全滅させるなんて私としても予想外だったわ…

私は指を鳴らして倒れている屋敷妖精を適当な部屋の中に押し込む…

「また消えた？」

一瞬で屋敷妖精が消えたことに柚神は驚いているみたいね…
しかし… 私の能力を理解していないみたいだし、彼女自身も消耗している…

この勝負見えたわね…

私は彼女に向かって賛辞の拍手をする

「お見事といっておくわ… 私が用意した妖精達を全滅させるのは認めらわ」

「… それはどうも」

柚神は力なく笑みを浮かべるがもう余裕はないみたい…

「でもこれからは警告よ？これ以上戦うというなら身の安全を保障できないわ…」

しかし彼女は首を横に振る

「… 退くことはありませんね… 一応任務ですので」

「そう… 残念ね」

私は能力を発動し彼女の周りにナイフを大量に設置する…

「これで終わり…」

能力を解除するとナイフが次々と柚神を襲い彼女の体を切りつけ、突き刺していく…

それは彼女の両足・腹部を切りつけ、顔につけている謎のスコープを破壊する…

「ぐっ!!」

柚神は後退して地面に蹲る…

両足を切りつけたしもう彼女は動けない… これ以上の戦闘はできないわね…

「貴女は良くやったわ… でも貴女では私には勝てないわ…」

「…」

私の言葉に反応を示さない柚神は目に着けたスコープを投げ捨てる…

「… 全く鬱陶しい能力だ」

「!?」

私を見つめる彼女の目は先ほどの穏やかな目ではなく猛禽類のような鋭い目が変わっていた…

「…こちらが大人しくしていればこの有様… どうやら本気ださな
いといけないみたいね」

彼女は荒々しくホログラム画面をスライドしている…

何かしら? 先ほどよりも行動が粗暴になっているわ…

先ほどのアレは演技だったみたいね…

ホログラム画面が展開され、文字が映り、音声が始める

(ターゲット:十六夜咲夜… 能力・時を操る程度の能力)

「!?私の力が!!」

何時の間に調べ上げたというの!?

少なくとも私は手の内を明かすようなことはしていないのに!!

柚神はその画面を眺めながら肩で笑う

「ふふふーワタシにかかればすぐにわかる… 美羽程ではないがワタシの力も相当に性質が悪いのでね!」

彼女が笑うと辺りの空間が歪み霧が発生する…

私はとっさに時を止めて廊下から離れて柚神の行動を観察する。

「…?」

霧が晴れた廊下には誰もいない…

柚神の姿はどこにもないわ!

「まさかー」

私との戦闘を抜かして先にいるお嬢様の方へ向かったのでは!?

「こうしてはいられないわ!!」

私がお嬢様の下へ向かおうとすると、廊下から声が聞こえる

「ぎ…… 咲夜さくん！」

「…… 貴女は」

私の目の前には紅魔館の門番である紅美鈴がそこにはいた。
着ている物はボロボロであり、彼女自身も満身創痍みたいだ……

「美鈴……」

「すみません！咲夜さん！紅白の巫女に侵入を許してしまいました
!!」

美鈴は私に向かって土下座をする。

「紅白の巫女？」

…… 話からして柚神には該当しない

他にも侵入者がいるということかしら？

しかし困ったわ……

柚神を止めるだけに屋敷妖精の大量に出撃させてしまったし、これ
以上の戦力はないわ……

「…… 美鈴！まだ動けるわね？」

「ええーきついの食らいましたけどまだ余力は！」

美鈴はガッツポーズをする。

傷だらけだけど、まだ戦えそうね……

「ではお嬢様のところへ向かうわよ？貴女が会った紅白の巫女の他に
も侵入者がいるのだから」

「そうですか…… どんな方ですか？」

美鈴は私に問う

「妙な画面を使う能力者よ… 見目からして天狗に近いみたいだし妖怪ね…」

「妖怪ですか…」

「ええ… 実力は本物だけどそれなりにダメージを受けているから… すぐに…」

…

背中に衝撃が走り私は壁に叩き付けられる!?

「な… 何?」

攻撃された方向を見るとそこには私を見下ろす美鈴の姿があった…

「美鈴? 何で?」

美鈴は髪を靡かせて目線を合わせるためにしやがみ笑みを浮かべる。

「今頃この美鈴とやらは門でオネムですよ…」

美鈴の姿がぶれ始める…

「貴女… まさか!」

「ふふ… ワタシの力を甘く見ましたね」

美鈴の姿が変わる…

黒い軍服・灰色の長い髪に黒い翼…

私の目の前には天逆柚神がそこにはいた!
美鈴に化けていたのね!

「ぐっ！」

体を動かそうにも力が入らない…
少しきついものを食らってしまったわ…

「… 大人しくしていたほうがいいわね… ワタシの力は美羽程ではありませんが、それなりには破壊力はありますので…」

柚神は敬語が混じったような言い回しをして私を見つめる…

「くっ… まだ…」

私はつい柚神の目を見つめてしまう…

彼女の目を見つめると深い緑色の目に吸い込まれそうになる…

それと同時に… 意識が遠くなり、眠気が私を襲う…

これも… 彼女の力なの？

意識をとどめようと努力はしたが私の意識は暗転する…

side 柚神

咲夜に催眠術をかけ終わり、ワタシは服と体の傷を癒しながら奥へ進む

「ああ… スコープが壊れてしまいました…」

人間相手にここまで苦戦を強いられるとはワタシも鈍くなったものです…

それに… ついつい地が出てしまいました…

いけませんね… この粗暴な振る舞いは… 女らしくするように

あの方に言われましたのに…

「… まあ… 血は争えないか… さて」

この廊下の奥に咲夜が言った主がいるとか何とか… ここは美羽と合流した方がいいですね…

「… ああ… でも」

元来た廊下の方を振り向くと、何やら強い力がこちらへ向かってきていますね…

誰かはまだデータがないから分かりませんが、ここは美羽が戻るまで迎え撃つとしましょうか…

もつとも今度は本気で行きますがね…

白黒と紅白

天逆美羽とパチュリーノーレッジの戦いが始まり数刻の時が経過した頃…

両者の力が苛烈を極め、打ち出す攻撃の質が高まり始めていた。

しかし… 美羽の相手であるパチュリーは美羽の力に疑問を感じ始めていた…

時間が経過するにつれて彼女にも焦りの色が出る…

sideパチュリー

「… おかしいわー」

私は美羽から距離を取りながら彼女を観察する。

疑問に思うことが浮上したからだ。

「あら？休憩？それでもいいけどね」

美羽はキセルを吹かしながら壁に寄りかかっている。彼女が油断したのは私としては好都合だけど…

美羽の能力… それに警戒を怠るわけにはいかないわ… 只でさえ謎があるのだから…

まず… 先ほどよりも美羽の攻撃の質が上がり始めている…

単純に彼女が本気を出していないかと思ったら考えれば、その疑問も薄れるのだけど、もう一つのことを疑問に行きつく…

それは私の力が少しづつだけ、弱まり始めていることに気づいたからだ…

「… 今日の分の薬は飲んだわよね？」

私の体は喘息を患っていて貧弱だけど今日はいつもと比べては体の調子も良かったから不調ではないはず…

体の不調ではないとすると一体何が起きているの？

美羽の方は煙を虚空に吐き出して私の方には全くと言っても良いほど警戒していない…

「フー… 無理はしないほうが良いと思うけど？アタシとしても病人相手にマジな戦いはできないというか…」

「心配は無用よ…」

私は美羽に光弾を放つが彼女はそれを腕で薙ぎ払うだけで打ち返し、打ち返された光弾はあたりの本棚を破壊する。

ああ… 貴重な魔導書が…

「のんびりお仕事をしているのもいいけど… そろそろ柚神の奴が騒ぎそうだから終わりにしないとね…」

美羽はキセルを啜えながらこちらへとゆったりとした足取りで近づいてくる…

どうやら… 休憩時間は終わったみたいね…
そろそろ彼女が本気を出してくる頃合いね…

「終わりなのは貴女よ！日符（ロイヤル・フレア）」

私は巨大な光弾を美羽に向かって放つ…

彼女は避けもせずそれを眺めるだけ…

「…言ったでしよ？終わりにするって土符（バースト・エナジー）」
美羽がこちらに手を向けると彼女の手から高濃度の光線が放たれる

その光線とロイヤルフレアが直撃し辺りに爆煙が舞う…

私はその爆炎に押されて壁際まで追い詰められる。

「げほ!!げほ!!まさか!私の魔法が!」

ロイヤルフレアは現段階の私の魔法の中では最大の力を持つ物!

それをいともたやすく消滅させるなんて、美羽の力の底が見えないわ…

「ふふふ…驚いたあ?」

煙の向こうから美羽の姿が露わになる。

彼女自体は全くの無傷だ…

彼女は左手を腰に当てて右手で私の方を指さす…

「驚きの連続よ…貴女の能力が強力だということを痛感したわ…」
「ええ!それはそうよねえ…それがアタシが最強と呼ばれる所以だからねン…」

美羽は自身の手を眺めて考え老け始める。

「でも制約がきついわね…中途半端じゃ能力を活かしきれないわ…さっきのだってアタシが本気を出せば光弾ごと貴女を巻き込めたのにね…」

彼女は右手に集中して光弾を私に向けて放つ…

私は魔法壁を発動し、それを防ぐが一回受けただけで魔法壁が消滅する。

「ぐー!」

「とりあえず…お仕事だからねえ…とりあえず何回まで耐えられるかしらん?」

美羽はまた光弾を放つ！
再度魔法壁を発動するがまた直撃して消滅する…

「はあはあ… 罅り殺しにするつもり？」
「変に防ぐからよん… 大人しく受ければすぐに楽になるわ」
美羽は再度右手に力を籠める…

「ぐ… げほほ!!」
体に負荷をかけ過ぎたかしら？… こちらとしてももう限界ね…
レミイ… 後は頑張りなさいよ…
私は抵抗することもなく目を閉じる…

「おらあー！私も混ぜろよ！」

「あら？げほん!？」

…?

何やら声が響き私は目を開ける…

目の前には後頭部を手で押さえながら床を転がって悶えている美羽の姿があつた？

私は何もしていないのに何が起きたの？

「痛い痛い!! 一体何よお!!」

美羽は涙目になりながら辺りを見回している…

「ここだぜ！」

声のする上の方向を私達は見る。

本棚の上には金髪の少女がいた…

黒い魔女帽子に白黒のエプロンドレスを身に着けている。

彼女は二カつと笑うと本棚から降りてくる。

「貴女ねえ… 仕事の邪魔しないでくれない？ 人の後頭部に光弾を直撃させるし!!」

美羽は叫ぶか少女は悪気もなく笑うだけだ。

「私だって仕事みたいなものだぜ？ この紅い霧を晴らすためにここまで来たんだ… おい！ これ以上痛い目にあいたくなければ紅い霧をなくせ！」

何故か少女は美羽に向かって言い放つ？

私ではなく何で同じ目的をもった美羽に？

美羽の方は怒りで判断能力を失ったのか反論せずにいきり立つ…

「うっさいわ!!! これ以上痛い目にあいたくなければですって？ ならアタシが痛い目に合わせてあげるわよ!!」

「いいぜ！ こいよ!!!」

「…」

ある意味チャンスかもしれないけど、巻き込まれるのはごめんね…

離脱するには良い機会かも…

私はそつと彼女達から離れて物陰に避難する…

戦闘を眺めるにはちようどいいわ…

美羽の能力… 見させてもらおうわよ…

一方その頃…

紅魔館の廊下では異変の解決に向かった幻想郷の巫女である博麗霊夢がそこにはいた。

紅魔館の門番である紅美鈴と道中にいた屋敷妖精を蹴散らし、異変の黒幕へと近づいていることに彼女は確信を持っていた…。
しかし…運命とは狂うに狂うものである…。彼女を待ち伏せている者の存在に彼女は気づいていない…。

side 霊夢

「…ふん…随分とぬるいわね」

異変の元凶を目指して私は廊下の奥へと進む…

こんな大それた事をやったのだから苦戦するとは思ったけど、出てくる者は妖精くらいだし苦戦はしなかったわね？

少し妙な感じがするけど…楽になることにはこしたことはないわね…

「しかし…長い廊下ね」

いつまで進んでも同じような景色が続くわ…

それなりに大きい屋敷だけどここまで大きかったかしら？

「あら？」

廊下を進んでいくと遠くに人影が見え私はお札を構えて臨戦態勢に入る…

その人物は窓の外を眺めており、後ろ手を組んでこちらに背を向けている。

こここの住人かしら？

しかし…隠しきれない力を感じるわね…

「先手必勝！」

私はその人物に向かって光弾を放つ…
その人物はそれに気づくような素振りも見せない…
もらったわね…

「…ふふ」

「!?」

その人物は微かに笑い声をあげると同時に霧のように姿を消す？
私の光弾は窓を突き破りその人物を捉えることができなかつた…

「一体どいつ!?」

私は辺りを見回すが誰もいない…
確かに誰かいたはずなのに！

「噂でしか情報がありませんでしたが…人間にしては中々の力を
持っているみたいですね」

「!?」

後ろを振り向くと私を見つめて笑みを浮かべている女性がいた…
灰色の長い髪に黒い軍服のようなものを身に着けている…
その緑色の目は吸い込まれそうになるくらい明るい色をしている。
その顔はどこか見覚えのある顔だった…

「美羽？何でアンタが!?!」

その女性は前に神社で戦った美羽にそっくりだった…
私の話を聞いて女性は首をかしげる

「美羽ですか？いえ？ワタシの名前は天逆柚神です…美羽とは似て

「いますかね」

「別人？」

「……よく見たら口調や細かな見た目は違うみたいだけど本人にそっくりね」

「しかし彼女から感じる力は美羽と一緒に……」

「よくわからないけど強力なものだと私の勘がつけているわ……」

「柚神と名乗った女性はスコープを取り出し目に着けて私を観察するように見つめている……」

「……ふむ齡10代とまだ若いのにこの力とは……生まれ持った天才というべきですかね？人間にしては中々ですね」

「私博麗の巫女よ？それなりの力はないと博麗の巫女は名乗れないわ」

「柚神は笑みを浮かべ拍手をする……」

「素晴らしいです！情報以上の人だということを確認しましたよ！」

「……ええ」

「何というか……美羽と比べると調子が狂うわね……」

「まだ彼女の方が話しやすかった気がするわ……」

「しかし……何で美羽に似たこの人がここに？」

「彼女も来ているのかしら？」

「少し聞くけど……美羽はここに来ているのかしら？」

「ええ……ワタシとは別行動ですがね……」

「柚神はスコープのレンズをハンカチで拭いている……」

「質問には淡々と答えているわね……」

「でもワタシの勘がつけているわ……」

「この人……美羽以上にタヌキみたいね……」

「どす黒い本性を隠している人と同じ臭いがするわ……」

「まだ油断はできないわ」

「次に聞くけど…アンタらの目的は何なの？」

「…目的ですか…仕事でこの紅い霧の調査に来ただけですよ…本来は美羽の仕事ですがワタシが影ながらバックアップをさせてもらっていますかね」

とりあえず嘘は言っただけはないみたいね…

少し引つかかるところはあるけど、私としてもこれ以上時間を浪費するわけにはいかないわね…

「そう…一応敵ではないことは理解したわ…で？この奥にこの異変の黒幕がいるのよね？」

柚神は頷く

「そうみたいです…美羽がいつまでたつても来ませんので、どうしようと思っていた時に貴女が来ましたのでね…」

「…貴女戦えるかしら？そっちとしても早く異変を終わらしたいのでしよう？利害が一致すると思うけど？」

「協力というわけですか？」

柚神は少し迷ったような表情をするが利害が一致したのかすぐに頷く

「ワタシでよければ…美羽よりは戦闘能力は落ちますがね…」

「決まりね…」

私は柚神の手を引いて廊下の奥へと進む…

落ち合うはずだった魔理沙と合流できなかつたけど…

彼女がいれば何とかなるわね…

魔法使いと謎の力

sideパチュリィ

「さて… お手並み拝見ね」

美羽と謎の乱入者である霧雨魔理沙との戦いが始まる。

私は彼女達から距離を取って観察に移る。

美羽の謎の力を確認するには絶好の機会かもしれないわ…

私の勘が告げている… あの力は危険なものだと…

しかし… その内容が分からないわ… 振動と高エネルギーを放出する力… どちらとも繋がりのないように見えるけどね。

「行くぜ！」

魔理沙は大量に光弾を美羽に放つ！美羽はその光弾をすぐに見切り、それを紙一重で避けていく。

鈍いし注意力散漫かと思っていたけど、やればできるのね…

「… アタシ相手にそれはないわ」

美羽が掌底を放つと魔理沙の方に振動の波が障害物を破壊していきながら飛んでいく…

「おっと！」

魔理沙はそれを箒の上に立ちながら高速でそれを避けて美羽との距離を詰める。

「弾幕以外にもこんなことができるんだぜ！」

魔理沙は箒に乗ったまま美羽に一直線に近づき、突進を仕掛ける…

それに気づいた美羽はそれを紙一重で避ける。

「っ！まさか… アタシに向かつて突進を仕掛けるなんてね… 力押しでは絶対にアタシには勝てないわ！」

美羽は空間を複数回薙ぎ払うようなモーションをすると振動の刃が魔理沙の方へ放たれる。

「確かに当たったらやばそうだ… でも！お前ワンパターンなんだよな… よつと！」

彼女は振動の刃を避けていく… もう慣れた感じね… この子に会ってまだそんなには経過してないけど相手の技を見切ることに関しては秀でているみたいね…

「ワンパターン… ね… なら… ちょい本気いくわ」

美羽が翼を羽ばたかせると彼女の姿が消える？

気配も何もない… ちょつと本気出ただけで目に追えないとは…

魔理沙の方はキョロキョロと辺りを見回している。

「どこ行った？物陰にでも隠れたのか？」

魔理沙はあたりの本棚の影を警戒するが、それは違う…

あんなアグレッシブな戦い方をする子がそんな姑息な手を使うはずはないわ…

私が思うに… 彼女は隠れているのではなく…

「ふふふふ」

「っー」

魔理沙の横を何かの一閃が横切っていく…

その方向を見ると美羽が姿を現す。

「反応が遅いわねン… 軽く図書館を飛び回っちゃったわ…」

美羽はキセルを啜えて煙を吐き出す…

やはりね… 彼女は消えていたのではなく… 目にも追えないス

ピードで図書館内を飛び回っていただけ…

あれはもう… 人外にしか彼女の動きを捉えることはできなそう
ね…

「… おいマジか… 全く見えなかったぜ」

「それはそうよ… アタシの力についてこれる者なんて多分いないん
じゃないかしらん？」

美羽は退屈そうに虚空を眺めている。

しかしこの子これだけの力を持っているのにムラがあるわね…
今だって魔理沙を仕留めようと思えばすぐにできたのに…
それに気づいたのか魔理沙は不服そうな声を上げる

「おい… 今その気になれば私を倒せたんじゃないか？」

「ええ… やろうと思えばできたわん… 次で仕留めるけどね…」
再度美羽の姿が消える…

「また消えたか… 次は見切ってやるぜ」

魔理沙は辺りを見回すが彼女の姿は目視できない…

確認できることといえば、僅かな風切り音くらいかしら？

しばらく彼女が飛び回った後姿を現し、魔理沙の背後でキセルを吹
かしている。

「速いな… 見切れなかったぜ… でも仕留めるんじゃないのか
？」

「ええ… 貴女は終わりよ… 大丈夫… 手加減はしてあるからね」

美羽がキセルの煙を吐くと辺りの空間が線状に僅かに歪む…

まるで空気の層が渦巻いているかのようになり、その線は魔理沙の周りを
複雑に囲い檻のようになっていく。

「なんだこれ!？」

魔理沙はそれを警戒しながら辺りを見回すが抜けられる場所がない……

「アタシが翔けた大気の層は刃と化す…… 土符（エアライド・ソニックブーム）」

美羽が宣言すると歪んだ空気の層がはじけ飛び振動波が辺りへと無差別に飛び辺りの物を破壊していく……

無論…… 囲まれていた魔理沙が避けられるはずもないわね……

「こんなん！ありかよ!!」

魔理沙は叫びながら被弾する……

「…… 軽い肩慣らしにはなったかしらん？」

煙が舞う図書館の中で美羽はキセルの煙を吐いて辺りを見回す……

やはりあの子では勝てる相手ではなかったわね…… 明らかに実力差が大きすぎる……

もつとも美羽の方は本気を出していないみたいだし、その実力が計り知れないわ……

美羽の力は今の戦闘を見ても全く正体が分からないのが現状ね……

振動波に並外れた速度……

それに何らかのヒントがあると思うのだけど？

「…… しかし」

私は荒廃した図書館内を見回す……

これはもとに戻すのに骨が折れるわね……

美羽の力も気になるけど、こちらを最優先にしないと今後に支障をきたすわ……

「さてと… 柚神と合流しないとね…」

美羽が地下室の方へと歩を進める！

いけない！あそこにはあの子が！！

私が制止しようとするとう光弾が飛んできて美羽の頬を掠る…
光弾の飛んできた方向を見ると魔理沙がそこに立っていた…
全身ボロボロだけど、まだ闘気ありふれた顔をしている…

「… あら？まだ戦えたの？」

「あいにく諦めは悪いほうなんだぜ！」

魔理沙が光弾を放つが先ほどと比べて光弾にキレがない… これでは美羽を仕留めることはまずできないわね…

美羽はその光弾を手で薙ぎ払う…

「あきらめたら？明らかに威力は落ちているし… アタシを倒す火力はないわん」

美羽の方は戦闘をやめにしており、退屈そうに欠伸をしている…

油断しきっている今なら魔理沙でも倒せる算段はあるけど、疲弊している以上彼女に勝つ事はもうできないわ…

でも魔理沙の顔はまだあきらめていない…

「やってみないとわからないだろ！」

魔理沙は光弾を放つが狙いが甘かったのか美羽には当たらず彼女の横を通り過ぎていく…

本棚が破碎する音が聞こえるわ…

「やめとけばいいのに… でも好きよ… そういうあきらめの悪い子

はねえ」

美羽は両手を上に掲げ巨大なエネルギー弾を生成する！

先ほどよりも強力なものだ！

これを受けたら人間である魔理沙は！！

「本気か…。」

「いえ？まだ30%くらいよ！痛みもなく眠りなさい！」

ばき… がたん！！

「ん？」

物音に気付き美羽の気がそれる…

何かが壊れて倒れるような音がみたいね…

ばきき!!がたん!!!

その物音がどんどん大きくなっていき、美羽は攻撃を中止し辺りを
見回す…

「何が起こってるの？」

「ふふ… うまくいったぜー！」

美羽の反応に魔理沙は笑う

「何したの？」

「偶然の産物みたいだが… 今！現在！疲弊した私でもお前を倒せる
ほどの力が！集まった！」

魔理沙が叫ぶと破碎音と倒れる音が美羽の背後から響く…

「…え？」

美羽が振り向くとそこには彼女に向かって倒れてくる巨大な本棚…

美羽は逃げ出そうとするが… あまりにも遅かった…

「いやああああ!!!」

ずうずうん!!

彼女は本棚に押しつぶされる…

「…一体何で？」

私は物陰から美羽を押しつぶした本棚を見る…

奥の方の本棚も本棚に向かって倒れている…

これはもしかして…

「ドミノ倒しって奴だな！」

「!？」

魔理沙の声が響き彼女の方を向くと彼女は私の方を見てにこやかに笑っていた…

しまったわ… 前に出過ぎたかしら？

「私に気づいてたの？」

「ああ… 戦う前から…」

魔理沙は美羽を押しつぶした本棚をしげしげと眺めている。
そして奥の本棚を見て一息つく

「本当にうまくいったぜ… これが成功しなかったら負けだった…」
「ドミノ倒しって… いつのまにやったのよ？」

「最後のダメ押し of 光弾だぜ… あの時は美羽本体ではなく奴の背後の本棚を狙った… あれは最後の賭けみたいなものだ…」

倒れてきた本棚の奥を見ると奥の壁際に置かれていた本棚が一番
損壊が大きい…

本棚に沿って平行に配置していたから… ドミノみたいに崩れた
のね…

魔理沙は伸びをして奥を見る

「さて！強い奴と会ったけどまだ異変は終わらないぜ… さっさと外
の紅い霧も晴らさないと！」

「… あ」

… そういえばこの子… 美羽を異変の協力者と勘違いして戦っ
たのよね？

ある意味助かったけど… これでよかったのかしら？

「… 人間風情が… このアタシに… 勝ったと思うんじゃない
わ」

本棚の中から濃厚な殺気があふれ出し私達は後ろへ飛ぶ!!
魔理沙も殺気に驚いたのか冷や汗を流している

「!!」

「本気出すなど言われてるけど… 破ることなんて造作もないわ…
それでもしないとアタシのプライドがズタズタになってしまうのよ
!!」

辺りの空間に変化が起きる…

何やら薄い青色の霧が立ち込めたと思いきや、辺りの本棚が宙へと
浮く？

まるで無重力下の道具のように宙を漂っている…

そしてその中に傷だらけの美羽を発見する…

先ほどつけていた帽子はどこかにいっており、長いアホ毛のある頭
からは出血・白い軍服のようなものも彼女の血で汚れており、彼女は
足を組んだまま座るように宙を浮きながら不機嫌そうな顔をして頬
杖をつく。

「… まだ意識があったか… しかしこれは一体？」

「100%のアタシの力… その気になれば空間すら歪められる
わ… さて時間も惜しいし… 終わりよ！」

美羽は先程以上のエネルギー弾を生成する!

傷を受けているのに!まだこれだけの余力があるなんて!!

(何をしてるんです?美羽…)

空間から声が響き美羽は不機嫌そうに辺りを見回す

「… 柚神い… 何の用?今すごい忙しいんですけどお!」

柚神?そういえば美羽の言葉の端々でそんな名前が出ていたわ
ね…

確実の仲間の名前ね…

「大体貴女は肝心な時に余計な…」

美羽が文句を言っていると柚神と呼ばれた女性の声が響く

(早く仕事を終わらせるんでしよう?心を平常心にしませんと…)

「はっ?先ほどの貴女だって…誰かとの戦闘で随分とお怒りだったと思うけど?」

(…小言はここまでです…現在ワタシは博麗の巫女ともに黒幕の下へ向かっております…そんなに時間は取りませんので…早めの合流をお願いします)

「博麗の巫女?…わかったわよ」

美羽はエネルギー弾を消滅させ地上に降りると辺りに浮いていた本棚なども地面に落ちる…

(ええ…それでいいです…では後程…)

「はいはい…」

美羽は床に落ちていた帽子を拾い頭に被った後、背を向けて地下室の方へ向かう…

そんな美羽に魔理沙が話しかける

「おい!やめるのか?」

「…仕事の途中だもの…仕方ないわん…それに何だかやる気がなくなっちゃったし…」

「仕事?」

「…組織の命令でねえ…紅い霧をどうにかしろと言われて遠路はるばるここまで来たってわけ…」

「紅い霧?じゃあ!お前は異変を解決しようとして…」

美羽は私達の方を見ずにキセルを吹かして僅かに笑みを浮かべる…

「冷静に考えてみれば貴女もよねえ…全く無駄な戦闘をしてみましたわん」

美羽は地下室へと入り姿を消し、魔理沙の方は私を見つめる。

「お前の方が異変の協力者？」

「…」

私が大人しく頷くと魔理沙は溜息をつく…

「はあ… やつちまった…」

「… 言えた義理ではないけど… 間違えは誰にでもあるわ…」

頭に黒い雲を陰らせながら落ち込む彼女を見ながら、私は美羽が消えた地下室の方を眺める…

彼女の最後に見せた本気の力…

本棚と自身の体を浮かせた… アレは無重力空間を作り出したみ

たいね…

振動波に高エネルギー・常軌を超える速度…そして無重力…

考えれば考えるほど力の本質が分からないわ…

「でも… 妹様の玩具にはなるんじゃないかしらね？」

これで私の観察はここまで… 残りは大人しく事の展開を見守るか
かしらね…

運命とは

美羽と魔理沙が戦っている同時刻…

黒幕の元へと急ぐ霊夢と柚神は長い廊下を進んでいく…
道中の敵はほとんどおらず、暇を持て余した彼女たちは雑談を交えながら歩を進める…

side 霊夢

「へー… 美羽の協力者ねえ… どうりで似ていると思ったわ…」

「うちの美羽がお世話になりました…」

柚神と話をしながら私達は黒幕へと足を進めていく…

どうやら美羽と柚神は天狗の組織の命令で外で発生している紅い霧の調査にきたみたいだ…

つまり私達とは目的は一緒というわけね…

「…」

しかし… 幾ら物腰柔らかそうな振る舞いをしていても彼女からは美羽と同等の力を感じる…

さつきだつて謎の力で私の攻撃を避けたのだし、気が抜けないのも事実ね…

柚神の方を見ると頭に手を当ててどこか難しそうな顔をしている。何やら小さい声で誰かと会話しているようだ…

「… どうしたのよう？」

「いえ… 何でも…」

彼女は少し機嫌でも悪くなったのか目が少し鋭くなる…
本当に読めないわ…

柚神としばらく歩いてみると大きな扉に差し掛かる…

柚神はその扉をしばらく眺めていると私の方を向く

「さあ… つきましたよ…この扉の奥から強力な力を感ずます…」

「この奥に黒幕がいるってこと？」

柚神は頷いて私に道を開ける…

「さあ…どうぞ博麗の巫女…異変を解決するのが貴女の役目ですからね」

「…アンタはやらないのかしら？」

「…バックアップに回ります…美羽を倒した貴女の力を見てみたいので…」

柚神はスコープのレンズをハンカチで拭きながら答える…

私の力ねえ…

「…分かったわ…支援任せたわよ」

私は扉を開けて中へ入る

扉を開けるとそこは大きな広間だった…

天井には大きなシャンデリアがあり、大広間の奥には大きな玉座があった…

その玉座にはある人物が座っている。

青い髪にピンクのドレスを着た小柄な少女…背中には蝙蝠のような翼が生えており彼女は不敵な笑みを浮かべて私達を見る…

「へえ…まさかここまで来るとは思わなかったわ…」

少女は赤い液体が入ったグラスの中身を飲んで…

随分と余裕ね…

「アンタがこの異変の黒幕かしら？」

「ええ…私はこの紅魔館の当主レミリア・スカーレット…この紅い霧の黒幕よ」

レミリアはグラスを私達の方へ放り投げ、私達の足元にグラスが破碎する…

グラスに入っていた液体がカーペットに染み出し、柚神の方は眉を顰める。

薄っすらだけど鉄臭いわ…

「… 血ですか」

「… そうみたいね」

レミリアはフンと鼻を鳴らして玉座から降り、片手に巨大な槍を出現させる…

「生き血… それは私が生きていくうえで必要なものよ… この吸血鬼の末裔である私達にとつてね」

「吸血鬼… 海外の妖怪みたいなものですか… ならこの異変も理由が分かった…」

柚神は考え込むように顎に手を当てレミリアは窓の方を眺める…

「貴女の考え通りよ… 吸血鬼の弱点である日光… この霧によりあの忌々しい太陽が姿を現さないわ… これで私達は完璧になれるわ…」

「それが動機というわけ… 全く…」

人間である私には理解できない動機ね… 半分呆れていると柚神が口を開く…

「完璧など存在しませんがね…」

柚神がぼやくように言うレミリアは彼女をにらむ…

「何分かったようなことを言っているのかしら？… 咲夜を倒したからって調子に乗らないことね」

レミリアの言葉に柚神はスコープのレンズをハンカチで拭いている…

「… 気に障ったなら失言でした… これはワタシの今までの経験談です… どんな完璧に創った兵器であってもどこかに綻びが出てしまいますからね… ワタシも美羽もね…」

彼女はスコープを付けて後ろへ下がる…

その表情は少し寂し気に見えるわ…

そしてレミリアの方は顔を真っ赤にしている…

「ぐぐぐ… 貴女ごときに分かるわけないわ!! スピア・ザ・グングニル
!」

レミリアは柚神に向けて槍を投げる!

柚神は背を向けてまま肩越しでレミリアを観察している…

「柚神!」

私が注意を促すと柚神の姿が消えレミリアの背後へ幽霊のように
現れる

「なっ!」

レミリアは驚きの表情を見せているが柚神は微笑むだけで彼女の
耳元に囁く…

「ワタシぶるとき? ワタシにはわかりますよ… 自身の欠点を消すこと
は生きていく限りの性ですからね」

そう言っただけで彼女は姿を再び消して私の背後に現れる。

「少々時間が長くなっちゃいましたでしたが早くやりましょうか… この
異変はもうじき終わりを迎えますからね…」

「ぐぐぐ!!」

レミリアの方は顔を真っ赤にしている… 柚神の言うことが気に
障ったのかしら?

「アンタが怒らせたんだからちゃんとサポート頼むわよ…」

「ええ… やりますよ…」

彼女は悪びれもなくスペルカードを取り出す…

しかし… この勝負は早くも見えた気がするわ…

一方その頃美羽は地下へ進んでいる…

霧雨魔理沙から受けた傷により、少々満身創痍の彼女であったが仕事を早く終了させるといふ目的が生まれたため先を急ぐ…

進む度に強力な力を感じた彼女は自身の受けた傷を治しながら、胸を高鳴らせていた…

side 美羽

「…あら？」

つい地下へ行ってしまったけど、これはこれでお宝に巡り合えたかもしれないわね…

柚神達が戦っている吸血鬼とは別の力を持った存在がアタシの近くにいます。

これはこれで面白いわ…

さっきの戦闘で受けた屈辱… それ憂さ晴らしが出来るかもしれないからねえ…

「上の方は柚神に任せましょう… 多分負けないでしょうね」
アタシは地下へと歩を進めていく…

しばらく進むと金属製の扉に行く着く…

この中から濃厚な力を感じるわん！

「ふんふん」

扉の門を開けて中に入ると真っ暗な部屋が目映る。

中は薄暗く牢屋のような内装ではなく客間のような感じになっている。でも家具やら壁は壊れたりヒビが入っていたりと何か暴れた

ような感じになっている。

光源は無いみたいだけど、アタシには分かる…。小柄な子供が暗闇からアタシの事をじっと観察していることにね…

「だれ？お姉さまではないみたい…。待って！少し明るくするから」

少女はベットの所で跳ねると蝋燭に火がともり部屋の中が少し明るくなり姿が明らかになる。

… 金色の髪をサイドテールにして赤い服とスカートを身に着けリボンのついたドアノブカバーのような帽子を頭に乗っている…。そして目立つのは背中にある翼のようなもの細い黒の棒に色とりどりの宝石のような羽が下がっている…。あれで飛べるのかしら？

「ウフフ…。だれ？お姉さまの友達かしら？」

お姉さま？今袖神達が相手している子のことね…

「アタシは貴女のお姉さんのことは知らないわん…」

「…。それでもいいよ！私の名前はフランドール・スカーレット！フランで良いよ！お姉さまのお友達では無いみたいだし…」

フランは右手をぐっ！とにぎるとアタシの横にあった机が弾け飛ぶ。

「オモチヤ ニ シテモ イイヨネ？」

「…」

アタシは机を見る…。バラバラになっており、砕けているパーツがある…

「コワサレナイデネ？…。オネエサン？」

「美羽よ…」

「？」

フランは頭に？マークを浮かべて首を傾げる。

「アタシの名前よ…。それ以外の呼称では呼ばないでもらいたいわん」

「…。ワカッター！ミハネ！」

「ええ…。良いわん！」

…今なら柚神の邪魔が入らないわ
少し遊んであげるわよ…
本気でね…

兵器の力

紅い霧異変の首謀者であるレミリア・スカーレットと対峙する、霊夢と柚神……

柚神の完璧なぞ存在しないという発言に激昂するレミリアとの戦いが今始まろうとしていた。

この異変の結末はいずこへ向かうのだろうか……

side 霊夢

「巫女の前にまづはお前からだ！この……ロボアーミーが!!」

レミリアは柚神に狙いをつけて光弾を放つ……

柚神はそれを笑いながら避けて、スペルカードを発動する。

「ふふふ……では様子見と行きますか……虚兵（ホログラム・キャスト）」

柚神がスペル宣言をすると柚神の周りに大量の画面が現れ、中から次から次へと柚神が現れる！

「！柚神が増えた？」

「ええ……このスペルはワタシ自身を増やすことができます……まあ色々と応用がききますのでね」

柚神は呑気にスコープをハンカチで拭いているが……彼女の周りの画面からは次々と彼女達が這い込んできてくる……

その光景はそこかホラーに見えるし……レミリアの方も顔を青くしているわ……

13体目が出てきてた後、画面は消えて増えた柚神は一斉にレミリアの方を見る。

「ちよ……反則よ!!幾らなんでも増えすぎでしょ!!」

「戦いに卑怯もくそもありませんよ……さあ！行きなさい！」

「畏まりました!!」×13

柚神達は懐から光り輝くナイフを取り出して、一斉にレミリアに襲い掛かる!!

「いやー!!!こないでー!!」

「ぐ?」

「な?」

「あら?」

レミリアの方は半泣きになりながら槍を振り回し柚神達を撃退していく…

何やかんやであの大群を撃退していく彼女はすごいけど…

「不夜城レッド!!」

レミリアは魔力を放出し、周りの柚神を消滅させる。

あつという間に全滅ね?

強いと思ったのに柚神の力を過大評価しすぎたかしら? 思ったより呆気ないわ…

「… 大丈夫なの?…!」

「… 配置を誤ったみたいね?」

柚神は少々苛立ったような顔をしながらハンカチを噛んでいる…

何故かさつきまでの敬語口調が抜けている…

これが彼女の地なのかしら?

こうしてみると… 完璧に美羽と同じね…

「… ふ… ふん!!どうよ!やっぱ見掛け倒しじゃない!」

「… 様子見と言ったはずだけど? とりあえず… 貴女の実力は分かりました…」

柚神はレミリアに向けて拍手をし、新たなスペルカードを取り出す。

「その身体能力を削ぐ必要が出てきたわ… 虚霧(ダウン・ミスト)」
柚神の体から霧のようなものが放出され、辺りが霧に包まれる。

「… あらっ？」

何かしら？この霧から甘い匂いがするわね？

… 何というか… 何もかも忘れそうになる…

「っ!!っ!!」

いけない!!これは柚神の能力!完全に私が巻き込まれているじゃない!!

「柚神!!アンタ私がいることを忘れてない?巻き込むんじゃないわ!」

「… あ… 大丈夫です…」

「何が大丈夫なのよ!!これの匂い嗅いでたら頭がぼーっとしてきたんだけど!」

柚神は耳をふさいでいる。

「これで!勝負を決めますから!大丈夫ですよ!」

「…」

レミアアの方を見ると地上へ降り、目を擦って欠伸をしている… 私と同じくこの霧の香りを嗅いだ所為ね…

「… な… なによ… このぼーっとする感じは…」

「これで貴女はワタシの術中に嵌った… ワタシ自身は戦闘力は低いのでこうでもしないと仕留められないのでね…」

柚神は懐からナイフを取り出してそれを舌で舐める…

「… 吸血鬼狩りというのは初めてですが… 戦争に比べればあつという間ですねっ!」

彼女はナイフをレミアアに投げる…

レミアアの方はそれを寸でのところで避けるが体が思う様に動かないのかバランスを崩して転倒する。

「っ!」

「あらあら… 無理に足搔かない方がいいですよ？下手に動く可愛いお顔に傷がつかますからね…」

柚神は再度ナイフを取り出してレミリアに向ける…

レミリアの方は戦意を喪失でもしたのか蹲ったままだ…

「これでチェックメイトです…」

「させるわけないでしょ！」

「っ!？」

刹那… 柚神の帽子が弾き飛ばされ、彼女は驚いて後ろへ後退する…

そして柚神と対峙しているのは銀髪の少女…

館内にいた妖精たちと同じ格好をしているけど… 人間みたいね…

どうやらこの人が柚神の戦いを妨害したようだ…

でもどうやって？

「さ… 咲夜？」

レミリアはその少女の方を見て顔を輝かせながら名前を呼ぶ…

どうやらその少女の名前のようね…

「お待たせしました… お嬢様… 咲夜只今参上しました…」

咲夜と呼ばれた少女はレミリアの方を見て微笑む…

対照的に柚神は驚きの表情を浮かべているが…

「… 何故？確か貴女は… さつきワタシが…」

「お嬢様が危険な目にあっているのに… 寝ているわけにはいかないわ」

咲夜は柚神に向けてナイフを放ち、柚神の方も負けじとナイフで反撃をする…

「おっとー！」

咲夜の姿が消えて柚神が放ったナイフは壁に突き刺さり、咲夜の方は柚神の背後にまわっていた。

「能力を使わなかったら大したことはないわね…」

「ぐ…なら…もう一度！」

柚神は辺りに画面を出して展開する！

「させるわけないでしょ？」

咲夜の姿が消えたと思った瞬間に柚神が出した画面が次々と爆発して消滅する。

「ば…馬鹿な？」

「貴女の能力は謎だらけで厄介なものよ…でも発動するタイミングが遅いから…幾らでも潰せるわ！」

咲夜が指を鳴らすと柚神の周りにナイフが現れ、彼女の体を切り裂きいていく…

そしてナイフの1つが彼女の左腕を貫き、柚神は刺された左腕をかばいながら後退する。

「柚神！アンタ！大丈夫なの？」

「ぐぐぐぐ！！！」

彼女は私の言葉に反応せず、ハンカチを取り出すがそれを傷に当てるのではなく噛みしめる。

「あー…もう!!むかつくーむかつく!!!何で妨害ばかり入るのよー!!!もう少して完璧に終わるはずだったのにー!!!」

彼女は悔しそうにハンカチを啜えてビローンと伸ばしている。

こうしてみると美羽に瓜二つね…

そんな柚神を見て咲夜はせせら笑う。

「地が出ているわよ?もうお得意のマジックは終わりなのかしら?」

「ワタシの能力はマジックではないわ!」

柚神は時計を取り出して時間を確認する。

「… 時間のかけ過ぎね… このままでは美羽が…」

「アタシが何なのよん?」

「!」

声のする方を見ると美羽が入り口の方におり、キセルを吹かしていた…

彼女は大広間に入り、私を見つけると軽く手を振る。

「あら? お久しぶりじゃない?」

「柚神の話の通りアンタも来ていたのね…」

「… つれないわね… せっかく会えたのに…」

美羽は軽く伸びをして辺りを見回している…

着ているものはボロボロだが彼女に関しては余裕そうだ…

美羽は柚神の方へ歩を進めて笑みを浮かべる。

「随分偉そうなこと言っていた割には無様じゃないかしらん?」

「… うるさいですよ… これからが本番です」

柚神の言葉に美羽は肩をすくめる。

「傷だらけで何を言っているのだから… とりあえず戻りなさいよ… ちよつと仕事を任せたいのよ」

「…!」

美羽が柚神に手を差し伸べると柚神の姿が光の粒子となり美羽の体に取り込まれていく…

「柚神は？」

「…アタシの体の中…この子は無理するからね…少し充電させないとね…それに頼みたいこともあったし…」

美羽はキセルを啜えながら咲夜とレミリアの方を眺めている…

彼女達も急に現れた美羽に警戒しているようだ…

「…また…新手ね」

「…援護します」

臨戦態勢になっている彼女たちを見て美羽はキセルの煙を吐き出しながら溜息をつく…

「中々の実力者みたいだけど…フランドールと比べて能力値が劣る気がするわぁ…」

「!?…フランがなんだって!？」

美羽の言葉にレミリアが反応する…

「ん？」

「お前！フランに何をしたと聞いている!!」

激昂するレミリアに美羽は耳をふさぐ…

「…そんな大きな声出さなくてもいいじゃない…あの子とは軽く遊んだだけよ？アタシの勝ちで終わったけどね？」

美羽は欠伸をするがレミリアはワナワナと震えている…

話が見えないけど、美羽の奴何かやらかしたのかしら？

「…貴様…咲夜！フランの様子を見に行つて!!」

「しかし！お嬢様！この者の力は！」

咲夜はレミリアに反論するがレミリアは首を横に振る…

「行つて！これは命令よ！」

「…畏まりました」

咲夜が消え、レミリアは美羽と対峙している…

「何？アタシ疲れてるんだけど？」

「私の妹に手を出した以上…嫌と言っても相手してもらおうわ！」

レミリアは槍を出して美羽に向ける…

美羽はキセルをしまい…私の方を見る…

「悪いわね…霊夢…人の獲物を捕る趣味はないんだけど…向こうはアタシに狙いを定めちゃったわ…」

「…別にいいわ」

私が許可すると美羽は拳を鳴らしながら笑みを浮かべる。

「感謝するわ…アタシとしても物足りなかったしいかしらん！」

美羽が両手を広げると彼女の体には力が集まっていく…

「スピア・ザ・グングニル」

レミリアの方はその状態の美羽に怯むことなく槍を投げる…

美羽はそれを見て笑う薄ら笑いを浮かべるだけだ…

「アタシ相手にそれはないわ」

美羽は槍を素手で掴み止める…

レミリアの魔力が籠ったものをいともたやすく止めるなんて…

「!!馬鹿な!!」

「もつと強くなつてきなさい[±]!符(ヴァイオレンス・ウェブ)」

美羽が薙ぎ払う動作をすると衝撃波が放たれレミリアに着弾する…

「げふー」

レミリアはそのまま置いてあつた玉座ごと後ろへ倒れて動かなくなり、衝撃の余波を受けたのか周りの窓ガラスが一斉に割れる…

キラキラと光るガラスの破片が宙を舞うのを見て美羽は天井を見上げる…

「これでお仕事終了ね…後は任せたわあ…霊夢」

美羽は壁の方へ近づいて座りキセルに火をつける…
吸血鬼である彼女を…一撃で倒すなんて…
天狗組織か…
とんでもないものを隠し持っていたみたいね…

side 咲夜

時を動かし私はお嬢様の妹であるフランドール様が幽閉されている地下室にたどり着く…
すでに部屋の扉は破壊されているし、ここで戦闘が行われていたことは容易に想像がつく…

妹様の安全を確認しなくては!!

「妹様ー!」

私は意を決して部屋へ入る。

部屋の中は破壊の限りをつくされており、原型がない…

これでは!妹様の安全が!!

「!…!?!」

「…」

部屋の隅を見るとぼーっと虚空を眺めている妹様を発見する…

「妹様!…無事で!!」

「… 咲夜?…ここに来たの?」

妹様はぼーっとしたような顔をしながら私の言葉に反応を示す。

普段は活発な妹様がここまで沈みこんでいるとは!

あの天狗!一体何をしたの!!

「お怪我はありませんか?」

妹様の体を確認するが外傷らしいものはない…
妹様も首を横に振る

「ううん… 私は大丈夫… 遊び疲れただけだから…」

「遊び？でございませうか？」

妹様の遊び…

そういえばあの天狗… 妹様と戦ったわりにはダメージが少な
かったし、まだ余力を残していた感じもしていた…

私が相手した袖神よりももしかしたら…

「…」

「咲夜…」

「何でしょう？」

妹様は私の体を抱きしめる

「あのお姉さん怖い…」

… 妹様の体が震えている

あの天狗の本気を見たようね…

私達はとんでもないものと戦おうとしていたのだろうか…

震える妹様を私は抱きしめる…

この異変は私達の負け…

とんでもない者が来てしまったわね…

お仕事後の一服

幻想郷に蔓延した紅い霧は、博麗の巫女＋その他により収束に向かう…

異変の首謀者であるレミリアを倒すのを見届けた博麗霊夢は、呑気にキセルを吹かしている天逆美羽のもとへ向かう…

side 霊夢

「…ふう」

「？」

広間の端つこでキセルを吹かしている美羽…

性格に難があると思っただけ… 実力は確かなようね…

私は彼女へ向かう…

「ふう… 何か用？」

「アンタ… 本当に何者なの？天狗の組織に属しているみたいだけど、実力・性格から考えて使われている側ではないと思うわ…」

「何者かと聞かれてもねえ… アタシは生まれてこの方ずうーと使われている側だからね…」

「？」

「分かりやすく言えば兵器よ… 兵器は使用者がいて初めてその性能を発揮するわん」

… 確か柚神が自身のことを兵器に例えていたわね

「柚神もアンタと同じようなことばやいてたわね… 綻びが出るとか… 完璧なぞ存在しないとか…」

私の言葉を聞いた美羽は僅かに不機嫌になる。

「あの子… まあ… いいわ… 言っていることは事実… ゴホツ
!!」

美羽は急に口を押さえる…

彼女がふさいだ手からは血が流れ出している!?

「アンター！大丈夫なの？」

「こほ…何…問題は無いわん…ここへ来る前にキツイの一発食らってしまったからね」

美羽は口についた血を拭いお腹を押さえる…

薄暗くてよく見えなかったが美羽の白い軍服のお腹の部分には血で赤く染まっていた…

まさか…こんな傷を受けた状態でレミリアと対峙したの？

「そんな状態で…」

私は玉座に倒れているレミリアを見る

満身創痍だというのにあのレミリアを一撃で倒したとなると…美羽の実力が計り知れないわ…

「心配はいらないわん…現在進行形で柚神がアタシを治療してくれているからねえ」

「柚神が？…ああそういえば…」

確かレミリアと戦う前に柚神は美羽に吸収されたわね…

柚神の能力は分からなかったけど、彼女なら治療の一つや二つ出来ると思うのが自然と頷けてしまう。

美羽は体を伸ばし地べたに座ったままキセルを再度啜える。

「まあ…アタシのことは気にしないでいいわん…博麗の巫女として危険かどうかの確認なのでしょう？」

「…まあそんなところよ」

美羽はボーっと天井を見上げる

「…アタシは権力やら快樂何てものは興味はないわ…前もって言うっておくけど貴女のお世話にならないわん」

「本当に？」

私が聞き返すと美羽は溜息をつく

「本当よん… アタシは… 生きていることだけで充分満足しているの…」

「… なら… アンタの言葉を信じるわ… でも万が一… 変なことを起こしたら…」

「… 分かっているわ… その時はね… けど貴女は本気のアタシに勝てるかしらねん」

「一回は勝ったわ」

「… 邪魔が入らなければよん」

美羽は立ち上がり窓の方へ向かう

「では失礼するわん… 初めての任務だし色々と疲れたわ…」

美羽は窓を蹴破って大空へ飛び出していく…

天逆美羽に天逆柚神ね…

少し厄介な存在が現れたけど… 何とかなるかしら？

「… とりあえず… この異変の後始末をしないとね」

私は伸びているレミリアを叩き起こすことにした…

妖怪の山…

美羽の牢屋…

天逆美羽は天狗の里の自身の牢へ帰還し、ベットの上に寝そべる…

「痛っ… 本当に… きついのが食らったわね…」

美羽は自身の腹部に手を当てて息を整える。

しばらくすると美羽の体が光り出し、柚神が彼女の体の中から飛び出してくる…

柚神は疲れが溜まっているかのように、飽き飽きとしたような目で美羽を見据える

「リペア完了です… 本日は安静にお願いします」

「…ご苦労さま」

美羽は柚神の方を見ずに寝ころんだまま…

柚神はスコープを外してハンカチで拭く…

「珍しいですね… 貴女が重症を食らうとは…」

「… 力量を図り損ねただけよん… それなりに本気で行ったけど… ノーダメージでは無理があったわん」

軽く答える美羽だったが彼女はその時のことを思い出す…

フランドールのレーヴァテインを食らう光景…

自身の体が壊れていく時の恐怖…

何百年ぶりに彼女は死を覚悟した…

美羽は左手首にある縫合の痕をさする…

かつて一回死にかけた美羽…

激痛…

鉄の臭い…

冷たくなつていく体…

虚ろになつていく心…

その時のことを鮮明に思い出したのだから…

「… 少し寝るわん… 後の処理は任せたわん」

「… 承知しました… 体を休めてくださいね」

しばらくして美羽が寝息をたて、柚神はスコープを付けて窓の外を見つめる。

「… 貴女に消えられるとワタシも困るのですよ… ワタシも… あの方もね…」

彼女のスコープに映るのは幻想郷を照らす月…

曇った彼女たちの心を照らすのだろうか…

これにて幻想郷を騒がせた異変は終了を告げた…

彼女たちの初めての任務も無事に終わったのだ…

新たな任務

紅い霧異変が収束して三日が経過する…

幻想郷にまた平和が訪れるが一部はそうはいかない…

妖怪の山のある牢屋ではその事後処理が行われていたのだから…

牢屋の中では机を引っ張りだし、書類の処理に追われている美羽とそれを見守る文の姿があった…

side美羽

「…ぐぐぐ!!!何でアタシがこんなこと!!!」

机に山と積まれていいる書類を見ながらアタシは愚痴をこぼす…

異変で重症を受けたというのに！休むことなくこれの処理に追われるなんて!!!

「あやや…頑張ってくださいいな！まあ貴女が悪いんですよ？能力の上限を破ったんですからね…」

文は笑みを浮かべながら大きな判子を持ちながら書類を確認する…

そう…アタシが書いているのは異変の報告書と始末書…

報告書を書くのはわかるわ…異変が終わったからそれを伝えるのは当然よ…

でも何で始末書まで!!ちくしょう!!何でバレたのよん!!!

確かにアタシが本気を出すことは禁止されていたけど！何でそれが組織にばれたの？

柚神の奴!!事後処理を怠ったわね!!

文がいなければ柚神の奴に、この書類の山の始末をさせられるのに
!!

しかし!天狗の山は柚神の存在に気づいていない!!

下手に柚神の存在が明るみに出てしまうと色々と面倒になる!!

「うぐ…」

筆を持つ手が震える…

へし折れそうになる筆を何とかしながらアタシは書類に筆を進め
る…

少女… お仕事中…

数時間後…

「…ぐぐぐぐぐ!!!!! お…終わったわ…」

最後の書類を書き終えた瞬間に筆が弾け飛ぶ…

これで今日の仕事は終了よ…

もう無理…今日は早めに寝ようかしら?

「あやや?大丈夫ですか?では次の仕事を…」

「は?何よそれ?」

「別件の仕事ですよ♪」

文は書類を片づけて机に一枚の書類を出す…

まだ終わってなかった!!

この組織はアタシを過労死させたいの?

「これ以上何を書けっというのよん!!!」

「今度は潜入捜査を行っていただきたいんですよ…。また紅魔館へね」

「…は？」

何でまたあの館に行かなくてはいけないのよ…

異変は終わったし、もう関係はないはず…

「何で？」

「簡単にいうと異変の再発の防止です♪」

「…うそン!？」

何でそんな面倒なことまでアタシが？

この前の異変の時アタシが本気出して力を見せてやったのよ？再発するわけないじゃない!!

「無駄じゃない？そんな細かなことでアタシが動くなんて…」

「上層部が決めたことですよ？まあ…上層部も石橋を叩いて壊して渡るくらい慎重派なので…」

「…壊さんでもいいじゃない!!」

文は扉の方へ向かうアタシの方を振り向きながらペンでアタシを指す…

「これは決定事項です！本日中に報告お願いしますよ！出ないと…書く書類が増えますからねえ」

文は黒い笑みを浮かべて牢屋を去る。

「ぐぐぐ!!!やるじゃない！文!!このアタシにそのような言葉をねえ…」

このアタシがここまでこき使われるなんて何年ぶりかしら？

でも嫌いではないわねえ…

アタシの恐ろしさを知った時の顔が楽しみだわん!!

でも…その前に…

「柚神!!出てきなさい!!」

「…何ですか?大声ださんでもいいでしょう?」

アタシの体から柚神が抜け出る…

彼女は眠そうな目を擦りながらスコープを目につける…

「こつちが重労働しているってのに!ぐっすりとは良い身分ね!!」

「何を怒ってるの?」

柚神の方も寝起きなのか不機嫌な顔をする…

でもそんなの関係ないわ!

「アンタ!この前の異変の後始末忘れてたでしょう!?おかげでアタシが始末書まみれになったのよ!!」

「…異変?…ああ」

柚神は明後日の方向を見ながら欠伸をしながらアタシの方を向く。

「貴女の体にリペアをしていたんです…それで手一杯だったんですから勘弁して下さいよ」

「リペアって…アンタ…」

「貴女が大怪我負わなければよかった話です…ワタシだって体は実質一つなんですから無茶な事言わないでくださいよ」

「アンタの何もかも隠蔽する能力を使えば良い話じゃないの!!」

アタシの言葉に柚神はイラツとした表情を浮かべる。

「ワタシの能力は隠蔽じゃないと何度言ったら分かるんだ?アンタは?」

「あ?あー!はいはい!!詳しくは(情報を操作する程度の能力)でしたね!!対して変わらないじゃない…」

「無にしてもいいのですよ?」

「あ? やってみなさいよ」

お互いに殺気を放つがすぐに徒労と気づく...

アタシには柚神を殺せないし、柚神はアタシを殺せないものね...

お互いに殺気を消す。

「...で? どうします? ワタシは寝ていたから状況を呑み込めないのですが?」

「紅魔館への侵入をまたするのよ...」

アタシの言葉に柚神は首を傾げる

「何故? あの異変はこの前解決したはず」

「再犯の可能性があるから調べるとの上からの指示よ... しかも本日中... 流石にもアンタの能力を使わないと潜入は不可能だわ」

柚神は考えるような仕草をする

この子のIQなら... 別に考えんでもすぐに結論は出るでしょう...
う...

「...分かりました... ではすぐに現場に向かいますでしょうか」

「その方がいいわ... アタシとしても早くするのに限るわ」

アタシたちは紅魔館へと向かう。

紅魔館へたどり着きアタシたちはその館の外観を確認する...

この前と同じ紅い屋敷...

異変の時はすんなりと潜入できたけど... 今度はどうかしらね?

「ど…どうするの？」

紅魔館の前の木の枝へ着地し様子をうかがう…
門には門番が一人…

侵入するには苦労はしないけどその後が問題ね…

柚神は紅魔館を観察しながら髪を手くしする

「… ふむ半日程度なら問題ないですね」

「どうするのよん？」

柚神はアタシの顔に手をつける

「紅魔館の者に気づかれなければいい話です」

「!?」

彼女の手が光りだす…

特に変わったような感じはしないけど、柚神はアタシの方を見ながら頷く…

「… 我ながら完璧ですね」

「… 何したのよん」

柚神は黙ってアタシに手鏡を渡す

それを見ると…

「… は？」

鏡に映るのは幼い顔をした灰色の髪をした少女…

アタシは自身の姿を確認する。

「… うそん!？」

体も小さくなってる…

服もメイド服に… 翼も昆虫のようなものになっているし…

これは…

「屋敷妖精に紛れば潜入はたやすいかと思われます」

柚神も姿を変えてアタシと同じ昆虫のような翼をはやす

アタシの肉体の情報を書き換えたのね…

柚神の能力は情報と呼べるものに全て手を加えることができる能力…

情報というのは全ての万物に作用する…それが生きている者であれば、柚神にかかれれば例外なく書き加えることのできる強力な能力…アタシの能力よりもずっと性質が悪いわ…

でも…

「…」

アタシは自分の左腕を確認する…姿は変われど、相変わらず元の縫合の痕が残っている…やっぱ駄目ね…エラーが出ているわ…

「回りくどいわ…他の方法はなかったの?」

「この方が一番早期にお仕事を終わらせられますので…では参りましょう?」

「はいはい…」

アタシたちは木から飛び降りて紅魔館の門の前に立つ…

潜入捜査開始ね…

とりあえず日が落ちる前には終わらせましょうか…

潜入紅魔館！

幻想郷の異変の再発防止に向けて紅魔館へ侵入するために美羽と
柚神は紅魔館の門へ着地する…

潜入することが第一条件…

彼女たちは屋敷妖精に変装し辺りの様子を確認する…

side 美羽

「さて… どうしようかしらねえ？」

潜入… とりあえずこの門を超えないと話にならないわ…

内部の情報がないと報告書も作成できないわ…

アタシと柚神は遠目で門の様子を確認する

煉瓦づくりの大きな高い塀… 門の前には赤い髪をした女性が
立っている…

確かこの子… 霊夢に倒された子よね？

「… 門番は一人ですか」

「そのようね… さて… どう突破するかが肝心ねん」

アタシたちは門番の様子を確認する…

別に強行突破でもいいのだけど潜入だし… 事を公にするのはご
法度なのよね…

「…」

「微動だにしないわね？」

「… 集中力を高めているのですかね？」

柚神はスコップを取り出しズームしながら観察している…

まあ… アタシの方はこの距離からでもくつきりと見えるけど
ね…

そしてアタシたちは門番の顔を確認する。

「zzzzzz!!」

「あら?」

「嘘でしょ?」

何と門番は鼻提灯を膨らませながら寝に入っていた...

まだ昼間だというのに何というセキユリテイなのかしら?

「...このまま素通りしても良い気がするわあ」

「...お待ちください」

柚神はアタシの前に手を出して牽制する?

「何よ?別に警戒する必要はないわん」

「いいから!よく観察をしてください!」

「...あ?」

大人しく門番の方をじつと目を凝らしてみることにした...

全く警戒する必要性が感じられないというのに...

「...ん?」

門番の周囲を見ると何かモヤのようなものが漂っている?

何かしら?今まで見たことが無いけど...アレに触れたらやばい

気がするわ...

「...何よアレ?」

柚神はスコープのスイッチを切り溜息をつく...

「あの門番から流れている気ですよ...あれに触れた瞬間に気づかれますね...」

彼女は地面に落ちている石を門番のところへ投げる...

そして石が漂っている気に触れると同時に門番が目を覚まし辺りを確認する...

「はっ!!… あれ?何かいた気がするのですが… まあいいか…」
彼女はまた寝に入る…

まるでレーザーポインターセキュリティね…

「… 器用ですね… 寝ているのにあれとは…」

「どうする?あの門番だけ気絶させとくとかどう?」

柚神は首を横に振る…

「駄目に決まっています!潜入ですよ?絶対に気づかれたら不味いんですから!!」

「潜入の基本よねえ… 分かっているわよん…」

しかしどうする?

あの門番の横を通らないと中には入れないし… 屋敷に入らないと情報は入らないし… ちよいとこの後の行動を考えないと…

しばらく考えていると柚神が門番へ近づく…

「柚神?」

「良いことを思いつきました…」

そういつて彼女は能力を発動する。

side 美鈴

「zzz」

昼寝… 私はこの時間が好きだ… 温かい日差しに照らされての昼寝はもう絶品です…

平和な時間です… 誰にも邪魔されたくはない…

例外に… 咲夜さんが来なければの話ですが…

(… りん… めー…)

誰かが私を呼んでる?

あれ?この声聞いたことがあるような?

(美鈴!!)

あれ?これはまずいかも!!

「はっ!!」

目を開けるとそこには赤い目で私を睨んでいる銀髪のメイドごと…十六夜咲夜さんがそこにはいた!!!

何で!?この時間は家事中だというのに!!!

「はい!!紅魔館の門番紅美鈴です!!!」

私は敬礼のポーズをとるが咲夜さんは不機嫌そうにナイフを取り出す…

「怒らないから正直に言って…寝てたでしょ?」

「ね…寝てませんよ、工作中ですよ?この前の件で懲りましたよ…」

私はとぼけることにした…

この前は正直に答えてお尻ナイフを食らったもの!!

正直に答えても地獄・とぼけても地獄…なら私は可能性のあるとぼけるを選ぶわ!

咲夜さんは私に詰め寄る…

「美鈴…私嘘は嫌いよ?」

咲夜さん…人間だというのに何て言う威圧感…

このままではいつものお仕置きナイフが私に来てしまう!!!
いやだ!!お仕置きナイフは嫌だ!!お尻ナイフは嫌だー!!!

私が心の中で叫んでいると咲夜さんはナイフをしまう…

「…そう?まあ…今日は見逃すわ…腑に落ちないけどね」

「…え?」

…あれ?いつもなら咲夜さんの追撃が来るはずなのに!?今日は手ぬるいですね…

…まあ私としては行幸ですけどね

咲夜さんは木陰の方へ向かうと隠れていた妖精の手を引っ張りこちらへと来る。

灰色の髪に長いエルフ耳…可愛い子です…

「その子は妖精みたいですけど?」

「今日から新人メイドとして来る子よ…色々と仕事を教えないといけないし…門を開けてもらえるかしら?」

「はい!!」

私が門を開けると咲夜さんとその新人メイドは屋敷内に進む…
そしてすれ違いざまに咲夜さんは私の方を見る。

「…居眠り厳禁よ」

「…やってないです」

咲夜さんからは私に忠告をしてそのまま屋敷の中へと入る…

「…はあ…助かった…しかし…今日は手ぬるか…
まあいいか!」

私は再度昼寝につくことにした。

三度の飯よりお昼寝タイムです!!

side美羽

「…なるほどね」

紅魔館の大広間にたどり着くとアタシは手を引つ張っていた人物
を見る。

アタシの目の前には紅魔館のメイドこと十六夜咲夜がいる…

彼女は薄ら笑いを浮かべながらアタシの方を向く…

「どうです?ワタシの演技は?」

格好こそ十六夜咲夜本人だが声がどんどんアタシに似てきてい
る…少しずつだけど化けの皮がはがれてきているわ…

「ベストアクトレス賞を受賞したいくらいだわん!」

「ふふふ!!うれしいですね…ですが…この姿を維持するのも疲れ
ますね」

咲夜の体は変化し始めて灰色の長い髪に緑色の瞳になりアタシの相棒……元の天逆柚神の姿へと変わる。

この子の能力（情報を操作する程度）の能力は彼女が集めた情報をそつくりそのまま具現化することができる強力な力……

情報というのはこの世の万物全てに当てはまるわ……生き物だって彼女にかかれば歩く情報みたいなものだし、その対象の姿・声・仕草・力も全て完全にコピーすることができる。

それに相手の元の情報を書き加えて弱体化することも可能という……とんでもない能力よ……

「……あのメイドに良く似せたわね……門番ビビっていたじゃないのん」

「咲夜の情報を使った結果です……どうやらあのやり取りは日常茶飯事だったみたいなので……」

柚神はスコープをつけて遠くを見つめる。

紅魔館の暗い長い廊下……壁にかかった蠟燭がアタシたちを照らす……

少し時間がかかったけど、これからがアタシたちのお仕事よね！

柚神はしばらく廊下を見た後アタシの方を向く……

「どうします？二手に分かりますか？」

「……いえ……ここで分かれるのは得策ではないわん……何かがあったときに対応ができないわ」

アタシの言葉に柚神は頷きスコープをしまう。

「畏まりました……ではミッション開始です」

「ええ……行くわよ」

アタシたちは廊下を突き進む……

さて再犯がないか確かめないとね……

そのころ紅魔館の門では紅美鈴がまた寢息を立てており、その前には本物の紅魔館のメイド長こと……十六夜咲夜がいた……

彼女は表情を崩さずに懐からナイフを取り出す……

「……もう日課になってしまったわね」

咲夜は美鈴にナイフを振り下ろす……

そして……

「いぎやあああああ!!!」

幻想郷中に美鈴の悲鳴が木霊する。

潜入と異国の文化

紅魔館へ侵入した美羽と柚神…

彼女たちは屋敷妖精へと変装し屋敷の奥へと進む…

単純な異変の再発防止の調査だと彼女たちは心の中で思っていた…

だが世の中うまくいかないのが当たり前である。

side 美羽

「… 流石にも広いわね」

長い廊下を歩きながらアタシは一つ一つの部屋の扉を開けて中を確認する…

異変の再発防止だとか上の連中は言っていたみたいだけど、その報告書を作るのには骨が折れそうね… それを纏めるためのネタがほしいわ…

「日が落ちる前には戻りたいのですがね…」

アタシの横を歩く柚神は窓の外を眺めている。

日の昇り具合としては14:00ぐらいかしら？ しまったわね… 潜入に時間をかけすぎたかしら？

「調査に使うネタさえあれば問題ないわ… いざという時はそれっぽく話を作っておけば問題ないわん」

「… 隠蔽はしませんよ」

白い目でアタシを見る柚神だがアタシは気にしないわ…

何やかんやでお仕事はちゃんと終わらす… それがこのアタシだもの！ 失敗は絶対にしないわ！

長い廊下を歩いていると柚神は何やらそわそわし辺りを見回し始める…

「…」

「どうしたの？」

「… 何かいい匂いしません？」

「柚神に言われて辺りに匂いを嗅ぐと何かの匂いがするわね…
明らかに食べ物臭いだわ…」

「… あら本当だわ」

「少し見てみましょうよー」

柚神に手を引かれ臭いの下へ向かう…

アタシとしては気が進まないけどね…

しばらく進むと大きな台所へとたどり着く…

白いタイル張りの部屋に様々な調理器具が置かれているシンク…
そして臭いの素である銀製の鍋…

アタシが記憶している日本の台所にしては随分と近代化が進んで
いるわね… これが異国の文化というものかしら？

「何やら美味しそうなものが入っているみたいですね！」

柚神は興味深々と云った表情を浮かべながら大鍋を観察してい
る…

任務には関係はなさそうだし… アタシとしてはここから離れた
いのよね…

… まあ… 柚神が珍しく燥いでいるみたいだし好きにさせとく
のもいいかもね…

どうせ食べやしないでしょ… 彼女の興味はその対象の情報だけ
だもの…

「さてと… 時間つぶしでもしようかしらん」

アタシは鍋から離れて戸棚を開けて中に入っているビンを確認す
る…

色んな色の粉末が入っている…

料理に使う調味料かしら？やはり異国の物が多いわ… ラベルに

はバジルと書いてある…」

「… 良い香りがするわね♪これ貰っておこうかしら？」

ピンを懐へ入れようとしようとすると誰かの視線を感じてアタシは入り口の方を見る。

「… 仕事さぼって何しているのかしら？」

そこには紅魔館のメイドである十六夜咲夜がいた!!!今度は本物!!!

アタシは柚神の方を見るが彼女も咲夜の登場が予想外だったのか目を点にしている…

(どうしますか？美羽！まさかの咲夜がここに！)

柚神は直接アタシに語り掛けてくるがここはとりあえず無視!!

今は姿を妖精に変えているけど下手なことをしてしまうとアタシたちの正体がバレてしまうわ!!

万が一バレて潜入捜査が失敗に終わったら…アタシに大量の始末書が降りかかってしまう!!!そんなこと絶対にダメ!!!

アタシの完璧な経歴に傷が!!!

「もう一度聞くわ？何してたの？」

咲夜はずいっとアタシたちに詰め寄る…

「… えーと… 休憩かしら？」

「左下に同じく…」

アタシたちはとりあえず返事はするが咲夜は警戒したままだ…

「休憩中ね… もつとも屋敷妖精は遊んでるのが殆どだけ…」

咲夜はアタシたちをジッと眺めている。

「な… 何よん」

「… 貴女たち… 何か… あの天狗達に似ている気がする…」

流石はメイド長… 勘が鋭いわ…

でも姿がばれても… いざとなったら戦闘不能にさせてでも任務は続行するわ!!

… この距離なら時を止められる前に何とかできるわ
右手に力を込めて袖神の方を見るが彼女は手で×マークを作って
首を横に振っている…

(駄目です!!バレたら後が大変ですから!!)

却下… ではアタシはどうすればいいのん…

「あの?あの天狗って何ですか?アタシわからな~い!」

アタシは無理に笑みをつくり咲夜へすり寄る…

戦闘禁止なら出来るだけごまかすだけよ… 始末書の山を味わう
のはもう勘弁!!

咲夜はアタシをジツと見つめる…

「… この前の異変の時に巫女と魔法使いに紛れて来たじゃない忘れたの?」

「えー?アタシ?気絶してたから詳しくはー?」

咲夜からの問い詰めをごまかしているが… どこまで通用するか
分からないわ…

袖神の方を見ると彼女は笑いを堪えているのか明後日の方向を向
いている… 仕事なさい!!!

言い訳を考えているが咲夜の方は相変わらずアタシたちの方を怪
しそうに見つめている…

「えーと…」

「… 天逆美羽と天逆袖神でしょ?」

咲夜のつぶやく一言がショットガンの弾のようにアタシの胸を貫
く…

「げほあ!?!… それって… その天狗の名前ですか?」

「ごまかしても無駄よ… 美羽貴女なのでしょ?妖精に変装なんかし
て?」

完全にばれているわ… 万策つきたわ… もう流石にもごまかし

きれない!!

アタシは地面に蹲り柚神はへらへら笑っている…

「何でここにきたのよ?」

「異変の再発防止に来たのよん」

「早くもばれてしまいましたかね…」

アタシたちは全てを自白する… もう駄目ね… 任務は失敗に終わったわ… これで帰ったら多くの始末書がアタシを待っている… もう覚悟するしかないわ…

咲夜はアタシたちを見つめて大きく溜息をつく…

「…ふー… まあ… 異変の再発防止ね… 別にいいわ… ちょうど人手が足りなかったし… 貴女たちの正体が何であれ関係はないわ…」

咲夜はそういうとアタシたちの手を引く…

「え?!どこへ連れてくの?」

「… とりあえず館の仕事をしてもらおうわ… 黙っている変わりの交換条件ということどうかしら?」

何という幸運なの!?!この交換条件を飲めば… アタシはあんな始末書だらけにならずに済むわ!!

「咲夜様くアタシ!話の分かる子って好きよ!!その交換条件飲むに決まっているじゃない!」

アタシは手を挙げるが柚神は鋭い目で咲夜を見ている…

「なんか怪しい気もするけど…」

「なんのことかしら?警戒しているのは貴女ぐらいじゃない?」

「あ?」

何故か柚神の奴は地が出ているわね?

咲夜と何かあったのかしら?

しばらく進んでいくと咲夜はとある部屋の鍵を開けてアタシ達を
その中に入れる。

「ここですばらく待っていて… 準備が出来次第呼ぶわ…」

そういうと彼女は廊下の奥へと消える…

館の仕事ね… 何かあるかわからないけど何とかなるわね…

アタシと柚神がいればできないことはまず無いと思うし…

柚神の方を見ると彼女はイライラと辺りを見回している…

… ああ… こうなると少し面倒になるのよね…

アタシは柚神の肩に手を置く…

「まあ… 落ち着きなさいよン！ 怪しいかもしれないけどアタシ達に
も安全にデータが取れるという利点があるじゃない！」

「… まあ… 確かにそうですがね… ふう… 仕方ありません…」

柚神は目を閉じて溜息をついた後… 元通りの口調に戻る…

アタシと似て厄介な性格な子ね…

まあ… いいわ… 館の仕事をするだけで情報が入るのだしアタ
シたちとしては都合ね…

久々に戦闘以外の仕事も頑張ってみますかね…

アタシ達は咲夜の仕事の指示を待つ…

紅魔館でのお仕事

紅魔異変後の異変の再発生がないか紅魔館に潜入した天逆美羽と
柚神…

柚神の能力でうまく変装した二人であったが紅魔館のメイド長で
ある十六夜咲夜により正体を看破されてしまう…

任務の失敗覚悟する美羽ではあったが咲夜の仕事を手伝ってくれ
るなら正体は黙っておくという交換条件により再度潜入捜査を開始
する… 異国の文化を知らない美羽達が紅魔館の仕事ができるかど
うか… それは誰にも予測がつかない…

side美羽

アタシ達は咲夜に連れられて長い廊下を歩いている…

正直… 任務失敗を覚悟したわん… 本当に続行できてよかった
わ… 流石のアタシも大量の始末書をやるのはもう勘弁だもの…

(まずどうします?)

柚神がアタシの頭の中に囁くけど… もう決まっているわ… 聞
かなくても分かっているクセに…

「とりあえず… やることはちゃんとやるわよ? で? アタシ達は何を
すればいいのかしら?」

咲夜はアタシ達の方を見て僅かに笑みを浮かべる…

「… 頼もしいわね… 流石は妹様とお嬢様を倒しただけはある
わ…」

「ふん… アタシ達は完璧だもの… 当然よ!」

完璧… それがアタシ達の存在理由だもの…

廊下の奥に大きな扉があり咲夜はそのノブに手をかける…

「では頼むわよ… まずここ…」

咲夜が扉を開けるとそこは…

「… あ… っは…」

目の前にはいつぞやの大きな図書館… そういえばここでパチユリーと魔理沙と戦ったわね…

「… まずは… っこの図書館の掃除をお願いするわ… 前回の異変の時に滅茶苦茶になってしまったし…」

「… 確かにねン」

よく見ると本棚が破壊されている箇所がちらほら見受けられる… まだ完全に元に戻ってはいないみたいねン…

「あらあら… 随分と破壊が進んでいるようで…」

柚神は辺りを観察するように見回し咲夜の方はアタシの方をじつと見つめる…

「どこかの誰か達が図書館で大暴れしたからよ… おかげで未だに掃除が進まないわ」

「ええ… うちの美羽がご迷惑おかけしました…」

柚神はぺこりと頭を下げる!!!

何でアタシの所為!?

「ちよ… ちよつと待ちなさいよ!!! 確かにアタシが大暴れしたのもあるけど魔理沙が本棚をドミノ倒ししなければもつと被害は抑えられただはずよ?」

「大多数は貴女の仕業でしょ… 美羽」

図書館の奥から今度はパチユリーが現れる… 何だか不機嫌そうな顔をしている。

「あら… この前ぶりかしら?」

「ええ… 何でそんな恰好の貴女達がいるか分からないけど… 図書館の掃除に来てくれたのかしら?」

パチユリーは咲夜の方を見る…

「ええ… パチユリー様… 職場体験のようなものです… 今回はこの2人に紅魔館の仕事をやっていただこうと思ひまして」

「なるほどね… レミイからは何も聞いてないけど… とりあえず凶

「書館の掃除を任せるわ」

「この大きな図書館の掃除ねえ… まあ… すぐに終わるわね…」

「柚神…」

「はいはい… 少し失礼しますよ」

「アタシの合図で柚神はパチキュリーの方へ移動し頭に手を当てる。」

「な… 何よ… 早く掃除を…」

「… 大体の過去のデータは分かりました」

柚神はパチキュリーから手を放し図書館を見つめ能力を発動する。

「荒れ果てた図書館はみるみるうちに変化していく… 倒れてたり
破砕した本棚は元通りの形となり元の場所へと戻り、落ちていた本は
元の本棚に収まっていく…」

「それを見ている咲夜とパチキュリーはその光景をポカンとした表情
で見つめている。」

「な… 何が起きたのよ？ 柚神の能力？」

「パチキュリーは本棚を慌てて調べている…」

「本の所定位置までちゃんとなっている… 一体何をしたの？」

「柚神の情報を操作する程度の能力よん… これで大体の物は柚神が
覚えていれば元に戻るわん」

柚神の方はスコープをハンカチで拭いている。

「… 貴女の頭の中を見させていただけだけです… その光景をそ
のままやっただけですから… 貴女が本の場所を覚えていたおかげ
で早く済みましたね…」

「… そういえば貴女うちの門番に化けたり出来たわね…」

「ええ… 短い期間でしたらその人の姿を一度見れば大体模倣はでき
ますよ？… 生きている者・存在するものは全て情報となりますから
ね、ワタシ自身も例外ではありません」

「情報ね… なら？ 私の姿も貴女にかかれば思い通りに変更出来るの
かしら？」

「… 何かしら？ 咲夜の奴、異様に柚神の能力に興味を持っているわ」

ね？あまり他人には興味を示さないような感じだったけど？

柚神は首を振る…

「残念ながら… 他人の体というのは見た目の情報が固定化している
ので例外はあります… 傷などを受けた場合に元の状態に戻すこと
や身体能力を一時的に弄ることは出来ても姿そのものを変更・身長を
増やす・胸を大きくするといったことの物理的なことまでは不可、そ
れに生物の場合は生きている者のみですね、体の機能が停止した時点
で不可です… モノはともかく生きている者については制約がある
以上、ワタシの能力はそこまで万能ではありません…」

「… そうなの？残念ね…」

「何が残念なのよん…」

「… 知る必要はないわ」

咲夜は少し気落ちでもしたのかそっぽを向く…

柚神は咲夜の方を見る。

「次はどうします？」

「… 予想以上に早く終わったわね… じゃあ厨房に戻るわよ…」

アタシ達は図書館を後にし厨房へ戻る。

厨房へと戻ると咲夜はポットとティーカップを用意し始める…
今度は何をしたらよいのかしらね？

「次は何をするのよん？」

「毎日15：00はお茶の時間だからその用意ね… 貴女たちはお
茶の用意をしてくれるかしら？」

「お茶の用意ですか？ではワタシが…」

柚神はお茶の葉が入った瓶を持つがアタシはそれを止める…

「ストップ！それはアタシがやる…」

「え?でも...」

「いいから!!!」

柚神に料理をやらせたら大変なことになるわ... それはもう過去に経験済みよ... お吸い物が汚水物になるくらい柚神の料理の腕は最悪だわ... 料理を口に入れただけで意識を失うなんて自分でもここまで酷いとは思わなかったわ...

アタシはポットのお茶の葉と水を入れてカートに乗せる...

クツキーを持った咲夜が怪訝そうな顔をする...

side 咲夜

「ちよつと! 幾らなんでも紅茶はお湯を使うのよ!」

私は美羽がしたことを確認する... カートの上には湯気が出ていない紅茶があるだけ... 幾らなんでもこんな手抜きは私としても許せないわ!

美羽は悪びれもせずに紅茶のポットを指ではじく...

「... ああ... 悪いわね... アタシのお茶の作り方はこんな感じなのよ... 大丈夫よ温かいから」

「?」

私はポットに触れる...

... 温かい... 丁度良い加減ね... 何で? 確かに美羽は水を紅茶ポットに入れたのにな?

「... 貴女的能力かしら?」

「それだけではないけどね... アタシの能力は... 見せた方が早いわ... これ持って...」

私は美羽からポットを受け取る... まだ温かいわね?

「これで何が分かるのよ?」

「いいから...」

美羽がポットに触れるとポットのお湯は今度は冷たくなり始める...

「…今度は冷水に？」

「戻すことも可能よ！」

今度は温かくなってくる…ポットの液体の温度の上昇・下降が激しすぎるわ…

私はポットをテーブルに置いて能力の関係性を考えを纏める…

なら…美羽の能力は…

「上昇と下降…それを調節する能力かしら？」

「理解はできたみたいね…でも半分外れ…アタシの能力の名前は（力の増幅と減退と調節する程度の能力）…これがアタシの力よ」

「増幅と減退…」

「ええ…あらゆる力を調節することができアタシだけが許された能力…気温・重力・火力あらゆることに応用が聞いわ…まあ…使いどころ間違えると大変なことになるけどね…」

ボン!!

ポットが弾け辺りに熱湯が飛び散る…

「…危ないわね」

「ね？とりあえず柚神く元に戻しなさい！」

「はいはい…」

柚神が空間を弄るとポットは元に戻る…

…美羽の能力はどこまでも増幅できるみたいだから一歩間違えば大変なことになるわね

「とりあえず？できたみたいだしどこでお茶会するの？」

「…中庭よ…その前にお嬢様と妹様を呼ばなくてはね…」

「分かったわん…では行きましょう」

私達はお嬢様を呼びに行く…

しばらくお嬢様の部屋へと続く廊下を進んでいく私達…。後ろについてくる美羽と柚神を見ると美羽は退屈そうにあたりを見回し柚神は窓の景色を眺めている…

冗談半分で仕事をやらしてはみたけど一通りはできるみたいね…。少し彼女達を見くびっていたかしら？

ガツシャーン!!

何やら破碎音が響く…。お嬢様の部屋の方からみたいね？

美羽と柚神は同時に首を傾げる…

「何よ今の音?」

「何です今の音?」

「…何となく想像がつくわ…。気にしなくてもいいわよ」

私はお嬢様の部屋の戸を開ける…

そして私達の目に映るものは…

「お姉さま!何で私のプリン食べたのよ!!」

「プリンに名前書いときなさいよ!!!」

部屋の中にはとつくみあいの喧嘩をしているレミリアお嬢様とフレンドールお嬢様…

どうやら昼食に出したプリンの件で喧嘩しているみたいだ…

「…何よこれ?」

「只の姉妹喧嘩よ…。気にしなくていいわ」

「…姉妹喧嘩?これがですか?」

柚神は部屋を指さす…

破碎した家具・天井・床・窓…。確かに人間の姉妹喧嘩ならここま
で被害は広がらないでしょうが…。お嬢様たちが吸血鬼…。そうも

いけない…

「…いつものことよ」

「…大変ね…これでは部屋を修理するのも一苦勞…ごふ!!」

美羽が飛んできた壺に被弾して倒れる…

部屋を見るとお嬢様達の喧嘩がエスカレートし始めている…

「あの時だって！私のプリン黙って食べたくせにー!!」

「490年前の話を持ち出すんじゃないわ!!」

…飛び交う壺・皿・ベット・戸棚…ああ…戻すこちらの身にもなっってくださいな…

とりあえず…喧嘩を止めないと他にも被害が…

私が部屋に入ろうとすると空気が急に重苦しくなり…私はもちろん喧嘩をしていたお嬢様達も動きを止める…

「…?」

その発生源の方を向くとそこには額から血を流しながら鬼の形相で立っている美羽の姿…

彼女はキセルを持ち出して火をつける…

「…こら…餓鬼ども…静かにしなさいよん?喧嘩なら外でやりなさいよ…他人が被害被るのよ!こんな風に!!」

美羽は自身の血まみれの額を指さす…

お嬢様達は美羽の迫力に押されたのか床に正座している…

「…あ…貴女はこの前の天狗!!何でここに!」

「ひっ!!あの時のお姉さん!!何でここに!!」

どうやらお嬢様達は美羽達の正体に気づいたみたいだが美羽は気にしないみたいだ…もう当初の予定はどうでもよくなったのかしら?

「アタシの鉄拳制裁を食らいたくなければオトナシクしときなさい…いいわね?アタシこう見えてかなりプツンしやすいからん」
「はひ!!」

お嬢様達は大人しく首を縦に振る…

すごいわ… お嬢様達の喧嘩を収束させるとは…

美羽は私の方を向く…

「とりあえず… お茶会は始めるのかしら?」

「… ええ… 一応毎日やっているし…」

「では… 早くしましょう? アタシとしてもここにいられる時間は限られているし… 柚神! この部屋の修正まかせたわ」

「ええ… 図書館よりは早く終わりそうですね」

美羽は柚神に指示をしてカートを押して中庭へと向かい… 柚神の方は私の体に軽く触れた後部屋の中へと入る…

「さあ! お嬢様達! 行きますよ」

「うん…」

「… はい」

意気消沈しているお嬢様達を連れて中庭へ向かう…

中庭ではいつも通りパラソルが指してあるテーブルでお茶会を行う…

お嬢様達はいつもよりか静かに紅茶を口に運んでいる… やはり美羽が怖いのだろうか?

美羽の方は屋敷の入口の方でキセルを啜えたままボツと空を眺めており上の空状態だ…

レミリアお嬢様は遠くにいる美羽を見ながら私に耳打ちする…

「ねえ… 咲夜何である人がいるの?」

「異変の再発防止に来たみたいですよ? 私達があれをやらないようにね…」

「やらないよ!? やらないわよ!!」

お嬢様は首を横に振る… まあ… あれだけ被害が出れば当然よね?

美羽も天狗の上層部から調べてくるように言われたみたいだし自

分の意志ではないことは分かるけど…

美羽程の存在が使われる立場というのは少し疑問が残るわね？実力は充分なのに…

「…」

「… 咲夜… お茶」

「!!はい！只今！」

私はポッドを持ってお嬢様のカップにそそぐ… 考えるのは後…
今は私の仕事をやらないとね…

お茶会が終わり厨房へ戻る私と美羽…

彼女は歩きながら何か手帳に記している…

「何それ？」

「帰ってから報告書に書くことを纏めているのよ… とりあえず再発はないとやっておくわ…」

「へえ？何を根拠に？」

「… この当主様の言葉を見れば充分よ… 必死にやらないと言っていたじゃない」

「あら？聞いてたの？」

「… 聞いていないわ… 見ただけよ… アタシは口形で何言っているか理解できるのよん」

「器用なものね…」

美羽の姿が変わりこの前の姿になる… 彼女は手帳をしまつて黒い翼を広げる…

「… 柚神の力も消えたみたいね… じゃあ… ここにいるのも悪いし退散しますかねん」

「あら？帰るの？」

「まだ帰ってからの仕事があるのよ… お暇するわ」

「また手伝ってくれるのはありがたいけど？」

「… 壺投げられるのは勘弁だけどね」

美羽はそう言うと言姿を消す…

廊下には彼女の黒い羽根が数枚落ちていているだけだ…

「… 天逆美羽と天逆柚神ねえ」

… 見た目はよく似ている姉妹みたいに見えるけど… どこか姉妹にしては違和感があるのよね？

「そういえば… 柚神の力は他者の身体的特徴は変更できないのに… 何で美羽はできるのかしら？」

少し私の方でも調べておくべきかしらね？

16:55

幻想郷の空の彼方に夕日が沈み… 妖怪の山へ目掛けて天逆美羽は一直線へ飛ぶ…

「任務完了ですかね？」

彼女の横を並走するように柚神が現れ美羽はキセルの火をつける…

「… まだ終わらないわ… 報告しないとアタシの仕事が増えるのよ… 本来私はデスクワークに向いてないのに…」

「ワタシも手伝いますから… そのためワタシがいるのですからね？」

美羽は少し笑みを浮かべて口から煙を吐く…

「それもそうね… 今も昔もアンタの代わりに台所へ立つのもアタシの役目だし」

「… ワタシだって… 多少は… 多分…」

「… いいからアンタはアタシが出来ないことをなさい… それがアタシらでしょ？」

「確かにそうですが… 腑に落ちない… です」

美羽達は談笑しながら帰還し… 本日の任務は無事終了する。

幻想郷縁起・天逆

妖怪の山の最終兵器く天逆く

主な危険度：極高

遭遇頻度：低

多様性：普通

主な遭遇場所：妖怪の山

主な遭遇時間：朝く夕

特徴：

天狗の山に所属する灰色髪为天狗…あまり天狗の里から外には出ないようて詳しいことは不明…

年齢は15く18といった風貌の少女であるみたいだがかなり高い戦闘能力を誇る…

自身を完璧だと自負しているがどこか抜けているところがあり、性格が災いしてか油断して傷を負うことが多々あるらしい…

被害報告：

人里の地面陥没・蕎麦屋にいた者達が謎の昏睡状態に陥るなどがあげられている…

実質死者は出ていない模様だが高い戦闘能力を持つため危険であることには変わりはない…

対処法：

こちらから喧嘩を吹っ掛けなければ問題はない…最低でも戦闘をすることはやめておいたほうがいいだろう…

○○○○の司令官

天逆 美羽（ミハネ）

能力：増幅と減退を調節する程度の能力

危険度：極高

人間友好度：普通

主な活動場所：天狗の山

好きなもの：山菜・ハーブの香り

嫌いなもの：肉類全般・思い通りにならないこと

髪色：灰色

目色：青

身長：170

スリーサイズ：B97/W55/H88

誕生日：12月18日

体力：B

霊力：A

速度：A

回避：D

攻撃：A

命中：E

能力：増幅と減退を調節する程度の能力：

この世に存在する力の増減を自分の意のままに操ることができる力である。

本人曰く重力・火力・自分の力なども調節することができるみたいだが増幅をし過ぎるとコントロールが効かなくなることがあるらしい……

目撃報告例：

・人里で妖怪を倒してくれたがいまいち謎の多い奴だ…（人里の守護者）

能力は知ることはできましたが未だに謎の多い人であることには変わらない

・ボーナスが増えました（匿名希望）

何故ボーナスが増えたのかはわかりませんが良かったですね…

・実力はあるみたいだけど性格がね…（博麗霊夢）

自分の力に慢心している箇所があるらしい…

対策：

基本的にこちらから喧嘩を売らなければ問題ない… 万が一怒らせた場合は逃げるしかありませんね…

パーフェクトミリタリースタッフ

天逆 柚神（ユウガミ）

能力：情報を操作する程度の能力

危険度：不明

人間友好度：高

主な活動場所：不明

好きなもの：データ採取・野菜類

嫌いなもの：肉類全般・作戦失敗

髪色：灰色

目色：緑

身長：170

スリーサイズ：B97/W55/H88

誕生日：12月18日

体力：E

霊力：A

速度：D

回避：A

攻撃：E

命中：C

能力：情報を操作する程度の能力：

この世に存在する情報を自分の意のままに操作することができる能力。

情報というのは自身の事も例外ではなく、容姿の変更や増減は可能であり人のコンディションも低下させることができる強力な力である。

しかし欠点というものがああり他人の姿までは情報が固定化されているため変更できない上元になるデータがないと完全に模倣できないというものがある。

目撃報告例：

・ 大人しいみたいだが何か嫌な予感がする（人里の守護者）
能力が能力だけあり、何かあるかわかりません

・ 紅魔館の異変の時にいたけど… 良く分からない子ね…（博麗
霊夢）

あまり目撃例がないのでどうすることもできない

・ 物腰柔らかそうに見えて… 怒るときの素は美羽とそっくり

よ…（紅魔館メイド）

唯一美羽と一緒に行動しているみたいなので彼女を追っていけば
そのうち…

対策：

能力の関係上対策を打つことはまず不可能といったほうがいいで
しょう… 戦闘をする場合気を付けるべきは美羽よりも彼女かもし
れませんね…

以上が天狗の最終兵器・天逆の幻想縁起でした！

更なる情報が入ったら随時更新していきますので応援宜しくお願い
します！

by 稗田阿求

第3章：2ndミッション 異常気象を何とかセヨ！ 追憶

○月△日… 妖怪の山…

幻想郷に秋が到来し紅葉に染まる妖怪の山では秋の神様達が嬉しそうに飛び回り、いつも通りの平和な妖怪の山の日常を描いている…

そして天狗の里の牢屋では美羽と柚神が将棋を指していた… 盤を見る限り美羽側が劣勢に陥っているのが一目でわかる…

side美羽

「…げ」

「ふふん？やはりこういうのはワタシが上手ですね」

得意げな柚神を無視しながらアタシは将棋盤に集中する… アタシの側には王将の他に歩兵が3枚… ここまで死ぬ寸前までやられるなんて…

「待つて… 考えるから…」

「… この状況では投了するしか道はありませんが？」

「むぐ…」

「… さあ？どうします？」

「こ… こいつ!!アタシに負けを認めろというの!?!しかもこんな嫌らしい笑み浮かびやがって!!」

「うぐぐ…」

「ただ一言言えばいいんですよ？さあ！さあ!!」

「…ま」

「ま？何ですか？聞こえませんかよー！」

「… 参りっ！ましたっ!!」

「よく言えましたー！偉いですよ！美羽！」

柚神はアタシに向けて拍手をする

「… こいつ… つか殴る… 殴れることができたなら殴る… と

「いうより… 殴ることに意味があるのかしら？」

「アタシはキセルの火をつけて将棋盤を眺める… 考えてみればこれが出来なくとも別に生きていく上では必要はないわ!!」

「こういうのは柚神の役目! アタシは実行するのが役目だもの!!」

「アタシなら一回で全員を倒せる實力はあるのに…」

「アタシは駒の王将をつまんで柚神の陣地へ移動させ柚神はスコープを磨く…」

「ルールはルールですから… 確かに貴女ならこういう状況でもひっくり返すことはできるでしょうね」

「アタシは完璧ですから…」

「アタシは自分の陣地に置いてある3枚の歩兵を眺める…」

歩兵… か

「…」

「どうしました?」

「… いや何でもないわん」

「アタシは将棋の駒を片づけ始めると柚神は酒を啜りながらアタシを見つめる…」

「… あの3人の事でも思い出しましたか?」

「っ!!」

「柚神の言葉に怯んだ所為で駒を盛大にばら撒いてしまう…」

「… 凶星ですね」

「… 知ってたくせに」

「アタシは駒を1つずつ回収し元に戻すと柚神は天井を見つめながら口を開く…」

「… あの件は貴女の所為ではありません… ワタシの所為でもありません…」

「… アタシが… 力を過信しなければ… あの子たちは死ぬことは…」

なかったのよ!!あの子達の未来を奪ったのはアタシ!アタシなのよ!!!

…あの時の光景が鮮明に思い出してくる

燃える景色に肉塊と化した部下の姿…アタシが…あの時余計なことをしなければ…

「…」

「…貴女だけが悪いわけではありません…そうでしょ?」

「…慰めにはならないわよ」

アタシは柚神の言葉を一蹴しお酒を煽る…

柚神なりに慰めたつもりでしょうけど意味がないわ…アタシにとつては忘れたいことだけど…あの子達に合わす顔がない…

こんなアタシを見たら…なんて思うでしょうかね…

「…柚神…もう一戦よ」

「…はい!幾らでもやりますよ」

アタシ達は再度将棋を開始する…

今度は間違えないわ…今度こそ…

一方幻想郷のとある屋敷…

その屋敷の一室には幻想郷の母こと八雲紫が布団の中で寝息を立てていた…

「むにゃ…れいむ〜!」

…時刻は午後2:58

紫は寝返りを打ちながら寝言を口にするが起きる気配は一切な

い…

だだだだだだ!!!

だが八雲家の廊下を走る音が響き始め薄っすら紫の額に青筋が立つ…

バシン!!!

激しく開かれる障子の音… 更に紫の額に青筋がたつ

「大変です！紫様!!!」

そして紫の従者である八雲藍の大声によりとうとう紫の堪忍袋の緒が切れる…

「うるさいわー!!」

「ぎゃあああ!!!」

弾幕結界が放たれ藍と部屋が破壊の限りを尽くされる…

side 紫

「… 失礼しました」

土下座をする藍を見つめながら私は部屋の惨状を確認する…

破壊された畳・天井・壁・箆笥…

五月蠅かったとはいえ… これはやりすぎたわ…

「… 何よ藍？わざわざ私を叩き起こしたんだから何かあったのかしら…」

「実はこれが!!」

藍は幻想郷縁起を出す…

新しい新刊ね… まだ私は目を通していなかったわ…

「何よ？阿求の奴が私のプライベートでも掲載したの？」

「それではありません!!!奴が掲載されているんです!!」

「…奴？」

私は藍が差し出す… ページを見つめ藍が言いたいことがすぐに理解ができた…

「… 天逆美羽… 柚神ね…」

そのページには彼女達の事が書かれていた… 随分懐かしい名前だ事…

「あいつらが生きていたんです!!しかもこの幻想郷に!!」

「… 生きていたのは予想外ね」

… 美羽に関しては藍が左手を切断した上に体に重症を負わせたのを記憶しているわ

そして柚神共々自爆して跡形もなくなったはずなのに…

「阿求に彼女達の事を説明していなかった私が悪いわね…」

「どうします?!あいつら今は天狗の組織に所属しているみたいですよ？」

… 天狗の組織ね… 幾ら私でもあそこに関与はできないわね…

幻想郷の不可侵領域に近いものね…

「… 保留にしたい方がいいわね… 今のところ異変の解決が今のお仕事みたいだし… うまく泳がしておきましょう?… 触らぬ神に祟りなしよ」

「宜しいので?」

「二言はないわ… 藍!遅いお昼だけど用意してもらえるかしら?」

「は… はい…」

藍は立ち上がり障子を開けて台所へと向かう…

「天逆ね…」

… あそこまでの実力者はそうはいないわ… 出来ることなら敵
としては出会いたくなかったけど

私は布団から身を起こすと縁側から白い猫が私の部屋へ侵入す
る…

「なー」

猫は藍が置き忘れた幻想郷縁起に顔をつっ込みじゃれついてい
る…

「橙のペットかしら？ほらほら！貴女の家はあっちの方向よ！」

猫を庭へと戻すと猫はそのまま草むらへ消える…

「… とりあえず大人しくはしているみたいだけど… 様子は見ない
といけないわね」

私は藍のご飯にありつくために居間へ向かう…

遠い問題より今のご飯！今はそれが大切だもの…

大雪注意報

秋が終わり幻想郷に冬が到来する…

幻想郷の自然を白銀の雪が覆う寒さに厳しい季節であるが幻想郷の住民の生活には関係のないものであった…

しかし今年の冬は違った…とある日天狗の里の牢屋を射命丸文が目指している…

side文

「お仕事！お仕事ーっと！」

私は上層部から渡された書類を持って美羽のいる牢屋へ向かう…
恐らく今度の異常事態も異変に違いありませんね!!彼女の力が必要です!

私は牢の戸を開こうとすると中から話し声が聞こえる…

「はうん!… もみちゃん… もっとお…」

「ここっ!ですかっ!美羽様っ!」

… 中から美羽と椀の声が… しかし… 何やら息が荒い気がします…

「…?」

私は戸に耳をつける… 中の声が鮮明に聞こえ始めます…

「ふん!ふん!ふん!!」

「っ!!… はあ… はあ… あ… 貴女… 意外にテクニシャンなのね…」

「… ふふ… 美羽様… ここが良いみたいですわね!」

「… ああっ!!!」

中からは美羽の艶やかな声が聞こえる…

まさか… 中では美羽と権が!!

「… 権… あ… 貴女… 美羽とそんな関係だったの？」

私は中に突入することが出来ず聞き耳を立てる

「も… もみちゃん!!こ… これ以上やったら… 駄目っ!!アタシっ!!」

「何ですか?もう終わりですか?… まだ15分ぐらいしか経っていませんよ？」

「だ… だめなのっ!これ以上やったら… あ… アタシ壊れちゃうっ!!!う… うああ!!」

は… 入り辛い!!もうクライマックスじゃないですか!!

ですが!これを渡さないと私の仕事が終わらないのも事実!!気づかないフリをして切り抜けるしかありません!!

「美羽!お仕事ですよー!!!」

私は戸を開く!

「… あやや?」

… 私の目の前にはベッドの上でうつぶせになっている美羽に馬乗りになっている権の姿…

彼女は私に気づかず美羽の背中に両手をつけて体重をかける…

「そおい!!!」

ベキボキっ!!

「はうん!!!」

美羽の背中から嫌な音が獄中に響き、悲鳴のような声を上げて美羽は枕に顔を突っ伏す…

「… な… なんだ… マッサージ中でしたか…」

全く紛らわしい… 私としてはお楽しみ中でもよかったですかねえ…

そして漸く権が私の存在に気づく…

「ん？文様？何でここに？」

「それはごっちのセリフよ… 何で貴女が美羽の牢屋にいるんですか？」

権は美羽の背から降りて彼女を指さす

「いえ… 美羽様と剣の稽古をしていたんですが… 美羽様が腰をやつてしまいました…」

「ええ？」

あの美羽が腰を？仮にも天狗の最終兵器なのですし… そのようなことで…

美羽はプルプル震えながら懐からお金を出す

「… もみちゃん… ありがとね… これお駄賃だから… 好きなもの買ってらっしゃい…」

「良いのですか！美羽様！」

権は目を輝かせる… 今まで私は権のこのような目は見たことありません… それに… 美羽の手の中のお駄賃… それなりに高額です!!

「いいのよん… お疲れ様…」

「お疲れ様です！ゆつくり休んでくださいね！」

権が美羽からお金を受け取り牢屋から出ていく… あんな楽しそうな権は本当に久しぶりに見ましたね… 軽く嫉妬を覚えます…

「… おっと！本来の目的を忘れるところでした」

私は美羽に近づく…

美羽は私の方を見ずに枕に顔を埋めており… 心なしか… 体を震わせています… もしかして…

「あれ？泣いてます？」

「泣いてっ… ないわん!!!」

美羽は枕に顔を埋めたまま言いますが声が震えまくってますね…
「… あゝ！確かにすごい音がしましたし貴女が泣くのも頷けますが…」

「泣いてないわん!!!」

美羽は枕から顔を離しますがもう涙目ですし… 目の下が真っ赤です…

ですが追及するのはやめましょうか…

これ以上彼女の機嫌を悪くすると任務を言い渡せません…

「貴女にお仕事が入ったのですがいいですか？」

「… ダメよん!!腰をやってしまったの!!無理な体勢でもみちゃんの攻撃を避けたら… 腰がごきっ！って!!」

「駄目です！例外は認められません!!」

「酷いわ!!」

美羽は駄々を捏ねますが関係はありません… 私は黙々と書類を読む…

「紅霧異変に続く異変が発生しました… 貴女にはその調査に行ってもらいたいというのが上層部の命令です」

「… アタシに人権はないのね… 悲しいわ… でも異変の内容を言いなさいよ… アタシには何の事だかわからないわ!!」

美羽は不機嫌そうな顔をします… 幾らなんでも気づくとは思ったのですが…

「… 本日の暦はいつですか？」

「… 五月ね？」

「外の天気を見てください」

美羽はしゅしゅと格子の外を見る…

「… 大雪ね」

美羽が外を見て分かるように外は雪が吹雪く銀世界に覆われている…

そう… 今回の異変はその五月まで続く長すぎる冬が続く異変… その調査を彼女に依頼したのですが気づいていないとは…

「長すぎる冬… その解決が貴女の仕事です」

「… てっきり幻想郷だからこんな長いと思ってたのよ… ほら！アタシずつと牢屋にいたし…」

美羽は腰を押さえて青い顔をする… 腰が痛いのでしょうか？

「とりあえず… お願いしますよ？ 貴女の仕事は天狗の里にとって不利益になりそうなものを解決することが役目なのですから」

「ア… アタシ… 本当に腰をやってしまったのだけど？」

「お仕事なさい!!」

私はそのまま牢屋を出る…

「鬼!!悪魔!!サデイストー!!」

美羽の叫び声が聞こえますがとりあえず無視でいいですね… 私の役目は終わりましたもの…

「… さて… 新聞のネタを考えませんか…」

私は新聞のネタを探すために人里方面へ向かう… 後は美羽にお任せです…

side 美羽

「お… おのれっ！文っ!!」

腰の痛みを堪えながらアタシは開きっぱなしの扉を閉める…

まさか… もみちゃんとの決闘の最中に腰を痛め… 更に追い打ちをかけるように異変の依頼が来るとは…

「どうすればいいのよん!!!」

外を見ても大雪が降り積もる幻想郷の景色… 流石のアタシでも原因までは分からないわ!!

「… その前にリペアを… 柚神!!」

アタシが叫ぶと何も無い空間から柚神が現れる…

彼女は眠そうな目でアタシを見つめている

「ふああ… なんですか?」

「… リペアをお願いするわ… 異変の調査のお仕事前に体を整えておきたいのよ」

「… はいはい… 腰ですわね」

そうとうと柚神はアタシの体に馬乗りになる

「!!待ちなさい!!何でアンタがアタシの体に乗るのよ!!!」

「リペアでは時間がかかりますので… 早く異変に向かいませんといけませんし… 手っ取り早くやるにかぎります」

柚神はアタシの背中に力を込めるっ!!

…
ベキっ!

「いったーい!!!痛い痛い!!!」

腰の骨が鳴る音がする!!

腰が折れる!!!折れちゃう!!!折れちゃうよ!!!

「全く… 遊びで器に負荷をかけるからこうなるんですよ」

「やめっ!!無理!!これ以上やったら!!」

アタシの制止も聞かず柚神は更に力を込める

…
…
ベキっ!!

「ぎゃあああああ!!!痛いっ!いたっ!… 痛いっ!!!」

腰が砕ける!!もみちやん以上に痛いわ!!これでは本当に痛みでアタシが天に召されてしまう!!

「あらら… 変にひねっているみたいですね… ワタシも力が強いわけではありませんがやるしかないわね…」

更に… 力が加わる!!

ぼきっ…

もう… 骨折れたわ…

激痛が体中に伝わる…

「あー!!!ひ… ひっ!!!ごめんなさい!ごめんなさい!!!あー!!!」

…!!でも… これで終わりなのよね?もう痛い思いしなくていいのよね?

アタシが体を動かそうとすると柚神が体を押さえる!

「な… 何よ!!もう終わったでしょ?」

「まだ?十分の一です… 後9回やらないと…」

… あと9回!?アタシは… こんな苦悶を… あと9回もしない

といけないの!?

「やめてー!!!」

この後… 9分間アタシに対する拷問が続く…

side 柚神

「ひぐっ!!酷い… アタシが痛いって言っているじゃないっ!!」

ワタシの前にはベットのうえでぐずついている美羽がいます…

とりあえず無理矢理ですが腰は完治させました… しかし美羽の方は完全にストライキし始めていますね… ベットから動こうとし

ない…

「悪かったですって…でも早く行かないと他の事に支障がでますよ？」

「もう…嫌よ!!アンタがアタシの代わりに行ってきなさいよ!!」

「あ?」

完全に拗ねてやがる…いい年こいて駄々っ子とは手に負えねえわ…

だがここは我慢…ワタシには秘策がある!

「…ごほん!もう治ったでしょ?早く仕事しないとまた始末書書くはめになりますよ?」

「それも嫌!!」

一瞬で美羽は泣き止む…思いのほかうまくいった…

その顔は絶望感に満ちていますが…本当に始末書を書くのが嫌なのでしょうか?まあ脳筋の彼女にとってはデスクワークは拷問でしかないでしょうね…

「ほら!行きますよ!」

「うぐぐ…サポートしなさいよ…今回は前回とは違ってどこから来ているか分からないわ…」

「確かに…」

前回は霧の発生源を辿っていけば何とかかなりりましたが今回は違う…

有益な情報を集めないといけませんね…

「とりあえず…頑張りましょうか…案外歩き回っていれば原因にたどり着くかと」

「ええ…とりあえず片っ端から…やっていきますか!これの所為でアタシがどんなに辛かったか!」

美羽の表情を見ると黒い笑みを浮かべている…

完全に腰の痛みの憂さ晴らししようとしていますね…

美羽の身勝手な怒りですが…まあ…構いません…美羽とワ

タシは一心同体ですもの… 彼女の怒りは良く分かる…

「では参りましょうか…」

「行くわよん！疑わしきは罰するわ!!!」

ワタシ達は猛吹雪の中幻想郷の空へ飛ぶ…

さてさて… 今回の異変はどうなりますかね？

早くもターゲット発見

猛吹雪により白銀の世界と化した幻想郷…

天逆美羽はいつまでも終わることのない冬の異変の勅命を受け幻想郷を飛ぶ…

side 柚神

「さて!!黒幕をぶっ飛ばすわよん!!とりあえず片っ端からやっつけてばいいわね!!」

開口一番… 美羽の口からとんでもない言葉が飛び出す…

早速テロでも起こそうとでもいうのでしょうか？

「あの？美羽？黒幕はともかく片っ端からとは？」

「何言ってるのよん!!怪しいと思った者は片っ端からやるのよ!アタシの腰の痛みの恨み晴らしてやるわ…」

美羽が拳を鳴らす…

この脳筋が…これではいつまでたつても黒幕へはたどり着けませんよ!!

それどころか多数の冤罪被害者を出してしまうでしょうが!!

「幾らなんでも無差別は非効率では？もう少し頭を冷やした方が？」

「アタシは…アンタの拷問に近いマッサージを10分近くやったのよ!この怒りは誰にぶつければいいのよ？」

…完全に怒りで目が曇っていますね…これはダメです…ここまでになると美羽は止められません…ワタシは良く知っていますから

「この左腕の切断の痛みよりもやばかったわ!!」

美羽は左腕の縫合の傷をささる

「…それは盛っていますよね？」

「…うん…盛ったわ…これが一番痛かったわ」

美羽は罰が悪そうに顔を青ざめて目を反らすが見つけたの

かその方向を見る

「アタイはサイキョー！誰にも負けないー！」

美羽の目線の先にはいつぞやの氷精ことチルノがいた…

冬… 氷… 異変…

単純な美羽の思考回路の事はワタシには頭に入ってますもの…
次に彼女がやることは…

「犯人みーつけ!!!」

美羽はもはや狂気に満ちた表情を浮かべてチルノの方へ接近する…

「あ？」

「おらあ!!」

美羽が拳を突き出し振動波を出す。チルノは辛うじてそれを避け… 初めてワタシ達の存在に気づく…

「げ… お前らあの時の…」

「久しぶりじゃない♪チルノ♪この異変アタタが犯人よね？とりあえず冬を解除するか殴られるか… どちらかを選びなさい♪」

流星単細胞… 話を聞くまでもなく犯人扱いとは…

チルノの方も困惑の表情を浮かべている…

「い… 異変？アタイ何のことかわからない…」

「アタタが犯人でしょ？氷の妖精だもの… 長い間冬にするくらいできるじゃないの!?完璧のアタシの推理は間違いないわ!!」

… 何が完璧ですか… 冬⇨チルノ… だと無理矢理考えたでしよけど… あまりにもガバガバすぎます…

「でも… アタイは知らない!」

「しらばつくれるんじゃないわ!!アタシの拳が火を噴くわよ!」

美羽の奴… 完全にチルノを犯人扱いしてます…

ああ…ダメだ…この単細胞が主導権を握っていると終わるものも終わらなくなります…

「少し黙ってなさい」

「ふふ」

私はすぐ近くにあった石で美羽の頭を殴る…

美羽はそのまま冷たい雪の草原に倒れこむ…これで話がスムーズに進みますね…

「え？美羽が…倒れた…」

「大丈夫です…これで丸く収まりましたよ」

「でも…雪原が血まみれで…」

チルノは倒れた美羽を指さす…

彼女から流れた血により雪原が血に染まっていますが気にはしません!!!

私はそつと彼女に近づいて瞳を見る…

少し恐怖に染まっていますが…問題はないでしょう

「少し質問をします…貴女はこの長い冬の原因を知っていますか？」

「…し…知らない！」

チルノは焦るかのように返答しますが…瞳を見る限り嘘は言っていないみたいです…

嘘はついていない…これだけの情報があれば充分…彼女は異変に関わっていないし黒幕も知らないということだけわかりました…

「これで質問は終わりです…うちの美羽がご無礼を働きましたね…ではワタシ達は失礼しますよ」

「お…おう」

ワタシは美羽の体を引きずりその場を後にしようとするが辺りの気温の変化に足を止める…

「…」

(お待ちなさいよ…：せつかく来たんだし私の相手もしてもらわないと…)

透き通るような声…：チルノのものではない別の声…：誰かいますね…：

しばらくすると辺りが吹雪き始めて中から一人の女性が出てくる…：

薄紫色のショートヘアに白い防寒着のような服…：

この人が来て更に気温が下がりました…：

「どちら様で？」

女性はワタシを見て口を開く

「私の名はレテイ・ホワイトロック…：冬の妖怪といったところかしらね？」

レテイと名乗った女性は軽く息を吐く…：

その息は白く…：辺りの大気を少しだけ凍らせる…：

一応…：この人もこの異変には該当しますかね…：

ワタシはスコープの倍率を上げて彼女の瞳を観察する…：

「もしかして…：貴女はこの長い冬の問題に関係しているみたいですね？」

「いえ？何が原因か分からないけど…：満喫はさせてもらっているわね」

…：変化なしか

嘘は言っていないですね…：しかし何でこのタイミングで姿を現したのでしょうか？

何か嫌な予感が…：

「失礼…：ではワタシ達はこの辺で…：」

ワタシ達が去ろうとするとワタシの横を鋭い氷柱が通り過ぎる…：

「まだ何か？こちらは色々忙しいのですが？」

「こちらにはまだ用はあるわ… チルノの話聞いてたけど… 貴女たちこの長い冬の異変を解決しようとしているみたいじゃない？」

「ええ… 一応仕事ですのよ」

「… それはまだ駄目よ… せっかくこうなっただし… もう少し長くてもいいじゃないの！だから少し眠っててもらいたいよね」

レティはスペルカードを取り出す…

ふむ… 関係ないのに巻き込まれましたか…

ワタシとしては時間を浪費するのはあまり宜しくはないのですがね…

「美羽出番ですよ？」

ワタシは美羽を揺さぶるが… 彼女はぐでつとしたまま…

ああ… そういえば… ワタシが昏倒させたままでしたね…

と… いうことは… この荒事はワタシが担当ですか…

「はあ… こんなことだったら美羽を気絶させるべきではなかったですね…」

「もう遅いわよ！… 見た限り貴女の方は戦えなさうだしね…」

レティは余裕な表情でワタシを見ますが… ワタシもそれなりに戦えるのですがね… 何がいけないのでしょうか…

「とりあえずは無駄な時間は取りません… 矛盾（リバーズ||リバーズ）」

ワタシはスペルカードを発動させる…

さて… どこまでやりますかね…

sideレティ

「さて… とりあえず氷漬けにしときましようか」

私の目の前には黒い軍服の女性と足元で虫の息になっている白い軍服の女性…

さっきの光景を見る限り、その白いのは直情型…

ゆつたりとした仕草が目立つけど… この中では一番素早く動け

る方ね… 昏倒していて助かるわ…

チルノに突っかかってきて… あまり気が長い方ではないみたいだし…

そしてその黒いのは… 慎重… チルノや私の瞳の動きを確認して真偽を図っていた…

頭はよさそうだけど… さっき白いのの頭を殴るときの動作が鈍い…

こつちの方は戦闘向けではないようね…

彼女は目につけたスコープをハンカチで拭っている…

「やるなら早く始めましょう？こつちも時間が限られているので…」

「ええ… 分かっているわ… とりあえず貴女たちはここでかき氷よ！」

寒符（コールドスナップ）

黒いのへと氷弾が放たれる… 幾多の氷弾は黒いのを囲む！

「綺麗な弾幕です… ですが… 避けられる範囲ですがね！」

その氷弾を抜けて私に一気に近づく！

「!!」

速い!! 鈍そうな子とってたのに!! これは!!

私は彼女から距離を取るが彼女は私に手を向ける… 来るわね!!

「来るのかしら…」

「ええ… ただしワタシの方からは来ませんがね…」

「え？」

「ぐっ!!」

私の背に衝撃が走り私は体勢を崩す…

「え？被弾？」

私の背後を見ると何もない空間から光弾が出現しこつちへと向かってくる!! 死角から攻撃とは姑息なまねを!!

私はそれを避けて彼女から更に距離を取る

大した速度でも威力もないけど… 不意打ちにしては驚いたわ…

「死角から攻撃とは随分と卑怯なまねね…」

「ふふ… ワタシのスペル矛盾(リバーズ⇨リバーズ)は全てにおいて逆に作用するんですよ… こんな風にね！」

黒いのが前方下に手を向け私は辺りを見回す…

そして私の後方上部かの空間から光弾が発射される!!

「くっ!!」

… 彼女の言う通り手の方向を逆の空間に光弾が発射される!!

私が避けると光弾は彼女の目の前で消滅する流石にも自分の光弾が当たるわけないか…

「ふふ… 今のうちに慣れないと怪我しますよ？」

再度彼女はあらゆる方向に手を向けて逆方向に光弾を放つ…

「そうね…」

大した威力・速度もないから… 数をこなせばすぐに体が慣れてくる…

変則的だけど… 慣れば何とかなるわ!

「あら？全部避けましたか？」

大量の弾幕を避け15分が経過する…

「少しトリッキーだけど普通の弾幕ごっここと変わらないわ… 貴女のやることは全てが逆になる！貴女が前方に光弾を放てば私の後ろから光弾が来て貴女の方へと戻る… それさえ理解できれば問題ないわ…」

「おや？理解が早いようで…」

黒いのは悠長にスコープを拭いている…

自分の力が理解されたというのに… 随分と余裕そうね…

でも… この子と長い間戦うのは禁物ね… 次に何が起こるか分らないもの!!

私は彼女へ向かい距離を詰める!!

黒いのは私に手を向けて迎撃に移っている

この状態なら!!私の背後一直線に来るわ!!

「これでは終わらないわ!!」

私は背を氷結させる!!

軽い防弾チョッキみたいなものだけど、これなら黒いものの攻撃を耐えて本体を撃つことができるわ!

「… 思い込みとは恐ろしいものですね」

「え?」

黒いのをみると彼女の手から光弾が放たれていた!?

そんな!!彼女の攻撃は逆に作用するはずなのに!!

とつさに避けようとするが自分で至近距離まで詰めてしまったのでもう目の前… 避けられるはずもなく私は被弾する!

「ぐ… ああ!!」

私が落下し黒いのは私の前へと降りてくる…

「そんなに威力はありませんが… きついところに当たりましたし… 動かない方が賢明ですね」

「あ… 貴女なんですか? 貴女の弾幕は逆に作用するはず?」

黒いのは私に向かって微笑むだけだ…

「思い込みで行動するからですよ」

「… どういうこと?」

黒いのは空間にボードを出して指示棒でそれを軽くたたく…

ボードには黒いのこのスペルの細かな説明書きがされている… 読
む気にはなれないけど…

「ワタシのスペルはおつしやるとおり！ 光弾の発射が逆になるもので
す… 貴女は最後の一瞬それが来ると思っていたはずです… 私が
スペルを解除しているとも知らずにね」

「… 解除… そういうことだったのね」

スペルの解除… つまり初めの状態に戻してたのね… うまい具
合に嵌められたわね…

「そういうことです… ワタシがいつまでもそれをしてるとお思いで
すか？ スペルの解除をすれば光弾は通常通りに発射されるのです
よ… 15分緩い弾幕で貴女が信じるまでね」

「… 随分と意地が悪いわね… 回りくどいことばかり…」

黒いのは嫌らしい笑みを浮かべて肩を震わせる

「ふ… くく… 元々がそうですからね… 他社を困惑・混乱・惑わせ
るのは楽しくてしかたがありませんっ!!… やっぱり… 変えれた
と思っても地は変わらないものよね…」

黒いのは私に近づいて私の額に手を当てる…

きついのもらったし… もう限界ね… これ以上動けないわ
「何？ とどめを刺す気？」

「痛くはありませんよ… 少し眠ってもらいましょうか？… 目が覚
める頃には春が迎えているでしょう」

「残念ね… そのまえに貴女の名前を教えてくださいませんか？ 名乗る
前に戦いを始めてしまったからね…」

「名前ですか… そうですね… 天逆… ○○ですね…」

… 可愛い名前ね… 今度は… 負けないわ…

私が意気込むと同時に強烈な睡魔が私を襲い視界が暗転する…

天逆○○… 覚えたわ…

side 柚神

「…しまった」

「…しまった… 本名を言ってしまいました…」

美羽の奴が五月蠅いです… バレないようにしときましょう…

私は眠りについたレティを木下へ移動させ気絶している美羽を叩き起こす

「美羽！起きなさい!!!次行きますよ!!!次!!!」

「… うあ?」

美羽は目を開けて血まみれの額に手を当てる…

「…!!!な… 何でアタシが血まみれ!!!」

彼女は怯むが記憶が安定してきたのかワタシに掴みかかる

「暴力反対です…」

「何が暴力反対よ!!!アタシを石で昏倒させたくせに!!!… つ!!いたた…」

美羽は蹲って頭の傷を回復させる…

少し強くしすぎましたかね?耐えられるくらいには手加減したはずですが?

「話を円滑に進めるためです… 冤罪を作るわけにはいきませんし…」

チルノの方を見ようとするが姿は無し… 逃げてしまったのでしょうか…

「せめて口頭で注意でいいじゃない!!アタシだって聞き分けはあるわ!!」

「… 理性より本能で動くのが何を言っているのですか… ワタシは充分そのところは理解しています」

「…う」

美羽は言い返せなくなったのか言葉を切る…
とりあえずこれは終わりですが… まだ仕事を終えるには早いで
す…

異変の黒幕が誰かもわかっていないのですからね

「行きますよ美羽…」

「分かってるわよん…」

ワタシ達は吹雪の中を再度飛ぶ…

ゆっくり… 情報を集めていきますかね…

THE猫

白銀と化した幻想郷の激しい吹雪の中……レティとの激闘を終えた天逆一行は次への目的地へ急いでいた……

しかし……黒幕の情報を持っていないため作業は難航し焦りの表情を浮かべる一行であったが彼女達の目の前に古い廃村が目に見える……

幻想郷の事をいまいち把握していない彼女達であるが情報もないのでその廃村へ降りることになった……

そこでは何が待っているのだろうか？驚き……それとも？

side美羽

「……今度は廃墟？情報が集まらないじゃない」

アタシの目の前には昔は人が住んでいただろう廃墟が映る……

人の気配は感じない……こんなところで情報が集まるのかしら？

「ですが……複数の気配を感じます！情報を集めるのにはちようど良いと思いますが？」

……その複数の気配が話せる者だったらの話だけだね

柚神はどこか抜けているから信用ならないわ……でも信じるしかないわね

「アンタの事信じるわ……話になる相手が見つかるといいのだけど？」

「……多分大丈夫です……多分」

アタシ達は廃墟の奥へ進んでいく……

まともな返答を得られるかしら？

一方その頃……廃墟事マヨイガの奥には沢山の猫が生息していた……猫好きの者には堪らない楽園であろう……

その沢山の猫に混じって二又…猫の妖怪である少女がじやれついていた…

茶色い髪に赤い導師服に身を包んだ少女…

彼女の名前は橙…とある妖怪の式神である。

いつものように彼女は猫を集めようと号令をかけるが…彼女は
まだ未熟…

猫たちは橙の言うことを聞かずに好き勝手にあちらこちらへと移動する…

side 橙

「うああん!!何でうまくいかないの!!」

散らばる猫たちを集めようとする私だが…猫たちは次々と草むらへと隠れてしまう!!

頑張つて私が上だと言っているのに彼女達は言うことを聞いてくれない!!

この様では…私が八雲の性を貰えるのは…いつになるのだろう…

これでは藍様が…悲しんでしまう!!

「うああん!!そんなのいやー!!誰でもいいから!!私の言うことを聞いてー!!」

私は草むらの中から猫たちを探す…

誰でもいいの!!とりあえず私の言うことを聞いて!!

私が草むらを探すとある白猫が目映る!この子でもいい!!進歩があれば!!

私は猫じゃらしを出してその猫に振る!

「…」ふりふり…

「なー！」

その猫は私にすり寄る!! やった!! 今までの努力が実を結んだ!!

初めて! 猫がこっちに来てくれた!!

「やったー! 初めて来てくれた!!」

「なー... プイ」

しかし... この子は猫じゃらしにすぐに飽きたのか... 廃墟の奥へと行ってしまおう!!

「待ってよ!!」

この子にはまだ相手をしてもらわないと!! 私の為! 藍様のため!! この子には協力してもらわないと!!

白猫は建物の角を曲がり私はその後を追う...

「... にゃ?」

「な〜!」

猫を追っていたと思ったら私の目の前にはマタタビガス注意と書かれている巨大なドラム缶が鎮座している...

その上には白猫が乗っており、猫は猫パンチでその元栓を外している...

「にゃ!? ま... 待って!! それは!!」

白猫は私の方を向いて...

「... ごめんね♪」

... しゃべった!? この子しゃべったよ?

その言葉を聞くと同時にドラム缶が破裂しマタタビが辺りに充満し...

「... ふうんやっ?」

そして私の意識が暗転する...

廃村の奥へ進んでいくアタシ達だけど… やはり柚神はあてには
ならないわ…

「… 情報収集できないじゃない」

「… ワ… ワタシは複数の気配を感じ取っただけです!!… 生き物
には違いありませんし… ワタシは悪くないというか…」

… 柚神の声がどんどん小さくなっていく… 流星にも自信喪失
でもしたかしらね？

それもそうよね… だって… アタシ達の前には…

「なー」

「にゃー!」

「ごろごろ…」

アタシ達の周りには多数の猫…

確かに沢山いるけど… 意思疎通ができないわ…

「他に行くわよ!!時間が惜しいわん」

「ええ… その方がいいかと」

アタシ達は猫を避けて廃村を後にしようとする…

「… あらあら…?もう帰っちゃうんですか…?せっかく会えたとい
うのに〜」

「!!?」

「声?」

辺りを見回すが静かな廃村に響くその声の主はどこにもいない!!
でも…この声…この話し方…まさか!!そんなはずは…

「う…嘘よね…あ…アタシ疲れてるのかしら?」

「…いいえ…ワタシも聞こえました…そしてデータからして…この声紋の主は…」

「久々に可愛い部下に会えたというのに…随分な言葉ですね…〇〇様
♪」

「!?!」

アタシ達の目の前には白い猫が現れる…猫は笑みを浮かべながらこちらへ近づき猫の姿は少しずつ変化していき人型になり始めてくる…

「あ…ああ…」

「再度お久しぶりです♪〇〇様♪」

アタシの目の前には懐かしい姿がいた…

赤い軍服に身を包み白い長い髪をした…うさ耳を付けた少女…

睡眠が…そこには…いた…

「あ…アンタは…確かあの時に死んだはず?」

アタシの言葉に睡眠は頬を膨らませる

「…勝手に死んだって勘違いしたのは〇〇様です!!確かにあの時は爆風で肉塊になってしまいましたけど…ちゃんと意識はありましたよ!〇〇様だったら…泣きながら私を地面に埋めてマジで本当に死ぬかと…」

「っ!!!」

アタシは彼女の体を無意識に抱きしめていたっ!

今起こっていることが… 幻なのか… 確かめるために…
でも… 温かい… 心音が聞こえるっ！
この子は生きてる!!

「うー苦しいです…」

「おバカ!!生きてるならアタシの下に来なさいよ!!もう… 会えないのかとっ!!」

「○○様く?私は言ったはずですよ?部下である限りはずっといるって?」

「… 軽口は… そこまでに… とき… なさいっ!!本当に昔か… らっ!!口が減らないっ!!うっ… ああ… うああああ!」

とめどなく涙があふれて止まらないっ!!このアタシが… かな…

睡煉はアタシを抱きしめて肩を軽くたたく…

「はいはい… 大丈夫ですよ… ○○様く… 睡煉はここにいますからね」

10分後…

「ぐす… とりあえず… 生きててよかったわ」

睡煉に慰められ… 何とか平常心を保つことが… できたわ…

睡煉は柚神の方へ向かいアタシと顔を見合わせる…

「んく?相変わらず… 昔の癖が抜けていませんね?○○様?」

「アンタ… その言葉は禁句だと言ったはずだけど?」

「美羽の方は五月蠅いですよ?睡煉…」

柚神が睡煉をたしなめると睡煉はアタシと柚神を交互に見つめ

る…

「確かに覚えていますけどー… ややこしいんですよね… 本当…」

「気合で慣れなさい!!アタシについてくるならー!」

睡煉は笑みを浮かべて敬礼のポーズをとる…

「それはもちろんです!第0部隊!隊員ナンバー2!睡煉!美羽様・柚神様についていきます!!」(睡煉 (すいれん) 通り名・ミラージュ・アサシン)

「…それでいいわん… 睡煉… せつかく会ったところ悪いんだけど…」

「なんでしょ?」

睡煉は敬礼のポーズをとったまま首を傾げる

「… 春を越えて… この銀世界… 何かおかしいと思わないかしら?」

「… 今年は冬が長いなくつと?思っていましたけど…」

「アタシは今その調査の仕事をしているのよ… 協力してもらえるかしら?」

「そんな水臭い!!私はちゃんと手伝いますよ!一緒に解決しましょうよ!美羽様!!」

… 口は軽いけど… 本当に良い子ね… 偶には… 道草喰うのもいいかもしれないわ… 思わぬ幸運と出会えるのだもの…

「では!調査再開よ!柚神!睡煉!!次向かうわよ!!」

「ええ… 畏まりました」

「了解ー!」

アタシ達は今度こそ廃村を後にし再度情報収集へ向かう…
… とりあえず… 1つ過去の悩みが消えたかしら…

虹色の人形使い

天逆一行はマヨイガにてかつての部下である睡煉と合流する…
部下と合流できて感激する彼女ではあったが本来の目的である長い冬の原因を突き止めるには及ばなかった…
そして彼女達は吹雪荒れている幻想郷の空を飛ぶ…
異変の解決にむけて…

side 美羽

「すごい吹雪ですね〜？これではこの世界の生態系が狂ってもおかしくはないですね」

「… ええ… アンタのいう通りよ… まあ… とりあえず… 今の仕事はこれの原因の究明だから… 協力おねがいね」

アタシは睡煉に言うが彼女は不服そうに首を傾げる

「ん〜？私としては〜… 美羽様が何でわざわざここまでするかが疑問なんですけど…」

「… 仕事は選んでられないの!!そう思うなら!アタシのために頑張りなさいよ!!」

「それはそのつもりですー!」

睡煉は頬を膨らませて賢明に辺りを見回す…

彼女がぶらぶらさせている左うさ耳には外れかかった装置が埋められている…

「それって受信器かしら?」

「ん?そうですけど?」

アタシが尋ねると彼女はいつでもよさそうにうさ耳を挿んで受信機を確認する…

「けど… その装置にアタシは少しだけ… 希望を見出しているわ!!」

「それで… 他の子の居場所って分かったりしないかしら？ 確か貴女たちの標準装備だったはずだけど？」

「あく…」

睡煉は言いづらそうに眼を背ける…

「… 何か問題でもあったかしら？」

「… 実はこれ壊れているですよね… 爆発の以前から調子悪くて… 直そうかなと思ってたら… アレが…」

… やっぱり… うまくは行かないわよね…

「せめてメンテナンスくらいはちゃんとしときなさいよ…」

「それは重々承知です… 地上で遭難して連絡できなかつたんですから…」

睡煉はアタシを見つめた後… 帽子を目深にかぶりなおす…

「… 彼女達なら平気ですよ…」

「… ん？」

「だから！他のメンバーです！！簡単にくたばるわけないですし！！どこかで生きてますって！！美羽様が心配するほどないですよ！」

「… ん」

… 少し気を使わせてしまったかしら？

駄目ね… これじゃあ… 完璧とはいえないわ…

しばらく進んでいくと魔法の森の上を通過する…

ここは… 調べるだけ無駄ね… 広いし迷いそうだし… 柚神のデータから… 特に変わったものはなかったわ…

「見た限りめばしいものはなさそうですね…」

「そうみたいね」

… 今回の異変は目的が分からなすぎるわ… これではどこから手をつけていいかすらままならないわ…

「… 困ったわねこのままじゃ本当に手詰まりだわ」

「場所を変えた方がいいですかね？」

「その方がいいわね… 柚神… 次の場所をサーチして」

さつきと次を見つけないと… このままじゃ… 時間を無駄にしてしまうわ…

「いえ？ここに来たことは決して無駄ではないと思うわよ」

「…」

声のする方を見るとそこにはアタシ達を見下ろす金髪の少女がいた… 青のワンピースに白のケープを身に着け… 彼女の周りには洋風の人形が彼女を守るかのように浮いている…

明らかに能力者… 困ったわね… あまり戦闘をするのは好ましくないわん…

「お次はどちら様？アタシ達はお仕事で忙しいのよん」

「私はアリス・マーガトロイド… 只の通りすがりよ… お仕事ね… 天狗とうさぎの妖怪が何をしているのかしら？」

「上層部からの指示です… この長い冬を何とかしろという勅命を受けているのが現状ですね…」

柚神の話にアリスは薄ら笑いを浮かべる…

「行き詰っているように見えるのは私だけかしら？」

「何が言いたいものよん！… 喧嘩なら買うわよ？仕事が思う様に進まなくてイライラしているのよん!!」

「… 天狗組織に属しているにしては… 随分と短気なのね？どこぞの新聞記者を見習った方がいいわ」

「文の奴は関係ないわ!!管轄が違うのよ!アタシ達は!!」

「... イライラして疲れてくるわ!これはわぎと煽っているのかしら?」

アタシに興味を持ったから近づいて来たって感じみたいだけど困るわね...

余力は残しておきたいんだけど... 戦わないといけないみたいね...

「美羽様!私が行きますよ!」

睡煉が手を挙げてアタシの前へと出てくる

「アタシは戦闘向けではなかったはずだけど?」

「いいじゃないですか!!久々の睡煉の戦いを見てくださいいよ!」

睡煉はアリスと対峙する...

「では!前座としてこの睡煉がお相手します!!」

睡煉は笑みを浮かべて手を広げながらアリスの方へ向かう...

「貴女が相手ね... 一番弱そうなのが来たわね」

アリスの言葉に睡煉は頬を膨らませる

「失礼ですねー!!これでも私はそれなりの実績はあるんですよ!!少なくともお姉さんのような人間には遅れはとりません!!」

「... そう?」

アリスが手を動かすと睡煉の周りに人形が一瞬で配置され睡煉は身動きが取れなくなり動きを止める...

「いや!?!」

「... その割には周りが見えていないわ... これで終わりよ」

「うぎゃあ!!!」

人形から光線が放たれ睡煉は被弾し爆発四散する…

sideアリス

「… スペルを発動する必要もなかったわね」

辺りには爆発による砂煙が舞っている…

今の子弱かったわね？ 何に実績があるか分からないけど… 隙が
ありすぎるわ…

「睡煉ー！ 返事なさい！！」

白い軍服に身を包んだ天狗は青い顔をしながら煙に向かって叫ん
でいる…

恐らくこの中では一番強いのはこの人で間違いないわね…

隠しきれしていない力を感じるし… この人なら魔法の実験になる
というものね！

砂煙が晴れてくる…

あの子からの反撃が来るかもしれないけど… 殺気も何も感じな
いわ…

「…？」

砂煙が完全に晴れ私の目の前には倒れているはずの彼女が跡形も
なく消えている光景だった！

魔力は調整したはず… 消滅するまでの力を出していないのに何
故!?

白いのを見ると体を震わせて青い顔を更に青くしている…

「… あ… あ… アタシはまた… 部下を… 死なせたというの

?… まだ… つもる話も聞いていないと… ぶ… ぶぶぶつくく
くっ!!」

彼女は白目を剥いて口から泡を出して倒れる…

… 何か悪いことをしてしまった気がする… 私だってまさか消滅するとは思っていなかったわ!!

彼女の横の黒い軍服の者はスコープをハンカチで拭きながら観察するかのように彼女がいた空間を眺めている…

こつちの方はあまり力を感じないけど… 何か嫌な感じがするのよね… 私のすべても見透かされているような目線を感じるわ…

「… ふむ… なるほど」

「あ… 貴女は冷静なのね… その白いのは気絶しちやっただけど？」

黒いのはどうでもいいかのように目を閉じる…

「美羽がこうなのもいつものことです… 長年の付き合いですからね… それよりも貴女… アリスといたしましたよね？」

「ええ… そうだけど? 何?」

黒いのはスコープを目に着けて私を見つめる… その緑色の瞳は何かを見透かしているような雰囲気を出している…

「… 油断しないほうがいいですよ… 睡煉は人懐っこい子ですけど…」

「っ!」

黒いのが言い切る前に私の体に違和感が起き私は動きが取れなくなる!

「な…」

誰かに羽交い絞めさせたかのように体が動かなくなる! もがこうにしても… 力が強い!!

辺りには誰もいないのに!! 何が起きているの!

「お姉さん… 捕ま〜えたく〜！」

「っ!!!」

背後の何も無い空間から先ほどの睡煉と呼ばれた子の声が聞こえる!!

後ろを肩越しに見つめていると… 背景の景色が少しずつぶれ始めてきている？

「… な… 何が起こって…」

「お姉さん私の能力を甘く見ていたみたいですね…」

声が再度聞こえると同時に私の背後にはいつの間にか睡煉が私を羽交い絞めしていた…

「… う」

このまま上海達で迎撃してもいいんだけど… 彼女と密着しすぎているから… 私にも光弾の被害が及びかねない!!

黒いのが言っていた油断というのは… この子の力のことだったのね!!

「… 何かの能力持ちかしら？」

「そうですね〜… 言いますと〜私の能力は（姿を自在に変化させる程度の能力）なのですよね… 隠密作業には便利なんですよね」

睡煉は体の半分を消す…

今の私には左半身がない酷い映像が映っているけど… 本当に消えたわけではないみたいね…

細胞を弄って透明化させたというべきかしら？

「随分と面白い能力を持った部下を持っているじゃない…」
黒いのにというと彼女は首を傾げる…

「… 余裕そうですね？ 本当に気を付けた方がいいですよ？… さっきの話の途中ですが… 睡煉は人懐っこいですが…」

「これでも何人も殺めている… 連続殺人鬼なのですからね…」
「!?」

黒いこの話を聞き終わった後… 首筋に冷たいものを感じる…
今まで気が付かなかったけど… 私の首にはタガールの刃が当てられていた…

「お姉さんく？ 私はこう見えてく… 本当に沢山の人をバラした…
大量殺人鬼… 大量殺人鬼なんですよねくこういう戦闘はある程度
踏んでいるんですよね…」
「う…」

… 力量を凶り損ねたかしら？

この中では一番弱いと踏んでいたけど… 本人のいう通り実績は
あつたみたいね…

… なら… 私も少し力を入れた方がいいかしら…

「!… 睡煉… 戻りなさい」

黒いのがいうと私の後ろにいた睡煉は黒いの下へと戻る…

「… 何ですか？ これからがいいところなの…」

睡煉は地団駄しながら抗議をするが黒いのは気にせず空間に画面を表示させてそれを眺めている。

「… 時間がかかりすぎましたね… これでは今後の任務に支障が
たします… 他のところへ向かいますよ」

「えー… 美羽様はどうするんですか？」

黒いのは倒れている美羽を一瞥して彼女の体を担ぐ…

「そのうち起きるでしょう… こうなれば他の方法をとりましようか
ね」

「他の方法ですか？」

「…ええ」

そういうと黒いのと睡煉はそのまま森の中へ消えていく…

「…」

…あの中で一番やばそうだったのは…美羽という天狗だったけど…あの黒いのも同等ね…

あの人が少し魔力を高めたのに気付いて睡煉を退かせた…戦闘全体を把握する力に長けているみたいね…

「…まあ…いいわ…少しは実験が出来たし…」

私は吹雪いている空を見る…

この冬も長いわね…

あの黒いのが何を考えているか…何となく予想がつくわ…

それに…もしかしたら…あの天狗…

「…まさかね…物理的に無理よね…さて…上海達を回収して戻りますか」

…私は上海達を回収して自宅へ戻る。

漁夫の利

魔法の森でアリス・マーガトロイドと軽い戦闘を行った天逆一行は吹雪の中黙って辺りを観察していた…

気絶した美羽を背負ったまま辺りを見回す柚神とクシヤミをしなから辺りを面倒臭そうに眺めている睡煉の二名…

「…くしゅん！…いつまでここにいるんですか？」

「…そろそろ動きがあると思いますよ？」

「…くしゅん！」

睡煉は不服そうにクシヤミをするが…この異変の解決のために柚神がどんな策略を巡らせているか…部下である彼女は知る由もない…

side 睡煉

「へっくし!!!」

寒いです!!この吹雪いている中私達は動くこともなく…じっとしているだけです!!

幾ら私でも寒いのは勘弁なのですよね…

そこまで体力があるわけではないですし…お仕事は速めに終わらせるのが私のモットーですから!!

「へふっ!!」

「…」

私がかくしやみをして…柚神様はスコープを弄りながら辺りを眺めているだけですし…私もこれからどうすればいいか!!

しばらく経つと柚神様は口を三日月のように歪ませる。

「…?」

「ふふ…見つけました…」

そういうと彼女は美羽様を背負ったままその方向へ向かう!!

「ま…待ってくださいよ!!」
私は彼女の後を必死に追う…

柚神様についていくと何やら遠くの景色には輝かしい光と爆発音が… 誰か戦っているのでしょうか？

「誰か戦っていますね…」

「ええ… ワタシが知っている人間が3名ですかね…」

目を凝らすと何やら紅白の人間・白黒の人間・銀青の人間がそれぞれ… 何かと戦っている…

向こうには見た限り… 紅いの・黒いの・白い格好をした少女達かな？

「へえ… しかし… 柚神様が興味を持つとは珍しいですね…」

柚神様はスコープを取り外して僅かに微笑む…

その表情には少し悔しそうな感情が伺えます…

「… 美羽がですね… あのうちの2人に敗北したんですね…」

「ええ!? 美羽様が!？」

私はその言葉を聞いて少し混乱する…

あの美羽様が人間に敗北とか… 普段なら考えられないことです!! 只でさえ… この方たちには… 私ら第0部隊が束になつてもどうにもならないというのに!!

「… 嘘ではないですよね？」

「… 嘘じゃありません… 紅白の巫女には完全敗北・白黒の魔法使いには満身創痍までやられました… そして銀青のメイドにはワタシ自身が苦戦を強いられましたし… 完全な戦いはできていません…」

「… 只の人間なのに…」

「油断したらいけませんよ… 実力は本物です… 昔とは違って中々

人間も強くなっているのですよ… 貴女もワタシの下へ戻ったので
すから訓練をしませんと…」

「う… 善処しますよ…」

… 第0部隊で一番弱い私がどうしろと??

他の2名はガチでやばい人だというのに!!この私がどうしろと!!

私が困惑していると遠くの景色が眩い光に照らされて、白いの・黒
いの・赤いのが次々と落下していく…

(うわああああ!!)

(こんなはずはああああ!!)

(イエアアアア!!)

あつちや… 本当に実力者ですわ…

「… それよりも柚神様!あの人間達を見張って何のメリットがある
んですか?私たちの目的はこの長い冬の解決ですよね?」

柚神様は画面を出して何かを確認した後微笑む…

「… 異変を解決する者はワタシ達だけではありません… 彼女達も
ワタシ達と同じ目的を持っているということですよ… つまりこの
後の我々の展開はどういうことかは理解できませんよね?」

「彼女達を利用して自分たちは本質を調べる… つまり漁夫の利です
か?」

私の言葉に柚神様は頷く…

… 言いたいことは充分理解した… あの人間達を使って異変を
調べることですね… 手を汚さず自分たちは影で動く…
なるほど… この後の展開が読めたわ…

「なるほどです… あの人間達を利用するんですね!!」

… 柚神様のやることは少し回りくどいんですね…

美羽様みたいに正面突破みたいなことを嫌っていますし…

両者とも性格が同じなのによることが真逆でこちらとしては合わ
せるのが大変ですね…

柚神様は機嫌がよさそうに鼻歌を歌う…

「ふふふん!!理解が早くて助かります... こちらは手を汚さずに済みますからね... 睡煉... 彼女達を追いますよ」

柚神様は私の前へ出るが背負っている美羽様が邪魔なのか動きが鈍い...

流石にも邪魔だと思ったのか美羽様を揺らす...

「... 美羽!!お仕事です!!」

「... きゅ...」

美羽様は完全に使い物になりませんね...

柚神様は溜息をつく...

「なら... ワタシの体に入ってくださいいな... 余計な体力使いたくありませんし...」

柚神様は美羽様の体を縮小化して体に吸収する...

身軽になった柚神様は私に向けてウイंकをする...

「行きますよ... 睡煉」

「分かっていますよー!」

あの人間を疑似餌にして異変の黒幕へと向かうのか...

なら後の仕事は楽な物ですね... 只見てればいいし...

いざという時は柚神様と同じく本気を出せばお仕事は終わりですね!!

軍師と暗殺者のお仕事

吹雪が吹き荒れる幻想郷…

幻想郷のとある場所へと目指す博麗霊夢・霧雨魔理沙・十六夜咲夜
一行についていく怪しい2つの人影…

天逆柚神・睡煉はその後を気づかれないようについていく…

彼女達としても幻想郷の異常気象の調査を早くに終わらせたい一
心であった。

長く冬が続く幻想郷…

これが終わる日が来るのだろうか？

side 睡煉

「ぶえつくし!!!」

「くらくら…!!」 気づかれてしまいますよ?」

「…すみません」

吹雪が吹きすさぶ中… 私と柚神様は博麗の巫女一行の後を気づ
かれないように追っていく…

幸い私のくしゃみは吹雪の音でかき消されたみたいですが… こ
の極寒は私には辛いです…

… ○○様の本拠基地にいたら熱燭片手におつまみのサラダス
ティックでもいただきたいです…

「考えてみれば… お酒も久々だなあ… 野良猫生活も長かったで
すし… ろくなもの食べてなかったような…」

「な?」

柚神様は私の独り言が耳に入ったのか動きを止めて驚きの表情を
浮かべて振り向く…

「…なんですか?」

「…辛い思いをしていたんですね…。仕事が終わったら復帰祝いを
しましょう…。ワタシが…。あの時の決断を間違えていなければ…
貴女たちにこんな思いは…」

「!!いや!!誰も悪くありませんよ!!少なくとも○○様は!!!」
…そう…。アレは誰も悪くない…。絶対に○○様は悪くありま
せん…。

…あの方が…。裏切らなければ…。こんなことには…。

「…ごめんなさい…。ワタシがこれでは…。ダメですね」

「復帰祝い！楽しみにしてますよ…。あははは…。は…。」
もう!!空気が重くなったじゃない!!!

しばらく進んでいくと上空に何やら巨大な屋敷が見えて前方にい
た巫女一行がその中へと進んでいく…。

明らかに怪しい場所です！今回の黒幕はここにいるはずですよ!!
私達は気づかれないように庭へ着陸して辺りを見回す…。

この季節だというのに桜が咲いています…。
季節はずれにもいいところですよ！

「ここですねー！」

「ええ…。確かにほぼ確定ですね…。」

袖神様は桜を見ながら溜息をつく…。

「とりあえず…。書類作成のデータはそろった感じです…。ワタシ達
の役目は終わりですよ」

「ん？じゃあ早く帰りましょうよ！」

私の言葉に袖神様はハンカチを噛み少しいらついた顔をし左手を
激しくさする…。

「ワタシとしては迅速にお暇したいのですがね…。異変を見届けない
といけませんし…。」

「中々…辛い立場にいるみたいですね」

…
○○様…本当に難儀な立場にいるみたいですね…
ただでさえ…あの時は…

「…とりあえず！桜を見ながら異変の解決を見届けましょう！！ほら！お花見と思えばまだ仕事って感じはしないじゃないですか！」

柚神様はポカンとした表情を浮かべた後笑みを浮かべる…

「…貴女といると…心労が消えていきますね…それなら遅れたお花見とでも行きましょうか！」

「はい♪」

私は柚神様へついていく…

この方の…心の傷は…この私が埋めていきます!!

しばらく…桜見物をしながら進んでいくと大きな屋敷へとたどり着く…

まあ…ここまで広い庭だし屋敷も広いと予想はついていた…

しかし…何か居心地が悪いような？

「…お花見で気分を紛れらわしても…何か嫌な感じですよ…」

「それはそうでしょうね…ここは白玉楼…魂が行きつく冥界なのですからね…」

「いわゆるあの世ですか…」

「…ワタシも詳しくは調べてみないとわかりませんね…しかし予想通り…嫌な物があるみたいですが」

「…嫌な物？」

柚神様は私の前を先導して庭の更に奥へと進んでいく…

「…この先ですよ…ワタシ達は見学といきましょうか」

「見学？何の？」

「大きな桜の木の見学ですよ…ほら…こつちの方角ですよ」

「…」

柚神様が指さす方向には確かに遠目でも分かる程大きな桜の木が見えます…でも何か爆発するような光が…

でもあまりにも離れすぎているし…それ以上の情報は…

「私の目では…詳しくは…」

「でしょうね…変なのに目をつけられたら…今後の仕事に支障がでますので…データが取れたら…すぐに帰還しますよ」

柚神様はスコープを弄っている…

それがあるから観察できるといふのに…ずるいです…

「…それと…こちらに解決の妨害をしようとする者が近づいていますし…」

「妨害？」

…耳を澄ますと…こちらへ向かってくる足音が聞こえてくる…

僅かに金属音…歩数からして小柄のようだが…確実に近づいてきている…

「…私が行きますよ柚神様は調査を早く終わらせてくださいな」

「頼みますよ…睡煉…終わり次第回収にきますのでね」

「お願いしますよ」

柚神様は桜の木へ向かい私は迎撃をしに反対方向へ走る…

一方…同時刻白玉楼の奥へと急いでいる者が1人…待ち構えている睡煉の下へと近づいていた…

短い白い髪黒のリボンに緑色のベスト・スカートを身に着け…腰には2本の太刀を付けた少女…

魂魄妖夢がいた…

すでに博麗の巫女一行に敗れていた彼女ではあるが…満身創痕の体に鞭を打って主の下へと急ぐ…

この白玉楼の主であり…この異変の首謀者である西行寺幽々子の下へ…

side???

「ぐっ…！幽々子様!!」

痛む体に鞭を打ちながら私は白玉楼の奥へ向かう!!

私としたことが…何という不覚!!侵入者をいともたやすく通してしまおうとは!!

これは私が未熟の所為!!幾ら…1対3の勝負に…なつたとしてもっ!!

「くっ!!」

あいつらは…西行妖へ向かっているはず!!何としても

「はいはいー！ストップですよー!!」

「っ!!」

上空からの声で咄嗟に私は後ろへと下がる…

さつきまでいた場所には大量のナイフが石畳に突き刺さっている…

「誰!？」

「姿は見せますよ…一応礼儀としてね!」

桜の木の枝を見ると空間が歪み声の主が姿を現す…

赤い軍服に身を包み白い長い髪にうさ耳を付けた少女がいた…

黄色の目は私を見つめ彼女は桜の木から降りてくる…

「さつきの巫女の仲間かしらっ?」

私が刀を握ると少女はウインクをする…

「いや？私は上司の命で動いている只のアサシン…ここから先へは通すなど言われているのです」

少女はナイフを手にとってそれを向ける…

「第0部隊…隊員ナンバー2 睡煉…行きますよ!!」

「白玉楼庭師!!魂魄妖夢!行きます!!」

睡煉と名乗った少女は私に飛びかかる!!

幽々子様…ご無事で!!

同時刻… 白玉楼… 西行妖近く…

睡煉と別れた柚神は白玉楼の奥に存在する西行妖の近くまで足を延ばす…

しかし完全に近づこうとはせずに西行妖の近くで行われている戦いを観察するように眺めるだけだ…

そう… 博麗の巫女一行と白玉楼の主西行寺幽々子の戦いに…

「…さて…始めますか…」

彼女は目に着けたスコープをつけてそれを撮影する…

それを見ている者に気づかず…

「…?」

「ぎげんよう…天逆〇〇」

柚神の背後には長い金髪をして紫色のドレスに身を包んだ女性ごと… 妖怪の賢者である八雲紫がいた…

彼女はスキマの淵に座って傘を開き笑みを浮かべており…… 柚神は溜息をついて西行妖の方を目を離さずに返答する……

「ええ…… お久しぶり…… 妖怪の賢者……」

その声は至って静かだが…… 只その顔は…… 怒りで相当歪んでいた……

嫌なデータ

西行妖から離れた桜の木々が生い茂る空間…

そこにはこの異変の偵察にきた天逆柚神と後ろに立つ…妖怪の賢者である八雲紫の2名がいた…

西行妖の方を見たまま表情を歪ませる柚神と対称に笑みを浮かべる紫…

その空間の空気は少し重苦しくなっていた…

side紫

「あらあら？人と話をするくらいはこちらを向いたらどう？」

私は柚神に言うが彼女は視線を動かすことなく西行妖の方を見ている…

「…書類作成のための観察をしないといけませんので…しばらくこのままを許してよ」

柚神の声は僅かに棘を感じるわね…まあ仕方ないわ…

「あの天逆が…今では天狗の組織に仕えているとはね…驚きよ」

「…」

「…生きているとは思わなかったわ…美羽と一緒に派手に爆発したのに幻想郷縁起を見たときは驚いたわ」

「…あの時は死ぬつもりだったし…生きてること自体がワタシの最大の誤算なのよ」

柚神は画面を忙しなく動かした後一息ついたのかスコップを外す…

「悲しい存在ね…」

「どうとでも言え…元々必要とされていなかったもの」

柚神は初めて私の方を向く…

その顔は明らかに…敵意むき出しな怒りの表情を浮かべている。

「言葉が乱れているわよ…」

「五月蠅いな…今は公私を分ける必要もないわ…今のワタシにあるのは私怨だけよ」

柚神は殺気を出すがすぐにホログラムを出してそれを確認する…

「…睡煉の戦いは終わりましたか…回収に行きませんか…」

彼女はホログラムを消す…

「…睡煉…あの赤い兎かしら？随分と良い部下を持っているじゃない」

「…ワタシには過ぎた部下です…今のワタシは組織に使われる存在…ワタシにとって…大事な子ですから」

柚神は木から降りて私から離れる…

「…あら？西行妖はいいのかしら？」

「…見なくてもすぐに決着はつくでしょう…では失礼…ワタシはまだやるのが山積みなのでね」

彼女は姿を消しいなくなる…

「やるのが山積みね…本当に中間管理職になってしまったみたいね…」

私は西行妖の方を見る…

あの桜は絶対に満開になることはない…今回の異変は大事にはならないわ…

しかし…天逆か…あの様子だと本気は出していないみたいだけれど…危険な存在であることには変わりはないわ…

それに彼女に部下がいたことは驚きね…パッと見ただけだけど…明らかに能力以外の何かの力を持っているのは確定ね…

「…前途多難かしら…でも警戒しておくことに越したことはないわ…」

私はその場から離れ一度屋敷へ帰還する…

その頃白玉楼 門前：

天逆柚神がそこに辿りつくど彼女の体が光だし… 中から天逆美羽が姿を現す…

「おや？遅いお目覚めで…」

「… 悪いわねン… 少し変な幻覚を見ていたわン」

美羽は具合が悪そうな顔をしながらキセルを出して火をつける…

「幻覚ではありませんが？それに睡煉も健在ですし気にすることは…」

「アタシは…あんな思いはご免なのよ!!!」

美羽は柚神に掴みかかる…

柚神は溜息をつき美羽を見つめるだけだ…

「少しは肩の荷を降ろした方がいい… 睡煉が健在だったことが分かれば他の子も生きている可能性が少しは上がったと思えますが？」

「…」
美羽は俯き柚神は彼女の手を払う…

「今までの馬鹿みたいな過剰な自己評価はどうしたのです？完璧なのでしょー…」

「過剰評価ではないわ… アタシは… 完璧なのよン!!!アタシの名は！天逆〇〇!!!才色兼備な！完璧な兵器なのよ！」

美羽が高らかに宣言するとドタバタと鳴り響く足音が彼女達に近づく…

「お待ちせしましたー！美羽様ー！柚神様ー！」

彼女達の部下睡煉の声… 美羽は睡煉の方へ指を向ける

「遅いわ！睡煉!!さつさと帰るわよン!!」

「あはは！すみませんー！ちよつと苦戦しましてー！」

「…」

睡煉の姿を見て美羽は硬直する…

彼女の視線の先には血まみれの睡煉の姿… 彼女は全く気にはしていないみたいだが、第三者の目では重傷者としかしいようがない…

「す… 睡煉… 大丈夫なのですか？」

「ええ♪少し切られましたたが拳一発でノックアウトしてきましたよ」

心配する柚神に対して彼女は軽い言葉で返す…

「まあ… いいです… 美羽早く帰還しますよ… 帰ったら書類を… 美羽？」

「…ぶくく」

案の定美羽は泡を吹いて失神していた…

柚神はそれを確認すると彼女の前に立つ…

「さつさと帰還するわよーこらー!!!」

バシーン!!

柚神の目覚ましビンタが炸裂し美羽の体は門に叩きつけられる…

だが柚神の努力空しく頬に大きな赤い紅葉をつけた彼女は起きる
気配を見せなかった…

「はあ… 最後の最後まで締まらない！」

「あちゃ… クリティカルヒット入っちゃいましたね…」

「帰還するわよ… これから説明もしないといけませんし」

「はいはいー」

柚神達は美羽を抱えて妖怪の山へと帰還する…

これでこの異変も無事に終わったはず…

多分…

妖怪の山でのルール

長く続いた冬の異変は博麗の巫女一行の活躍により無事に収束した。

幻想郷の気候は暦通りの気候となり灼熱の太陽が照らす夏へと変わった。わかっていった…

そしてここは天狗が住む妖怪の山の牢屋…

その一室にはその主である天逆美羽＋柚神…そして新しく加入した睡煉の3名が作戦会議を行っていた…

新しく加入した睡煉は幻想郷のルール＋妖怪の山の暮らしに関しては知らないため、それについて教える必要があった…

side美羽

「はい！ではこれから軽いここでの暮らしのルールを教えますよ！」

「宜しくお願いしまーす！」

柚神はホログラムの黒板を出して指示棒で叩き、睡煉は椅子に座ってそれをワクワクしながら眺めている…

説明は柚神に任せましょう…アタシよりは間違いはないもの…話を抜け出してアタシは窓の外を眺める…

セミの声が鳴り響く青々とした木々が生い茂る妖怪の山…ここからの景色はいいものね…

異変の仕事も無事終了したし、報告書も提出済み…しばらくはゆっくりできそうね…

「つまり弾幕ごっこことは…って！美羽!!貴方も話を聞きなさい！」

アタシが話に参加していないことに気づいたのか柚神が指示棒でアタシを指す…

「別にいいじゃないのよん… アタシよりアンタがやった方が効率がいいんだから…」

アタシがキセルを啜えると睡煉がアタシ達を交互に見つめる…

「落ち着いてくださいよ、貴女様たちが喧嘩すると私一人では収集がつかないんですからー！」

「大丈夫よん… 不毛だということはアタシ自身が理解しているからねん」

「左に同じく…」

睡煉はお腹を押さえる仕草をする…

「うう… 何で私が… つ… あれ？」

睡煉はアタシの方を見て動きを止める… その視線はアタシのある部分にそそがれている…

「どうしたのよ…」

「美羽様？その左腕…」

彼女の視線はアタシの左腕にそそがれていた…

痛々しい縫合の酷い痕が目立つアタシの左腕… そういえば…

睡煉は知らないわね…

「… 数百年前の名誉の負傷よん」

「…」

睡煉はアタシに近づき左手に触れる…

「… 私達がお傍にいれば… こんな傷を負うことはなかったのに…」

「アンタが気にすることはないわ… アタシは生きてるだけで満足なのよん！それにアンタが生きていたと分かっただけで少しだけ未来が明るくなったわ」

「…？」

睡煉は首を傾げる

「第0部隊の他のメンバーの生存確率が0から少しは上がったのよん

！」

「…他のメンバー…夜喪妓と忌梗ですね…睡煉が生きていたと
なると…あの爆発から生き残れた…その可能性が生まれていま
すね…」

柚神の言葉に睡煉は目を背ける…

「…生きているはずです…だって私達は…」

カッ…カッ

「!?」

牢屋の外から足音が聞こえ私達は会話をやめ、柚神はモニターを出
す…

そのモニターには書類を持った文の姿が!!!

「…文が来ています」

「こんな時に!!柚神戻りなさい!!」

天狗の組織にはまだ柚神と睡煉のことは知られていない!!まだ知
られるわけにはいかないわ…

柚神を体に戻すと睡煉は辺りを不安そうに見渡す

「美羽様?私はどうすれば?」

「…あ」

がちや!!!

side文

「どうもー!お仕事持って来ましたよー!」

美羽の牢屋を開けて私は中に入る…

何やらガチャガチャ聞こえましたが良いでしょう!

牢屋に入ると美羽はベツトの上で胡坐をかいてキセルを啜っていた……でも……

「あや？美羽……その頭のは何ですか？」

「な……何よ」

美羽は目を泳がせながら私を怪訝そうな目で見る……ですがそれは今は関係ありません……

何故なら美羽の頭の上には大きな白い鳥が止まっていたからです……

「綺麗な鳥ですねえ……」

「そ……そうでしょ？この前見つけたのよん!!アタシに釣り合っているでしょう!?!」

「かあ……」

鳥は元気がなさそうに鳴き美羽は私に詰め寄る

「そ……それで何か様なの？アタシは色々忙しいのよん!!」

「……ああ！そうでした……今回の異変も前回と同じように再犯がな
いかの確認をしてもらいたいですよ……」

私が書類を渡そうとすると美羽は引つ手繰るように書類を手に取り
る

「分かったわ！時間を頂戴！これでいいでしょう？後は任せて!!」

美羽は早口で言いながら書類をめくっていく……いつもは嫌々
やっているのに……珍しいこともあるものです

「ええ……じゃあこれで……」

「ホラー！忙しくなるから！」

美羽は私の背中を押す……

「もう！押さないでください！それと美羽!!キセルに火がついていま
せんよ!!」

「ライター無くしたのよん!!」

ばたん!!!

そのまま私は外へと出される・・・
ライターって・・・普段から自分で火を出してつけていたのに・・・
・・・何か異様に慌ててましたね・・・丸で何かを隠すかのようです・・・

私は外に出ながら鞆を開ける

「・・・もしかしてこれのことですかね」

私は幻想縁起を取り出し天逆のページを開く・・・

そこには美羽の情報ともう一つ・・・柚神というの情報が載っていた・・・

「隠そうとしていたみたいですが・・・上層部が知らないと思っていたのかしらね？それに幻想郷の歴史家からは逃げられませんよ」

side 睡眠

「・・・これでいいですかね？」

「・・・OKよ」

美羽様からの許可をもらい私は元の姿へ戻る・・・

急な来客には驚きましたが何とか耐えましたね・・・

能力はこういうときに有効活用しませんと!!

「しかし美羽様？テンパリすぎですよ・・・ボロを出しすぎですって！」

「五月蠅いわん!!!アタシだって慌てる時はあるのよん!!」

美羽様はベットに座りキセルに火をつけてベットに書類を置く・・・

「それが次のお仕事ですか？」

「そんなところね…。前の異変の時もそんな感じだったし」
美羽様はキセルの煙を吐いた後私の手を掴む

「？」

「行くわよ？私のサポートをしてくれるんでしょ？」

… 過去のことを憂いていても仕方ないですね…。今の私に出来ることは○○様のサポート!!これからはいなかった分！役に立ちますからね！

「あ！一応さっきの姿になっておいて？アンタの姿は目立つからね」

「はい♪」

私は鳥の姿になり美羽様の肩に留まり私達は牢を抜けて白玉楼方面へ向かう…

これからが私の初めてのお仕事です!!失敗はしませんよ！

潜入白玉楼

上層部から新たな任務を渡された天逆美羽と睡煉は前異変の発生源である白玉楼へ向かう。

内心ここには向かいたくはなかった美羽ではあるが、調査をしなければ始末書の地獄が待っているため、向かうざるを得ない…

果たして今回のお仕事も解決するのであろうか？

side 美羽

白玉楼へついたアタシは、門の上でキセルに火をつけて思案にふける…

調べた限りでは、ここはあの妖怪の賢者の友達の屋敷らしいわ…あのスキマと知り合いならばアタシとしても、あまり会いたくはないわね…

「ふう… 睡煉… とりあえず庭の奥へ向かうわよ？」

「奥ですか？ 屋敷の方ではなくて？」

鳥の姿になって頭に乗っている睡煉は首を傾げる…

「前回の異変の原因を調べたほうが早いわん…」

「原因ですか？ 私としても検討がつかないというか？」

「… そういえば… 確かアンタはあそこにはいなかったわねん」

とりあえず… 柚神の奴が手に入れた情報だけで事足りるわ…でも、あまり時間はかけられないわね… あのスキマ妖怪が来たら色々と面倒なことになるわ…

「迅速にやるわよ… 早く仕事終わらせて帰るわん」

「了解です！」

アタシ達は内部の者に気づかれないように、庭の奥へ進んでいく…

日本庭園の奥にたどり着くと、そこには大きな枯れた木が一本立っていた…

ここが霊夢達が今回の黒幕である西行寺幽々子と戦った場所…

「アタシ集中するから…何かあったら宜しくー♪」

「了解!」

睡煉はアタシの頭から離れて近くの木の枝にとまる…

さて…ここからがアタシのお仕事! 柚神のデータと照合しないとね…

「…」

対象…枯れた木こと…西行妖…

古くから存在する桜の木の化け物…現在は休止中というより、封印がかけられているわね…

でも…封印されていても力を感じるわ…これはアタシであつてもキツイわね…

この様子だと…相当な数を殺めていることは確定…

…封印をかけたのは、やっぱり八雲紫か…何となく予想はついていたわ…

「大体のことは分かったわね…睡煉? 大丈夫よね?」

「ふああ…だいじょうぶです…」

早くも寝に入りそうじゃないの…

「…睡煉? 寝たらどうなるか分かっているわよね?」

「!! 大丈夫です!! 起きてますよ!」

…どうだか…この子は少々マイペースなところがあるのよね…警戒心はあの3人の中で一番薄いし…

「とりあえず…やりますかねン」

… 異変の内容

今回の黒幕である西行寺幽々子が発端…

庭師の魂魄妖夢に春を集めるように命ずる… か

春を集めるね… どういう原理かは不明だけど、集めれば集める程
幻想郷は冬になっていくみたいね…

この世界何なのよ…

異変を起こした理由は西行妖の開花と言ったところかしら？アレ
の封印が解かれたら幻想郷の生き物がどのくらい死ぬのかしらね？
随分お淑やかに見えるけどテロ紛いなことをするのねえ…

「美羽様！危ないです！」

「っ!？」

突如来る睡煉の言葉に反応し、アタシはその場から飛びのく…
少し頬に痛みがあるわね… 少し反応が遅れたかしら？

「随分な挨拶ねえ…」

「何をしている天逆…」

アタシの目の前には金髪のショートヘアに同色の9本の尾をし、導
師服に身を包んだ九尾の狐… 八雲紫の式神こと八雲藍がいた…

「… お久しぶりねえ？あの時の戦い以来かしら？」

「ふん！お前の存在がああの時の戦いの戦況を変えたんだ… 迷惑だっ
たってことしか私にはない！」

「アタシとしてもアンタらのことは迷惑でしかなかったわん」

コンパクトを取り出して顔を確認する…

左頬にわずかに切り傷が出来ているわね… まあすぐに治るわ…

「しかし… いきなり攻撃とは不躰ね？アタシじゃなかったら危な
かったわよ？」

「幽々子様の屋敷に無断で入るお前がそれを言うか？首を掻き切るよ

うにやったに決まっているだろう…。今度はその左腕だけでなく四肢もやってやろうか？」

「…」

そういえばアタシの左腕を切断したのはコイツだったわね…。あの時の借りを返していないし…

side 藍

美羽は薄ら笑いを受かべて、キセルに火をつける…

こいつは生かして置いたら非常に不味い…。現在としても…。体から霊力があふれ出ているし…

「…やるのか？来ないならこっちから行くぞ？」

「あはは…。ちよつと頭に來たわね？…。今までキレなかったアタシに勲章を与えたいわ…」

「ブチ殺すわよ…。妖怪狐!!」

美羽は床を踏みつけて石畳を破壊する…。殺気が駄々漏れだ…。しかしこちらとしても都合だ…。紫様からは戦闘は禁じられてはいるが…。身を守るためならば、それは別の話だ!!

「十二神将の宴!!」

「ヴァイオレンス・ウエブ!」

私達はお互いのスペルを発動する!

「お止めなさい!!!」

「!」

「…」

突然の声に私達はスペルを中止する…

この声は聞き覚えがある…

この声は…

「藍？私は一応指示はしてあるはずよ… 天逆には手を出すなどね？」

スキマが開き私の主である八雲紫様が出てくる…

「しかし!!」

「二度は言わないわよ？それと一步も動かないでね」

「…はい」

…これ以上はやめておいた方がいいか… このままでは私がお仕置きを受けてしまう。

紫様が天逆の方を見ていると彼女はキセルの灰を地面に落とす

「戦いの邪魔をするとは… 相変わらず無粋ね」

「それは貴女もやったことでしょう？」

「ふん」

天逆は不服そうに鼻を鳴らし、キセルを啜え、そして紫様は木にとまっている白い鳥の方へ向かう。

「そして貴女も攻撃をやめてくれたら助かるわ… 藍の非礼は謝るわ」

紫様は白鳥に頭を下げる？何でそんなもの？

「…何ですか？バレていましたか？」

「!!」

白い鳥は形を変えて少女へと姿を変える…

赤い軍服に白い髪… そしてうさ耳のついている…

「ええ… 貴方も美羽と同じく殺気が駄々漏れだったからね」

「あらら… これでも頑張ったつもりなのですが…」

少女が能力を解くと彼女の右腕の爪がごんごん現れていく…

「…！」

その鉤爪は私の首元まで来ていて触れる一歩手前だった… 気づかなかった… いつもの間にこんなことに？

「その首… 美羽様の左腕のようにふっ飛ばしてあげるつもりでしたが…」

「…この子の非礼は謝るわ… だから手を引いてくれるとありがたいわ…」

「睡煉… ここは引きなさい… 今回の仕事には殺しは入っていないわ」

睡煉と呼ばれた少女は黙って爪を元に戻す…

「…仕方ありませんね♪美羽様の命令ならば猶更です♪」

睡煉は帽子を取り、うさ耳を撫で笑みを浮かべているが目は全く笑っていない…

「しかし… 他の2名なら私の様にはいきませんね♪私は一番優しいですからね」

… 2名？こいつの他にも天逆には部下がいるというのか？

一見大した力はなさそうに見えるが… 戦闘慣れしているのは確かみたいだ… この私に気づかれずに攻撃の射程圏内に入ったのだから…

紫様は睡煉の頭を軽く撫でた後、天逆の方を向く…

「…少しお屋敷でお話でもしましょう？お茶くらいは出すわよ？」

「断るわん… 大体の仕事は済んだし残りは報告書をまとめるだけだもの…」

天逆は乗る気ではないが、紫様は話を続ける…

「… 貴女の今後の事でもあるの… もしかしたら貴女の本当に望んでいる結果が得られるかもしれないわよ？」

「… アタシが… 望んでいること？」

天逆は僅かに紫様の話に食いつく… それを見た紫様は僅かに笑みを浮かべる…

「時間はあまりとらせないわ… 少し話すだけよ」

「… 少しだけよん」

天逆は少し迷ったような顔をした後承認し… 紫様はそれを見た後こちらを向く

「藍… お客様を白玉楼に招待よ… お茶の準備をしてあげて」

「え…」

「早く」

「はい!!」

私は白玉楼の屋敷へ向かう!!

何であいつを招待するんだ!?!紫様の考えていることが理解が出来ない!!

だが… やるしかない… 今の奴は… お客様だ…

だが… 白玉楼で暴れたら… どうなるか分かっているんだろうな!!天逆!!

私は心を消してお茶の準備を始める…

白玉楼でのお茶会

異変の調査で白玉楼へと足を運んだ天逆美羽と睡煉の2名は大きな白玉楼の庭の奥で西行妖を発見し、それを調査していた…

しかし調査も一段落したところで、八雲紫の式神である八雲藍の襲撃に遭う…

過去に敗北を喫した美羽にとっては一触即発の危険な状態になったが、八雲紫の登場により、それも無事に収束する…

紫の案で一時停戦となり美羽達は白玉楼に招待される… 今後の未来について話し合うために…

side 紫

白玉楼の屋敷へついた私は美羽と睡煉の2名を中へと入らせる…
彼女達は少し警戒したように辺りを見回していたが、何もないと分かったのか中へと入っていく…

「ここって禁煙かしらん？」

美羽が私の方を振り向く… 所謂えば彼女はヘビースモーカーだったわね…

幽々子とかは煙草とかは吸わないし… ここはご遠慮を願おうかしら？

「一応禁煙よ… こここの主は吸わないの」

「あら… 残念ね」

美羽は大人しくキセルをしまい奥へと進んでいく…

思ったより大人しいわね… 敵対さえしなければ話が分かる人物みたい…

あの時はお互いポジションが悪かったわね…

居間にたどり着くと、この屋敷の主である幽々子が満面の笑みを浮かべて私達を出迎える…

「あらー紫いらっしやい!!」

「ええー！急に来て悪いわね」

幽々子は私の後ろにいる美羽と睡煉の方を見つめる…

「… お客さん？」

「… 天狗の組織所属の天逆美羽と彼女の部下の睡煉よ」

私が彼女達の説明をすると彼女達は頭を下げる

「どうも… 天逆美羽よ」

「よろしくですー!」

「ええー！宜しく」

幽々子は二人を見て笑みを浮かべた後、私の方を見る。

嬉しそうですね… あまり客が来ないから話相手でも欲しかったのかしら？

「ここにお客様が来るのも久しぶりじゃない！話し相手が来てくれてありがたいわー!」

「喜んでくれて何よりよ… 台所を貸してもらえる？藍がお茶を出すから…」

「ええー！好きに使ってちょうだい！でも悪いわねえ… 本来なら妖夢がするんだけど… 彼女今はノックダウン中なのよね…」

妖夢がノックダウンね… 過労で倒れたのかしら？

美羽の方を見ると湯呑片手に庭の枯山水を眺めている…

「… 気にいったのかしら？」

「… まあね… 山でもこういうの見れないからねえ」

美羽は私の方を見ずに返答し湯呑に口をつける…

「… そろそろ本題に入らない？アタシに話があるんでしょ？」

「いいのかしら？」

「アタシもそこまで暇ではないの… そしてできるだけ単刀直入でお願ひするわん…」

単刀直入ね… 私としては沢山聞きたいことがあったのだけど…

「… じゃあまず1点目… 貴女の目的は何なの？」

「アタシの目的？それがアタシに聞きたいこと！」

美羽は不服そうな顔をするが、これは重要なことよ… 彼女が本気でやったら私や霊夢でも勝ち目はないわ…

「… 少なくとも貴女は、こき使われている身分ではないはずよ！実力は充分… その気になれば貴女一人で独自の組織を立ち上げることだって…」

「権力・名声なんてアタシにはイラナイものよ…」

美羽つまらなそうに火のついていないキセルを啜える

… 彼女の性格からして執着している物だと思っていたけど… 違うみたいね？

「貴女が好きそうな物だと思っただけ？」

「アンタはアタシがどんな奴に見えているのよん」

美羽は苦々しげに私を見つめ縁側へ歩を進めて空を見上げる…

「アタシにはそんなの… 必要ない… 只生きていれば… それでいいの…」

「生きていけばね〜！生きるって良いものよ!!美味しいものとか沢山食べられるし！」

幽々子が茶々を入れるが美羽はその言葉に頷く…

これもまた意外ね… てっきりキレると思ったのに…

「それも間違っではないわん… 時計の針が進めば昼夜は逆転し、四季は巡る… その時の発見もあるというものよ」

「随分とセンチになっているわね」

「…それがアタシの唯一の願いだからよん… 認められなくても良い… 只存在さえ出来れば… 何も…」

美羽はキリキリとキセルを噛んでいる… その顔は怒りと悲しみが混じったような顔をしている…

「貴方の出生に関しては私が言うことではないわ… とりあえず権力には興味はないということね…」

「何度言わせるのん…」

美羽は懐中時計を取り出して時間を眺めている…

「あまり時間は無いわ… 質問はこれで終わりかしら？」

「… 後一つ… 質問というより提案があるわ」

… 私は手を挙げて彼女を見つめる

こつちが私の本当に聞きたいこと!!

「早く答えなさいよ…」

美羽は私の方を向かずに懐中時計のねじ巻きを回している…

「… 貴方は… 故郷に戻れたら戻るのかしら？」
「!？」

彼女は懐中時計をしまい私を見つめる…

「故郷？」

「私の力なら… 送ることができるわ… まあ… これは貴女の返答

次第だけど…」

美羽は目を泳がしながら考え込んでいる…

明らかな動揺… 即決で返答しないということは… 迷いがあるみたいね…

「… アタシは」

「答えが出たかしら？」

彼女は5分ほど考えた末に口を開く… 長考だったわ… せっかくのお茶が冷めてしまうわ

「… ア… アタシは… 戻りたくないわ」

「随分考えた結果がそれかしら？」

彼女は目を反らす…

「… 居場所なんて無いわ… 元々必要とされていなかったし… ここで終わるのも一興よ… 睡煉… 帰るわよ」

美羽は湯呑を机に置いて睡煉を急かすが幽々子が彼女の前に立つ…

「待って！とっておきの水羊羹があるの!!それを食べてからでも遅くないわよ!」

「時間が無いのよん…」

美羽は面倒そうな顔をするが幽々子が強制的に座らせる…

「せっかく紫が連れてきたお客様なんだから途中退席は私としてもあまり喜ばしくないのよ!」

「せっかくの御厚意何ですし… 受け取らないと無礼ですよ… 美羽様」

睡煉の方は水羊羹を受け取る気満々のようだ…

気乗りしてない美羽は根負けしたのか大人しくなる…

「… 食べたたら帰るわ」

「ええ！それがいいわー！」

しばらくすると台所から藍が出て来て人数分の水羊羹をちやぶ台に置く…

見た限り… 緑色だけど？

「抹茶かしら？」

「ええ！人里人気の抹茶水羊羹よ！新品の冷蔵庫で冷やしておいたからヒヤヒヤよー♪」

「てつきり氷室に保存していると思っただけどお？」

美羽が首を傾げるが幽々子は反論する

「この季節… 氷室があまり冷たくならないのよ… だからこの前香霖堂で買ったの」

「ふーん… じゃあ頂くわ」

「私としてはどうでもいいものですけどね！」

美羽と睡煉は楊枝で水羊羹を一指して口に入れる…

「… ん？」

「… んー！美味しいです!!」

睡煉は美味しそうに頬張っているが… 美羽は表情を曇らせている

「？抹茶が口に合わなかったかしら？」

美羽は首を横に振る…

「いえ… 美味しいけど… 本当に冷蔵庫に入ってたの？どっちかというと… 生温かいわん」

「生温かくても美味しいですがねー」

「アンタだけよん」

「え？」

幽々子は羊羹を口に入れる…。そして美羽と同じく渋い顔をす
る…。

「…冷たくないわ…。あれ？確か…。冷蔵庫に確かに私は…。」

「藍？これはどこにあったの？」

藍に問うが彼女は御盆を持ったまま台所を見る…。

「指示通り…。冷蔵庫の水羊羹を…。」

美羽は立ち上がり、台所へ歩を進める…。

「おい！天逆！！台所は客人禁制だぞ！！」

美羽は藍の言葉を無視して冷蔵庫の扉を開けて中を確認した後
に深々と合掌する

「…ねえ？この冷蔵庫ぶっ壊れてるわ…。」

美羽の言葉に幽々子は信じられない顔をする

「ええ!!…だつてこの前買った…の…に…?」

美羽は冷蔵庫を開けて中に手を入れる

「…残念ながら…。内部も冷たくないわ…。他の食材は諦めたほ
うがいいわん」

彼女がそう言うのと幽々子は膝から崩れ落ちる

「…そんな…。まだ色々なものがあつたのに…。」

「ぎつと…。何かの部品がイカレタのでしょうね…。それで内部の
温度が上昇してこの有様って話かしら？」

「買ったばかりなのに…。」

幽々子はショックを隠せないような顔で冷蔵庫を恨めしそうに見

つめ美羽は火のついていないキセルを啜えながら頭を搔く…

「アタシは機械には疎いのよん… うちの技師がいれば何とかなるけどねん…」

「その技師はどこに！」

幽々子は希望に満ちた顔をするが美羽は首を横に振る

「… 残念だけど行方不明なの… 現在捜索中よん」
「うろう」

美羽は水羊羹を食べ終えた睡煉の方へ向かう

「帰るわよん」

「はいはい!!しかし残念ですね… 忌梗がいれば、こんな新品同様になるというのに…」

「できないことはできない… それでいいじゃないのん… では失礼するわ」

美羽と睡煉は姿を消す…

その場に残っているのは項垂れた幽々子だけ…

「紫様… 天逆の件はとりあえず？」

「保留よ… 余計なことはしなくていいわ」

「… 分かりました」

藍はそのまま食器を片づけに居間へ向かう…

「… 戻りたくない… か… でも随分と長考したわね？何か大切なモノでもあるのかしら…」

私はとある戦いを思い出す…

そこには重傷を負いながらまだ私達に挑み続ける○○を思い出す…

(…から先は通さない!!アタシを認めてくれた人を!!守る!!アタシの命に代えても!!)

… あの長考は、それかしら？… 認めてくれた人ね…

今回はとりあえず収穫はあったわね… 天逆が思ったより話を理解できる者で助かったわ… 残りはまた今度お話ししましょうか…

ね？認められない英雄さん？

臨時業務

本日も雲一つない青々とした空が果てしなく続く幻想郷…
木々は青々とした葉が生い茂り、蟬の鳴き声が響く灼熱の夏がまだ
続いている…

幻想郷の神社こと… 博麗神社の縁側には、紅白の巫女こと博麗霊
夢と白黒の魔法使いこと霧雨魔理沙が冷茶を飲みながら他愛もない
会話を楽しんでいた…

side 霊夢

「あちー…ぜ…」

「夏はこんな物よ…」

私達は縁側で強い日差しと蒸し暑い気温に耐えながら… 夏を満
喫する…

これで何回目の夏かしらね？… 毎度ながら鬱陶しい事この上な
い季節だわ…

「霊夢… 冷茶おかわり…」

魔理沙はカラになつた湯呑を私に突き出す…

「賽銭箱にお金が入っていないわ… 飲みたきや追加料金を…」

「じゃあ… いらね…」

魔理沙は帽子を脱いで、それを団扇のように使つて扇いでいる…
「… けち」

残り少なくなつた冷茶を飲み干し私は憎い太陽を見つめる…

… 今日の日差しがきついわね… 残りの時間… どうやって過
ごそうかしら…

「…ん？」

太陽に何か黒い点が…？

それが少しずつ大きくなってきている!!

キィィーン…

風を切る音まで… 何かがかつちに近づいてくるわ!!?

「おい… 何だあれ？」

「襲撃者かもね… 構えて魔理沙！」

私達はスペルカードを構えて襲撃者を迎え撃とうとする！

が…

黒い点の正体は境内から、かなり離れたところに着地し、私達の方へダツシュで向かう…

その人物には見覚えがあった…

「こんにちわん!!!文々。新聞の勧誘に来たわー！」

私達の目の前には謎の天狗こと、天逆美羽がそこにいた…

彼女はいつもの服装に大きなバックを肩にかけ、私達に新聞を渡そうとしている…

その新聞には見覚えがあるわ… 天狗の記者こと射命丸文が発行している新聞ね…

美羽は笑顔のまま新聞を突き出している…

「何の用よ… 美羽」

「…新聞の勧誘だけどお？」

「いや… 何でアンタが文の新聞を配っているのよ…」

私の言葉に美羽は憎々し気な表情を浮かべ始めている…

「暇なら手伝えと文に言われたのよん!!!アタシの本来の仕事ではないのに!!!」

「ご愁傷様だぜ...」

文は元々そういう感じよ... 部下に自分の仕事をやらせるのは珍しいことではないわ...

「組織に入っていると色々大変ね... そういえば柚神はどうしたの？アンタ達いつも一緒でしょ？」

美羽はキセルに火をつけて空を見上げる

「あの子の存在が組織にバレると非常に面倒なのよ... アタシとしても説明し辛いし...」

「そうかあ... でも柚神の存在はバレているはずだぜ？」

魔理沙の言葉に美羽はキセルを地面に落とす...

「... は？それってどういうことよん!!」

「これだ...」

魔理沙は懐から幻想郷縁起を取り出して、とあるページを美羽に見せる...

そのページには美羽と柚神の事に関することが書かれており、美羽はそのページを見て震えている...

「な... 何よ... これ!!いつの間にかこんな!!」

「幻想郷の歴史家には隠し切れないみたいね... どういうルートか分からないけど、いつの間にか情報を掴んでいるのよね...」

まあ... 情報を提供したのは私だということの内緒にしときましょ...

「ぐぐぐ!!柚神の奴!!また！隠蔽し忘れたわね!!!説明が非常に面倒なのよん!!」

美羽は爪を噛みながら目を泳がせている...

説明が面倒ね？ 只柚神の事を説明すればいいのに… 美羽は何を嫌がっているのかしら？

「お前の妹にしとけば良いんじゃないか？」

「… 柚神は… アタシの家族ではないわ… 只の戦友よ」

只の戦友ね？

… しかし姿形が美羽と柚神は瓜二つだというのに、わざわざ他人とするとは… 何か事情でもあるのかしら？

「アンタも只の天狗ではなさそうだし… 何か事情でもあるのかしら？」

美羽は落としたキセルの埃をふき取り再度啜える…

「… あまりのヒトの事情に首を突っ込むことは感心しないわん… この話は終わりでいいでしょう？」

… 話す気はない… か

私としては興味はあったけど… これ以上はやめておいた方がいいわね…

私は彼女に冷茶の入った湯呑を渡す…

「… !? 何よん」

「私からのご褒美よ… こんな暑い中… 文の仕事回されて疲れているでしょ？」

美羽は困惑したような顔をするが、すぐに笑みを浮かべる…

「ふふ… じゃあ！ お言葉に甘えようかしら？… ついでに新聞は…」

「それは要らないわ」

「… 残念ね」

美羽は私の隣に座り、冷茶を口に含む…

前よりは刺々しさが無くなったみたいね… 少なくとも敵として出なければ友好的な人物なのかもしれないわね…

魔理沙の方は美羽を観察するようにジロジロと見つめており、美羽

は視線が気になり始めたのか、お茶が飲みづらそうだ…

「…何よん?」

「いや? すごい久しぶりだと思つてな? 前回会つたの紅魔館の異変だろ? お前普段は何をしてるんだ?」

「ア… アタシのこと?」

美羽は急な質問に首を傾げるが、口を開き始める…

「…主に上層部からの仕事の勅命が来なければ出撃することはないわね… オフの時は山の景色を楽しんだり… 天狗の里で美味しいものを食べたりしてるわね…」

「文のように山から出てこないんだな… お前みたいな奴は何かと興味を持つ方だと思つたが?」

美羽は冷茶を飲み干し… キセルに火をつける…

「ソレは柚神の役目よん… あの子の役目は外部の情報を集めることだもの… 昔から決めていることだからね」

「そうか… 意外にもインドア派なんだな?」

「インドア派ではないわあ… アタシの方は体を動かすのが大好きなのよん! でも… 効率よく情報を集めるには視野を広く持たないとね…」

…話を聞きたび美羽と柚神の関係性が分からなくなるわ

美羽は私の方を見てクスリと笑う…

「ふふ… 何なのよ霊夢? 変な顔でアタシを見て?」

「変な顔つて何よ!… アンタたちのことを考えたら頭が絡まつただけよ! 少し考えていたけど、アンタたちのことは分からないわ…」

「細かい事は考えなくてもいいじゃないの… 頭が疲れるだけよん」

美羽は口から煙の輪を出して空をボーッと眺めた後、時計を見つめる…

「…少しお邪魔しちゃったわね…そろそろ山に戻らないとねン…お茶御馳走様♪」

美羽は空へ飛びあがり妖怪の山方面へと消えていく…

「色々と読めない奴だわ…」

「…いや？私は何となく分かった気がするぜ？」

魔理沙は煎餅を齧りながら返答する…

「あの短い返答で何が分かったのよ？」

「案外美羽と柚神は似たもの同士かもしれないってことだぜ！」

「…そこは分かっているわよ」

私としては危険人物ではないとは思うけど、持っている力が強力なのよね…

少なくとも仕事の時以外は大人しいみたいだし…警戒する必要はないわね…

妖怪の山… 牢屋…

牢屋に辿りついた美羽が自室に入ると、そこにはベットの上で寛いでいる文がいた…

「あやや…遅かったですね？」

「人の部屋で何をしているのよン？」

美羽はバックを床に落としてベットで寝ている文の前に立つが彼女は一行に動く気配を見せない…

「いつまで寝てるのよン！」

「私の新聞勧誘とれましたか？」

「… とれるわけないでしょう！急に言われたんだものお!!」

美羽が溜息をつくと言は身を起こし厚い封筒を取り出す…

「残念ですね〜！予約が一件でも取れたら！この件はチャラにしようと思っただけですが…」

「何よ… チャラって!!アタシはちゃんと仕事をしているわん!!何かミスでもしたかしら？」

文は封筒から書類を取り出し、笑みを浮かべる…

「いえ… お仕事はちゃんとやってくれていますね… でも… 隠し事はいけませんねえ〜！」

「… か… 隠し事？」

「… 天逆… 柚神さんでしたっけ？何で隠していたんです？」

文の一言で美羽の顔からは血の気が消える…

「… は？」

「何でこんな優秀な人物を隠していたか… 疑問ですね！上層部も貴女の隠蔽には大層お怒りです…」

美羽は口からキセルを落として文に掴みかかる！

「待って！隠蔽ではないわん!!!言う必要がなかったから言わなかっただけだわ!!」

「優秀な人物を自分だけの駒に使うのはいけませんねえ〜!!ということとで…」

文は封筒から書類を全て取り出す…

「始末書50枚… 本日中に提出をお願いします♪」

「… ご… 50枚!!!何で!!!言わなかっただけじゃない!!!」

「… まあ… 半分は隠蔽に対してですね… もう半分は文々。新聞の購読数を増やせなかったペナルティとしてです♪」

「ふざけんじやないわ!!!隠蔽はともかく!アンタの新聞に関しては絶対に書かないわ!!!」

美羽は顔を真っ赤にし拳を握る…。流石の彼女でもそのような横暴は許すはずがない…。

文の方は、嫌らしい顔をしながら書類を手で弾いている…。

「あやや…。これでも私は頑張って弁明したほうですよ?本来は始末書200枚の所…。私が頑張って減らしてあげましたのに…。」

「に…。200!?!」

あまりの多さに美羽はその場に蹲る…。

文は彼女の肩にそっと手を置く…。

「1/4にしてあげたんですから…。お願いしますね?50枚」

「…。嫌!!袖神!!来なさい!!アタシのアシスタントを!!…。あれ?」

美羽は袖神を戻そうとしたが…。彼女が戻る気配がない…。

「無駄ですよ?彼女は現在、新人歓迎会に出ていますもの…。主役が抜けることは許しません♪」

「…。うあああああん!!!袖神く!ヘルプ!!!アタシじゃどうにもならないわー!!」

牢獄内で美羽の泣き叫ぶ声が響く…。

一方そのころ…。

「袖神さん!さあさあ!!飲んで下さいな♪」

「ああ…。すみませんね…。椀…。」

椀にお酒を注がれながら袖神は、この宴会の空気を楽しんでいた…。

普段裏方に回っている彼女にとっては目立つ事はなかったためか…。自分が祝福されることに喜びを感じていた…。

美羽がどんな地獄を受けているか知らされないまま…

新たな入隊

とある早朝… 天狗の里にある封印牢へ続く道歩く者がいた…
灰色の長い髪をして黒い軍服に身を包んだ女性…

彼女は名は天逆袖神… 昨日正式に天狗の組織に入った実力者である…

今までは、彼女の戦友である天逆美羽のサポート役として影で暗躍をしていたが、その存在が今更になって露見してしまったため遅い入隊となってしまうた… 昨夜は、その入隊の歓迎会に出ていたため薄っすら酒の匂いが彼女から発していた…

袖神は袖に鼻をつけて眉間に皺を寄せていた…

side 袖神

「… お酒臭い」

軍服の臭いにワタシは眉間に皺を寄せ地下牢へ急ぐ…

ワタシとしては、これは予想外… まさかワタシの存在が組織にバレてしまうとは… ワタシなりには、情報の流失には気を付けていたのですがね… 人里の歴史家には気が回りませんでしたね…

… これはワタシの失態ですね… 美羽に小言を言われてしまいます…

「… でも… まあいいか」

遅かれ早かれバレるのも時間の問題でしたし… 少し早まってしまったと考えれば、それも問題は全くない…

… 急な入隊になってしまいました… うまいこと情報を纏めれば…

「… うっ」

… 深酒の所為で思考が纏まらない…

宴会にも慣れませんとね… 今後はワタシも天狗の組織の一員…
こういうことにも参加しないといけませんから…

「… とりあえず美羽に説明をしませんと… ワタシの今後の事と弁
明をしませんと」

ワタシは牢の戸を開けて中へと入る…

「宴は楽しかったかしら!!! 柚神ちゃん!!」

「うわ!!」

急な美羽の怒号が耳に入ったかと思うと、ワタシの顔目掛けて衝撃
波が飛んでくる!

ワタシは、それを避けて他の牢屋の中へ入り戸を閉め鍵をかけ
る…

「柚神ちゃん! 出てきなさい〜! 言い訳くらいは聞いてあげるか
らあ…」

外からは美羽のネコ撫で声が聞こえる… いつものネットリとし
た口調が乱れているからして… 相当怒っている!!

「美羽!! 話を聞くのが先です!!! 確かに情報の漏洩と処理を怠ったの
は、ワタシの落ち度ですが!」

「その怠慢の所為で… アタシは寝る間も惜しんで始末書に追われて
たの!!! 終わったのさつきよ!! 楽しかったかしら? お酒の匂いが体か
ら出てるわよ♪」

背後の戸がドンドンと荒々しくノックされる!!!

… 戸の振動がやばい

ワタシは戸からそっと離れて辺りを見回す…

外に出る手段がない… この部屋は格子窓がない!! 完全に逃げ場
が…

「流石のワタシでも全部の情報を処理できません!! か… 完璧何て存

在しません!!」

「言い訳はそれで終わりかしら!!!」

どごお!!!

戸が弾け飛び外から美羽が、ユラリと現れて破壊された戸を踏みつける…

「さてく… 覚悟はできているかしら?」

「あ… 貴女はワタシと戦おうというのですか?それが無意味だということは知っているはずです!!」

「知らないわく!とりあえず今のアタシはソレよりもアンタをボコしたいという気持ちが強いのよねく!」

彼女は拳をボキボキと鳴らしながら近づいてくる!

「ぐっ!!!」

… 美羽の奴!!完全に怒りで目が曇っていやがる!!!

戦ってもいいが… 戦闘の方は彼女の方が上… 記憶抹消っていう手も考えたが… 時間がない!!

考えろ!考えろ!柚神!この場を制圧しろ!この手で勝利をつかむのだ!!!

「… あ」

… 何だ簡単なことじゃないの… 何を焦っていたんだか…

「何か思い浮かんだのかしらん!!」

美羽が片手から雷撃を撒き散らしながら、にじり寄ってくる…

「ええ… 策がないので無抵抗ですね… 好きにしてくださいですよ」

「… 何のつもり？アンタ程の奴が簡単にあきらめるわけないわ」

美羽は警戒し始めたのか… 放電をやめて辺りをうろついている…

「ふふふ… 策はありませんね… 好きに殴って結構！でも後悔しないのならば… ね？」

「後悔？するわけないわ!!」

「… それがまた始末書を書くことになってもですか？」

「… え」

始末書… その言葉を聞いた美羽は、顔を真っ青にし冷や汗をかいている…

だが… まだ拳を握ったまま戦闘の構えを解こうとはしない…

「あは♪… はったりよ!!何でアンタをボコって始末書なのよん!!」

「確かに今まで通りならそうでしょうね… しかし… 今と昔は状況が違うのですよ…」

「状況？」

美羽はまだ気づいてはいないようだ… やはり頭の回転が鈍いのは相変わらずだ…

「わかりやすく言いましょう… 今のワタシは… 正式に天狗の組織のメンバーとなった… つまり組織に存在を確認されている…」

「… あー」

美羽はようやく気付いたのか顔を更に青くする…

「そう… 今ではワタシと貴女は戦友だけの関係ではなく天狗組織の正式なメンバー… メンバーになった以上、私怨での戦闘をしたら… 上も黙ってはいません」

「… あああ」

「ここで戦闘をしたければ結構！その瞬間貴女を待ち受けるのは大量の始末書!!」一徹開けでもう一回戦行きますか!？」

ワタシが指を突き付けると美羽はその場にへたり込む…

「ああああああああ!!!」

泣き叫ぶような声を上げて彼女は床に拳を打ち付け、蜘蛛の巣のよう
に大きなヒビが石畳の床に入る…

…これを食らっていたらワタシでも不味かったかもな

「…うう」

しばらくすると美羽が落ち着いて来たのか顔を上げる…

「落ち着きました?」

「アタシの怒りは何処へぶつければ良いの?」

「その悔しさをバネにして次に生かすのが得策かと…」

「…口では何とでも言えるわ」

美羽は溜息をつきながらキセルを取り出して火をつける…

とりあえず、この場は収まった…ワタシの方も気を付けましょ
う…

「この作戦もいつまで持つかは分かりませんから…

「…ふう」

牢獄内を見回すと睡煉の姿がないことに気づく…

彼女なら、こんな時ひよこつと現れるというのに…

「美羽? 睡煉は?」

「…少し仕事を頼んだのよん…アタシの始末書もそれで終わる
わ…」

美羽は始末書を取り出してワタシに見せる…

そこには…

「…一面記事のネタを探せ?」

… 始末書ですよね？

何でこんなことが始末書の内容なのでしょう？

「… 何ですこれは？」

「… 文の新聞の購読数をどうやって増やすか… という項目があつて… そのネタ探しに睡眠を…」

「下らない…」

文の奴… 少し職権乱用している節がありますね… 少しこれは、上層部に報告を…」

「… 分かりました… とりあえずワタシが行きますので、貴方はこの掃除をお願いします」

「… うん」

美羽と別れてワタシは能力を展開する…

さて… あの子はどこでサボっているのかしら？

同時刻… 霧の湖の畔…
睡眠は、その畔で釣りを行っていた…
湖畔に向かって垂らされた竿はピクリとも動かず彼女は欠伸をする…

side 睡眠

「… ふああ」

… 何も釣れませんね… 全く美羽様も厄介な命令をしたもので…

新聞のネタ探し？

そんなのは知らないですよ… 私はそういうの面倒なのでやりません!!

「私の仕事ではありませんし…」

とりあえず夕飯のおかずでも釣って、何とかしようと思いましたが一行に釣れません…

「… エサは魚肉ソーセージではダメでしたか… もうやる気なくなっちゃいました〜!」

私は竿を投げて草原に寝転ぶ…

「… 今晚のご飯どうしよう」

…
びく!

「ん?」

竿を見ると、先ほどまで動きが無かった竿に動きが!!
今晚のおかずが釣れましたか!!

「フイーツシユ!!」

私はリールを引き、獲物を一気に釣り上げる!!

今晚は!お刺身?それともムニエル?

「…」

「もしやもしや…」

… 私は釣り上げた獲物を見て言葉を失う

… てつきり釣れたのは、大物… 大きな魚だと思っていたが…
違った…

「もしやもしや!!」

「… ナニコレ?」

… 私の目の前には… 緑色の着物を身に包んだ… 青い髪の女性
性がいた…

… 一見人間に見えたが、とある部分がそれを否定する…
彼女の足の部分には、大きな尾びれがあった…

つまりこの人は人間ではない… つまり？

「… マーメイド？」

… 本で見たことがあるが、この人はマーメイドに似ている…
でもそれは御伽噺… つまり創作物のはず？

マーメイドは、魚肉ソーセージを食べつくした後私の方を向く…

「…」

何故か私の方をジッと見つめている？

「… 何です？」

「… もつとないの？」

… おかわりか

どうやら魚肉ソーセージが気にいったようだ…

食べれそうもないし、もう釣りをする気も無くなってしまいました
し… いいかゝ

「どうぞ？」

「わーい♪」

残りの魚肉ソーセージをやると、マーメイドはそれにパクつく…
考えてみると共喰いの気がするが言わないでおこう…

しかし… 湖にマーメイドね？これは誰も知らない情報でしょう
？

「… これは使える？」

美羽様が言っていた新聞のネタになるんじゃないでしょうか!!!

これは行幸!!!

これでなら！新聞のネタには充分になるというもの!!!

美羽様は始末書から開放！

私は功績により褒められる!!
… 良いこと尽くしではありませんか!!

「さて!!裏取りをー」

写真機を手に取りマーメイドの方へ向かう!!

「… げぶ… ちそうさま」

マーメイドはそのまま湖の中に入ってしまおう!!!
そんな!!まだ写真を撮っていないというのに!!!

「ま… 待つて!!せつかくの手柄が!!」

「… 手柄とは?何です?」

「うえ!?!」

後ろを振り向くと、そこには柚神様が!!!

何で彼女がここに!?!

「… 何で?」

「貴方がちゃんと仕事をしているかの確認です… 確か新聞のネタ探しをしているのでしたね?」

「… はい… 一応」

「… で?そのネタは?」

… 出せるわけない!!たった今!逃げられたというのに!!

「… その… 上手いところまで行ったのですが」

「… サボりとは感心しませんね… さっさと戻りますよ!!」

柚神様は私の手を引く!!待つて!!サボりではない!!

「本当です!!!この湖にマーメイドが!!!」

「何で海の生き物がここにいますか… ちゃんとした嘘をつきな
や」

「嘘ではありませんー!!!」

私の弁明も空しく… 私は柚神様に連行される…

もちろん… 美羽様にサボっていたことがバレて… しこたま怒られました…

必死にマーマイドはいたと… 言ったのに… 誰も信じてはくれませんでした…

でもこれだけは言えます… 私は嘘は言っていないと…

第4章：3rdミッション 宴会地獄の乗り越えヨ！
宴会？・・・それは仕事なのかしら？

夏が始まっている幻想郷・・・

今年は、前回の異変により、冬が圧倒的に長く春が異常に遅れた年である・・・

そんな暦の乱れにも気にせず、本日も妖怪の山での日常が始まる・・・

天狗の里の封印牢では、本日非番の天逆美羽と柚神・睡煉の三名が昼間からお酒を飲んで小さな宴会をしていた・・・

次の異変が来ることを、予期もせず・・・

side 柚神

「・・・ほれほれ〜！もつと行きなさい！睡煉!!」

「あは・・・余裕ですよ♪」

ワタシの目の前には、美羽が睡煉にお酒を注いでいる光景が映る・・・

本日は貴重な非番だというのに、ワタシ達は真っ昼間から早い宴会を楽しんでいる・・・

駄目兵器・・・真っ只中ですね・・・この光景は・・・

「柚神〜！杯が空よ〜♪」

「頂きます・・・」

美羽も完全に出来上がっている・・・まあ・・・ワタシ達の仕事は秘密裏に問題を解決することが仕事ですもの・・・

こういう何も無い日が本当に暇なのでしょう・・・正直ワタシとしても暇だ・・・

「ふあああ・・・私は少しお眠ですね」

睡煉は、壁に寄りかかりドライ人參を口に入れる…

「あらあら？もう終わり？夜喪妓とか忌梗はまだ持ったわよん♪」

「あの人達とは一緒にしないでくださいよ!!夜喪妓さんの酔った姿なんて見たことないですし… 忌梗に関しては… 無表情で何を考えられているか分からないし!!」

「おほほ… 早くあの子達とも杯を交わしたいわ…」

美羽は寂しそうに持っている杯を見つめる…

分かりますよ… 大事な部下ですもの…

生きている可能性が分かれば… 早く会うことに越したことはない…

…
だだだ

… 足音が聞こえる… 歩調からして… 文ですかね？

「… 文が来ました… 睡煉隠れなさいな」

「ういーす」

睡煉は姿を変えて白鳥の姿になり、美羽の肩に留まる…

そして牢屋の戸が一気に開かれる…

「あややー!!美羽!暇ですかー!」

そこには、いつもどおりの姿の射命丸文の姿…

彼女はワタシと美羽を見つめながらニコニコしている…

「暇よん… だからここで屯っているの」

「右に同じく」

「あやや…既に酒浸りとはく…これは丁度いいですね♪」
文はニコニコと笑みを浮かべながら跳ねている…
何でしょう…この笑みは嫌な予感しかしない…

「…新聞の手伝いはしないわよ?この前…上層部にこつ酷く怒られたでしょう?」

「…う」

文は笑みを崩す…

確かに文は美羽に自分が出版している新聞の売り込みをさせていましたね…

それが上層部にバレて、怒られたということは聞いています…

確かに…兵器である我々を、そのようなことで使うのは頂けない…

「…うう!!反省してます!!ですから今度は権にさせます!!」

「…反省してないじゃない!!もみちゃんが可哀想でしょう!?!」

反省の色は見えませんが、残念ですが、もみちゃんには少しの間生贄になってもらいましょう…

しかし…この天狗は何でここに来たのでしょうか?

「…ここに来たということは…何かお仕事ですかね?」

ワタシが文に問うと文は首を横に振る…

「いいえ?…今日は暇そうな貴女たちに宴会のお誘いをしに来たのですよ!!」

「…宴会?」

美羽が聞き返すと文は頷く…

「ええ!!本日の夕方に博麗神社で宴会を行うことになったのです!!ですから!私と権とく天逆双方には出席する予定を立てているんですね」

「…宴会ねえ…面白そうだけど…他にも誰か来るのかしら?」

「…そうですね？紅魔館・白玉楼・八雲・その他人間でやるみたいですね!!」

「あらあら…随分と多いわね…しかし…何でアタシらが参加なのよん？」

「それは私が霊夢さんに頼んだのですよ!!貴女たちも幻想郷を知って日が浅いですし…もつと交流を深めてもらいたいと思いましたね！」

「…ふうん？まあ…感謝するわん？」

美羽は、疑問に思いながらも感謝の意を述べる…
しかしワタシは美羽とは違う…物事の裏を見ませんとね…

「…実際の所？何か貴女にメリットがあるのでは？」

「!!」

文はワタシの言葉に驚くような仕草を僅かにする…
抑えていたみたいですが…ワタシの目はごまかせない

「わ…私にメリット？私は善意で皆さんに場の提供を…」

「…そうですか？ワタシ達を紹介するには構いませんが…態々權を連れて行くとなると話は別の意志を感じますね…彼女は本日山の警備の仕事が入っているはずですが？」

「あはは…私は…ふふふ!!」

文は口を押えて笑い始める…

「…何がおかしい？」

「あやや…失礼しました…權を用意したのは…私の身を守るためですよ…」

「身を守るとは何よ？」

美羽はキセルに火をつけながら杯に酒を注ぐ…

「まあ…念には念ということですよ…私は新聞のネタ探しに絶対に出席しないといけませんし！万が一のことがあつたら困りますからね？」

「… 万が一とは何よ？ たかが宴会でしょう？」

「時に宴会が牙をむくときだつてあるんですよ… 何となく私の第六感が働いただけですので… 保険をね…」

文は鞆から書類を一式揃えた後踵を返す…

「では♪お待ちしていますよ〜！」

そのまま彼女は牢屋を出ていく…

宴会が牙をむく？ 第六感？ 彼女は何を言っているのでしょうか…

「… あらら… スケジュールが狂ったわね？」

美羽は酒を飲みながら一息をついている…

「行く気ですか？」

「誘われた以上行かないと駄目でしょう？ 何とかなるでしょう？ アタシがいればね！」

… やれやれ… 相変わらずの自信過剰… 何が起きても知りませんよ？

「… 時間つぶしに将棋でも指します？」

「いいわね！」

ワタシ達は酒を飲みながら将棋で時間を潰すことにした…

何か嫌な予感がしますが… 問題はありません…

夕方

「… 28連勝… ざっとこんなものですね…」

「何故よー!!!」

美羽が将棋盤をひっくり返す…

とりあえず… 暇つぶしにやった将棋はワタシの全勝ですね…

美羽はこういうのには向いていない… 本人が一番分かっていると思いますかね…

やはり！こういうもので弱者を弄ぶのは本当に気持ちが良いものですね♪

「ぐぐ…」

「夜喪妓とどっこいどっこいじゃないですかね？貴方の手は毎度ながら単調すぎる…」

「…夜喪妓さんは…ルールすら分かっていないですからね…」

「もういいわ!!アタシはこういうの得意ではないの!!!うう…アタシより弱い人いるのかしら？」

…多分いいでしょう

正直…人里の子供達でも美羽は負けるでしょう…

…とりあえずこれくらいにしておきますかね？

「そろそろ宴会の時間です…行きますよっ」

「…分かってるわん!!睡煉!アンタはそのままの姿で参加なさい!

アタシは始末書を書くのはもう嫌よ!」

「はいはい!」

ワタシ達はそのまま博麗神社へと向かう…

博麗神社…

博麗神社へたどり着くと、そこには既に人がごった返している…

流石は、幻想郷…人と妖怪が宴会をするという光景は中々ありませんね…

せんね…

「ははは…これはすごい…」

「色んな人がいるじゃない!紅魔館に…白玉楼など…」

美羽は燥いでいるみたいだが、とある人物がこちらへ向かっていることに気づいて口を閉じる…

「… あら？まさかアンタらも来るとはね」

ワタシ達の目の前には、紅白の巫女こと博麗霊夢…

「お久しぶりね？」

「ご無沙汰です」

霊夢はワタシ達を交互に見た後、お祓い棒で境内の方を指す

「面白いのが来たじゃない… 宴会が楽しみね」

「お手柔らかに頼むわね」

「同じく…」

ワタシ達が境内に入ると、少し視線を感じます…

紅魔館組からは畏怖の視線… 白玉楼からは興味の視線… 八雲

からは、良く分からないごちゃごちゃした視線が来る!!

この視線は、昔を思い出すわ…

「あやや!! 来ましたね！こちらですよー！二人とも!!」

「天逆様ー！こちらです！」

遠くのシートには文と権がおり手招きしている…

「約束通り来たわよん… で？もう始まる感じ？」

「ええ！準備は出来ましたし！そろそろかと！皆さまの分もちゃんと用意してますよ！」

文はお酒が入った2つの杯を指さす…

辺りを見回すと酒の封を開けて既に杯についている人がチラホラ
という…

これは遅刻ギリギリでしたかね？

「では遠慮なく…」

ワタシが杯を取ると美羽は文の方を向く

「文… もう1つ貰えない？」

「…？お二人分は揃えたはずですが？」

文の言葉に美羽は肩に留まっっている白鳥化した睡煉を指さす…

「アタシの鳥も飲むのよ… お願いね？」

「… あやや… それは失礼しましたね」

文は睡煉の分の杯を用意してそれに並々とお酒を注ぐ…

「… やりました♪」

睡煉はそれに飛びついてお酒を煽る…

小声で人語を話している… 全く… 変身しているのですから… バレないようにしないといけないのに…

文はそれには気づかなかったみたいですが… 睡煉の飲みっぷりに唾然としている…

「あやや… 良い飲みっぷりですね」

「アタシの鳥だもの当然よ…」

美羽が酒を飲んでいると隣のシートからとある人物が美羽の横を座る…

「おう！飲んでいるか!？」

美羽の隣に座ったのは霧雨魔理沙…

彼女は美羽の杯に更に酒を注ぐ

「あら… 久々じゃない？魔理沙」

「何ちまちま飲んでるんだよ！ほら向こうは凄いぜ？」

魔理沙の指す方向には、一升瓶を片手に酒を一気飲みしている霊夢とレミリアの姿があった…

「レミリア！私についてこれるかしら？」

「… 紅魔館の主としてっ!!」

… あの飲み方は危ない気がしますが大丈夫でしょうか？

「あの飲み方は明日に響くわよ？」

「… まあ！気にするな！お前も参加するんだからよ！」

「… は？」

魔理沙に手を引かれて美羽が連行され霊夢達の方へと向かう…

「よお！私らも混ぜろよ！」

「私ら… つてアタシも参加なの？」

「2升目突入！… つて！魔理沙に美羽？何でアンタ達まで!？」

霊夢は急に来た魔理沙・美羽に驚くが酒瓶を渡す…

「アンタらも参加なのね！なら付き合いなさいよ！」

「おう！すぐに追いつくぜ!!」

「… まあ… いいけど… さっさと終わらせるわん」

魔理沙と美羽は酒瓶の酒を一気飲みし、それを空にする…

「ふああ!!やっぱり効くぜ！」

「… 美味しいわん」

「あららくすごいわー！」

「ほらほら！美羽ー！貴女は完璧な兵器でしょうー！」

あつという間に空にしてしまった彼女達に拍手と茶々が響く…

そして霊夢は更に酒瓶を彼女達に渡す…

「早いわね？でも勝負はこれからよ！ほら！レミリア！ポーつとしな
いー！」

「… ええ… やるわ… この吸血鬼である私が負けるわけがないも
の… 遊んであげるわ！」

「面白くなってきたぜ!!よし！こうなれば天辺を目指すぜ!!」

「… 軽くだけど… エンジンが温まってきたわん！このまま走るわよ！！」

4名の酒バトルが今開催される…

結果は何となく見えています… ワタシは宴を楽しむことにしましょうかね！

ワタシは自分の分のお酒を注いで、その余興を観察することにした…

お酒は程々に・・・

side 柚神

「・・・ 1時間30分経過ですか」

お酒バトル開始から、1時間半が経過し・・・ 勝敗がつく・・・
ワタシの目の前には勝利のポーズをした博麗の巫女が映る・・・

「これが博麗の巫女の力よー！」

霊夢の勝利の言葉により辺りは拍手大喝采の音が響く・・・

・・・ 本当に人間なのか？幾ら何でも・・・ これはデータとしては計算が狂いまくっている！

「・・・ はあ・・・ しっかりしてくださいよ・・・」

ワタシは敗者達の方へと向かう・・・

そこには、バケツに頭を突っ込んだまま伏している、レミリア・魔理沙・美羽の三名・・・

人間の魔理沙に勝てるのは分かるが、吸血鬼のレミリアに兵器である美羽を下すとなると・・・ もう分からない・・・

「・・・ うーうー」

「気持ち悪いっ!!」

「あ・・・ アタシは・・・ すでに飲んでた・・・ からっ！うぶ!!!」
何やら聞こえますがここは、スルーしときましょう・・・!!

・・・ しかし良いデータが取れたものですね

幻想郷の宴会は・・・ 人間であっても勝つ者が存在するということ
が分かりました・・・

ワタシは近くにいる睡煉をこちらへ向かわせる・・・

「・・・ 変身は解かないようにね・・・ 更に面倒になるから」

「・・・ 分かっていますよー！柚神様の方は派手好きではありませんか

らね」

そう言うのと睡煉は鳥の姿のままストローでお酒を啜う…
その光景は変ですが… もう素面の者はいませんし… いいか…

「あややくあややく〜！」

遠くを見るとワタシ達を誘った文も泥酔したのか半裸でフラフラしながら、あっちこっちを行ったり来たりしている…

酒バトルに参加したわけでもないのに嵌めを外しすぎです…

「はあ… 静かに飲めないものですかね…」

「全くですわね…」

「おや？」

ワタシの横には権がおり、彼女は酒瓶を持ってワタシの杯に酒を注ぐ…

「ああ… 悪いですね権…」

「いえいえ… 柚神様も大変ですね…」

権は文の方を見つめている…

権の言葉は手のかかる上司を持つと大変ですね… と言いたいんだらう…

彼女は苦勞している… それはワタシが分かっている… 本日は警備だというのに大変ですね…

今度何かの差し入れをしましょうかね？

「…」

「… はあ」

美羽の方を見ると、黙ったまま動かない…

完全に堕ちましたか… 全く情けない… これがワタシと同じとは… 実に嘆かわしい…

「…しかし」

文が言っていた…宴会が牙をむくというのはどういうことでしょうか？

彼女は勘だとか言っていました…その言葉にはワタシも胸騒ぎがする…

何故か知りませんが…嫌な予感がします…

あまり深入りしない方が、ワタシ達の為になるかもしれませぬ…

「お暇するのが宜しいですかね？」

杯を空にして、ワタシはその場から離れようと思いますが何者かに肩を掴まれる…

「あらあら〜！天逆の天狗さん！杯が空よ〜」

ワタシの後ろには白玉楼の主こと…西行寺幽々子がいた…

「あはは…ご丁寧…ですが酔いが回って来ちゃいましたね…これくらいにしようと…」

「駄目よ！素面で帰さないわ！貴女も美羽と同じく！乱れてもらいましょうか!!」

「嫌です!!遠慮します!!」

幽々子はワタシを宴会の中心へと押していく!!

「次紫！アンタも参戦しなさいよ！」

「貴女…2戦目もやるの？」

「うふふ！次は機械のお姉さんか！」

中央には博麗の巫女・妖怪の賢者・悪魔の妹がお酒バトルの次のラウンドを進めようとしている!!!

嫌だ…美羽がこのザマなのに!!ワタシにどうしろというのです!!

(睡煉!!助けて!!ワタシを守りなさい!!)

アイコンタクトで睡煉に助けを求めるが… 睡煉は杯を空にした後、そのまま飛び去って行く!!!

ワタシを置いて… 逃げるといいますか!!

「あああ…」

「ほら! 袖神! 行くわよ!」

「貴女はどこまでいけるかしら?」

「うふふ! ワタシが壊してあげる!!」

有無を言わずワタシは次のラウンドに参加させられる…

あ… あの子は… 今度… お仕置きよ!!

side 睡煉

「… あはは… ごめんなさいー! 天逆様♪」

私は遠く離れた森の中で変身を解いてストレッチをする…

肩が痛い… やはり… 長い変身にも慣れませんとね?

「天逆様達には悪いことはしましたけど… 私はまだ異変には関わりたいくはありませんからね」

遠くの博麗神社方面を見ると… 何やら霧が立ち込めている…

少なくともアレは… 何かの前触れですかね?

何か嫌な感じがしましたし… 関わらないのが一番です!

「鬼が出るか蛇がでるか… ですかね?」

私は鳥の姿になって妖怪の山方面へと飛び立つ…

まあ… 天逆様なら… 大丈夫でしょうね?

仮にも私達第0部隊を纏めていたリーダーですものね！
これくらいは何とかなるでしょう！

「さて… 昼寝しよう」

私はそのまま妖怪の山へと帰還する…

繰り返される惨劇

日が差し込み新たな日を告げる幻想郷の朝…
新たな朝を迎えた妖怪の山の牢獄では、宴会から6時間が経過して
いるというのに悲痛な唸り声はまだ響いている…

牢獄の一室で、酒バトルでの敗者である天逆美羽がベットの上で顔
を真っ青にし横になっていた…

side美羽

「う… うう…」

牢獄の中に日が差し込みアタシは、布団を被って日光を遮断す
る…

今日は何もしたくない… 酒の飲みすぎで気持ち悪いし… 頭が
ガンガンする…

まさか… このアタシが霊夢にまた敗北するとは… ショックで
はあったけど… それを上回る二日酔いの所為で薄まってきてい
る…

「柚神… リペア…」

じ… じじじ…

アタシの体から火花が散るような音が出る…

ちっ… やっぱ使いものにならないわ… 集中しないとアタシ
の能力は使えない…

しばらく能力が使えないし… 具現化することもできなそうね…

「あはは！柚神様の方は消滅してしまいましたか!？」

枕元の方には睡煉がアタシを見下ろしている…

こいつ… アタシを置いて宴会から逃げたくせに!!

「敵前逃亡は認められないわ… それに声を押さえてえ… 頭がガン

ガンするの」

「まあ… あれだけ飲めば当然ですよ… それに敵前逃亡ではありません！戦況が一変したので撤退しただけです」

「… ものはいよいよン」

睡煉と交わしていると… 廊下から誰かの足音が聞こえてくる…

「睡煉… 誰か来るわ」

「はいはい！」

彼女が鳥の姿へなると、足音が部屋の前で止まる…

バァン!!!

「おはようございますー!!!美羽ー！生きてますかー!!」

思いつきり開かれた扉の騒音!!そして開幕早々の文の大きな声!!

この2種類の騒音がアタシの頭を激しく響かせる!!

「ぐおおお…!!」

アタシは布団を深くかぶる… ダメっ!!このままじゃ壊れちゃうわ!!!

「あやや？美羽？どうしました？」

「声を押さえてえく… 二日酔いなのによン…」

「あやや… 貴女とあろう者が… 敗北とはー」

「… ふん！何とでも言いなさい… アタシは今日はもう無理…」

文を追い払おうとするが、彼女は手紙をベットのの上に置く…

「… 何よっ…これは」

「… トドメを差す気はありませんでしたが… 貴女にとっては仕方

ないことですね」

「何よ…」

アタシは手紙の封を破いて中に張っていた便箋を手取る…

「…は？」

便箋の中にはアタシの予想していなかったことが書かれていた…

（3日後… 博麗神社で宴会開始… 昨日のメンバーは確実に来るよ
うに！）

と書かれていた…

文の方を見ると半笑いでアタシを見つめて辺りを見回す…

「残念ですが… その手紙に書かれている事が全てです… 3日後も
参加してくださいね!!」

「嫌!!アタシも昨日は酷かったのよん!!!」

「私だっけ行きたくはありませんが… 便箋の端を見てください…

昨日のメンバーの名前が書かれていますよ?」

… よく見ると… 便箋の端には、昨日参加したであろう名前が
びっちらりと書かれていた…

「… あ… ああ」

「仕事だと思って諦めて下さいね♪… ところで柚神さんは?」

文は辺りを忙しなく見渡す…

さつきから落ち着かないのは、柚神がいない所為かしら?

「柚神はいないわ… 昨日の飲み会で再起不能になったのよ… 能力
が使えないし呼び出せないわよ?」

「あやや？逃げちゃいましたか… だったら猶更貴女が行かないと！」

文はアタシの腕を引っ張る!!

「っ!!離さない!!」

「駄目ですよー!!貴女を連れて行かないと私が怒られます!!」

「違っ!!その前にっ!!」

こいつ!!アタシの左腕を伸ばしているっ!!このままじゃ古傷が開いてしまう!!

「ほらほらー!!行きますよー」

「い… 痛いっ!!」

「これ以上の無礼は流石の私でも許せませんねえ？」

「あや?」

突如響く睡煉の声に文の動きが止まり、アタシは彼女の手を払いのける

彼女の機転には助かったけど!今は文がいるから出て来てはダメだというのに!

「はあ… はあ… 睡煉!何をしているの!!勝手に能力を解除…」

文の方を見つめるとそこには、文の首筋に鋭い鉤爪を当てている睡煉の姿があった…

「あやや… 何です?このバニーちゃんは…」

「天逆様大丈夫ですか?とりあえずこの人は私がバラシて夕飯に出して置きますので〜」

睡煉の明るい口調で物騒な言葉に文は顔を青くして冷や汗を流す…

「あややや!!美羽!!何とかしてくださいよ!!このままじゃ私が夕飯の焼き鳥にー!!!」

・・・ お肉は好きじゃないし、文が消えるのも後々と厄介ね・・・

「睡煉・・・爪を抑えなさい・・・」

「・・・はいはい」

睡煉は満面の笑みを浮かべて文を開放し、文は荒い息を吐きながら壁まで移動する・・・

side文

「はあ!はあ!!!」

・・・ 私は壁まで移動してバニーちゃんから距離を取る

さつきまでこの子いなかったのに!!どこから現れたんですか?それに私を今晚の夕食につて!物騒すぎます!!何も悪い事してないのに!!

「全く・・・美羽様に無礼を働くからですよ」

睡煉の姿が変化し白い鳥になり彼女は美羽の頭の上に留まる・・・

「私は悪い事してません!!只美羽を宴会に連れて行こうと!」

「してるじゃないですか・・・美羽様の左腕を引っ張るなんて・・・」

「あや?」

睡煉の言葉に私は美羽の方を見る・・・

美羽はベットに座りながら、左腕を抑えており、左腕には酷い縫合の痕があった・・・ ああ!そういうえば!!

「あ・・・ ああ・・・ いやん!!古傷が開いちやうわ」

美羽は、わざとらしく傷を舌で舐めている・・・

「あやや!!すみません!!そんなことする気じゃ!!」

「いいわん・・・悪気があったような感じではなかったしね・・・お陰で酔いが醒めたわ・・・」

美羽は私の前に来て、右手を壁にあて私を覗き込むような体勢を取る…。美羽は女性にしては大きいから私が壁ドンされている気分になります…

「あややく私のお手柄ですね！」

「痛い痛かったけどねっ!!」

めき…

私の横の壁を見ると美羽が右手を当てていた壁に大きなヒビが入る…

「… あやや!!冗談ですよー!!」

「そうね… 冗談の方がアタシも怒らなくて済むわ」

美羽は満面の笑みを浮かべる…。そして頭の上の鳥こと…。睡煉がカアカアと鳴く…

「と… ところで… その子は何者ですか？確か… 上層部にはそんな情報は…」

「知らないはずよ… だって言っていないもの」

「ふええ!？」

美羽は開き直った態度で睡煉の首元を撫でている…。柚神さんの時に報告しなくて始末書だったのに懲りてない!!

「そんなことしたら！始末書！」

ばき!!

「… 嫌よ♪」

壁が… ヒビから穴へと進化した…

「わ… 私を脅す気ですか!!?私は脅しには屈しませんよ！」

「脅してはないと思うわあ… アタシは貴女の命を救ったじゃない♪つまりこれはイーブンよ」

さっきのアレですか!!そんなことで始末書をイーブンなんて出来ません!!

「さ… さっきのは私一人でも何とかなつたかと…」
「へえ？ そうなの？」

美羽は嫌らしそうな顔をし… 睡煉は鳥から人型へと戻って医療用のメスを持って打ち鳴らしている…

「どうします？ とりあえずバラしますか？」

「やめておきなさい… 後々の処理が面倒になるだけよん」

「み… 美羽はともかく… この子には遅れはとりませんよ!!」

私は毅然とした態度を貫くが美羽は溜息をつく…

「やめときなさいよん… この子こんな身形だけど… 一応連続殺人犯なのよ」

「うえ!？」

…れ… 連続殺人犯？ 何でこんなのが美羽の下に？

「うう!! それは言わない約束じゃないですかー!!」

「どうせ言わなくてもバレるわよ… 大体アンタはヒト殺しすぎなのよ…」

「… 100人からは数えてませんけど」

睡煉はいじけるような素振りを見せる… こんな少女が… 連続殺人犯とは…

「で？ 文？ これに関しては始末書は無しでいいわよね？ 今後も部下を探していくから宜しくとのことよー!」

「み… 認められま」

がらららららら…

背後から何かが崩れる音と冷たい風が吹き… 後ろを見ると、灰色の景色が… 幻想郷の景色に変わってます… 壁さん… さようなら!

「わ…： わかりましたよ!!! とりあえず!! その件の始末書はやりませんよ!!!」

「いい子ね♪アタシ好きよ♪話の分かる子…：」

「その代わり! 宴会には出てくださいね!! 霊夢さん何故か貴女の事気にいっているみたいです!!」

「ええ? どういうことよん?」

「知りません! 失礼します!!!」

私は牢を逃げるように飛び出す…： とりあえず連れてくることは出来そうです! この鬱憤は楯で晴らします!!

「あらら…： ここからの景色は眺めが良いですね」

「…： やり過ぎたわ」

牢屋にポツカリ開いた大穴から幻想郷の景色を眺める、美羽と睡眠…：

美羽はキセルを取り出して火をつける…：

「宴会ねえ…： 気が進まないわ」

「3日後は壁の花を決め込むのがいいのでは?」

「ふう…： あの濃い連中がそれをさせてくれるわけないじゃない…： 嫌だけど」

美羽は、煙を吐きながら大穴に手を当てる…：

「参加よん…」

刹那… 大穴は元通りの壁に戻り、元通りの牢屋の風景に戻る…

「あらら… 良い景色でしたのに…」

「… ふんーこれじゃ寝れないわよー」

美羽はベツトの上にあった帽子を被って牢屋の戸を開く…

「… 人里にご飯食べにくわよん」

「はいはい〜御供しまーす♪」

彼女達は昼食をとるため、その場を後にする…

3日後… 彼女達はまた宴会という死地へ足を運んでいく…

それが大惨事の幕開けとも知らず…

お酒に負けない！

宴会から3日後… また博麗神社にて宴会が開かれる日がやってきた…

突如決まったこのイベント… 当日の参加者も困惑の表情を浮かべているのだろうか…

一方その頃… 妖怪の山の牢屋では、天逆美羽と睡煉が昼から深いため息をついている…

それは勿論… この宴会と言う名の地獄の戦争についてだ…

… この戦争により博麗神社が墓標になるのか… それは誰にも分からないことである…

side 美羽

「…ふう〜」

妖怪の山の景色を眺めているのは良いわん… 美しい景色だもの、それは見飽きないわ… けど… みるみるうちに時間が過ぎていくわ…

宴会の時間が刻一刻と迫っている…

「はあく… 何かこの待ち時間が嫌ですなぁ」

「… それはそうよ… 前回みたいに散るのは勘弁よ」

気分は宴会と言う名の死刑執行を待つ囚人よ…

前回よりはある程度回復したけど… 柚神の奴が出るには至らないわ…

「柚神様は… 出ませんよね？」

「… そうね… アタシが至らない所為でね」

煙を吐くと、睡煉はくしゃみをする… 煙がかかったかしら？

「あらっ… 悪いわね」

「いいえ… 気にしないで下さい… 私は美羽様でも柚神様でも…

どちらかいればいいですからね？」

睡眠は屈託もない笑顔をアタシに向ける…

… 健気な子ね

この子の為にもアタシがしっかりしないと… 宴会が何よ!!この

天逆美羽様が!!恐れる必要はない!!

時計を見ると、約束の時間15分前… 行かないと…

「死地に行くわよ」

「はいはい〜!」

アタシ達は重い腰を上げて博麗神社へ向かう…

博麗神社…

どよーん

「う…」

神社に辿り着くと既に重い空気を感じる… この前とは大違い
ね…

「まだ誰にも会っていないのに… この重々しい空気とは…」

「… 怯む必要はないわ… 今回はお酒は抜いて来たし… 前回とは
違うはずよ」

アタシ達は境内へと足を運ぶ…

既に境内には何人か見知った顔がいるが…

「…」

「はあ… 何で私何だ…」

「うーうー」

そこには霧雨魔理沙… レミリア・スカーレットがいたが… 2人

共目が死んでいる…

3日開けたとはいえ… やはり辛いものは辛いわ…

「… 今日は無事に帰れなそうね」

「… 私が… アフターサービスはしますから」

… アフターサービスね

つまり現在進行形では助けてくれないみたいね… 乗り切るには、自分の実力のみという訳ね…

境内で死んだ目をしている連中を見ると、神社から博麗霊夢が出てくる…

彼女はアタシの方まで近づいて、アタシを見つめている…

「… ふん… 来たのね… 美羽」

「… 来たのねとは随分な言葉ね？… アンタが呼び出したんじやない」

霊夢はアタシの言葉を無視して睡煉の方を見る…

「… こっちの方は初ね… アンタの部下かしら？」

「… 察しの通りよ… アタシの部下の一人睡煉よん」

アタシの言葉に睡煉は霊夢に会釈をする…

「睡煉です！宜しくです！」

「… 宜しく… そういえば… 柚神の奴の姿が見えないけど？」

霊夢は辺りを見回す… そういや… 柚神の奴は欠席ってこと言っていないわね…

「あいつは欠席よ… 前回の飲み会が効いたのよね」

「… ああ… 確かに前回の飲み会の時… 酒比べに負けて爆発する

ように消滅したわね… 死んでないわよね?」

彼女は心配するような目でアタシを見つめる…

死ぬはずがないわ… あいつはアタシと一心同体… 消滅するこ
となどあり得ないわん!

「心配する必要はないわ… 軽くエラー起きているだけよ… という
より… 何でまた宴会を?」

「何となくよ… やりたくなつたのよ…」

霊夢はあやふやな返答をする… アタシとしても何か腑に落ちな
いわ…

「… まあいいわ」

「ところでアンタ達が天狗の代表でいいわね?」

… 何か足りない気がするわ

「待って… まだいるわよ!!文と椀の2名が来ていないじゃない!!!」

辺りを見回しても2人の姿がない… 霊夢は何を言っているのよ
ん!!!

彼女は溜息をつき頭を掻きながら懐から便箋を取り出す…

「… 文がこんなのを送ってきたのよ」

「な… 手紙?何でこんな!!」

アタシは便箋に書かれた文を読む…

(スミマセン!!!椀が捕まらなかったのと… 今月の文々。新聞の締め
切りが本日です… 欠席します!!!そこにいるはずの美羽とバニー
ちゃんは好きに使ってください!!!)

と… 書かれていた…

「…ふ…ふふふ!!…ふぎけんなあ!!!あの天狗があ!!!」

アタシは便箋を握りつぶす…

あいつ!!!アタシらを囮にするとは!!!前回の飲み会で二日酔いになったというのに!!何て…酷い…ことを!!!

「美羽様… やっぱりアレ… 唐揚げにした方が良かったのではく?」

「アタシは肉は食べないのお…」

アタシらのやり取りを見て霊夢は溜息をつく

「文に良いようにされているのね… お気の毒様」

「ふふ… まさかの裏切りには驚いているわよ… 今度の新聞売れると良いわね?」

アタシは天に向かい呪詛を吐き、大人しく霊夢に連れられて境内の端っこにあるシートへ座る…

「はあ… あの天狗… 覚えてなさいっ!!」

「いない者に言っても意味はないですよ… 大人しく乗り切りましょうよ」

「…うう」

アタシは目の前に置かれている酒瓶を手に取り、それを御猪口に注ぐ…

今回だけは… 無事に帰りたいわ… お酒がトラウマになるなんて… 長い時を生きているけど初よ…

「あらあら?…楽しんでるかしら?」

「…」

アタシの目の前の空間が開いて、中から妖怪の賢者こと八雲紫が姿を現す…

薄ら笑いを浮かべており、疲れ切っているアタシとしては話したく

ない相手だわ…

「…楽しんでるように見えるかしら？」

「あら？げんなりしている表情の貴女は珍しいから… つい…」

紫は扇子で口元を隠しているが… 確実に笑いを堪えるような顔を
をしているわね…

「アンタも限界までやってみたら？前回適当に負けてたじゃない！」

「… 私はいいのよ♪勝利よりも酔った人を見て笑うのが好きなの
！」

より性質が悪いわ…

紫と話していると今度は八雲藍がアタシ達の方へ来る…

「紫様！お食事の用意が… 何だ… 負け烏もいるじゃないか…」

会って数秒でアタシに対する暴言…

こいつ… 1回バラシタ方が良いかしらん？

「美羽様？… こいつ狐うどんにしちやいます？」

睡煉が爪を伸ばして爪とぎをする…

「やめときなさい… アタシ肉は食べないし… 本来狐うどんには狐
の肉は入れないわん…」

「ふん!!ちやちな兎妖怪程度に遅れは取らん!!」

藍は不快そうに鼻を鳴らすが、睡煉は笑みを崩して青筋を立ててい
る…

「… ちやちゅ?この私をつ!!安っぽいですつて!!!」

怒りの所為か… 睡煉の体が色々な動物に変化したり戻ったりし
ている… ああ… こいつ睡煉の地雷踏んだわ…

紫も藍も… 睡煉の豹変に驚きの表情を浮かべている

「え?どうしたの?何か怖い…」

「というより… 怒るところズレている気がするが？」

「… 睡煉にちやちという言葉は禁句よ… ほら！落ち着きなさいよ
ン!!アンタは最高傑作でしよう?」

「う… ううう!!」

睡煉は唸りながら鳥の姿になり、アタシの頭の上に留まる…
… ぷい!

「ああ… へそ曲げちゃったわ… こうなると面倒なのよね…」

「あらあら… 何か悪いわね」

紫は頭を下げるが、彼女が悪い訳ではないのよね…

「アンタが悪い訳じゃないわン… 説明し忘れたアタシが悪いのよ
ン」

「藍は後で折檻しておくから…」

「え!?!紫様!!」

紫は藍の尾を引つ張つて霊夢の方へ向かう…

後は彼女に任せましようかね…

「あらあら…?飲んでいるかしら…?」

「…」

紫が消えたと思いきや… 今度は西行寺幽々子がアタシの前に…

今日は色々と巻き込まれるわね…

「今日は静かに飲みたいのよン」

「つれないわく良いじゃない!!ワイワイした方が楽しいわよ!」

幽々子はアタシの手を引いて、人だかりがある場所へと案内す
る…

「…」

そこには酒樽が沢山積んであり、その前の敷物には死んだ目の魔理
沙・レミリア… そして楽しそうな顔をしたフランの姿があった…

「何で… また」

「うー！咲夜ー！助けてー!!」

「うふふ!!楽しいじゃない!お姉様!」

まさか… この光景は…

「ねえ… アタシは参加しないわよ!」

「そんなこと言わないの!!今回は私も参加するんだから!!」

幽々子は強制的に、アタシを座らせ… 隣に座る…

辺りには、アタシ達を見つめる他の者達の視線!!これじゃあ逃げるに逃げられないわ!!

「幽々子！何でアタシなの！霊夢とか紫がいるじゃない!!」

「… どうせ… 宴会はまた続くもの… 今のうちに慣れておいたほうがいいじゃない?」

「続くって… 何が…」

「第3回!!飲み比べ大会の開催です!!」

幽々子に問いたさすが、アタシの声は大音量によりかき消される…

声の方を見ると… そこには紅魔館のメイド… 十六夜咲夜がいた…

彼女はマイク片手に、言葉を続けている

「本日の飲み比べ大会に参加する… 命知らずはこちらー!!白黒の大

泥棒!!霧雨魔理沙ー!!」

「… 何で強制参加!?それに私は泥棒じゃねえよ!!」

… いや… 紅魔館の図書館で本を盗んでいることは本当でしょうが…

「次ー!!紅魔館の当主こと!!我が主レミリア・スカーレットお嬢様!!本日の勝ち筋ですー!!」

「咲夜ー!!助けなさいよー!!!そしてドサクサに紛れてハードル上げないでー!!」

・・・もう半泣きじゃない・・・それにあのメイド・・・その姿を見て楽しんでるわ

「次ー!レミリアお嬢様の妹様ー!!この宴会をぶち壊せー!!フラン
ドール・スカーレットお嬢様ー!!」

「わーい!!!」

・・・屈託のない純粋な笑顔・・・素敵ね・・・

「次ー!!白玉楼の亡霊姫!!その胃袋はピンクボール!!西行寺幽々子ー!!」

「ご飯なら負けないけどね・・・お酒はどうかしら〜?」

・・・ピンクボールって何よ?

「最後ー!!今回のダークホース!!!自称完璧の兵器!!天逆美羽ー!!ポン
コツなりに頑張ってくださーい!!」

「待つて!!ポンコツって酷いわ!!それに自称完璧って!!」

「さあ!!本大会のルールを説明しまーす!!」

咲夜はアタシを無視して、ルール説明をし始める・・・

うぐぐぐ!!このアタシがっ!!こんなこと!!

「・・・」

気づくと・・・アタシの前には酒が注がれた3号枡が山盛りに積み
れていた・・・

「・・・とりあえず!ぶっ倒れるまで飲んでくださいー!!」

司会が雑になってきている・・・

「何が大会よ・・・何が飲み会よ・・・飲み会って何よ・・・」

アタシの言葉が聞こえたのか幽々子が耳打ちする・・・

「うふふ・・・ブツブツ言っても仕方ないじゃない?ポンコツ扱いが嫌

なら貴女の方を見せつけなければいいじゃない〜?」

「…はあ… 考えても仕方ないわね… この美羽様の實力を見せてやるわー!!」

アタシは帽子を脱ぎ捨て、最初の枡に口をつける…

1時間半後…

「… げほ!!!」

「… あ… 頭が…」

「うー!!!」

「うふふふ… うぷ!!!」

いつの間にか… アタシ・魔理沙・レミリア・フランがバケツに頭を押し付ける結果になった…

そして勝負席には平然とした表情の幽々子がいる…

「あらあら〜!? 勝っちゃったわ」

… ふふふ… 頑張ったのに!! 結局こんなっ!!

「… うぷ!!」

アタシは思考を停止させ、その後の宴会はバケツと友達になってい

た…

宴会後… 妖怪の山の封印牢

「… うう」

「ほらほら!!しっかりしてくださいよ!○○様!!」

何とか… 妖怪の山の自室までやってきたアタシは、睡煉に支えられながらベットへ座り込む

前回よりは、マシだけど… 辛い事には変わりはないわ…

「げぶ… しばらくは何もいらないわ…」

「調子に乗るからですよ… 上には上がいるんですから…」

「… 何も言い返せないわ」

アタシはふとベットに置かれた便箋を手取る…

「こんなのあつたかしら?」

アタシはそれの封を開ける…

そして、その行動に後悔した…

(3日後・・・博麗神社で宴会を開きます・・・強制参加)

「・・・夢よね?」

「夢ではないと思います」

睡煉の言葉にアタシはその場に蹲る・・・

こんな絶対におかしいわ・・・

一方その頃・・・博麗神社に霧が立ち込める・・・

その場には八雲紫がおり、彼女は霧の中で目を閉じ、博麗神社からの手紙を出す

「・・・これは貴女の仕業ね」

紫の言葉に、霧から笑い声が辺りに響く・・・

(にやははは!!バレた感じ?)

「・・・こんな愉快犯がやりそうな異変だもの・・・貴女位しか思いつかないわ」

(そう?まあいいじゃないの!!面白い奴が出てきたしき!)

「・・・面白い奴?」

(あの天狗もどきだよ・・・あいつの慌てふためく姿は笑えるだろ?)

霧から聞こえる言葉に紫は溜息をつく・・・

「・・・あまりちよつかいは出さない方がいいわ・・・一応危険人物なんだから」

(は?いいじゃない!・・・今度はあいつに負けないもんね!!)

霧から声が聞こえなくなり、辺りから霧が晴れていく・・・

博麗神社の境内に残った紫はスキマを開く・・・

「・・・あの人は本気じゃないわ・・・もつと恐ろしい存在なのよ」
そう言い残し紫もその場から消える・・・

大惨事会と大惨事大戦

時は過ぎ… 博麗神社での3回目の宴会が開かれる日がやってくる…

妖怪の山の牢屋では、ベットの中で毛布に包まったまま、そこから動こうとしない天逆美羽の姿があった…

宴会まで後数時間… 彼女に残された時間は余りない…

side美羽

「…宴会… やだ… お酒… やだ… 飲み比べ… やだ… 人間やだ！」

アタシは痛む頭を抱えながら現実逃避をする…

もうこれ以上は、アタシとしては非常に精神衛生上宜しくはない!!
この世界おかしいわよ!!何で兵器にお酒で勝てる人間がいるのよ!!
何で頻繁に宴会開くのよ!!何でアタシがこんな目に合わなければならぬのよ!!!

「…うう… 頭痛い」

「あらら… 弱気な美羽様も珍しいものですね」

どこからか睡煉の声が聞こえるけど、返答する気にも起きないわ…

今日は植物のように生きていたい… 誰にも関わらず時を過ごしたい…

バン!!

「美羽ー!!宴会ですよー!!」

響くは… やかましい天狗ごと… 文の声…

今一番聞きたくない声が部屋の中で響く… アタシはその声を無視して寝返りを打つ

「…」

「何で無視するんですかー!!宴会の時間です!!行きますよ!!今日は私も行きますからー!」

文は毛布を引つpegがそうとするが、アタシがそれを許さない…

「嫌!!今日はアタシは欠席!!アンタが行きなさいよ!!この前休んだでしょう!!!」

「それはそれ!これはこれです!!私もやけ酒したい気分なんですよ!!新聞は売れないわ!楯にはぶん殴られるわ!!」

完全にアンタの都合じゃないの…

というか… もみちゃん… とうとうキレたのね…

「アンタの気分何て知ったことではないわん!!アタシは今回は休むの!!もうこれ以上は限界なのよ!!」

「それは許しません!!私は一人では宴会には行きたくない派なんですー!!!」

文が毛布を剥ぎ取り、アタシを御姫様抱っこする!!

「良し!連行準備完了!!」

「待ってヤダ!!睡煉!!コイツをばらしなさい!!」

「仰せのままにー!!」

睡煉は手術刀を持って文にジリジリと近づくが、文は青い顔をしながら毅然とした態度をとる

「お…脅しには乗りません!!美羽!貴女の安っぽいプライドは宴会ごときで消滅してしまうものなのですか!!」

「っ!!」

…アタシのプライド?

「誰が安っぽいだー!!」

睡煉が殺意を向けるがアタシは手で制す…

「睡煉…アンタの事ではないわん…でもアタシのプライド?アンタに何が分かるの!!?」

文に威圧をするが、文は臆することなく口を開く…

「…少なくとも貴女と初めて会った時は、貴方は怖い物知らずの傲慢な天狗だと思ってました…ですが今の貴女は何です!最近は何タレているじゃないですか!」

「ぐっ?」

文の言葉が胸に刺さる…確かに彼女の言葉は間違っではないない…昔はこんなことに臆するなんて有り得なかつたのに!

…考えてみれば…確かに最近のアタシは…昔と比べて…心も体も弱くなった?

あ…あれ?いつからアタシは弱くなったの?

「ぐ…ぐぐぐっ!!」

「…あや?どうしました?」

「…下ろしなさい!!」

文の腕を振りほどいてアタシは床に着地し、思考を巡らす…まずいわ…頭が久しぶりにコンガラガツテきた…

「美羽様…爪噛むの良くないですよ」

「お黙り!!」

睡煉の言葉を一蹴して、考えをめぐらす…

ワタシは… 兵器よね？生まれた時から… 確か…

(… ダメだ… 基準にも満たない… 及第点以下だな)

(予算をかけた意味がないな…)

(適当に使って使いつぶせば？)

「っく!!!」

ワタシは完璧なのよ！ワタシは最恐なのよ!!

だから… そんな言葉を向けるな… ワタシを… 否定するなっ

!!

「美羽!!血が出てます!!爪噛むにも程が!」

「黙れえ!!!」

… 急な言葉に、感情の赴くままに怒鳴り声をあげてしまった…

「ひっ…」

「み… 美羽様…」

… 目の前には怯えた表情の文と睡煉の姿がある

まずいわね… 久しぶりに感情が高まったわ…

「… 悪いわねン… 少し混乱したわ…」

「あ… あやや… それだけの迫力があるのに… 宴会から逃げるの
はないですよ」

文は青い顔をしながら茶化す…

「ふう… 確かにアンタの言う通り… 逃げるのはアタシらしくない
わ… 少し一人にしてくれないかしら?… 睡煉… アンタも席を

外してくれる？」

「ええ!!分かりましたー!」

睡煉は一目散に牢を出ていくが… 文はじっとアタシを見つめて
いる…

「… 逃げないで下さいね」

「逃げないわ… 時間になったら向かうわよん」

「… 待ってますよ」

文は、そう言うのと牢から出ていく…

「… はあ」

キセルに火をつけてベットに座る…

やっぱり濟んだ事とはいえ、やっぱり駄目ね… アレを思い出すと
感情が高ぶるわ…

トラウマになっっているのかしら… アタシの出生とはいえ、話せる
ものではないわん…

「…」

(… 君は… 私の大切な友だ… 生まれのことなぞ気にすることは
ない… そうだろう?○○○○?)

「… ふふ」

… こういう時に… あの方が言葉を投げかけてくれたわね…
今となつては懐かしいわね…

「… ふー」

… もう… 聞ける言葉ではないけど… この言葉でアタシの人
生は変わったというものかしら?

まだ長い人生… アタシらしく進んでいかなきゃ駄目よね？

「さあて!!アタシも負けていられないわん!!… 宴会が何よん!!いざとなったら本気出すわー!!」

アタシは自室を後にして博麗神社へと向かう…

博麗神社

「… ああ」

博麗神社へと降り立つと、そこはもう… 重い雰囲気醸しだしていた…

目のチャンネルがおかしいのかしら？いつもの博麗神社より、黒い霧が立ち込めているわ… 何でしょう？怨念的何かを感じるわね…

「…
」

そしてシートで寝かされている、魔理沙・レミリアを発見する…

3日の猶予があるとはいえ、飲み比べのダメージが残っているはず… お気の毒さまよ…

アタシと同じく死地を経験した仲間よ… 彼女達は頑張ったわ…

何連続か分からないけど…死なない程度には頑張ってもらいたいわ…

「あら？来たわね美羽？」

声の方を見ると、そこには霊夢がいたわ…

相変わらず血行の良い顔をしている…宴会のダメージはなさそうね？…この子本当に人間なの？

「こんにちわん霊夢…アンタも好きね？こども宴会を開くことは一生に無いと思うわ？」

「…私も何故開きたくなるか分からないわ」

霊夢は微妙そうな表情を浮かべてアタシから目を反らす…

…元の原因がこれとは…何かのきっかけがあるのかしら？

「…理由が無いのに開催するとは…アタシとしても理解ができないわねん？何となく…嫌な予感がするわ…」

「…奇遇ね…私も異変だと思い始めた頃よ」

彼女は言うが…信憑性に欠けるわあ…この子が異変を起こしている可能性もあるもの…何かの決定的な証拠が欲しいわね…

「ふん… 案外異変を起こしているのはアンタかもしれないわね？」

「っ!!」

霊夢はアタシに掴みかかる…

あら？少し問題発言だったかしら？

「アンタね!!」

アタシの服を掴む彼女の力が強まってくる…人間並みだけど…力強いわねん？アタシ好きよ？強い子…

「あら？失言だったかしらん？でも怪しいのはアンタしかいないのよね？」

「私だっこの衝動には迷惑しているの!!…私だっ…被害者な

のよ」

霊夢が俯く…

被害者ね？… アタシ達を飲み比べで潰した癖に… 何を言っているの？

「どちらかと言うとアタシらが被害を被っているはず…」

「私だって!! 大変なのよ!! この宴会開くのに! 幾らかかっていると
思っているのよ!!」

「… え?」

この言葉は予想外ね?… まさかの資金の話になるとは…

「… シ〜? てつきり紫辺りが… 資金の援助をしてくれると思って
いたけど?」

「… あいつがそんなことしてくれるわけないじゃない!! うう… 私
だって… 宴会を盛り上げるために… 神社の少ない予算を削って
持て成したというのに…」

「… ごめんなさい」

… 何故かアタシが頭を下げる結果になってしまった

… でもこの子の姿を見ていると、アタシの方が申し訳ない気分になるわ

「アンタが謝っても意味ないわ… それに今日の人数が少ないし…」

「…」

… 辺りを見回すと

八雲・西行寺組はいない…

紅魔館の方もレミリアと咲夜しかない…

山も… 文と睡煉しかないし… 今までで一番人が少ない宴会
となっているわ…

「とうとう集団でバックレがでたわね… 伸びているのが2名となる
と… 本日開く意味がないわよね?」

「それはそうだけど…この衝動が…」

衝動ね… 霊夢に人的作用が掛かっているのは、确实ねえ…

「…愉快犯がいると言わなきゃあかん？」

「何かの対策を考えないとね…紫の奴がいれば苦労しないんだけど」

十中八九… 八雲の連中は、面白がっているんでしようね… アタシとしても余り時間はかけたくない…

… 仕方ないわ… 久しぶりにやるしかなさそうね…

side 霊夢

「時間をかける必要はないわん… アタシがやる…」

「… え？ アンタが？」

美羽の方を見ると彼女は空間を弄り出しており、彼女の周りには色々な物が書かれている画面が映っている…

これは美羽の戦友の天逆柚神の能力!!

美羽の能力は、これではなかったはず！

「何でアンタが柚神の力を使えるのよ！」

「… 答える必要はないわん… アタシは完璧だもの… できるものはできるもの…」

美羽は我関せずといった感じで画面を見つめている…

… 聞くのは今度にした方がいいわね… 今の最優先事項は、この異変の愉快犯を見つけ出すことだもの…

彼女の見ている画面を見ると、そこには何かの地図が書かれていた…

… この地形は見たことがあるわ！博麗神社の周辺じゃない！

「これって！博麗神社の周辺？」

「ええ… 犯人を見つけるには便利なのよね… どこに誰がいるかすぐに分かるわ」

美羽は画面を弾くと、境内が映っている部分に8つ分のカラフルな点が映り出す…

「… これは？」

「… アタシが知っている奴がどこにいるか示しただけよん… この赤白がアンタ… 金白黒は、そこで伸びている魔理沙… 水桃がレミアといった感じだね…」

… 色で身体的特徴を現しているわね

… ということは、私の近くにいる灰白黒は… 美羽かしら？ 境内近くにいる睡煉が… 白茶？

「… 睡煉つて子はどちらかというと、紅白だと思うけど？」

「睡煉はアレで合っているわ… 今は彼女の話は良いでしょう？ それより… っん」

美羽が指さす所には神社の前にある… 金紫の点…

「これが犯人!!」

その点がある方を見るが… そこには誰もいない？

美羽はその方向を見て煙を吐く…

「… 多分紫の奴でしょうねん… この状況を見て面白がっているんでしよう… とりあえず放置で…」

金紫… 紫の奴か…

画面の金紫の点が、こちらへと近づいてくる…

「酷いわ!! 放置はないでしょう!?!」

スキマが開いて、紫が首を出す…

「こちらら… 時間が惜しいのよん… 犯人じゃないなら… 黙ってなさい」

「酷い!!」

紫はハンカチを口でビローンとするが、美羽は冷たい目で見る…

「… どうせ犯人は知っているのでしょうか？」

「… 何でそう思うのかしら？」

紫はハンカチをしまい、スキマから身を出したまま美羽を見つめる…

その表情はいつも通りの胡散臭さを醸し出している…

「ただのアタシの勘よ… 邪魔するなら容赦しないわ」

「… 邪魔はしないわ… 精々犯人捜しを頑張りなさいな… 見つかるなら… ね」

「… ふん！できるわ… このアタシに掛ければ… そんなこと造作もないわん」

美羽は画面をジッと見ているが、私はあることに気が付く…

「… ここにいる8人は映っているけど… 犯人らしき人物がどこにもいないじゃない」

ここにいるのは、私・魔理沙・レミリア・咲夜・紫・文・美羽・睡煉の8名全員… 美羽の画面には、他に人物が映っていない…

美羽は不機嫌そうに、煙を吐く…

「アタシの知っている奴… つと言ったはずよん？てつきり知っている奴が犯人と思っただけど… どうやら全く知らない奴が今回の黒幕ね…」

美羽が画面を弾くと、境内の地図に橙色の点が多数現れる!! 幾ら何でも多過ぎよ!

「待って! そんなにいるわけ!？」

「いるのよねん! でも… 実質には1人かしら? 隠れてないで出てきなさいよお!」

美羽が乱暴に手を振ると、虚空に衝撃波が走り何も無い空間から少女が現れる!

「うわ!!」

少女は尻餅をつく… 橙色の長い髪をしており、頭頂部には大きな

角が2本ある… 特徴からして… まさか！

「… 幻想郷に鬼がいるとは… 驚きね…」

… 鬼… 幻想郷では無い存在だと思っていたけど… 生まれて初めて見たわ… もっと筋骨隆々なイメージだったけど…

「… 私は知っていたわ… だって古くからの友人ですもの」

紫は悪びれもせずに笑う… この顔は明らかに異変の原因を知っていたみたいね…

鬼の少女は、辺りを不安そうに見回している…

「な!? 私の力が!？」

「一時的に解除してもらったわあ… 霊夢… この子がこの異変の黒幕… さっさと退治なさいよん」

美羽はキセルを吹かして、その場から去ろうとするが、鬼の少女が美羽の服を掴む…

「悪いけどさー! 相手してもらおうのはお前なんだよ… 天逆美羽!」

「… 何でアタシなのよん?」

美羽は面倒くさそうに少女を見ているが、少女は敵意むき出しだ…

「もう少し遊んでいるつもりだったけど! お前には私との勝負を受けてもらおう!! あの時の屈辱忘れないぞ!!」

「… ?… どの時よ? アタシも色々と戦っているからあ… イチイチ覚えていないわん」

「お前は覚えてないのか!!? 鬼の四天王を1度に相手したというのに!!」

少女の言葉はショックを受けたような顔をし、美羽は困ったかのような表情をする…

「… 覚えていないわ… 因みにアンタのお名前は?… それを聞いたら思い出すかも…」

「… 伊吹萃香だ! これで思い出しただろう!! 私達を瞬殺して… 鬼

の歴史に傷をつけたのはお前が初めてだ!!」

伊吹萃香…それが彼女の名前か…

しかし、美羽は退屈そうにキセルを吹くだけだ…

「…悪いけど思い出せないわね… 鬼を瞬殺したのは覚えているけど…」

美羽は煙を吐いた後、言葉を続ける…

「…正直…あの時さ？とある奴にボコボコにされてイライラしていたのよね… その憂さ晴らしに偶々バカ騒ぎしているのを止めたに過ぎないわ… アレは戦いのうちには入らないわ… それに…」

バシ!!

美羽の言葉が終わる前に、萃香からの拳が放たれるが… 美羽はそれを右腕を出して防ぐ…

「戦いのうちに入らないだ?!」

「行き成り不意打ちとは酷いわね…」

美羽は萃香を弾き飛ばすが、彼女は向かってくる…

「戦った相手の名は覚えておくはずだ!! 礼儀すらないのか!」

萃香の攻撃を美羽は弾く…

「…アンタの価値観を押し付けないで… それに覚えておく必要はないの…」

「…イチイチ負かした者のことなんて… 覚える必要ないでしょう?」

「てめえ!」

萃香からの三度目の攻撃…

その攻撃は美羽の顔を逸れるが… 彼女の頬に傷をつける…

「…何よっ…やる気?」

「本来の目的通り… その長くなった鼻をへし折ってやるよ！お前がどれだけ強くても！それは井の中の蛙だってな!!」

萃香が言い放つと、美羽はキセルを消して私の方へと来る…

「… 霊夢… この子はアタシがやる… 手出し無用よ」

「… 元々アンタが怒らしたんじゃないの…」

「強者というのは疲れるわね… 巻き込まれたただけだということにねん」

美羽は再度萃香へと対峙する…

両者はすでに戦闘モードね…

「潰して地の味を覚えさせてやる… 天逆美羽!」

「… へえ… このアタシをね？出来るものかしらん？… マジで潰すわよ…」

美羽と萃香の妖力が高まり、辺りの空気が重くなる…

異変の黒幕は現れたけど、状況が更に悪くなった気がするわ… 血の舞う宴会は避けたかったわね…

「紫… アンタ今回の事初めから知っていたでしょう?」

「ううん！知らない♪」

紫は満面の笑みを浮かべて否定する… この顔は… 確実に嘘を ついているわね…

「… 美羽が負けたら次は私ね… っ?」

… 美羽の方を見ると… 嫌な悪寒を感じ背筋が震える

あいつが実力者なのは分かっている…

でも今のあいつは… 今までとは何かが違う?

相棒の柚神の力を使うことができることも今までとは違うし…

妖怪よりも嫌な未知の力を彼女は隠している… 何か分からないけど、私の勘は… 確実に何かを告げている…

「… 天逆ね… アンタ一体何者なのよ」

… 今回の異変でアンタの力・正体を見切ってやるわ!

宴もたけなわ

博麗神社で開催されていた三日おきの宴会の黒幕… 伊吹萃香と対峙する天逆美羽…

異変の解決まで、もう一息だが油断はできない…

萃香は強力な力を持つ鬼であり、かつて萃香を含む鬼の四天王を降した美羽は度重なる宴会により満身創痍…

天狗の最終兵器に勝ち目はあるのだろうか？

side 霊夢

「いくぞ！天逆!!」

「どこからでもいいわー!」

二人は対峙した瞬間に戦闘を開始する!

先手は萃香がとり、彼女は美羽に向けて掌底を放つが、美羽は攻撃を受け流し彼女を投げ飛ばす…

「おっと！反応が早いな!」

萃香は空中で体勢を立て直し、美羽は刀を二本取り出して構える…

「軽い準備運動よん… この位で傷を負っているはアタシの相手にはならないわ」

「… まだ本気じゃないからな!」

更に彼女達の妖力が上がる…

いい勝負と言ったところね…

「… 動きにキレがないですね」

「!？」

私の横には、彼女の部下である睡煉が野菜スティックを齧りながら勝負を眺めている…

「…あれでキレが無いの?」

「…今の状態は必要最低限の力しか使っていませんね…体調もバットコンディションでしょうし…完全体には程遠いです」

「…充分強いと思うけど?」

「経験者は語るといふものです…私は本気の○○様に完膚なきまでに叩きのめされて…それによりあの方の部下になったんですもん」

睡煉は肩をすくめて、境内の奥へと下がっていく…

「…どこか聞き取れない部分があったけど、この子の言う通り美羽にはまだ本気のあるみたいね」

「分からないところばかりね…」

ふと彼女達の戦いを見つめると、萃香はどこから持ってきたのか分からない巨大な岩を持ち上げている!

「ちよつと!うちの境内にそんなもの持ってこないでよ!!」

「あやや…鬼の方々は相変わらず滅茶苦茶ですね」

私の横では文が写真を撮っている…今はそんな場合ではないのに!

「そら!潰れてしまえ!」

萃香は美羽に向けて岩を放り投げるが、美羽は避けようとしな

「それで倒せるのかしらん?ふん!」

美羽は刀を振り、岩を両断する…

岩は綺麗な切り口で裂かれて、境内に落下するが、萃香が不意をついて美羽の至近距離に現れる!

「なっ?」

「中々の攻撃だが!お前さんを潰せば終わりだろ?」

萃香は美羽の額を殴りつけ、美羽は後ろへ叩き付けられる!

… 今のはきつく入ったわ！

「美羽！」

「… ふふ… ふ… やるじゃない… の」

美羽は立ち上がるが、額からは血が流れており、目は虚ろだ…

「おや？ 完璧には当たらなかつたみたいだな？」

せせら笑う萃香を見て、美羽はイラついたような表情を浮かべてスペルカードを取り出す…

「まぐれ当たりの癖につく！ 虚偽（ライヤーライヤー）」

彼女がスペル宣言をすると、光弾らしいものは出現せず、代わりに彼女の体が光に包まれる…

あれは… 美羽のスペルカードではない！

「… あれは多分柚神のスペルカードね… 他人の物を使えるなんて…」

紫は光を見つめながら、首を捻っている…

… 確かに紫に言う通り、今回の美羽は前回とは違う気がする

自分の体術に加えて柚神の妨害能力を使うとなると、戦闘スタイルが全く違う…

睡煉は先ほど、完全体には程遠いと言っていたし… 何が起きているの？

「… この光攻撃していいのかわ？」

萃香は美羽を包んでいる光に警戒しているのか、彼女に近づこうとはしない…

しばらくすると、光が止み中から美羽が現れ、彼女は髪を靡かせて不敵に笑う…

「天逆美羽… 完全復活よん！」

彼女の姿は、傷一つない元の姿に戻っていた！

彼女は体をしなやかに伸ばしながら、萃香の方へと歩を進める…

「… 傷がない… そのスペルの効果か？」

「… まあ… そんなところね… 緊急の時にしか使わないものよ
ン」

美羽は刀を指で撫でているが、いつもの余裕そうな表情は全く出ていない…

緊急時？… 美羽も追い詰められているのかしら？

萃香は再度戦闘態勢になり、拳を構えている…

「… 小細工を覚えたみたいだな… あの時の乱暴なお前とは全く違うぞ」

「… 時と場合によるのよン… あの時のアタシは目につくものを倒せば良かったのよね… しかし現在アタシは仕事の他にも情報収集もやってるから、体が1つでは全部終わらないのよン？… 今のアタシは色々やることがあるのよン…」

「それはつまり本気を出していないと言っているようなものじゃないか！」

萃香は、怒りの表情を浮かべる…

実力者だけあって、手加減されるのは自身のプライドが許さないの
でしょうね… 戦闘が得意な鬼の種族だけあり、それは領ける…

しかし美羽は首を横に振る…

「… 一応本気は出したんだけどねン… それは問屋が卸さないわ…
本気を出そうにも柚神の奴が復活しないとそうもいかないのよ」

柚神が復活しないと駄目？何故彼女が関係あるの？あくまで美羽
の話だというのに…

「お話はここまでよン！とりあえず！さっさと終わらせないとねン
！」

美羽は萃香に向けて走り刀を振り、対する萃香は、それを鎖で防
ぐ…

「少しは追い詰めた感じだな！」

「あ？」

萃香の言葉に美羽は、言葉を投げ返す…

「長年の経験だが攻撃を見れば分かるんだよ… お前… 少しずつだが焦って来てるだろ？ 刀の太刀筋がブレてきているよ…」

「このアタシが焦りね… アンタの勘違いじゃないのかしら！」

美羽は萃香を弾き飛ばして後ろへと下がる…

しかし… 萃香の言う通り美羽に疲れが見え始めているわね… もう肩で息をしているし…

そういえば… かつて美羽と戦った時、考えてみれば私の陰陽玉1発が直撃してノックダウンしていたわね…

能力で回復したとはいえ、鬼の一撃を受けた以上… 彼女の余裕はないのかもしれないわ…

萃香は美羽を見つめた後、姿勢を低くして拳を構える…

「… 徐々にこれをやるか… 鬼の本気を見せてやるよ！」
彼女の拳からは妖力が高まっている…

これは、大技をやるみたいね…

美羽の方は、黙ってその光景を見つめているだけだ…

「あら？ 大技かしら？ 防がないとねん」

美羽は结界を張るが、その光景を見て萃香は笑みを浮かべる

「それでは私の技は防ぎきれないぞ！ 天逆美羽!! 三步壊廃！」

萃香は拳に力を高めて、美羽に殴りかかり、その攻撃は美羽の结界に直撃する…

「… あら？ 力が強いわん？」

「お前は確かにすごいよ… だが！ 舐めていると足下すくわれるぞ！！」

萃香の攻撃の質はが上昇し、美羽の结界にヒビが入る！

びび…

「な!？」

「これが鬼の力だ！天逆!!」

萃香の拳は結界を砕き、障壁の向こう側にいた美羽の腹部を捕らえる!!

「っ!!!ぐ…ぐ…」

「吹っ飛べ!!」

力が更に上がり、美羽の体は境内へと飛ぶ…

「ぎゃあああ!!」

彼女は神社内にあつた狛犬の像に叩き付けられた後、境内へと落下する…

…これは勝負あつたわね

「…鬼の一撃が入ったわ…流石の美羽でも戦闘不能ね…」

「戦闘不能…果たしてそうかしら?」

紫からの否定的な言葉が耳に入る…

鬼の一撃よ?流石の私でも、あの攻撃は防ぐことはできないわ…

「幾ら何でも勝負ありよ…」

「いえ…動揺が見られないわ…」

紫の方を向くと、彼女が境内にいる睡煉の方を見つめている…

睡煉は、手に持った酒瓶の酒を飲み干しながら、黙って倒れている

美羽を見つめている…

その表情は、何かに期待しているような顔をしている…

「…あの子の部下がああ態度よ?全く焦りの表情を見せていないわ」

「…」

…確かに睡煉には焦りの表情は見受けられないわ…まさか!

あの攻撃を受けてなお!美羽は戦闘不能に陥っていないというの?!

「…文確認!」

「ええ？私がですか？」

「いいから!!」

無理矢理だけど… 文を向かわせて確認を取る…
文は倒れている美羽をジッと眺めた後、体を触る…

「…ノックダウンですね… 伸びてますよ？」

「あれ!？」

…まさかの美羽のノックダウン宣言!?
てつきり伸びたふりをしていると思っただのに!

私達を見て萃香は笑っている…

「あははは!!流石の天逆でも私の一撃は耐えられなかったか!!これで勝負ありだな!!」

美羽が負けるなんて… これは予想外ね…

次は私が何とかしないと…

私はお札を構えて萃香へと向かう…

「…全く… 予想外なことはあるものね？」
「!？」

突然透き通るような声が響き、その方向を見る…

私の視線の先には、地面に臥したまま光り輝いている美羽の体があり、そこから声が出ている…

「この声… 美羽？でも彼女は…」

私の言葉に紫は首を振る…

「いえ… もう一人いるじゃない… 同じ声を持つ者が…」
同じ声… それに該当する人物は一人しか!

「…ここまでやられるのも…もはや何年ぶりかしら…」

美羽の体から幽霊の様に袖神が出てくる…

前回の宴会以来かしら？随分と久しぶりね？

彼女は私達の方を見ずに長い髪を振って萃香を見据えている…

その双眼は鋭くなっており、いつしかの共闘した時を思い出すわ…

「…少しアンタを見くびっていたわね」

「…もう一人の天逆か…今度はお前が相手か？」

萃香は袖神の存在に驚いているみたいだが、すぐに拳を構える…

だが袖神は肩をすくませて、足下で伸びている美羽を見つめている…

「…アタシ個人ではどうしようもないわ…力技で組み伏せられるのが関の山よ…でも…」

「追い詰めたご褒美にアンタだけに…本気を見せてあげる♪」

袖神が手を下げ美羽の体に触れると、彼女の体から霧のようなものが出てきて、霧に包まれてしまう…

あの周辺だけ霧が濃い…内部が全く見えないわ…

萃香は拳を鳴らし、その光景をワクワクしたような面持ちで見つめている…

「何かの準備か!!…なら私も迎撃に入る…」

「必要はないわよ？」

萃香に対し声が響いた瞬間に、霧から何かが飛び出して彼女を弾き飛ばす!?

「な？見えな…」

「見る必要もないわね…大人しく跪きなさい！」

萃香の体は体勢を変えることも許されずに、そのまま境内に叩き付けられる！

「がは…」

「あら？…速い幕引きだったわ？完璧というのも考え物ね？」

萃香を叩き付けた者は彼女の傍らに着地し、彼女を一瞥した後、耳についている機械のような物と片目に着けていたものを外す…

長い灰色の髪…青と緑色の目をし、白と黒が入り交じったスリッ
トの入った軍服・背には夜の闇に近い黒い翼を付けた者…

でも…このヒトは…美羽でも袖神でもない…別の者？

「…一体何者なのよ…このヒトは？美羽でも袖神でもないじゃない!!」

私以外の他の者も、その光景を見て戸惑いの表情を浮かべている…

只一人を除いては…

「ウフフ!! 久々に見ましたが…やっぱり惚れ惚れしますね」

唯一睡煉だけは、その光景を見て喜びの笑みを浮かべている…

その者は睡煉に近づいて、優し気に口を緩ませている…

「言ったでしょ？アタシは完璧だってね…ふふ…もっとも…

ギヤラリーの方々はアタシに驚きの表情を浮かべているけどね？」

その者は紫を見つめ、対して紫はいつもの胡散臭い笑みを消して、警戒の表情を浮かべている…

「…それが貴女の本気なのね…美羽」

「美羽？」

あれが美羽だというの？姿は似ているけど…体から発せられる力は全くの別物よ!？」

美羽と呼ばれた者は、紫に指を振る…

「その名は、この状態のアタシの正式名称ではないわねえ…案外無礼なのよ？ヒトの名前を間違えるというのはね？」

その者は嫌らしい笑みを浮かべている…

前言撤回…やっぱり美羽だわ…どこことなく彼女特有のねつとりとした口調が混じっているし…

美羽（仮）は後ろ手を組んで私達を見据えて口を開く…

「…アタシの名は天逆每乃葉… 史上最恐の完璧なる兵器の名前よ
ン♪」

（天逆 每乃葉（あまさか ことのは）通り名：人造〇〇の司令官）

お酒の後は適度な睡眠

自身の本気の力を出した天逆の活躍により、3日起ききの宴会異変を起こした黒幕… 伊吹萃香は倒された…

しかし、博麗の一行の眼前には未知の姿をした天逆の姿…
自身を每乃葉と呼んでいる者は、霊夢達一行へと近づいてくる…

side 霊夢

「…」

私の目の前には急に現れた者こと… 天逆每乃葉がいる…
美羽と柚神が消えて、代わりに、このヒトが出て来たけど一体どうなっているの？

每乃葉は私を見て、ふふんと鼻を鳴らす…

「どうしたのかしら？この完璧で美しいアタシに見惚れているのかしら？」

「違うわよ!!説明を要求するわ!アンタ美羽よね?その力は何なの?」

「そうです!!私だって理由をお願いします!!貴女のその姿は天狗の組織は知りませんよ!」

私の横に文が来て異議を唱えると、每乃葉は不機嫌そうに手袋を弄っている…

「… 一気に言われても分からないわ… 質問なら一つずつお願いしますわ…」

「じゃあ!私の質問に答えなさい!アンタは誰なの?美羽?それとも柚神なの?」

「その質問は認識がずれているわね… 今のアタシは美羽でもあり柚神でもある…」

「？」

「分かりやすく言うと…元々天逆美羽と天逆柚神は元々一つの存在ってこと、それがこのアタシ天逆每乃葉なのよねン…ほら一応美羽の時の名残が残っているわあ」

每乃葉は、左手の手袋をずらす…

そこには、美羽の時と同じ酷い縫合の痕が残っている…

…つまり…あの2人は元々1つだった存在だというのは？1つの存在を分けるなんて…何を考えているのよ？

次の質問をしようとする、紫が手を挙げています…

「私からも質問よ…」

「おや？賢い妖怪の賢者様でも質問はあるようねえ？」

每乃葉は嫌らしい笑みを浮かべているが、紫は全く動じていない…

「…何故自身の力を分散させる必要があるのかしら？あの時の戦いで、その姿だったら左手の怪我は負っていないはずだけど？」

「…深い理由はないわ？只の癖なのよ」

…癖？幾ら何でも…力を分けるということは、それなりのリスクがあるというのに…

「お仕事上の問題よ…当時のアタシは上から与えられた戦闘に関する仕事ともう一つ…とある方の身の回りの世話もしていたのよね…アタシの体は1つ…仕事は2つ…手が回らないから仕方なくね…」

…仕事ね…そういえば彼女の昔話は聞いたことがないわ…質問したというのに更に分からない事が増えたわね…

「質問は以上かしら？」

「…美羽がアンタの事は分かったけど…未だに柚神のイメージがあるから納得が出来ないわ」

每乃葉はクスクス笑う…

「ふふ…柚神の方のアタシも素は美羽と変わらないわ…只あの方

が女らしくしろというから、あの口調になったに過ぎないのよね…」
あの方？　そういえば誰かに仕えていたと言っているけど…

「…じゃあ…そのあの方って誰？」

「…言う必要はないわ…もう仕えてないし？…にしても？」

？
毎乃葉は私の至近距離まで近づき、舐めるように私を見つめている

「!?」

「随分と質問が多いわね？　このアタシに興味を持ってくれたのかしら？」

「何でもないわ！」

「つれないわあ…まあ…この姿なら今度は遅れは取らないわ…
次戦う時は覚悟しときなさいよん」

…殺気らしいものは感じないけど…嫌な威圧感があるわ
それに、甘いお香のような匂いもするし何かクラクラする…

紫が私の前に割って入る…

「…幾ら強力な力を持っていても…害なす者なら容赦はしないわ」

「あらあら…怖いわねえ…少なくとも、その考えは杞憂よ…前
に言ったでしょう？　このアタシは生きているだけで満足なの…こ
れ以上のことは望まないわあ」

毎乃葉は、踵を返しキセルを啞えて睡煉の方を見る…

「睡煉！　お暇するわよ…」

「はいはいー！　毎乃葉様ー♪」

彼女達はそのまま神社を後にする…

天逆毎乃葉・天逆美羽・天逆柚神…

全員同一人物というのは分かったけど、ややこしいわね…

言葉では、生きること以外には興味はないとは言っていたけど…
その言葉も怪しいものね…

妖怪の山封印牢…

自分たちの自室に戻って来た、每乃葉はベットに腰を下ろして天井を見上げる…

「…久しぶりに元に戻ったけど…やはり疲れが溜まるわね…」

「每乃葉様！復帰祝いに一本どうですか？」

睡煉は酒瓶を差し出すが、每乃葉は首を横に振る…

「…ううん…明日にしましょう？今日は久しぶりに本気を出した

から疲れたわ…悪いけど後処理お願いね…」

そのまま每乃葉はベットに横になり、すぐに寝息を立て…睡煉は

ピンを片づけて敬礼する…

「…ゆっくりとお休みになってくださいね♪」

睡煉は他の牢へと向かい、封印牢の中は再び静寂に包まれる…

一方その頃…

幻想郷に存在する大きな竹林ごと、迷いの竹林…

その竹林の中から、ヨロヨロとある者が中から出てくる…

「… やったぞ… やつと外に出られた…」

その者は、長い雪のような白い髪・薄汚れた緑色の軍服のようなものを身に着けており、目には眼帯のような物を右目に張り付けている…

彼女は力なく、その場に倒れて真っ黒な幻想郷の夜空を眺めている…

「… やつと… タケノコ生活から抜け出せる… ずっと竹林の中だったんだ… もう緑色の景色は… まっぴらだ…」

その者は眼帯を外して遠くを一通り見つめた後、それを元に戻す…

「… 同志よ… 私もすぐに向かう… 待ってる…」

その者は何かを見つけたのか、その方向へと歩を進める… 事態は好転する…

それが運命かどうか… それは誰にも分かることではない…

飛び入りと情報

お酒異変が解決された翌日…

妖怪の山では、いつもと変わらない朝の陽ざしが差し込んでいく…

いつもとは変わらない風景だが本日は違う…

妖怪の山の封印牢に、とある者が訪れているのだから…

「やはり…ここにいるか…」

その者は封印牢の戸を開けて中に入り、每乃葉がいる牢の戸を開けて中に入る…

「すー…すー…」

每乃葉は寝息を立てているだけ…

その人物は、その姿を観察しながら首を傾げている…

「…同志の本気の姿か？久々に見たが…警戒が薄い…平和ボケでもしているのか？」

その人物は、ライフルを構えて每乃葉に向ける!!

「まあ…撃ってみれば分かるだろう」

ズガン!!

封印牢にて銃声が響き渡る…

「うぎゃああああ!!痛いー!!!」

そして…弾丸が直撃しベットの从上から転げ落ち悶絶している每乃葉を見て、その者は呆然とする…

「む…む?てつきり前みたいに避けると思っていたが？」

「何です!?今の銃声は!!」

となりの牢屋から睡煉が飛び出し每乃葉の牢へと入り、その者の姿を確認する…

「え?貴女は!」

「久しぶりな同志睡煉… やつと合流できたな… しかし？寝起きとはいえ… 本来の姿をさらけ出すのは頂けないな…」

その者に言われて、睡煉は不機嫌な顔をしながら現在の姿からバニーの姿へと変える。

「うー… お久しぶりですけど… 何で銃声が？」

その者は、今もなお悶絶している毎乃葉を見つめている…

「… いや… 昔のノリで寝起きドツキリをやったら… この結果に」

「いやいや!!何です!その物騒なドツキリは!!」

彼女達が騒いでいると悶絶していた毎乃葉も身を起こす… 額からは出血… 手には、ライフルの銃弾が握られている…

「早朝から五月蠅いわあ!!ヒトの頭に銃弾とは随分なことね!!どこの回し者… よう？」

毎乃葉は、その者を見て口を閉じる…

「久しぶりだな!同志毎乃葉よ!!待たせてしまったな!」

「… ア… アンタ… 夜喪妓!!」

夜喪妓と呼ばれた少女は、キセルを啜えて、それに火をつける…

「本当に済まないな… 第0部隊… ナンバー1の私が遅れをとるとは…」(夜喪妓 (よもぎ) 通り名: ロンリースナイパー)

夜喪妓は済まなそうな顔をするが、毎乃葉は俯いたまま… 彼女を抱きしめる…

「ふ… ふふふ!… このアタシにプレゼントが来るなんて!」

「… プレゼントか?… すまん用意していたのは… 情報ぐらいだが?」

困惑する夜喪妓に、毎乃葉は更にきつく彼女を抱きしめる…

「アンタが帰還してくれたことが… アタシにとってのプレゼントよ

！うくつ… うう…」

嗚咽を漏らす每乃葉の頭を夜喪妓は不器用そうに撫でることしかできなかった…

「… すまん… 同志…」

15分後

「… ふう… 早朝から泣くのも久しぶりね」

さつきとは打って変わり、每乃葉の笑顔を振りまき… 夜喪妓をジツと観察している…

夜喪妓の格好は… 手入れの届いていない銀色の長い髪… ボロボロの緑色の軍服・灰色のマントをつけ… くたびれた眼帯をつけている…

「少しみつともないわ…」

每乃葉が手をかざすと、夜喪妓の体が光に包まれ、新品同様の軍服にマントになり、夜喪妓は自身の体を念入りに確認している…

「便利だな… その力は」

「当たり前よ… このアタシは完璧なもの！」

每乃葉の言葉に夜喪妓は怪訝な顔をする…

「その割には随分と墮落していたみたいだな… 前の同志なら、さっきの銃撃は寝ていても避けれたはずだが？」

「それを言わないでよ… 長い間封印されてたし… 久々にこの姿に戻ったんだから！」

夜喪妓はふと、每乃葉の左腕を見つめ、目を見開く…

「同志… この左腕は!!怪我をしたのか？」

「まあ… ちよつとヘマをしただけよん… 気にする必要はないわん…」

夜喪妓は何か言いたげな顔をするが、これ以上の追求は無粋だと判断したのか目を反らす…

「まあ… 元氣そうで何よりだ… 同志睡煉もあの事故でよく良く

残ったな…」

夜喪妓は睡煉の方を向き、睡煉は目を反らす…

「…それもそうでしょうよ… 私達が死ににくいのが貴方だって知っているでしょう？」

「…ああ…確かに」

夜喪妓はキセルを吹かして天井を見ながら答える… 彼女達の会話を聞いて毎乃葉は首を傾げる…

「死ににくい？…確かにアンタ達は特殊な生まれだけど？そうだったかしら？」

「こっちの話だ…気にするな同志よ…」

夜喪妓が煙を吐くと、毎乃葉は目を輝かせながら夜喪妓に近づく…

「そういえば夜喪妓！何か他にプレゼントあるのよね？確か情報とか言っていたし！」

「…ああ…2つあるな…良い情報と悪い情報かな…」

夜喪妓は、毎乃葉を見つめる…

その表情は、お前に覚悟があるのかと言いたげな表情だ…

毎乃葉は、深く息を吐いて口を開く…

「…まず悪い方をお願いするわ」

「…ああ…悪い方の情報はいたってシンプルだ…忌梗の生存が絶望的だということだ…」

夜喪妓の言葉を聞いて、毎乃葉は体を震わせ、睡煉は驚きの表情を浮かべる…

「そんな！忌梗が？どうしてそんなことが！」

「ああ…残念ながらな」

夜喪妓は軍服のポケットから、装置を取り出す…

それは、睡煉が耳につけている装置と同じものだ…

「…それは睡煉と同じものよね？」

「ああ…だがこいつのとは違って壊れてはいないぞ…ちゃんと持ち主がどこにいるか通信することはできる…ここへ来る前に一通り通信はしたが…同志忌梗の奴はどこ探しても反応はない…」

「…それって」

毎乃葉の言葉に、夜喪妓は頷く…

「…あの爆発で跡形もなく消滅してしまったとしか考えられないな」

夜喪妓の言葉に、部屋の中は静寂に包まれる…

それは僅かな希望が粉々に砕け散ったことを意味するのだろう…

気まづい中、毎乃葉が口を開く…

「…覚悟はしていたわ…元々アンタたちの生存だつて絶望的だもの…ねえ？良い方の情報を教えてくれない？」

「…もう一つの方もシンプルだ…私達第0部隊が散り散りになった原因…あいつの居場所が分かったということだ!!」

夜喪妓の言葉に毎乃葉・睡煉の顔が険しくなる…

双方とも…そのあいつという人物について心当たりがあるからだ…

「…え？あの人の居場所が？」

「というより…あいつ表記はやめなさいよ…仮にも…立場は上よ？」

毎乃葉の言葉に、夜喪妓は不服そうに鼻を鳴らす…

「ふん!!…立場などない!!罪人を手助けし!私達に手を下した奴だ!!同志でも何でもないだろう!!」

彼女の言葉からは怒気を放っている…

毎乃葉は、それを察してか笑みを浮かべて口を開く…

「…ふふ…良い顔ね夜喪妓…確かにそうね?このアタシの顔に泥を塗ったわけだし…確かにアタシとしても部下を傷つけられた

「憤りはあるわね…」

每乃葉は立ち上がり、翼を広げる…。彼女の体からは濃厚な妖気が発し…。牢屋内を包み込んでいる…

「夜喪妓！案内なさい！！あの時の文句ひとつでも言っただりしたいわ！」

每乃葉の号令に夜喪妓と睡煉は笑みを浮かべている

「ああ！承知した…。久々の仕事だ…。私に続け！」

「私もそれなりに文句言いたいです！！それと！忌梗の仇です！」

意見が一致したのを確認した彼女達は牢屋を後にする…。各個人が抱えていた、憤りを放つために…

大切な仲間の仇をとるために…

竹林と積年の恨み

妖怪の山を後にした、天逆一行は… 夜喪妓が先導の下、とある場所へとたどり着く…

そこは幻想郷の名所の1つ… 広大な竹林が生い茂るところである… 迷いの竹林…

彼女達は、その竹林の入り口に立つ…

side 每乃葉

「ここだ… ここに奴がいる!」

夜喪妓は目の前の竹林を指さしながら、キセルを啜える…

まさか… あの人がここにいるとは、アタシとしても予想外ね… とつくのとうに、地の果てまで逃げ切っていると思っただのに…

「ここにあの人が… 忌梗の仇です!!夜喪妓さん!!中の案内をお願いします!!」

睡眠は意気込むが、それに対して夜喪妓は浮かない顔をしている…

「… いや… 皆で探そう?私としても… この中の構造が分からないんだ」

「どういうことよ?アンタの目なら… こんなところ迷うはずないじゃないの?」

アタシの言葉に夜喪妓は目を反らす…

「… ここは空間が歪んでいるとしかいえないよ… どういう仕掛けか分からないが、同じところをグルグル回ってしまうんだ… 長い間同じ景色を見てきたんだ… もう一人で彷徨うのは嫌だ…」

夜喪妓は泣きそうになっている…

御気の毒ね… 長い年月竹林で遭難していたみたいだし、彼女の精神的ストレスは計り知れないわね…

「… ならアタシが先導するわ… ちゃんとついてきなさいよ」

「え？大丈夫ですか？」

睡煉が心配そうな声を出すが、アタシには問題ないことね…

「…大丈夫よ… 空気の流れがおかしいわね… 辿っていけばどこかしらに着くでしょう」

アタシ達は竹林の中へと入っていく…

仮に夜喪妓が言っていた通り、あの人がいたら… アタシはどうすればいいのかしらね？過去の恨み言の一つでも言えば良いのかしら？

2時間後…

竹林を進んでいくと、ある民家へたどり着く…

一般的な和装建築ね… しかしこんなものが何でこんな辺鄙なところにあるのかしら？

「どこかしら？」

「ああ！間違いない！！私の目はあいつを捕らえている！！奴はこの屋敷にいるぞー！」

「忌梗の仇ですよー！」

夜喪妓と睡煉は意気込むけど、アタシはやる気が出ないわね…

「やり辛いわ…」

古風な屋敷みただけで、夜喪妓の言う通り中から犇々と感じるわ… 嫌なあの気をね…

「… とりあえず中に入りましょう… 最初は話すだけに留めておけば…」

中に入ろうとすると、中からとある人物が出てくる…

「あ…」

中から出てきたのは、薄紫色の長い髪をした女の子…

紺色のブレザーに… 頭から生えた長いうさ耳があるわね… これには見覚えがあるわね… 地上のウサギではないわ…

「はあ… 何で玉兎がここにいるのよ」

「ひっ！」

玉兎はアタシを見るなり、怯えた表情をして後ずさりする…

「ま… まさか！ 追手がもう来ているの!?! いやああ!!」

そのまま玉兎は、屋敷の中へと逃げていく…

「あらら… 逃げてしまいましたね？」

「敵前逃亡は死あるのみだが？」

睡煉は笑い、夜喪妓は不服そうに煙を吐く…

大方… 夜喪妓の殺気に気づいて逃げたという感じかしら？…

でもそれだけでは無いみたいね？ 追手とか言っていたし何に怯えて

いるのだろうか？

「… 中へお邪魔しましょう？ 会って話さないと…」

びゅー！

風切り音を感じアタシは飛んできた物を手で弾き落す…

「同志毎乃葉！」

「大丈夫ですか!？」

「ええ… 直撃はしなかったわ」

弾いた物を見ると、そこには矢が1本地面に刺さっている…

ちよつと反応が遅れたら危なかったわね… 確実に頭狙っていた

し… 懐かしきかな… あの時の事件以来じゃない

「久しぶりだというのに… 随分な挨拶ですね… 八意×様… いえ
八意永琳様と言った方が宜しいかしら？」

屋敷の方を見ると、そこには長い銀髪をして赤と青の衣装を身に纏った女性がいた…

八意永琳… あの時と変わらないわ… このヒトの事は忘れることはなかったわね

「… まさか貴女達がここへ来るなんてね」

彼女は口を開くが、殺気を収めるつもりはないみたいね… 悲しいわね

夜喪妓の方を見ると、怒りで顔を歪めている…

「この反逆者が!!同志に向けて矢を射るとは!!」

「落ち着きなさい夜喪妓… アタシが何とかするわ」

夜喪妓を手で制し、アタシは永琳様の方へ向かう、彼女は再度矢を振り絞っている…

「… それ以上近づいたら貴女達でも!」

何かを警戒しているのかしら?アタシだけではなく、部下たちの方も含まれている?

さっきの玉兎も… アタシ達に酷く怯えていたし、別の何かに警戒しているのかしら?

「… 月の報復でも恐れているのですか?」

「… それで貴女達が来たんでしよう?」

永琳様は、矢を向けたまま言い放つ…

ビンゴね… 今更… 月の連中が動くわけないじゃない…

「ふふ… ご安心を… ワタシ達は、あの事件以降、除名処分になってしまいましたので… 組織とは関係はないのですよ」

「… 除名処分?」

「ええ… 任務の失敗により、第0部隊は壊滅… 生存も困難だと判断された次第です… 元々必要とされてませんでしたし…」

「生存困難?… そういえば… 第0部隊は4人編成だったはず… 1人足りないわ」

永琳様はアタシ達を見回している… 誰の所為で、こんなことになっっているか分かっていないみたいね…

「忌梗は殉死しました… あの時の爆発によってね…」

「死んだ?… そんなはずは…」

何やら信じられないような顔をする彼女だが… ここまで鈍いとは驚きよ

「ええ… 今回は… あの時の恨み言の一言でも言おうとして、ここまで来た次第です… そうでしょう? 八意永琳様?」

side 永琳

「恨み言ね…」

目の前にいる毎乃葉は、笑みを浮かべながら、こちらへと近づいてくる… 弓に力が入るけどまだ放つことはできない…

表情からは敵意を感じはしないけど、彼女の能力は自分の心も隠蔽できる物… 油断はできないわ…

「同志… 私達も助力するぞ!」

「必要だったら動きますよ!」

彼女の後ろにいる部下も彼女ほどではないけど危険に変わりないわ…

連続殺人鬼と国家転覆は謀った者だもの… 注意しなくては…

「… 貴女の恨み言は何?」

「ええ… ありますよ? 言いたいことは山ほどありますがね」

毎乃葉は、インカムのマイクを弄っている… 何気ない動作だけど油断できない…

「… まず1つ… 忌梗の死について… それに関しては許すことはできません… 何回謝っても許しません…」

「… 彼女が死んだのは予想外なの… でも言い訳にはしないわよ」

「2つ目… ワタシの部下も傷つけたことは許すことはできません… 死にはしませんでしたが… 長い年月苦しんだ者もいます…」

「… 否定しないわ」

彼女は3本指を立てて、笑みを浮かべる…

「3つ目は… あの方の期待を裏切ったこと… 何故咎人に手を貸した？何故あの方の心を踏みにじった!？」

声が乱暴になってきたわね… そうだ… この子はあの子の… 使用人だったわね…

「… 私が決めたことだもの… それに他の子に迷惑はかけたくなかったからよ…」

「…」

毎乃葉は次に言う事を考えているのか、こつちを見たまま沈黙する…

まだ言いたいことは沢山あったでしょうに… 一番被害を被ったのはこの子だから…

「… 貴方にも済まないとは思っているわ… 私をどうしたって構わないわ… でもこの先へは絶対に進ませないわ…」

「貴女をどうしようかと… 如何にもなりません… あの方は貴女を慕っていましたし… 手は出しませんよ… 蓬萊の薬を服用した貴女は… ワタシの手をもつてしても殺すことなぞできませんから…」

「そうよね…」

蓬萊の薬… それは月の禁忌の薬品… それにより私の身はもう滅びることはないわ、あの子の罪は私の罪… だから私も被らなくてはならないから…

毎乃葉は、私から離れて踵を返す…

「!？」

「今日の所は帰還します… もうお会いすることはないと思いますがね」

まさかの撤退？彼女からの報復があると思っただけなのに？

彼女の部下も驚きの表情を見せる…

「お… おい!!いいのかわ？」

「そんなあ… 忌梗の仇を討ちましょうよー」

そんな部下に毎乃葉は肩を竦ませる…

「言ったはずよ… 恨み言の1つ言うくらいとね… 悪いけど… どうしても手出しはできないのよ…」

どうしても… ね

内心では、鉄拳制裁をしたいというのが彼女の本音だろうけど、相変わらず命令には忠実みたいね…

毎乃葉は私の方を見る…

「そういえば… 忌梗の死は予想外… その言葉の意味は何ですか？」

毎乃葉の言葉に、後ろの彼女の部下達は体をびくつかせる…

「そ… それは」

「ううう…」

小さい声の所為か… 毎乃葉には気づかれてはいないみたいだ… 何だ彼女達内緒にしていたのね…

言うのはやめろと言いたげな目をしているけど… 説明を求められたら、言うしかないわ…

「それは…」

がららがらら…

「双方喧嘩はやめなさいよ！うるさくて昼寝もできないわ！」

永遠亭の戸が開き中から、長い黒髪をし桃色と赤の衣装に身を包んだ人物事… 私の主である蓬莱山輝夜が中から出てくる…

毎乃葉は輝夜を見て、驚いているのか口を半開きになっている…

「まさか… 一緒にいたとは…」

「あれ… 貴女… あの時の！まさか追手が来たの？」

輝夜は私を見つめるが、私は首を横に振る…

「… 一応月とは関係ないとは言っているわ… 本当か分からないけどね」

「ふーん… とりあえず… ここでもなんだから中に入って話でもしましようよ… もしかしたらお願いを聞いてくれると思うし…」

輝夜は小声で私に耳打ちするが、うまくいかないと思うわ… 仮にも敵ですしどうすることもできないわ…

「とりあえず… 中へ入りなさい… この先の話はそっちの方がいいわ」

「ええ… 分かりました…」

毎乃葉は、手を組んでやや警戒しているような表情を浮かべており、後ろの部下は溜息をついている…

私達は永遠亭に毎乃葉達を入れる…

こちらの問題が片づけられるなら試すべきかしら？… うまくいけばいいのだけどね…

話し合いと未来の系譜

竹林に囲まれた隠れスポット…… 永遠亭……

その居間には、その主である蓬萊山輝夜と八意永琳の2名……
そして急な客人である、天逆每乃葉・睡煉・夜喪妓の3名がいた……
そしてここで、今後の話し合いが開催される……
今後起きること…… それからの事についての大切な話が……

side 永琳

居間についた元第0部隊のメンバー達は、それぞれ座って寛ぎ始めている……

每乃葉と夜喪妓はキセルに火をつけており、睡煉は茶菓子にかじりついている……

さて…… どう話を進めるべきかしら？ 仮にも各個人で国家転覆を出来るくらいの実力を持つている以上、下手な話はできないわ……

「話をしても良いかしら？」

「構いません…… ワタシ達は準備は出来ていますので……」

每乃葉は、煙を吐き出しながら答える……

「同志よ…… 意見が対立したらどうする？ その時は私が進行を！」

「却下…… アンタが進行役やると終わる物も終わらないわ……」

「ぐうう!!」

每乃葉と夜喪妓は何やら会話をしているが、議論に支障はなさそうね……

「では話すわよ？…… 今回は非常に不味い状況よ……」

「大体は想像できますよ…… 月の組織の関係でしょう？ 過去の行い以外に何か厄介事でも抱えているのでしょうか？」

每乃葉の言葉に私の言葉が挫かれる……

この子…… 頭が悪そうに見えて人のやる事に関して妨害することに長けているわ……

無意識か知らないけど…洞察力が高すぎる事に関しては考えものね…

「まあ…当たり前よ…さつき見たと思うけど…うちの玉兎が月に狙われているのよね…」

「さつきの玉兎ね…何故に?」

「…簡単に言うと、あの子は月から逃げたのよね…それで奴らが連れ戻しに来るってわけよ」

「昔と同じですね…変わりありませんね…月の組織というものは」

「まあ…逃亡兵にはキツイ罰則があるんだがな…」

「何が起きるか上層部のみが知るってわけですね」

それぞれが口々に言葉を発す…

「話を続けるわ…それで私達はその対策として一週間後の満月に異変を仕掛けるわ…」

「…ほう?何故?」

毎乃葉は僅かに警戒したような顔をする…

「勿論…月からの接触を控えるためよ…私と姫は月を裏切った身…それにうどんげは月から逃げた身だもの…何をしてでも今回の事は避けなくていけないわ」

「リスクが大きいですね…」

「リスクは元も承知よ…そのために貴女達がいるのだもの…」

「どういう事よ?」

毎乃葉は口調を崩して私の方を怪訝な目でにらみつける…

彼女の部下も殺気を出している…

「まさかとは思いますが!!私達を手ごまにしようというのか!!ふざけるな!!良いように使われる覚えはないぞ!!」

「毎乃葉様く…!ばらしましょう!?!今なら数分で完了する自信がありますよ!!」

夜喪妓は銃を構えており、睡煉の方は医療用の手術刀を鳴らしている…

当の每乃葉は黙っているみたいだけど、相当頭に來たはず…

「落ち着きなさい2人共… 終わるものも終わらなくなるわ…」

「ちっ…」

「む〜」

每乃葉の言葉により2名は口を閉ざす… 鶴の一声と言うべきかしら？彼女の部下は彼女には逆らえないものね…

每乃葉はキセルの煙を吐きながら、私の方を睨むような顔で見つめている… どんどん本性が見えてくるわ

「… 随分と勝手なことを言ってくれるわね… 流石のアタシもキレる一歩手前よ」

「悪いとは思ってはいるわ… でも手段は選んでられないの… 私達は月に戻るわけにはいかない… だから貴女の力を見込んで頼んでいるのよ」

「はっ！アタシの部下を1人殺しておいてっ！よくもそんな言葉を…！！」

每乃葉は鬼の形相で齒がみしている… 啞えているキセルが悲鳴を上げているわ…

… でも… そのことに関して… 矛盾が生じているのよね？

そのところの誤解を解くのが先決かしら？

「… 貴女は忌梗が死んだと思っっているみたいだけど… それは何かの勘違いのほずよ」

「… 責任逃れかしら!?あまりふざけた事言っていると流石のアタシも怒るわよー」

「いいえ… ふざけてはいないわ… 貴女の知らない事実があるということよ…」

每乃葉の部下の方を見ていると彼女達は顔を青くしている…

「… や… や… やめ…」

「…ぐ…ぐうう!!」

毎乃葉も部下の変化に気づいたのか心配そうに見つめている…

「…アンタたち急にどうしたのよ?」

「…彼女達は貴女に内緒で私にあることを頼んだのよ…やはり貴女は気づいていないみたいね」

「…アタシに内緒?…夜喪妓! 睡煉!! 答えなさいよ!!」

毎乃葉が怒鳴ると2名は顔を更に青くして、その場に蹲る…

「…そ…それは」

「…只私達は…同志と一緒に居たかっただけなんだ…」

「…?」

抽象的な言葉に毎乃葉は首を捻っている…仕方ないわ…これも私の責任ね…代弁くらいはさせてもらおうかしら

「…結論から言うと…貴女の部下3名は私の薬の効果で死にくい体質になっているのよ…」

「アンタの薬?…死にくいって…まさか!!」

毎乃葉は顔を青くする…流石にも気づいたみたいね…

「…まあ…ご察しの通りよ…貴女の部下全員…蓬萊の薬の被験者なの…それが真実よ」

私の言葉に毎乃葉の口が開いたままになり、キセルが畳に落下し夜喪妓・睡煉の2名は、魂が抜けたような顔をしている…

「少し噛み砕いた話だから補足するけど、貴方の部下達が飲んだ蓬萊の薬はオリジナルではなくレプリカ…寿命で死ぬことはないけど、死に過ぎたら体にガタがくる仮初の不死…完全な不死ではないけど、多少の事では命を落とさなくらい体が丈夫になった感じかしら? だから彼女達が、あの事件で死ぬ事を無いと確信していたの…一応私からのサービスとしていたのだけだね」

「…な…何でそんなことを?…アタシ如きにそこまでしなくてもいいじゃないの…」

毎乃葉の言葉に睡煉は首を横に振る…

「…少なくとも私達は毎乃葉様が居なければ生きられませんでし

た… 貴女に私達の一生をかけての恩返しがしたかったのです!!」
「… 同志は… 私達の心を救ってくれた… だからついていこうと思っただけだ… 忌梗だって… お前に感謝をしていた…」

彼女達の言葉に毎乃葉は目を反らして。溜息をつく…

「… 本当におバカさん… そこまでする必要はないのに…」

「… 隠していて済まない… お前に心配はかけたくなかったのだ」

「おバカ…」

毎乃葉は2人を抱きしめる…

… 昔と変わらず部下にだけは優しいわね… 私が解散の原因を作ってしまったけど… これからは潰えることはないわね…

しばらくして、毎乃葉は私の方を向く…

「… アンタの言う事は本当みたいね」

「… 嘘を言っても仕方ないわ… 少なくとも忌梗は生きているはずよ… 心配することはないわ」

私の言葉に夜喪妓は苦言を漏らす

「だ… だがな!!私の通信機であいつを呼び出しても応答がないのだぞ!!この通信機はアイツが作成したもの!!少なくともあの爆発で破損するわけない!」

「… 通信機が壊れているのではなく… 止まっているのではないかしらっ…」

「は… はあ?」

「… あの子の能力の影響を受けたのなら… その可能性は充分に考えられるわ… あの能力は、あの子が触れた物全てに作用するからね」

… そう… 忌梗の能力は地味だけど、この中では一番恐ろしいわ…

仮にも月を相手どってテロを起すとしていた者だもの…

「… 確かにあの子の能力なら… あの爆発でも生き残れるわね」

「… 確かに… 能力発動されたら私達でもどうすることもできませんもん…」

「ということは… 忌梗の奴はこの幻想郷の何処かにいるということか？」

夜喪妓は目を輝かせるけど、一概にそうとも言えないわね…

「その可能性もあるけど… この世界は昔とは違う… もしかしたらこの世界の外にいるのかもしれないわ…」

「… 考えたくないことだわ」

每乃葉は溜息をつく… が再度目を鋭くさせて私を睨む

「一応… そつちの話は分かったけど… 異変の話には乗らないわ… アタシには一切関係のない事よ…」

「… そうかしら？… 今回の件がうまくいったら… 貴女をあの子の下へ戻してあげる事は可能よ？」

私の言葉に、每乃葉は目を見開く…

「そんな事必要ないわ!! それにあの方とは関係ないでしょう!! それに! アタシは戻る気なんか全くないわ!!」

… どんどん怒気が濃厚になってきているわ、このままじゃ危ないかしら？

「残念ね… あの子が悲しむわ… でも… あの子なら何て言うかしら? 元従者の貴女なら検討はつくんじゃない？」

「アタシを脅す気なの? 余りふざけたことを言っているんじゃない!!」

「でも… 貴女は私には逆らうことは出来ても、あの子に逆らうことはできないわ… よく考えることね… あの子なら確実に私に手助けをするように言うはずよ!」

「…」

每乃葉は、口を閉ざす…

少しずるい事をしてしまったけど、彼女に言う事を聞かせるには、あの子の事を使うしかないわ…

あの子と每乃葉の関係は、主と従者の関係… あの子は每乃葉に生きる目的を与え、每乃葉は彼女の命には忠実… あの子の命には確実にこなす…

每乃葉は、立ち上がり外へ向かう…

「每乃葉様!？」

「同志!! 話はまだ途中だ!」

「… 帰る… 話は終わりよ…」

彼女からは力のない返事… 意外に堪えたのかしら? あの子の話を出してしまった以上… 反論は出来ないみたいね…

「次の満月の時はお願ひね…」

「… アンタは鬼よ… アタシが断れないの知っている癖に!!」

「每乃葉様!？」

「待て同志!!」

每乃葉が消え、部下達は彼女を追うように次々と居間から去っていく… 少しやつつけ仕事になってはしまったけど、彼女にはこれで充分…

「頼むわよ… 認められない英雄さん… 少なくとも私は貴女が誕生して良かったと思ってるわ」

永琳の言葉に、沈黙を貫いていた輝夜が口を開く…

「永琳… 本当に彼女が協力してくれるのかしら? 見た限り彼女にはメリットは無いわ…」

「メリットがなくても… 彼女は時を越えても忠実な従者であることには変わらないわ… 私ではなく、あの子のね…」

私はアルバムを取り出して、とあるページを見る…

そこには、あの子が満面の笑顔を浮かべている写真が写る…

… 貴女は生きる目的を貰っただけと思ってるかもしれないけど、それと同時に彼女の心に安らぎを与えたのよ

「あれ? それって確か…」

「私の大切な教え子の1人よ… 每乃葉… あの子を盾にしたのは悪いとは思っているわ…」

その頃… 妖怪の山の大滝…

キイイーン!!

ぎぶーん!!

竹林から飛んできた天逆每乃葉は、その滝に飛び込んで激しい水しぶきを上げる…

水の中から出てきた彼女は、爪を噛みながら牢への道を歩く…

「…」

今までの事を反芻しながら…

(君らが私の従者になるのか!宜しく頼む!)

(君は美しい… だからそんな顔をしないでくれ…)

(やめろ!死ぬことは命令していない!!戻ってきなさい!每乃葉—!)

「ぐ… ぐううう!!!」

過去の思い出… 過去の後悔… それが彼女を呪いのように苦しめる…

每乃葉は、自身の爪から流れる血を気にすることなく、それを噛み続ける…

そしてしばらくして、笑い声をあげる

「…く… ふふふ… あはは!… 実に面倒なことをしてくれる…」

彼女は頭上の月を見て愛おしそうな顔をした後、牢の中へと入る…

彼女は関わらないと言っていたが… 今後どうなるか… 彼女の気分次第のようだ…

第5章：4thミッション 侵略を阻止セヨ！ 歪んだ月

竹林での話し合いから1週間が経過した幻想郷…

時は夜になり始めており月が出ようとしている…

今夜は月に一度の満月… 妖怪が活発になる日である…

妖怪の山の牢屋では、天逆每乃葉が恨めしそうに月を見上げてい
る…

side 每乃葉

「とうとう…この日が来てしまったわねえ」

窓の外の景色は幻想郷の夜の景色と、空に浮かぶ巨大な満月…と
うとうこの日が来てしまうとは、覚悟していたつもりだったけど…
決心が鈍るわあ…

「はあ…このアタシが何でこんなことを…」

「らしくないな…昔のお前らしくない」

「はあ？」

キセルに火をつけて溜息をつくとき、夜喪妓の声がして後ろを振り向
く…

彼女はライフフルを持ってアタシに向いている…

「…何よ？物騒な物をしまいなさいよ…アタシだってセンチにな
ることはあるわ」

「気づかないお前が悪いのだ…私が引き金を引いていたら死んでた
ぞ？…昔のお前は、ドが付くほどの高慢で自信過剰だったはず
だ…何故そこまで弱くなったのだ？」

…何か軽くデイスられた気がするけど、彼女が言っていることは
事実…アタシとしても…それは自覚はしているわ…

「…否定はしないわ…確かに昔みたいに考えなしに行動はしなく
なったわね…色々と経験すると少し保守に入ってしまうのよねえ」
「経験というのは敗北の事か？…例の博麗の巫女と言うやつにか？」

確かにお前が人間にやられたというのは俄かに信じられん」

「… まあ… それもあるけどね… 他にも色々大切なモノも増えてしまったのよん」

… 夜喪妓の言ったことも、もっともだけど他にもあるわ…

昔より… 大切なモノが増えてしまったのよね… もう例外なく失いたくはない… 命であれ、信頼であれ… ね… かなりやり辛いのよ… 今回のお仕事はね…

「夜喪妓… さっさと準備なさいよ… 早く終わらせてとつと帰るわよ…」

「… 本当にやるのか？それならいいのだが」

夜喪妓はライフルを下げてマントを翻す…

「ええ… 今回のお仕事は、ボランティア… 組織の事は関係ないから好き勝手に出来るというものよ… アンタも腕は鈍っていないでしょうね？」

「心配はない… 私は私の仕事をするだけだ…」

彼女は眼帯をずらす…

「やる気のようなね… じゃあ永遠亭に行くわよ… 睡煉の奴も呼んで頂戴」

… こうなったらやるしかない… 後悔はしないわ…

アタシ達は、永遠亭へ向かう

幻想郷の夜時間…

アタシ達は、永遠亭に辿り着き内部へと入る…

居間には、八意永琳様・そして蓬莱残輝夜様の2名と今回の主役である玉兔がいる…

輝夜様はアタシらを見て退屈そうな目で見つめており、玉兔の方は

怯えた目でアタシを見つめている…

「時間通り来たのね…」

「ええ… 約束通りには… で？これからどうしろと？少なくともワタシ達は知恵は出しませんが？」

永琳様は外に出て夜空を見上げる…

「… 月の連中が入ってこれないように、こうするのよ」

彼女は天に向けて手をかざす…

特に変化のない事にアタシらは、それを漠然と眺めることしかできずにいた…

「… さつきからあの方は何をしていますのしょう？」

「… さあな… 茶番はさつきと終わらせてもらいたいのだが」

「少なくとも無意味なことではないでしょう… アタシらをわざわざ呼んだわけだし… それ相応あるはずよん」

アタシは皆から少し離れてキセルに火をつける…

正直… 物事を説明してくれないとアタシも動けないの… 悪戯に時間を消費するのはアタシとしても不本意よん…

アタシはボツと月を眺める…

「… げほ？」

月の異変に気付きアタシは煙でむせる…

… 目の前の満月は… 完全ではない… 少しだけ欠けており、完全な満月とは呼べない物になっていた…

… 確か今夜は満月よね？さつきまでは… こんなものではなかったはず… 何でアタシの目には… 変に欠けている月があるのよ？

「気づいたかしら？これで月の者達の進行を防ぐことが出来るわ… これを維持して夜明けまで待つだけよ…」

永琳様はアタシを見つめた後に淡々と答える… このヒトは何を考えているの？この幻想郷でこんなことをしたら大問題よ！

「!?…何を考えているのよ?こんな事をしたら、すぐにこの連中が気づくわ!」

「何をいきり立っているの?」

「やることのリスクが釣り合わないのよ!!貴女の目的は月の連中の進行妨害でしょうけど!この世界の連中がすぐに飛んでくるわ!!月を弄ったら妖怪も活発になるし!!デメリットしかないわ!」

「そのために貴女達がいるのよ…夜明けまでこの状態を維持してくればいいの…」

「アタシらにそれを止めろというの!?!」

「貴女ならできるはずよ…完璧な兵器なのでしょう?」

「ちい!!ぎぎぎい!!」

…このアタシがここまで良いように使われるなんてえ!!何という屈辱よ!!…でも…断ることができない!!!

「爪を噛むのは行儀が悪いわよ…」

「黙ってくださいい…今すごい葛藤と戦っているのよン」

永琳様に背を向けてアタシは思考を開始する。

とりあえず…異変は始まってしまったし止めようがないわ…

これを朝まで維持となると長丁場は確実ねえ…

満月が歪んだことにより、妖怪の活発化・狂暴化は避けて通れない注意事項ね…まあアタシらには問題のない事だけ…

問題は…幻想郷の住民は確実に異変に気づくでしょうね…どれくらいくるか大体は分かるけど確実な事ではないわ…

①博麗神社の巫女こと博麗霊夢…

幻想郷の巫女であるから、確実に異変に関しては鼻が利くはず…あの子と戦うとなると油断は絶対にしてはいけないわね…

②霧雨魔理沙

2つ前の異変ではお世話になった子ねえ…咄嗟に何をしてくるか分からない以上油断はできないわあ…油断した所為で酷い目にあったわ…

③八雲紫

妖怪の賢者・幻想郷の母と呼ばれている妖怪… 100%こいつの出陣は確定ね… 更に式神の八雲藍も来るから一番厄介な部類になるわ…

アタシの左腕が使い物にならなくなったのも、こいつらのおかげだし… 絶対に油断はできないわあ！

④紅魔館一同

吸血鬼事… レミリア・スカーレット… 確定ではないけど、来る可能性はあるわね… 夜の時間だし彼女が動ける絶好の環境ねえ… 更に御付きのあの時を止めるメイドも来そうだし、面倒だから相手したくないわ…

⑤白玉楼

西行寺幽々子とその庭師のコンビも来る可能性が非常に高いわ… 白玉楼に関してはデータが集まり切っていないのもあるから安易に戦うことはできないわ…

… 結論… 全て油断は禁物ねえ…

「はあー… アタシが何をしたというのお」

「どうする毎乃葉？共に行動するか？」

夜喪妓が意気込んでいる… 何だかんだでやる気にはなったみたいただけ、この子はどっちかというアタシより睡眠と共に行動した方が強いと思うのよね…

「アンタは睡眠と共に行動… そしてアタシとは別行動でお願いしますわ」

「… ああ… 了解した」

「夜喪妓さんですか… 足を引っ張らないように気を付けませんと！」

「じゃあ… 早く行きなさい… 地形を理解した方がアンタ達にとっては利点にはなるでしょう？」

2名は頷いて、竹林の中へ消える… さあて… アタシもボヤボヤ

としてられないわ

「…悪いわね」

それを見送った後、永琳様から声がかけられる…

「悪いと思うなら…こつちのことは完璧にこなして頂戴！」

「分かったわ…」

永琳様から離れてアタシも準備をしに竹林へ向かう…

「全く…何でこんなことになったのかしらん？」

キセルの火を再点火して、アタシは夜空に浮かぶ月を眺める…

…完璧な満月ではない歪んだ月…まるでそれはアタシを示しているのかしらあ？

アタシもまた…完璧ではない兵器だものね…

「…今夜は程々にやるわ…大丈夫よね？」

一方その頃…博麗神社…

同時刻…その神社の巫女こと博麗霊夢は布団の中で眠りについていた…

異変の事は全く気付いていない彼女ではあったが…とある者がそれを許さなかった…

空間が割れて中から鍋とお玉を持った手が現れる

「霊夢ー!!異変の時間よー!!起きなさいー!!」がながんがん!!

「…」
けたたましく鳴る騒音…流石の彼女も寝ることが出来ずに身を起こす…

「五月蠅いわー!!!」

「うぎやああ!!」

彼女が放った光弾はスキマを突き抜けて音の発生源へと命中する…

side 霊夢

「はあ… 何よ… 一体!」

私はスキマに手を入れて中から黒焦げになった紫を引きずり出す…

「れ… 霊夢… ゆかりんは… 只起こそうとただけで」

「普通に起こしなさいよ!!普通に!!」

紫から手を離し、私は寝間着から普段着へと着替える…

さつき紫は異変だといっていたけど… こんな夜に何が起きているというのよ!

「はい!これで満足!?で?何の異変が起きているのよ!」

「… あれよ」

紫は外を指さす…

そこには、神社から見える巨大な満月があった… しかし寝ぼけた頭でも違和感に気づくことが出来た…

「何よこれ?」

その月は淵が削られ歪んだ満月となっており、いつもの満月とはかけ離れていた…

紫は力なく答え始める…

「はい… これが異変よ… このままでは幻想郷中の妖怪が狂暴化するの目に見えているわ… 早急に対処しないと」

… 確かに紫の言う通り… この状況は不味いわ… 只の愉快犯か… それとも別の目的があるか… 今回の目的が分からないわ…

異変の首謀者を探すとすると骨が折れるわね…

「… とりあえず月が出ているうちに解決できるかしら？」

「ふふ… こんな異変… 夜を止めてでも今夜中に解決するわよ」

紫は空間に術をかける…

「今夜中ね…？」

突如… 每乃葉の顔が頭に浮かぶ？何で彼女が思い浮かぶのよ…

「どうしたの？行くわよ？」

「… ええ… 何だか嫌な予感がするわ」

私達は眠い目を擦りながら神社を出る…

模倣&暗殺

欠けた満月が夜を照らす幻想郷のとある夜…

異変に気づいた霊夢達の他にも異変を察知して動き出した者もいる… 今回の異変は考えは違えど目的は同じ… 圧倒的に彼女達が有利だろうが…

今回の異変は、いつもとは違うことを彼女達は知らない…

竹林にまず最初にやって来たのは、紅魔館の主こと、レミリア・スカーレットと十六夜咲夜の2名…

彼女達は竹林に降りて辺りを見回す…

side 咲夜

「…どうやらこここのようです… お嬢様」

「ええ… ご苦労様… さて… 月を歪ませた黒幕はどこにいるのかしら？」

お嬢様は竹林の奥を見回している…

何故私達がここに来たのかという… 今回の異変がお嬢様の気にくわなかったことが原因ね…

いつもの夜のティータイムに月の満ち欠けを眺めるのが、毎日の楽しみだったお嬢様だけ… 今回の異変のおかげでティータイムを台無しにされて随分とご立腹なのよね…

「流石にもここにはいないわね… 咲夜！私についてきなさい！」

「あ！危ないですよ！」

私が制する前に、お嬢様は進んでいき、何者かがお嬢様の前に立ちふさがる

「おっと…ここから先へ進むなら私を相手をしていきなさい！」

出てきたのは、緑色の髪をした少女… 頭に虫のような触覚がついており、明らかに妖怪の類ね…

「お嬢様… ここは私が」

「いえ… 必要ないわ… 私で充分… 黒幕とのウォーミングアップになるわ！」

お嬢様は片手に槍を出現させて歩を進め、虫の少女は顔を青くする…

「あれ？ちよつと…」

「貴女に時間はかけられないの… スピア・ザ・グングニル！」

お嬢様が槍を投げる…

「え！待って!!」

ドカーン!!

少女は爆発して夜空へと消える… お嬢様の機嫌が悪い時に出てくるとは… ついていない子ね…

「咲夜… 次行くわよ」

「ええ… 畏まりました」

私達が竹林の中へ入ろうとすると、地面に何か突き刺さる！

「新たな敵ですか？」

「そうみたいね… まあ… 雑魚でしょうね」

「… そうですか」

地面を見ると、そこには手術刀が刺さっている…

この刃物には既視感があるわね… この形状の刃物を使っているのは私の知っている限り1人しかいない…

「… いえ… お嬢様… 次の相手は油断しない方が宜しいかと…」

「… ?」

お嬢様は首を傾げ、私は地面に刺さった手術刀を取る…

「… 姿を現したら？天逆の部下…」

私が声を上げると、何もない空間が歪む…

「あらあらっ？バレてしまいましたか？」

何もない空間から白い髪をして、赤い軍服に身を包んだ兎耳をつけた少女が現れる…

確か宴会の時に見た天逆每乃葉の部下… 睡煉とかいつていたわね…

「返すわ」

私は手術刀を彼女に向けて投げる… 頭を狙ったのだけど、彼女は手術刀をうまく受け止めて軍服の中へ入れる…

「あらあら… ぐ丁寧に」

「… 貴女あの天狗の部下じゃないの… 何で私達の邪魔をするのかしらっ？」

「あらあらく怖いですねえ、紅魔館の当主様だけあって迫力が違います」

お嬢様が槍を向けるが彼女はそれい臆せずお道化しているだけ… どこか余裕があるみたいだけど、その態度が何か引つかかるわ… 私とお嬢様がいるというのに…

「… まさか每乃葉の命令かしら？ 貴女がわざわざ妨害をするとなると、異変に関与していると見なしていいのよね？」

「私としては嫌々なのですよ？ 上司命令とはいえ、第0部隊を壊滅させる原因を作った方をお願いなんて聞けるはずがありません」

… 上司命令… つまり每乃葉が絡んでいることは確定ね… しかし每乃葉以外に第三者がいるみたいね… この後に彼女が居る以上… この子に時間がかけれないわ…

「なら… 押し通るまでよ…」

私が踏み出すと彼女は驚くように後退する…

「あはは… 嫌ですね？ 私としても戦闘能力は低い方なんですよ… あまり痛い目は遭いたくないのが本心なのですがね…」

「なら… さっさとどきなさいよ！ 貴女に関わっているほど私達は暇

じゃないのよ!!」

お嬢様が詰め寄ると彼女は笑みを浮かべる…

「どきません♪… 時間稼ぎが私の目的ですもの… ね!」

睡煉は懐から何かを取り出して、地面に叩き付ける…

その持っていた物は破裂して辺りに煙を立ちこませる!!

「うう!!」

… 目が染みるわ… 煙幕か何かかしら?

辺りは煙霧に包まれている… 只でさえ、視界の悪い竹林だということ… 何てこと…

「!?それよりも!」

私はお嬢様を確認する!私の前にお嬢様の身の安全を!!幾ら弱そうな子とはいえども、何の能力を持っているか分からない以上警戒を怠るわけには!!

少しずつ煙が晴れてきている… すぐにお嬢様を救出して… 睡煉に引導を!!

「…!?」

煙が晴れ… 私の目の前にはとんでもない光景が広がっていた…

「… う〜?」

「… う〜?」

「…」

私の目の前には、2人に増えたお嬢様がいた…

お嬢様達もお互いの姿を見て呆然としているが、次第に顔を引きつらせる…

「な… 何よこれー!!!」

2人のお嬢様は驚愕の表情を浮かべている…

そして1人のお嬢様が口を開く

「あ… アンタ!! 睡煉でしょう!! 高貴な私の真似をするんじゃないわよ!!」

「あ… アナタ何を言っているの!! 貴女が私の真似をしているんじゃないの!!!」

「うー!!!」

2人のお嬢様は子供の喧嘩のようにお互いをポコポコと叩いている…

… しまった… これが睡煉の作戦だというのね

片方のお嬢様が睡煉が化けたお嬢様の姿… まるで鏡でも見ているかのように完璧に真似ているわ…

お嬢様達は私を見る

「咲夜!! この偽物を退治しなさいよ!!」

お嬢様達は私に命令する… どうすればいいのよ!! 判別が全くつかないというのに!!

「残念ながら… 私には判別がつかない状況です… もう少し何かきっかけがあれば…」

片方のお嬢様が地団駄を踏む…

「… もう!! ならこれを見なさいよ!! スピア・ザ・グングニル!!」

片方のお嬢様の左手に緋色に輝く魔槍… グングニルが現れる…

そうだわ… 睡煉はあくまで姿形をコピーしたに過ぎないわ… 本物の能力までコピーできるわけないわ!

ということは…

「もう一人のお嬢様が睡煉!」

もう一人のお嬢様を見ると彼女は驚くような顔をする

「ま… 待ちなさいよ!! 私が本物!! スピア・ザ・グングニル!」

「…」

もう一人のお嬢様の右手にも緋色に輝く魔槍が…

ということは… 睡煉は姿形だけではなく… 能力のコピーもできるといふことなの?

お嬢様達はお互いを睨む…

「真似するなー!!」

お嬢様達は同時にグングニルを互いに投げ、グングニル同士が炸裂し爆発が起きる…

「うー!!!何なのよ!!偽物の癖にー!!」

威力も本物…

「私はどうすれば!!」

私は膝をつく… 姿だけではなく能力まで完璧に真似をされたら… 判別することが…

「咲夜!!何とかしなさい!!」

「うう!!待ってください!」

何とかしなくては… 考えるのよ十六夜咲夜… こうなれば… 私の目で本物のお嬢様を見極めるしかないわ!!私にしか知らない質問を!!

「ならーお嬢様!!御下着を見せてください!!」

「なっ!!!何を言っているのよ!!今はそれどころでは!!」

お嬢様達は顔を赤くする… が私も退けないわ!!

「私はお嬢様の身の世話をしているので、今日のお嬢様の御下着の色も形も把握できています!!偽物には直接見ない限り分かるはずがありません!!さあ!!見せてください!!」

「うわあ…」

何故かドン引きされている… でも!偽物には知らない情報よ!!これが一番の策なのだから!!!

「さあ!咲夜にお嬢様の御下着を!!」

「… はあ… 見なさいよー!」

お嬢様達は恥じらいながらスカートをたくし上げる…

「な？」

っピンクのフリフリ

っピンクのフリフリ

完璧に同じですって!?そんな馬鹿な…

「遊んでいる場合ではないのよ!!他の策を考えなさいよ!!」

「うう!!申し訳ございません!!」

決死の作戦も水泡に帰したわ…

… どうすればいいのよ… 手元にはお夜食用のサンドイッチと
ワインしか残っていないわ…

他の道具があれば何かしらの策は立てれたというのに…

「… 完璧な姿ね」

姿形は同じ… 能力の威力も同じ… 完璧にコピー出来ているみ
ただけど… 完璧何て存在しないわ… どこかに穴があるはず
よ…

「完璧？」

… 完璧… そこをつけば… 睡煉もボロを出すのではないのか
しら？

この事に関しては、お嬢様も知らないこと… 幾ら睡煉が完璧に真
似ていても何とかなるのでは？

「分かりました… これで白黒はつきりつけますよ!!」

「本当!?さっさと言いなさいよ!!」

私は懐からワインボトルを取り出す

「… このワインの産地をお答えください!!正解した方が本物のお嬢
様です!!」

「… こんなもので本物をねえ？」

お嬢様達は嫌らしい笑みを浮かべている…

本物のお嬢様は自信があるみたいね…

私はグラスを2つ取り出して赤ワインを注ぐ

「さあ!!どの産地のワインかお答えください!!」

「ふん!この勝負決まったわね」

「ふん!!どうだか...」

2人のお嬢様はグラスを空にして口を開く

「シャンパーニュ地方の赤ワインよ!!」

「ブルゴーニュ地方の赤ワインよ!!」

見事に割れたわね... これで私のやることも決まったわ

「ふん!!私の味覚にはついて来れなかったみたいね!!」

「は?貴女の味覚がおかしいんじゃないの?」

「正解を発表します」

私は空になったワインのラベルを確認する...

一応味見はしたけど... 念入りにね...

「ワインの産地は...」

「ブルゴーニュ地方!!」

「やったー!!」

「う... 嘘よ... 私外したことがないのに...」

私の発表に片方のお嬢様は跳ね上がり、片方のお嬢様は落胆している...

これで勝負ありね...

「... これで勝負はつきました...」

「さあ!咲夜!!偽物に引導を渡しなさい!!」

「うー!!咲夜ー!!何かの嘘よー!!!」

両方のお嬢様が喚いているが、私のすることは決まったわ...

私は産地をはずしたお嬢様の方へ向かう…

「咲夜！ やつてしまいなさい！！」

「咲夜？」

私はナイフを構える

「偽物は… 貴女よ！！」

私は産地を当てたお嬢様に大量のナイフを投げる…

とつぎの行動に出遅れたのか、向こうの偽物は避けることもできずに全弾被弾する…

「うぎゃあああ！！何で！！？」

偽物のお嬢様は姿を変えて睡煉の姿に戻る…

「流石の貴女でも完全コピーはできなかったみたいね」

「何です！？ 確かに私はワインの産地を当てたというのに！！ 完璧にマネをすることができたというのに！！」

睡煉は悔しそうにナイフを抜きながら地団駄を踏む…

本物のお嬢様は体を震わせながら、体裁を整えている

「ふ… ふん！！ 流石咲夜ね… 本物の私を見破るなんて」

「… ええ… 私にはわかりますよ」

私は空になったボトルを見る

「本物のお嬢様は… ワインの産地を当てることなんてできませんから」

「「え?？」」

お嬢様と睡煉が驚く…

「え?？ 何よ！！ 私は今で外したことが…」

「申し訳ございませんお嬢様… 今まで咲夜は嘘をついていました…」

「嘘?？」

「主を立てるとはいえ嘘をつくのは良くないことでした…。私はワインの産地を当てることなんてお嬢様には不可能だつて気づいていました…。今までの晩酌お嬢様の産地当ての正解率は1.5%…。間違つていても私には、それを間違いだと訂正することができませんでした…。全てはお嬢様の為に…。」

「うそん？」

本物のお嬢様は崩れ落ちる…

でも私は嘘を言つてはいないわ!!今までの晩酌の際…。お嬢様が産地を外していたのは紛れもない事実…。この問題にすれば外すことは分かつていたわ…

睡煉の方を見ると頭を掻いている

「あちゃ…。まさかそんな罠があるとは…。私もまだまだです…。完璧にこだわり過ぎましたね…。モチーフが100%とは限りませんか…」

彼女は竹に腰掛けて無防備になっている…

戦意を喪失したのかしら？

私はナイフを向ける

「あら？潔いわね？もつと変身をしてくると思ってたけど？」

「無駄なことはしませんよ…。今回の事は教訓にしましょう…。完璧というのは完璧ではないということを気づかされました…」

「そう…なら…貴女はここで一休みね!!」

私はナイフを振り下ろす！

「…ここに私だけだと思いませんか？」

ばーん!!

「っ!!」

突如の銃撃に振り下ろしたナイフが弾き飛ばされる!?

馬鹿な…。ここには睡煉だけだというのに!!他に誰かいたという

の？

「何処!! 周りには誰の気配もなかったというのに!!」

辺りを見まわしても誰もいない…

誰もいないのに… どこから攻撃が？

「ど… どこに貴女の仲間がいるの!!」

睡煉は平気そうに服の汚れを落としている

「… ずーつと… 遠くですよ… ほら… 気を付けてください…

次の銃弾が来ますよ？」

だーん!!

「ぎゃ!!」

「な？」

銃声が聞こえたと思いきや… お嬢様が銃弾型の光弾に被弾して地面に倒れる!! まさか撃たれたというの!!

「お嬢様!!」

私はお嬢様を抱えて狙撃手を探す… この辺りには誰もいないのに… 一体何処から銃弾が!!

… 辺りを見回しても誰もいない… 一体どこからこれが来ているというの!!

「… あゝ無駄ですよ？ 幾ら近辺を探してもスナイパーは見つかりませんでば…」

「遠距離からの狙撃とは…」

私が時間を止めてスナイパーのもとへ向かってもいいけど、負傷したお嬢様を抱えながらの戦闘は不利ね…

睡煉の仲間ということは、確実に彼女並みの厄介な能力を持っているといってもいいもの…

「ちなみにスナイパーは私よりも圧倒的に強いですよ〜!」

「…!」

… なら最善の策を取るまでよ!!

「…」

私のとつた最善の策は… お嬢様を抱えて私は竹林の出口へ辿り着く事…

ここまでくれば… スナイパーの射程範囲内のはず…

退くのは悔しいけど、睡煉の他にもう一人いるとなるとこちらの分が悪いわ…

最初から睡煉に余裕があつたのは、これの所為だつたのね…

「う〜」

私の腕の中でお嬢様は気絶している…

「… まあ… 他の子がこの異変を何とかしてくれるでしょう」

私はそのまま紅魔館へと戻る… 後でお嬢様に敵前逃亡したことは怒られるかもね…

side 睡煉

「ふい〜どうやら逃げちゃつたみたいですねえ」

私はその場に座り、夜喪妓さんがいる方向を見つめる…

あのメイドが退散してくれて本当によかったです… 時を止める能力を持っている以上、私には分が悪いですからね…

「感謝しますよ… 夜喪妓さん」

どどどどど!!

私の近くの地面が次々とダンガンが撃ち込まれる…

(次・行け)

つと… 地面に弾丸文字で書かれている… あらら… 休む暇もないとは…

「はいはい… 分かっていますよ… しかし? 夜明けが遠く感じます…」

… 確か作戦では、夜明けまでの攻防戦だったはず? しかし月が何時まで経っても動きを見せないのは… おかしい?

ドドドドド!!

(夜・動き・止まっている… 第三者・妨害が入っている)

夜喪妓さんからの弾丸文字… 第三者からの妨害ですか… これじゃあ何時まで経っても上がれません…

「次どうします?」

ドドドド!!

(近場・獲物・やる)

… シンプルな回答ありがとうございます… つと

「はいはい… 行きますよーだ…」

私は次の獲物を探すために竹林の奥へ進む… 夜喪妓さんの援護もありませんし次も何とかなるでしょう?

ザ・テリトリー

歪んだ月が照らす幻想郷… 迷いの竹林では、朝が来るまで狩りが続行される…

紅魔館組を退けた睡煉・夜喪妓を見届けた毎乃葉は、永遠亭の近くでスコープを弄りながら笑みを浮かべている…

彼女はキセルの煙を吐き出し、スコープの電源を切って歩を進める…

side 毎乃葉

「… 中々の感じじゃないの!」

紅魔館組のレミア・スカーレット・十六夜咲夜を降すとは、アタシの可愛い部下達も中々やるじゃない!!

少し危ない感じがあったけど睡煉!! 良く陽動したわ!!! 更に夜喪妓!! 貴女の正確な狙撃も惚れ惚れするわ!!! この調子で他の奴らも倒してもらいたいわあ!!

このまま狩りを行ってくれば、このアタシが動くことなく異変は終了するわ!!… このまま… 終わってくれば…

アタシは懐中時計を取り出して時間を見る…

「でも… おかしいわね?」

あれから時間が、かなり経過したと思うけどお… 月が… 沈まない? この時間なら月が、あの場所にあることはおかしいのだけど?

この異変は月が沈むまで続行されるはず… 幾ら経過したも沈まないとなると、こちらとしても異変を終えることはできないわ…

「おかしいわね? 八意様がこんなミスを犯すはずがないわ…」

地上に堕ちても月の賢者だった八意様にミスはありえない… ということは第三者の妨害でも入っているのかしらね?

… 全く余計なことをしてくれるわあ… 考える限り… 月が沈んでしまったら、この異変の黒幕を見つけられないと踏んだのでしょねえ… 余計なことをしてくれるわ…

「… 事をうまく運ぶことなんてできるわけないわね… 月の天才でもこうなるのだもの…」

やっぱり… このアタシが動く必要があるわね…

「前途多難ね… このアタシも本格的にやらないとねえ… 大丈夫… 本気ではないわね…」

… 今回は… これでいいわよね？

アタシは体を2つに切り離す…

side 美羽

「… ふう… 久しぶりにこっちの姿に戻ったわねん！」

アタシが目を開けると目の前にはもう一つのアタシ… 柚神の姿が目映る…

彼女は目を開いてスコープをハンカチで拭いている…

「アタシとしては… 変わらないわ… 一人芝居しているみたいになるわあ」

… いつもとは違うアタシと同じネットリ口調… 普段の敬語口調はどうしたのよん？

「いつものアレはどうしたのよん？アタシはともかくアンタは、あの方に女らしくしろと言われたのでしょうか？」

「… 失礼しました… 流石のワタシも、毎乃葉から分裂する時はキャラがブレてしまいますのでね…」

柚神は口調を戻して笑みを浮かべる…

久しぶりな感じの所為で… 柚神と話するのは少し変な違和感があ

るわ…： 彼女が言った通り一人芝居をしているような…： ねえ…：

「…： とりあえず…： アタシらも動くわよ…： 流石にも睡煉達に全てをやらせるのは荷が重いしい…：」

「そうですね…： しかし…： 月が動かないとなると…： やれる者も限られるはずでは？」

「…： 確かにねえ」

時を操る能力を持った十六夜咲夜は睡煉達が排除したし…： 彼女の線は除外した方がいいわね…：

つまり!!!彼女以外の者が妨害をしているということ…： 残りの者で、こういうことが出来るのは大体絞ることが出来るわあ!!

「つまり犯人は！」

「八雲紫ですか？確かに彼女なら…： できるかもしれませんね」

「…： 何で先に言うのよお!!アタシがせっかく考えてたというのに!!!」

…： でも柚神と意見が一致したということは、彼女である可能性が非常に高いということ…： なら優先的に潰していかないとねン!!

「…： じゃあ…： 夜喪妓の奴に連絡をお願いねン！」

「はいはい…： 分かっていますよ」

柚神は、空間にモニターを展開して夜喪妓につなげ、しばらくするとモニターに夜喪妓の姿が映り始める…：

「聞こえますね…： 夜喪妓」

柚神が語り掛けると、モニターに映る夜喪妓も反応を示しているわあ…：

「む…： どうした？同志毎乃葉!?何かあったか？」

彼女はライフルを担い通信機を更に耳に近づけている…：

…： 流石の彼女でもアタシが今、美羽・柚神になっていることは気づいていないわねン！

「その名は現在のワタシの正式名称ではありませんよ？」

「…その口調？同志柚神？…なら！今は体を分けているのか…」
彼女はキセルに火をつけ、その顔は懐かしむような表情を浮かべている…

「懐かしむのは後ですよ…残念ながら戦況が変わりました…すぐに体勢を整えてください」

「…時が進んでいないのだろうか？分かっている…犯人は私の方で片っ端から打ち抜けばいいのだからな…」

「犯人の目星はついていきますよ…この時間を止めているのは八雲紫…貴女の役目は彼女を撃ち抜くことですよ」

「ほう！ターゲットが分かったみたいだな…で？どうする？あの妖怪賢者の相手となると流石にも睡煉のバックアップはできなくなるが？」

夜喪妓は眼帯をずらして眼をこする…

「構いません…睡煉に伝えてくださいいな…ワタシ達の役目は夜明けまで、この状況を維持することですからね…」

「ああ…伝えておく…そちの指揮は任せた…私の方も次のお客さんの相手をしなくてはいけないからな」

通信が切れる…

…次のお客さんねえ…まあ…夜喪妓なら問題ないわ…

独りで国家転覆を謀ったのだもの…彼女を倒すなら国1つでも持って来なさいよ…

「…とりあえず…夜喪妓は大丈夫ですね」

「なら…アタシらはこの周りを警戒するわよ！夜喪妓がある程度やれば、この戦況も変わるつてもものよん！」

アタシは拳を打ち鳴らし、柚神は時計を見て頷く…

「ええ…早急に終わらせましょう…大丈夫ですよ…アタシにできなことはないわ」

「…分かってる」

アタシ達は獲物を探すために竹林に歩を進める…大丈夫…よね？

同時刻…

竹林から10km離れた幻想郷の草原…

その草原に生えている巨木の頂上には、天逆の部下の一人である夜喪妓がスコープのついていないライフルを構えて迷いの竹林の方向を見ていた…

「とりあえず… 睡眠に連絡を…」

彼女は通信機の電源を切り、竹林に向けて弾丸を数発打ち込む… それを終えた彼女は、キセルの火を吹かす…

「… とりあえずこれで良い… そろそろ出てきたらどうだ？ 私は逃げも隠れもしないが？」

彼女は後方に向けて叫ぶ…

「… 大きな力を感じたと思えば」「油断しないで霊夢…」

夜喪妓の後方には、彼女のターゲット、八雲紫＋博麗霊夢がいた…

side 霊夢

私の目の前には、緑色の軍服・灰色のマントに身を包み、片目に眼帯をつけた長い銀髪の女がいた…

紫が言っていた怪しい竹林に向かう時、突如銃声が聞こえたからこの場所へ来たんだけど… ビンゴと言うべきかしら… 深夜にこの場所で屯している以上… 明らかにこの子は怪しいわね…

「アンタがこの歪んだ月の黒幕かしら？」

「いえ… 霊夢… 黒幕ではないわね… その協力者と言うべきね」

紫は私の言葉に訂正を入れるが、彼女は気にすることなく高笑いを

する…

「ははははあ!!こちから出向く必要がなくなったというわけだ…感謝する!妖怪の賢者+α!」

目の前の子は高笑いをしながら、手にした猟銃を担ぐ…

私を+αって何よ?紫のおまけではないんだから…

「出向くってどういうことよ?」

私の言葉に紫は私の前に出る

「…そのままの意味でしょうね…もつとも彼女の目的は私みたいだけど」

「…紫が?」

「その通りだ!妖怪の賢者!貴様がいては…この異変がスムーズに進まないのな…この場でリタイヤしてくれると私達としては助かるのだ…」

…スムーズに進まない?…まさか…私達の時止めがバレているというの?

「…それを教えた者がいるのかしら?」

「…何故そう思う?」

「…貴女の服装よ…とある天狗とよく似ているわ…それに、その天狗の部下と貴女から感じる力が同じなのも引つかかるわ…貴女…毎乃葉の部下なのでしょう?」

「紫それって!!」

…あの子が毎乃葉の部下?この部下が異変に関わっているということは…毎乃葉が今回の事に関わっているというの!?!…彼女が異変に関わるなんて!!

「毎乃葉が?...嘘よね?」

私の言葉に彼女はキセルを吹かしながら、せせら笑う…

「バレるのも時間の問題だ…情報を渡しても別に構わないだろう…確かに、この異変の参加は毎乃葉が決めたことだ…そして妖怪の賢者の言う通り…私は同志毎乃葉の部下…第0部隊隊員ナンバー1夜喪妓だ…」

夜喪妓と名乗った女性は、私達をジッと見つめている…明るい橙

色の隻眼は、私達を逃がさないように捉えている…。何か彼女の目は危険だと私の勘が告げているわ…

「地位も名誉も要らないと言っていた彼女が、この異変に参加するメリットが無いと思うけど？」

「メリットなぞ存在しない…。むしろデメリットだらけだ…。今回の件は同志毎乃葉の主の師匠の命令なのだから…。奴も従うしかないということだ…」

夜喪妓は不服そうな顔をする…

「貴女も不服みたいね…」

「… 私達も従うのは反対だ…。だが仕方あるまい？将の手となり足となるのが、駒である私達の役目だ…」

夜喪妓は私達に銃を向ける…

「さて… 話は終わりだ…。ここで退場を願おうか！」

ダーン!!!

彼女は私達の足元に威嚇射撃をする…

「話し合いでは解決しなそうね」

「… 時間の無駄だ…。貴様らまとめて相手をしてやる…。さっさと来るがいい」

夜喪妓は濃厚な殺意を体から放出させる…

私と紫を同時に相手するなんて…。自信過剰かと思ったけど…

この殺気…。場数を踏んだ奴特有の気だわ…

「霊夢…。油断は禁物よ…。毎乃葉の部下とはいえ…。実力が未知数よ」

「分かっているわよ！」

私達は戦闘態勢を取り、夜喪妓へと向かう！

一方竹林にて、

夜喪妓と別行動することになってしまった睡煉は、地面に打ち込まれた弾丸を見て溜息をついていた…

side 睡煉

(私・別件やる・お前・勝手にやれ)

「…随分と…抽象的な…」

弾丸文字を見て私は溜息をつく…つまり…夜喪妓さんは他の仕事が出来たから、私とは別行動するという意味で受け取って構わないのですかね？

しかし…これは少し痛いですねえ…別行動するとなると私が苦戦を強いられてしまいます…

「あーあ…紅魔館組を退けた後…次どうすればいいのでしょうか？異変の加担も楽ではないです」

「紅魔館組を退けた？異変の加担？どういうことだ？」

「うえ!？」

後ろから話しかけられ、心拍数が上昇です!!…私はそつと後ろを向く…

「お前睡煉だよな？何で毎乃葉の部下のお前がここにいるんだ？」

「それよりも…異変の加担ってどういうことよ？」

そこには、いつぞやの白黒魔女といつぞやの七色人形遣いの姿…ここにいるということは…異変の解決に来たということですね！ちくしやうー!!

…というより…今の独り言を聞かれたー!!!…いや…まだ

白を切ることはできるはず!!

「あはは…何の話だかさっぱりですなー!!」

「いや…自分の言葉には責任持ちなさいよ…異変の加担ということとは、あの歪んだ月に何か関わっているのかしら?」

「毎乃葉の部下であるお前がか?…まさかとは思うがお前の上司も関わっているんじゃないのか?」

2人から怪しい目で見られる!!これじゃ隠しきることが―!!

side 魔理沙

「こいつ…怪しいな」

私達は目の前で、顔を青くし冷や汗を掻きながら目を泳がせている
睡煉を観察する…

こいつがこの異変に参加したというのは、俄かに信じられねえ
が…さっきの独り言は嘘を言っているようには見えない…

歪んだ月…アリスの話を聞く限り、幻想郷中の妖怪達が月に中て
られて狂暴になる可能性があるらしい…

それを止めようとして、怪しいこの竹林に来たところ、誰もいない
竹林でブツブツ言っているこいつを発見したというわけだ…

こいつが異変に関わっていると、こいつの上司である天逆毎
乃葉も異変に関わっているんじゃないか？

「毎乃葉もこの異変に関わっているんだよな？」

「あははは…」

睡煉は、顔を青くしたまま俯く…

これは肯定したということでもいいな… 毎乃葉が後にいるとなる
と事の重大さが分かってくるぜ…

私はアリスとアイコンタクトを取る…

「…あの天逆がいるとなると…この異変は少し苦勞するわね」

「分かっている…とりあえずここにいるコイツを片づけて奥に進
む…」

「あーあ…失言に気を付けていたんですがねえ…」

「!？」

突然睡煉が顔を上げて気怠そうな顔をしながら、私達の方を向く

「確かに貴女達の言う通り…。天逆様と私達第0部隊は、この異変に関わっています…。私達としては不本意な参加ですけどね…。」

「…不本意？じゃあ何の為に!？」

「答える必要性がないです…。私もお仕事に入れてもらいますよ…。天逆様からここに来る奴らを撃退するように言われていますのでー!」

睡煉は、手術刀を持って私達を威嚇する…

「話は平行線ね…。」

「だな…。なら…。力尽くで話してもらおうしかないな!」

私達は戦闘態勢を取り、睡煉へ向かう!

ものまね暗殺者

歪んだ月が照らす幻想郷の竹林…

そこには、異変を解決しに来た霧雨魔理沙・アリスマーガトロイドがおり、異変に加担した天逆每乃葉の部下である睡煉が立ちふさがり…

解決組の数は勝っていても、厄介な能力を持つ睡煉に苦戦は必須であろう…

未知の大量殺人犯の相手をするのだから…

side 魔理沙

「さて！仕事なのでやりますよー！」

睡煉は手に持った手術刀を私達に投げってくる…こいつは話によると、姿を自在に変える能力を持っているらしい…姿を変えられると厄介だ…早く決着をつけねえと!!

「甘い!!」

彼女が投げつけてくる手術刀を私は光弾で弾く!

だが…こいつの戦闘は至って稚拙だ…能力を使われなければ脅威でもないな…

「これじゃあ！私達を倒せなねえよ！」

「あらら…それはどうですかね〜？鏡符（合わせ幻鏡）」

宙に舞っていた手術刀が光り、次の瞬間、多数の手術刀へとなり降り注いでくる!!馬鹿な!こいつの能力は変身のはず!!

「な?」

「変身能力だけが私の力ではないのですよね!!では♪お元気で〜！」

「く!!」

「まずい!避けられない!!!」

「相手は魔理沙だけではないわ!」

私の目の前に、アリスの人形が現れ光弾で手術刀を弾き飛ばす！お
おおう… 助けがなければ終わってたぜ…

「サンキューな!!」

「… 目の前の敵に集中なさい!」

「お… おう」

… とりあえずアリスの一喝で、気分も持ち直したというべき
か… 睡煉の方を見ると、彼女は面白くなさそうに、こちらを見つめ
ている。

「邪魔が入りましたね… とりあえず邪魔なので退場願います!! 軽く
本気行きますよ!…こんな風にね!!」

睡煉の霊力が上がり始めると同時に彼女の姿が増え始める!! 変身
能力だけでなく、増殖だと!?

「変身能力だけじゃないのか!」

「応用でもできます」

彼女は何事も無いように返答する… 応用… さっきの手術刀を
増やした時と同じということか?

「さて!…最初は厄介そうな貴女から!」

彼女の姿が7名まで増え、睡煉達は標的をアリスに変え、手術刀を
持って飛びかかる!

「アリス!…今度は私が…」

「詰めが甘いのよ!…貴女の攻撃は!!」

アリスが指を動かすと、彼女の前方に人形が大量に現れ、レーザ
ーで睡煉達を全て撃ち抜く!!

「うぎゃああああ!」

全ての睡煉の姿にヒビが入り、粉々に砕け散り、竹林の虚空にキラ
キラと降り注いでいく。

「… 瞬殺かよ」

… 大技を簡単に返すとは… 今回は味方で良かったぜ… しか
し？ 睡煉の奴無事か？ 砕け散ったが？

「え!? 一体貴女はどれだけ人形を操れるのです!! 手数が多いですよ
!!」

1体だけ、焦げ目がついてボロボロなのが喚いている… あれが本
物なのか？ ということはさっきのは分身？

「あ… 生きてた」

「生きてますよ！ 死にませんよ!!」

睡煉は地団駄を踏んでいるが、アリスはその隙だらけの彼女を狙っ
ている…

「まだ本気じゃないわよ… とりあえずハチの巣ね…」

アリスの号令の下人形たちの一斉射撃が開始される…

数の暴力… 一方的に睡煉を狙い撃ち… アイツ1人で十分な気
がしてきた…

「ストッププー!! ストッププー!! ちよつと勘弁してくださいよー!!」

睡煉は弾幕を掻い潜りながら、必死に逃けている… あいつもあ
いづれといが… これで終わるな…

逃げ場なく、睡煉はアリスの人形に囲まれる

「うえ？」

「弾幕はブレイン… 常識よ… チェスと同じように相手を詰ませる
こと、それが私の戦い方よ」

容赦ない人形からのレーザーの一斉射撃… それは睡煉を貫く…

「ぎよえええ!!」

彼女は、そのままボロボロの姿で落下する。

「うう… やはりこの手しかありませんね!!」

だが睡煉は懐から煙玉を炸裂させて、辺りに煙幕を張る…

「諦めの悪い奴だな」

辺りは煙だらけで何も見えない… 風切り音がしないとするとア

リスの奴も攻撃を中止したな…
只のその場しのぎって奴だな… 煙幕が晴れたら随時攻撃をしないとな!!

しばらくすると、煙幕が晴れて元の竹林の光景に戻る…

ごく一部を除けば…

「あ?」

「ぜ?」

私の目の前には… 白黒金髪美少女こと… 私がこちらを見つめている?

辺りを見回すと、驚愕したようなアリスが1人… とっさのことで頭が回らないが、これは…

「おい! 睡煉!! 私のマネをすんな!!」

この馬鹿兎! 能力で私の姿をマネするなんて!! どういうことだ!!

「マネしているのはそっちだろ!!」

睡煉が私の声をマネして反論する!! こいつ!! 戦闘で勝ち目がないと判断して仲間割れを狙っているのか? 姑息な真似を!!

「お… おいアリス!! 私が本物だ… 分かるよな?」

アリスに私達は叫ぶか彼女は、溜息をつくだけだ…

「悪いけど… 見た目からは区別は出来そうもないわ… 上手くマネしているわ、どちらとも同じ魔力を感じるわね」

「おい!! 長年のつきあいだろ!!」

これは非常に不味いぞ… 睡煉の奴、何かの手を使って同士討ちを狙っているみたいだ… これが長引けば私達の方が不利になる…

「喚かなくてもいいわ!! 大丈夫よ… 判別する道具は持ってきているから…」

「本当か?」

私達はアリスを期待を込めて見つめる…。彼女は懐から紫色の帽子を被った私に似た人形を取り出して操っている？

「ええ…。流石のコピーでも貴女の黒歴史は分からないでしょうし」
…。黒歴史？

sideアリス

「…。おい…。待て黒歴史って…。まさか！」
「ん？」

片方の魔理沙が顔を青くしながら話しかけてくる。

一方…。もう片方の方は平然としており、この時点で偽物は確定したわ…。

でも…。念のために様子を見た方がいいわね！

「あたし…。魔理沙…。うふふふふふ!!」

「ぐはああああ!!?っ!胸が!胸が痛い!!!」

「え?何このリアクション?」

人形を操っていると片方の魔理沙は転げまわっており、もう片方の魔理沙は困惑している…。転がっている魔理沙が本物ね!!

「偽物は貴女よ!!」

私はもう片方の魔理沙に光弾を放つ!!彼女は気がとられていたのか、光弾を避けることが出来ずに被弾し、偽物の魔理沙にひびが入る。

「ああ…。もう…。最悪です…。そんなリアクション聞いてませんよ!」

睡煉は元の姿に戻り溜息をつく…。

「人をマネするのは限度があるの…。貴女は小細工を使い過ぎなのよ」

「教訓として学んでおきますよーだ…。ああ…。毎乃葉様と夜喪妓さんに怒られるなあ…。」

「…。これ以上の抵抗はオススメしないわよ」

「これ以上はしませんよー!只でさえ私は連戦で疲れているんですか

ら!!それに…」

睡眠が地面に座ると彼女の顔にひびが入る!?

「え?」

「心配はありませんよ… 現在の姿を維持出来なくなっただけですからね… このままいけば本当の私の素顔が拝めるかもですよ?」

… 現在の姿を維持?まさか今の姿も仮の姿とでもいうのかしら?

「興味ないわ… それに貴女の顔に時間を割くこともできないし…」
「… つれませんね… まあいいです… 私も自分の顔は見せたくありませんし、貴女達は異変の真っ最中ですし奥に進んでくださいな」

睡眠は奥の道を指さす、異変は、あの天狗と他の部下も参加しているみたいね… なら私達も急がないと…

「魔理沙!行くわよ!!!」

「いやだ… もう駄目だ…」

私は悶絶している魔理沙を引っ張り奥へ向かう。

side 睡眠

「… はあ」

姿が完全に戻ってしまいましたね… あの姿気にいつていたのに、体力が回復するまでお預けです… 竹林に2名通してしまいました。が、後は毎乃葉様と夜喪妓さんがいれば制圧可能でしょうね。

「しかし… 2戦しましたけど、どちらとも私の完璧な変身を見破られるとはね…」

それなりに自信があつたのに残念ですね、双方とも個人の微妙な能力値・深層心理奥の記憶により見破られてしまいました… 流石の私でもそれに合ったことをやるのは到底不可能です。

「… 完璧か」

正直… 完璧って何でしょうね?天逆様だってどうか分かりませ

んし… 本当に完璧何て存在するのでしょうか？

「… 考えるだけ無駄でしょうか？撤退命令を待ちますかー」

私は夜空に浮かぶ歪んだ月を見ながら命令があるまで、時間を潰すことにした…

ロンリースナイパー

睡煉が撃破された同時刻… 竹林から離れた場所にて、睡煉の仲間である夜喪妓が竹林の方を見て溜息をつく…

「… 睡煉が散ったか… あいつ遊び過ぎだ… だから足下を掬われるんだ…」

独り言のように、ぼやいている夜喪妓ではあるが、彼女の目の前にいる人物が吠える…

「今は私の相手だ!!!ぼやいている暇はないはずだ!!!」

その人物は、現在進行形で戦闘中である八雲紫の式神、八雲藍… 彼女は息を切らしながら訴え… 夜喪妓はライフルを担いだまま煙を吐く…

「ああ… すまない… 少々退屈だな」

夜喪妓は藍の拳撃を受け流し距離を取る。

side 霊夢

「… 藍の奴苦戦しているじゃない」

「藍を相手にあの余裕とは、流石は每乃葉の部下というべきかしらね？」

藍と夜喪妓の戦いを私と紫は遠くで見つめている… 先ほどから30分経過するが藍の攻撃は夜喪妓を掠りもしない… 全て彼女に見切られているわね…

紫の案で藍だけを戦わせて夜喪妓の手の内を明かそうと目論んでいたのだけど、夜喪妓は攻撃をしようとはせず、只それを眺めて避けているだけ… 何を企んでいるのかしら？

「私達も戦った方がいいわ」

「待ってよ、藍が頑張っているんだからーらん！ファイト!!」

「くううう!!!式神（十二神将の宴）」

藍は近接攻撃をやめ、スペルカードを発動する… 辺りに12体の

式神が現れて夜喪妓に光弾の一斉射撃を行う。

「ほう？大技か・・・」

夜喪妓は不敵に笑い、式神から放たれる嵐のような光弾を避け、ゆっくりとした足取りで藍に近づいてくる・・・

「お前達!!私を守れ!」

藍の盾になるように式神が集結するが、夜喪妓の歩が止まることがない。

「邪魔だ・・・」

ドン!!

突如響く銃声に、式神の1体が頭を撃ち抜かれて消滅する!

「な?」

「クリーンヒット・・・驚くことはないだろう?式神だろうが何だろうが頭を撃ち抜かれれば消滅もするだろう?」

ドン!

夜喪妓は何も気にすることなく、もう1体式神を撃ち抜いて銃口から出る煙を眺めている・・・

「・・・的確な射撃ね」

「片目だけなのに良くやるわね・・・あの狙撃銃は近接攻撃には向かないのに・・・それに何となく勝負が見えたわ・・・」

「貴様ー!!!」

藍の方を見ると、怒りか動揺でもしているのか注意が散漫になっているわね・・・式神の配置も穴があるわ・・・式神は夜喪妓に光弾を放っているが、彼女は避けながら煙を吐く・・・

「アグレッシブに戦うのも悪くはない・・・が・・・そろそろ終わりにするぞ・・・同志毎乃葉が五月蠅いからな・・・」

夜喪妓が銃を構え直すと彼女の姿が消える!?

「何?どこへ行った?」

チュン!!!

誰もいない空間から銃弾が放たれ藍の頬を掠める…
ドドドドド!!!

そして、今度はあらゆる方向から銃弾が放たれる。

銃弾は意志でも持ったかの如く、生き物のようにグネグネ動きながら次々と式神の頭を撃ち抜いて消滅させていく!!!あの弾道は…幾ら何でもおかしいわよ!?

「弾道と方向が滅茶苦茶よ!!どこにいるのよ!!夜喪妓は!?!」

「… 霊夢… よく見なさい」

「何よ?よく見ろって…」

「ほう?妖怪の賢者は私の動きが目で追えているのか?」

突如、夜喪妓の声が聞こえ彼女が姿を現す… 藍の後ろで銃を突きつけた状態で…

「う… いつの間に…」

「… 藍はここまでね」

くぱあ…

「ひゃあああああ!!!」

藍の足下にスキマが開き、彼女は重力に逆らうことなくスキマの中へと落とされる。

「ちっ… 逃がされたか」

夜喪妓はキセルを齒がみしながら、スキマが消えた地面を見つめている…

「中々足が速いみたいね… 目で追うのがやっただわ」

「ほう!面白い… 俊敏さは同志毎乃葉には負けないほどだ…」

夜喪妓は、キセルに溜まった灰を地面に落として笑みを浮かべている…

さっきの光景… 夜喪妓が高速で動いて銃を乱射していたのね… 私ので追えない程なんて!!

「…おい… 次来い… 時間が惜しいんだ… 2人纏めてかかってこい」

夜喪妓は飽き飽きとした表情で私達の挑発をする… 毎乃葉と同じく高慢な性格みたいだけど、実力は確かなみたいね… 隙らしいものが彼女からは感じられないわ…

「本当に2人がかりでいいのかしら？」

私が狼狽していると紫が前へ歩みだしていた…

「かまわん… さっさと来い妖怪の賢者」

「じゃあお構いなく！ブラリ廃線の旅！」

紫がスキマを開くと中から電車が夜喪妓に向けて発射され、電車は夜喪妓目掛け、けたたましい音を発しながら線路のない空間を走る。

「ほう？面白い技を使うな？」

ドン！

夜喪妓はカラカラと笑いながら電車の窓へ発砲し、割れた窓から内部へと侵入して直撃を避ける。

「その列車が貴女の棺桶になるのよ！」

紫は内部にいる夜喪妓を電車の外から光弾を次々と狙い撃つ…

「その程度止まって見えるぞ！」

夜喪妓は、次々を放たれる光弾の嵐を電車内を走って回避し、そして電車の窓を突き破り外に出て紫に銃を向ける。

「貫った！」

「私も見切ったわ！」

紫は傘を夜喪妓に向け、両者とも光弾を放つ

ばしゅ… ばしゅ…

「ちいー」

「…」

両者の光弾は命中こそしなかったが、夜喪妓は頬を掠り、紫は肩を掠める… 被弾こそはしなかったけど、ギリギリな戦いね…

「流石というべきか？中々の力ではないか！実に面白いぞ！妖怪の賢者！」

夜喪妓は称賛の意を込めて紫に拍手している…。どこか嫌らしさを感じるのは気の所為かしら？

「… 貴女本気を出していないでしよう？」

紫の言葉に夜喪妓からの拍手が止まる…

「余力を残すのは当たり前だ…。私の仕事は、この後も残っているの
でな…。」

夜喪妓は私の方を見る。

「博麗の巫女！お前はどうした？2人纏めて来いと言ったはずだが？」

「… 入るタイミングを失っただけよ…。アンタも本気を出したら？
本気を出さなくて負けましたという言い訳は聞きたくないのよ」

「言ってくれる！だが同志美羽を倒しただけはあるか…。」

夜喪妓は、自身のつけている眼帯を外す。

「本気を出す…。同志毎乃葉と戦った時以来だ…。」

夜喪妓の右目が露わになる。左目が橙色に対し金色の目をしてい
る…。けどあの金色の目…。何か嫌な予感がするわ…

「それが本気なのかしら？」

「… これを使わせるの当たり前だろう？もつとも、この右目は私
の自前ではないのだがな…。」

「自前？」

夜喪妓はキセルを噛みながら目を閉じる。

「… 若い時に仕事中に目を負傷してな…。使いモノにならないとい
う理由で強制的に移植された…。まあ便利だがな」

彼女が右目を開けると、私達の体に照準マークが刻み込まれる!?

「な？」

「… これが貴女的能力かしら？」

「私の能力ではない…。お前らをロックオンしただけだ…。逃げても

無駄だ！」

夜喪妓は銃を私達に放つ！私達はそれを避けるが先程と同じ単調な銃撃・・・本気を出したようには見えないわ？

「本当に本気を出しているのかしら？」

「大体の場所が分かればそれで良い・・・これで私の能力も輝きを増すというものだ!!」

「!?」

後ろを向くと、先ほど夜喪妓が放った銃弾が軌道を変えてこつちへと戻ってくる!?

「二重結界!!」

私はとつさに結界を貼り銃弾を防ぐ！いきなりの不意打ち危なかったわ！でも光弾が戻ってくるなんて・・・まさか!!

「これが貴女の能力というわけね」

「・・・そう・・・私の能力は軌道を操る程度の能力・・・私自身が放ったものの軌道を操作することが出来る・・・そんなところだ」

・・・軌道を操作?・・・どうりで、さっきの藍との戦いの時に弾丸が妙な動きをしていた理由が説明着くわ・・・

「軌道をね?なら・・・その眼は能力をサポートするものかしら?」

「ああ!!銃のスコープみたいなものだ・・・千里の距離をも見つめ障害物をも透視する！観測手も必要ない!!そして獲物を絶対に逃さない神の目というべきか?あははははは!!!!」

夜喪妓は嬉しそうに拍手している・・・

実質・・・彼女は、弾丸の軌道を操る能力とそれを補助する能力の2つの能力を持っている・・・

それに・・・眼帯を付けていたとはいえ、あの目の力は先程から使っていたみたいね・・・藍の攻撃が1回も当たらなかったし、相手の動きを読む力にも長けているわね・・・

「さて…これ以上べらべらと私の事を話すこともない…さつさと退場してもらおうか！我が同志の為にな！」

夜喪妓は銃を向ける…能力は分かったけど、対抗策が思いつかないわ！放たれる光弾を操作されてしまうとなると避けるのも限度があるわ！

紫の方を見ると、彼女は笑みを浮かべている

「こんな時に何笑っているのよ!？」

「いえ?…手の内を明かしてくれて良かったわ…これで対策が練られるわ」

「対策だと?」

夜喪妓は紫の方を警戒している…対策?紫には対策が出来ているというの?

「ええ…貴女は自分の能力のデメリットを理解していないみたいね…今から見せてあげるわよ?」

「…ほう?…面白い」

夜喪妓は完全に紫の方に興味が湧いているみたいね…

「霊夢…私がやるから下がってなさい」

紫はヒラヒラと私の方に手を振る…少し悔しい気がするけど、邪魔をする訳にはいかないわね…

「分かったわよ…さつさと終わらしてよ?」

「…すぐに終わるわ」

私は彼女達から離れて成り行きを見守る…

夜喪妓の方を見ると、青筋を立てており、目をギラギラと光らせている。

「…おい…すぐに終わらすだど?できると思っているのか妖怪賢者!!」

彼女は銃を乱射して、紫に大量の光弾を放つ…

光弾の軌道は全て滅茶苦茶になっている…物理法則を無視した弾道だけど、紫の方は気にすることなく扇子を振る。

「避けることは出来るのよ…」

紫はスキマの中に入り、光弾を避け、夜喪妓から離れた空間に現れる

「お前はロックオン済みだ!!私の銃弾から逃げられる訳ないだろう!!」

光弾はすぐさま方向を変えて紫の方へと再度向かう。

「ぐ…」

紫は被弾するが、すぐに体勢を立て直して夜喪妓の方を向く

「…ふう」

「トドメだ!!妖怪の賢者!!お前がリタイアすれば、この異変はもらったも同然だ!」

「紫!!」

夜喪妓の銃から光弾が放たれる!

「…常にロックオン…それが貴女の敗因よ」

紫は迫ってくる光弾を弾き、スキマから何かを取り出して、それを炸裂させる!

その何かからは眩い光が炸裂し辺りに鋭い閃光を奔らせる!

「うう!!?」

やばい…目を閉じるのが遅かったら眩んでいたわね…私が頭を振っていると夜喪妓の悲痛な叫びが響く…

「ぐああああああ!!」

夜喪妓が銃を落として、両手で目をかばう様に後退している…

「何が起きたの?…って」

私達の体を見ると、先ほどまでであった照準マークが消滅する!?!能力が解除された?

「見え過ぎるのも困ったものね?こんな閃光弾でも致命傷になるのだから」

「ぐうぐう!? 致命傷?」

夜喪妓は目が見えなくなったのか、辺りを手探るように見回しているが先ほどより動きにキレがないわ…

「貴女のその右目… 眼帯を通してでも透視してしまうモノだって言っていたわね… 能力を発動中の貴女なら引つかかると思っていたわ」

「それを… 狙ってっ! 私の能力の裏をかいただと? 小賢しい真似を!!!」

夜喪妓は紫の方を向き、懐から小型の銃を取り出して発砲する!

光弾は紫を掠めて戻ることなく消滅する… 弾道操作能力も使えなくなつたみたいね…

「貴女は目に頼りすぎなのよ… これで… この異変から退場なさい!!」

紫の背後から大中小の光弾が大量に出現して夜喪妓に向け放たれる…

「… 同志よ… すまん」

夜喪妓は抵抗なく被弾して吹き飛ばされ、戦いに幕が引かれる…

「… ごほ!!… まさか… 私が下されるなんて…」

夜喪妓は咳をしながら起き上がるが、戦意は感じられないわね…

「まだやる気かしら?」

紫の言葉に夜喪妓は後退する…

「… 撤退だ… どうせお前らに同志毎乃葉は倒せん」

彼女は、それを言い残してその場から消える…

「何とかやってみたみたいね…」

「ええ… 霊夢♪私をほめてー♪」

紫が私に抱き着くが、私は彼女を押しつける

「次行くわよ!!まだ毎乃葉が残っているじゃない!」

「分かっているわ… 次は今よりも苦戦は確実よ…」

私達は竹林へと歩を進める… 毎乃葉の実力が分からない以上… 油断はできないわ

side 夜喪妓

「はあ… はあ… ここまでくれば」

ここは… 人里の近くか… ここまでくれば弱った私でも安全だろうな…

… 頭がくらくらする… しばらく目の方の能力は切っておくか… 私がやられてしまうとは… とんだ誤算だ…

「同志には悪いが… 残りはやってもらおうとするか… 私達の仇を取ってもらおうためにな!」

姿を分けても、同志毎乃葉の実力は私達第0部隊を圧倒的に凌駕する… 幾ら妖怪賢者+aがまとめて相手をしても勝つ事は確定だ…

「さて… 回復したらさっさとお暇を…」

「そこで何をしている?」

声の方向を見ると、そこには青い服に身を包んだ銀髪の女性がいた… 人里の住民か?見つかったてしまったか…

「… ああ済まない… 只休んでいただけだ… すぐにお暇する…」
「… 怪我をしているじゃないか!!私の家に来い!!手当をするから

!!」

「いや… 別に」

「いいから!!!」

女性に手を引かれ私は人里へと通される… またもやとんだ誤算

だ…
同志よ…
後は任せたぞ…

司令官と参謀

睡煉・夜喪妓が倒された後の竹林にて…

第0部隊のリーダーである天逆美羽・柚神はモニターを見て溜息をついていた…彼女にとっては部下の敗北は予想外の事だったみたいだが、決まってしまったことは仕方がない…

side美羽

「… 睡煉と夜喪妓はリタイア… ねん… これからどうしようかしら？」

計算外ね… あの子達が負けるのはアタシとしても予想外よ!!! このままでは他の奴らがここに来てしまうわ!!! 凄く帰りたいたいんだけど!!

「… 無駄ですよ… ワタシ達が逃げることは確実にできませんから… 迎え撃つしか方法はないです」

アタシの心情が分かったのか、柚神は溜息をつきながらモニターを消して、スコープをハンカチで磨いている… こんな時に悠長な子ね!!!

「アンタね!!アタシの半身なんだから打開する策を考えなさいよン! 策を!!」

「その策が思いつかないのよ!!!アタシだってどうすればいいかわからないのよン!!!」

とうとう逆切れされた… 何で自分自身に怒られなければならないの…

でも柚神がお手上げ・部下がリタイアという事はアタシらが本格的に出ないといけないのね… 永琳様には逆らえないし! 凄く逃げたいけど、うう… 運命に逆らえないアタシの体たらくが恨めしいわ!!

「厳しいわ… 実に厳しい… この状況は実にやばいわよ…」

「言われなくても分かっている… ワタシらに逃げ場はない… かと

言って敗北するのも惨めになるだけよ…これ以上敗北が重なるのもワタシの精神衛生上良くないわ」

それは分かっているわ…確かに現在進行形で負け続きね…月面戦争・博麗霊夢・霧雨魔理沙・飲み会…このまま負け癖がつくのはアタシとしても悔しい…かと言って相手が悪すぎるわ…

「どうするのよ…自信がなくなってきたわん！やっぱり本気の姿で相手をするのが一番いいじゃないの？」

「手の内を明かすのは最終手段よ…必要はないわ…勝てばいいのよ…ワタシらに有利に事が運べればいいの」

何かしら？柚神の方は何故か自信があるみたいね？自分自身だけど、全く分からないわ！アタシは技術…柚神は頭脳専門なもの…うう…自分の考えていることが分からないわ

「…何かいい考えでもあるのかしら？」

「ええ…これ一つで戦況が変わるわ…少々…狡猾な手を使うことになるけどね」

彼女はスペルカードを取り出す。

一方竹林に入った博麗霊夢と八雲紫は異変の元凶である永遠亭へと近づいてきていた…

夜喪妓と戦った後だが、疲れの色は全く見えず順調に事を運んでいる。

side 霊夢

「…かなり奥まで進んできたわね」

「黒幕まであと少しよ！」

「紫…アンタは余力あるわよね？」

「もちのろんよ!!ゆかりん元気!!」

紫はガッツポーズをする…夜喪妓との戦闘である程度ダメージ

は受けていたはずだけど、それらしいものはないみたいね…。妨害はあったけど、何とかスムーズに進んでいるわ…。

他のメンバーである睡眠は誰かに倒されたみたいだし、残りはボスである天逆每乃葉だけ…。

彼女が一番厄介なのよね…。宴会異変の時は鬼である伊吹萃香をやすやすと倒したし、実力を測りかねるわ…。

更に能力が分からないけど、自身を分けて戦闘に特化した天逆美羽・情報に特化した天逆柚神になることもできるわ…。どれも厄介であることは変わらない…。他の部下と比べて対策が打てないわ…。

「確かに天逆はあんな性格だけど実力は本物よ…。さっきの部下、夜喪妓とは比べ物にならないわ…。注意なさい」

「分かっているわよ…。今回の動機も聞かないといけないし…。」
異変に参加した每乃葉だけど、夜喪妓の話を聞く限り彼女らしくない…。

メリツトが無い上に嫌々で異変に参加したのは確定みたいだけど、每乃葉の元の主の上司の命令とはいえ、彼女が素直に命令を聞くことは無いと思うわ…。何か理由でもあるのかしら？

「あらあら…。ここまで来てしまったのねン！」
「!?」

突如響き渡る、ねっとりとした声に私達は足を止める…。

竹林の奥を見ると、そこにはこちらへと近づいてくる天逆美羽と柚神の姿があった…。美羽は私達の姿を見つめると拍手をする。

「全くお見事ねン!!アタシの部下を倒すなんて思わなかったわ!これは勲章物よン!」

「歓迎の割には、随分と余裕はないみたいに見えるわよっ!」
紫の言葉に美羽は拍手をやめて、キセルの煙を吐き出す…。

「…それはそうよん？アタシだって部下に任せるつもりだったしい…アンタら2人と戦うことだって想定してなかったわ」

「大幅に計算が狂いました…全く…スケジュール通りにはいかないものね」

横にいる柚神も不服そうに溜息をつく…

「美羽… 柚神… アンタらね！何で異変側についたのよ!!」

私の言葉に彼女達はバツが悪そうに顔を背ける…

「悪いとは思っているわん… アタシらとしても不服なのよ… 今回の異変の参加はね」

「お互いに最善の策を尽くしました… 結局こうなったけどね」

「元主の師匠の命令よね？」

私の言葉に美羽が驚きの表情を見せるが、柚神の方はそれを想定していたのか笑みを浮かべてまま口を開く

「… 夜喪妓がしゃべってしまいましたか… 口止めしていなかったワタシ達が悪かったのですが…」

「ええ… 一応嫌々だとは聞いているけどね」

「なら… 察しなさいよ… 色々あるのよ…」

柚神が溜息をつくが、聞いておかないといけないことがあるわ！

「… 何でアンタらのような実力者が今回の自身にメリットもない異変に参加したのかしら？部下達も嫌々と参加したみたいだし… アンタららしくないわ!!」

「それは… ねえ？はーあ…」

美羽達は深く溜息をつく… 何とか帰りたいオーラを出しているわ… 何とかやる気がないというか…

「何よ… その溜息… 参加した割にはやる気が見えないわ」

「それはそうよん紫… 前にも言ったけど今回の事はアタシらとしても不服なの!!天狗が関わっていないとはいえ!!組織にバレでもすれば始末書が増える案件よ!!デメリットしかないし！アタシとしてはお仕事が増えるのは嫌なのよん!!」

「もつとも今回の件はレアケース… ワタシ達は運命に巻き込まれた

に過ぎません…」

「… 毎乃葉… アンタらしくないわ… アンタの性格からして今回の異変は不服なのでしょう？アンタなら逆らってもおかしくは…」

「物理的に今回の事は無理なのよ… アタシらは敷かれた運命のレールから外れることはできないのよ」

彼女達は肩を竦めている…

「運命のレール？」

「… 物の例えよん… アタシの主から言われたの… (毎乃葉…

××様の命は絶対だ)とね？」

××… それが主の師匠の名前かしら？随分と発音しにくい名前だけど…

「随分忠犬なのね？… 貴女のことなら平気で破りそうだけど？」

「無理よ… 主の言葉は絶対に避けられないわん!!」

「… あの方の命令は絶対… 約束された運命なのですよ」

彼女達は顔を青くしている… ただの口約束でここまで言う事を聞くのもおかしいわね？怯える程かしら？只の命令だというのに…

「アンタらなら命令に逆らっても別に大丈夫だと思うけど？」

「永琳様に逆らう事を見こされて！主に保険を掛けられたのよ!!! (お前は絶対に逆らうから念には念を) って!!」

彼女達は子供みたいに駄々こねている… ボロを出したわね…

××の本名は永琳… 柚神がいるというのにお粗末ね… しかし…

その主というのも気になるわ… こんな問題児を鶴の一声で大人しくさせるなんて…

「もしかして… その主の能力で縛られているのかしら？」

「…!?!」

紫の言葉に彼女達は口を閉じる… ビンゴみたいね… 分かりや

すいわ…

確かに何かの能力が作用しているなら彼女達でも言う事聞かざるを得ないわね… 何の力か分からないけど…

「ふう… 話過ぎたわねン… 時間が惜しいし始めようかしら？」

「ええ… とりあえずやらないといけませんし」

彼女達は紫の言葉に返答せずに戦闘態勢になる…

「ちよつと… ゆかりんの話を無視しないでよ」

「お話は終わりなのよン!!これからはお仕事に入らないといけないわン!!」

彼女達の主の事は気になるけど、やる気になってしまった以上やるしかないわね…

「紫… 話を聞くのは彼女達を倒した後よ… 今は倒すことに集中しなさい」

「うう… 仕方ないわ」

私達がスペルカードを取り出すと、柚神が笑みを浮かべる。

「ふふふ… もしかして勝つ算段でもあるというのかしら？」

「少なくとも私と紫は過去に美羽に勝っているわ!今回アンタと一緒に居ても何とかなるわ」

確かに彼女には勝っている… 強力な能力を持っているみたいだけど、性格が災いしてか彼女は足元を掬われることが多いわ… 今回は柚神がいるけど、逆に彼女は戦闘専門では無い分何とかなるわ…

「キー!!!むかつくー!!!」

美羽はハンカチを出して噛んでいるが、柚神は笑みを崩さない…

「ふふ… 面白いわ… でも、ワタシの前では、なす術もなくなるわ… 妨害戦術（スペル・ジャマー）」

柚神がスペル宣言すると、柚神の周りにある画面が赤く点滅し、辺りにけたたましい音が鳴り響く!!?

「な… 何よ」

「アラート音… 何かの警告かしら？」

「貴女の今後に対する警告ですよ… 邪魔をするのはワタシの十八番

なので…」

柚神の周りの画面に使用禁止という文字が現れ、画面が次々と増えていく…

使用禁止：夢想封印

使用禁止：二重結界

使用禁止：夢想転生

使用禁止：弾幕結界

使用禁止：八雲藍

使用禁止：ブラリ廃線の旅

「一通りの大技は使用禁止にしました… これでこちらの勝率が上がったというものです」

「使用禁止？」

よく見たら… 柚神の画面に書かれているのは私と紫のスペルカードのことじゃないの!!使用禁止って… まさか…

「… こんなのハツタリよ!!夢想封印!」

…

試しに夢想封印を放ってみたけど… 全く力が使えない…

「… 嘘」

「言ったでしょう?ワタシのスペルカード、スペル・ジャマーは対象の技を一時的に使用禁止にすることができます…」

技の使用禁止?柚神の能力は良く理解していないけど… 妨害するのに長けているみたいね… これはやられたわ…

「おほほほほー!!よくやったわ柚神!!!このままチェックメイトしちゃいなさいよ!!」

「… 荒事は貴女の役目ですよね？… ワタシは忙しいのです」

「… それもそうね♪バックアップを宜しく♪」

美羽はご機嫌な笑みを浮かべて、こちらへ来るが対照的に紫は不機嫌そうに彼女を睨んでいる…

「… やってくれるじゃないの… 見事に反則技を使ってくれたわね」

「今回は本気で悪いと思っっているわ… だから本気で戦わないだけ、ありがたいと思いなさいよ♪… まあ… 睡煉の方は関係ないかもしれないけど… 可愛い部下が倒されちゃったし、アタシとしてもムカついているのよね…」

美羽は体から靈力を放出させながら地面を踏み砕き、力を増幅させていく…

… 柚神の妨害をされながら美羽の相手とは… これは厳しくなりそうね

「… さてと… 始めるわよ♪部下の仇を取ってあげる！」

美羽は力を放出しながら私達へと向かう!!

ウエポonz・レイドバトル

幻想郷の夜の空に浮かんだ歪な月が照らす竹林にて…

天逆と博麗霊夢と八雲紫の戦いの幕が開かれる…

天逆柚神の妨害戦術により技を封じられた博麗の巫女一行であるが、この状況を逆転できるだろうか？

side 霊夢

「土符（ヴァイオレンス・ウェブ）!!」

美羽が薙ぎ払う動作をすると、衝撃波がこちらへと放たれる！

「っ！」

それを避けるが、衝撃波は辺りの竹を一直線に荒々しく破壊しながら飛んでいく… 避けるのは簡単だけど、威力が高いわ… 防いだりするのはやめておいたほうがいいわね…

「さてさて… どうする〜？ 霊夢？」

私の横の空間が開き、紫が上半身を出す…

「どうするもないわ… 彼女達を倒さないと先に進めないじゃないの」

「倒す以前に技が使えないと、どうすることもできないと私は思うわ…」

紫の言う通り、こちらの技が使えないのは不利な状況ね…

この状況を作り出している天逆柚神は、美羽の後ろで静観している… 戦いに参加する気がないのかしら？

「あああ？ 狙いが甘かったわねん？」

「慢心しないで下さいよ？ 今はこちらが有利なのですから」

「分かっているわよん… ちゃんとして狙い撃つわ！ そおい!!」

美羽が再び衝撃波を放つが、私達はそれを再度避ける…

柚神に注意されているのにも関わらず狙いが相変わらず甘いわね… この程度なら何とかなるわ…

「この状況を変えるには柚神を倒すしかないわね…」

「ならー！私に任せて！」

紫がスキマの中に消え、柚神の背後に現れて光弾を放つ！

「おっと!?」

紫の放った光弾は柚神の肩を掠める…。狙いは良かったけど、ダメージを負わせることにはならないわね…

「むー！…ならー！当たるまで狙い撃ちで!!」

「ちよ!!美羽!!何とかしてください!!」

紫が追撃しようとするが、柚神は美羽の背後へと逃げて距離を取る…

「はいはい…分かっているわよん！」

美羽は紫に向けて衝撃波を放つが、紫はスキマの中へ避難してこちらへ戻ってくる。

「やっぱり駄目だったわ」

「でしようね…」

やはり柚神を潰すことは難しいわね…。本人も警戒しているし、悉く戦闘を避けようとする…。戦闘に関しては美羽に任せっきりのながあるがたいけどね…

向こうを見ると美羽がキセルの煙を吐きながら、眉間に皺を寄せている…

「うーん…中々当たらないわね…。効率が悪いわん…。仕方ないわ…。技を変えようかしら?±符(エアライド・ソニックブーム)」

美羽がスペルを宣言すると、彼女自身が光線の様に飛んでくる！

「さあさあ!!夜喪妓よりアタシの方が速いわよ!!」

「っ!!」

「…」

私達はそれを回避するが、何とか目で追える程度…。さっきの攻撃よりも厄介だわ…

「ほらほらー!!追撃行くわよん!!」

美羽は更にスピードを上げてUターンして戻ってくる!!

彼女の動きを止めなくては！

「夢符（封魔陣）」

私は向かってくる美羽目掛けて大量のお札を放つ…

お札は、みるみるうちに美羽の体にまとわりつき、彼女の体はお札の弾丸と化している…

「… うっとおしいわね… はああああ!!」

美羽は攻撃を中止して、お札を弾き飛ばす… やはり美羽相手を拘束するのは難しいわね…

「もらったわー!」

紫が彼女の僅かな隙を狙ってレーザーを放ち、美羽の肩にヒットさせる… 弱い攻撃だけど、彼女は肩を抑えている…

「… ちっ!!」

「貴女相手だもの… 隙をつくのは当然よ」

「フン… でもこっちだって… アンタらを捕まえたわ♪はあく♪」

ぶ… ぶぶ…

美羽が煙を吐くと、私達の周りの空間に歪みが起きる!?

その歪みは線状になっており、私達の周りを鳥籠のように幾重も取り囲んでいる!!

「… 囲まれたわね」

「おほほほ!!このスペルは只の突撃ではないわ… アタシの高速スピードで裂けた大気層が弾け飛ぶ無差別攻撃!ほらほら!ポーっ」としている…」

「…!?」

辺りを見回すが、逃げられる場所がない!!結界は封じられているし!!どうすれば!!!

「弾け飛んでしまおうよん!!!」

美羽が叫ぶと辺りの空気の層が一斉に弾け飛び、大量の振動波が飛び出してくる!!

… ダメ… 避けられない!!

大丈夫よ… 霊夢…

「!?」

目を開けると、私は美羽の背後に移動していた!?美羽の視線の先には破壊つくされた竹林の地面の光景がある…。さつきまで私がいた場所?

「ゆかりんを忘れてないかしら?」

「紫!」

私の後ろでは紫が抱き着いている…。そう…。彼女のスキマで移動されたのね…。これは柚神の妨害スペルに封じられていないわ…。偶には役に立ったわね…

「霊夢!私をほめてー!」

「はいはい…。良い子!」

紫の頭を軽く撫でると、美羽が私達の存在に気づき、ワナワナと体を震わせている…

「な!!決まったと思っていたのに!余計な事で水を差さないでもらいたいわ!!」

「貴女達がそれを言うのかしら?妨害行為をしている以上…。言われる筋合いはないわ」

「ぐぐぐぐ…。ぐ!!」

美羽は反論できなかつたのか、ワナワナしているだけ…

「美羽!!いつまで時間を掛ける気?このままではいつまで経っても帰れないわよ」

遠くにいる柚神は飽き飽きとした表情で声を荒げており、美羽はそ

れに反応する…

「五月蠅いわね!!!アンタも協力しなさいよ!!」

「ワタシはこの維持で精一杯なのよ!!!」

何やら喧嘩しているわね… 本人たちは自分自身なのに… こうしてみると、一人芝居をしているような錯覚を覚えるわ…

「全く… チームワークが良いようで悪いわ…」

「…」

「紫?」

紫の方を見ると、彼女はいつもの胡散臭い笑みを浮かべている… 心なしか余裕が出ているみたいね?

「どうしたのよ?」

「ふふ… 見つけたわ… 彼女達の妨害戦術の穴をね…」

… 戦術の穴?

柚神が妨害して、美羽が柚神に被害が出ないように立ちまわる戦術だと思うけど、どこにそんな穴があるというの?

「どういうこと?」

「まあ… 見てなさい… 彼女が完璧ではないことを証明するわ…」

貴女にも協力してもらおうわよ?」

紫は私にあることを耳打ちして、彼女達の方へと近づいていく…

「あら?何か良いことでも思いついたのかしらん?」

「この状況を逆転できる方法はないと思いますけどね?」

「虚勢を張っているのも今のうちよ每乃葉… 貴女自身が分かっているのでしょうか?この作戦の穴をね」

紫の言葉に彼女達の顔から笑みが消える…

「何を企んでいるのかしら?やはりアンタは油断ならないわ!消し飛ばせてあげるわ!!!」

美羽が高速で紫へと飛んでくる!

「今よ!!美羽を捕縛して!!」

「夢符（封魔陣）」

紫の言葉通り私はスペルを再度発動する!!

紫からの指示は……美羽の動きを少しの間だけ止めておくこと……紫が何を考えているか分からないけど私は私に出来ることをするま
でよ!!

大量のお札は美羽を再度包み込んで彼女の動きを止める……

「またこれ!?うっとおしいわね!!この程度アタシを止めることなんて……」

美羽は先ほどと同じようにお札を弾き飛ばす……

紫が至近距離にいることも知らずに……

「なっ!?!」

「この作戦の弱点は美羽!貴女よ!!」

紫は美羽を背負い投げして、地面に叩き付ける!

「ごほ!!……この程度でこのアタシが倒れるとでも……っ!」

美羽は体勢を整えようとするが、彼女の眼前にスキマが開かれる……

「ゼロ距離なら……貴方でも避けられないでしょう!!」

ばしゅ!!ばしゅ!!

スキマから容赦ない光弾が発射され、美羽にクリーンヒットする!!

「ぐああ……」

美羽はそのまま後ろ向きに倒れ、動かなくなる…

「美羽!!あのバカ!!!油断して!!!」

「残りは柚神のみ!!紫!!」

私は無防備な柚神へ追撃しようとするが、紫が手で制す…

「!?」

「これで私達の勝ちよ… 每乃葉」

勝ちつてどういうこと?まだ柚神が残っているというのに!!

「… 勝ち… つて?」

「ぐ… ぐうう!!!」

柚神は顔を真っ青にしながら爪を噛んでいる… 何なの?妙に焦っているみたいだけど?

「どういうことよ… 紫?」

「もう… 彼女は詰んでいるのよ… 変に小細工をするから自分の首を絞めてしまったのよ… 策士策に溺れるとはこのことを言うのかしら?」

「小細工つて… 技の使用禁止かしら?それが何で…」

紫は溜息をつく…

「はあ… 鈍いわね… 柚神は私達の技を封じるためにスペルカード(スペルジャマー)の維持を続けなくてはいけないの… 攻撃役の美羽が倒れた後… 彼女に攻撃手段はないわ… 能力を解除しても、彼女1人では技を取り戻した私達に勝ち目はないわ」

「… あ」

… 確かに柚神の奴… 攻撃に参加していなかったわね… あれは戦闘に参加する気が無いのではなくて出来なかったのね… 美羽が倒れた以上… 彼女にこの状況を変える力が残っていないというわけか…

「ぐ…ぐ…」

柚神は目を泳がしながら爪を噛み続けている… 必死にこの状況を変える方法を考えているみたいだけど… 紫の言う通り詰んでいるみたいね…

「さあ!!どうするのかしら!!散り際を決めなさい!天逆每乃葉!!!」

「…」

紫の言葉に柚神は爪から流れる血を舐めながら俯く…

「本気を出していないとはいえ… このアタシが!!!またも敗北を決してしまふなんて!!!何てザマよ!!!あの方に認められた!!このアタシが!!!」

柚神はスペルカードを解除し、彼女の周りにある画面が一斉に消滅する…

それと同時に私の体に力が戻ってくる…

「調子が戻ったわ」

「私もね… とりあえず… 引導を渡す役目は霊夢に譲るわ」

紫は私を前に押す…

「屈辱よ… このアタシが… ここまで… あああ… あははは!!」

柚神は完全に自棄になっているわね… 理由はあつたみたいだけど、せめて… 後が引かないように一発で終わらしてあげるわ!!

「神霊（夢想封印）」

煌めく光の弾が柚神に向かい彼女を包み込み…

「…」

彼女の笑い声が消えて竹林に静寂が訪れる。

存在意義

迷いの竹林にて、異変に加担した天逆美羽・天逆柚神を倒した博麗霊夢と八雲紫の2名…

彼女達は、夢想封印で発生した爆発により、深い煙が舞っている竹林を見つめている。

心の中では倒したと確信している霊夢ではあるが、相手は強力な能力を持つ天逆…そんな簡単に倒せるはずのない実力者である以上、気が抜けない状況が続いていた…

side 霊夢

「…」

私達の前には、煙が舞っている竹林の光景…柚神の笑い声が聞こえなくなつたから、手ごたえはあるけど油断はできないわ…

「心配する必要はないわ…確実に倒したはずよ…流石の天逆でも…貴女の術に耐えられるわけじゃないもの…」

「それはそうだけど…」

次第に煙が晴れ始め、竹林の光景が映る。

目の前には、天逆柚神も美羽も消えており、その代わりにボロボロの姿で蹲っている、本来の彼女達の姿の天逆每乃葉がいた…

「はあ…はあ…」

息絶え絶えだけど、左右の緑と青の瞳は鋭いまま私達も睨みつけている…気絶までは行かなかつたみたいね…流石というべきかしら？

「あら？意外にも頑丈ね？直撃だったから気絶したと思っていたのだけれど？」

「…美羽と柚神はアタシの半身達よ…完全に直撃した柚神の方とはとかく…美羽の方は…ある程度余力があつて良かった…ごほ!!」

毎乃葉は口に手を当てて咳き込む…。流石の毎乃葉でも、私の夢想封印を直に食らえばこうもなるわね…

「頭は冷えたかしら？先に進んでもいいわよね？」

「…勝手にしなさいよ…敗者には構っている暇はないでしょう…」

毎乃葉は意気消沈でもしたのか…。竹に腰掛けてキセルをつけてうつむいている…。随分としよげているわね？それに…。何だか自棄になっている気がするわ？

「霊夢？先に行くわよ？」

「…少し待って」

私は先に進もうとする紫を止めて、毎乃葉へと近づく…

「何？まだ何か用なの？もうアタシは…。これ以上何もしないわよ…」

「ここで燻っている暇はないでしょう？アンタも来なさいよ…。今回の異変は嫌々だったのでしょ？このまま負けっぱなしでいいのかしら？」

私の言葉に毎乃葉は諦めたように笑みを浮かべている…

「勝つ見込みがないのよ…。このアタシは…。永琳様に逆らうことなぞ、永遠にできないのよ…。あの方の能力で運命を変えられてしまった以上…。アタシは抗う事なんてできないの…。完璧兵器には程遠いわ…。あの方に認められたことだけが…。アタシの存在意義なの…」

卑屈になっているわね…。毎乃葉の主の能力は分からないけど、彼女がここまで諦めに入るとなると相当強力なものなのかしら？

「運命は変えられるわ…。自らの未来は自分の手で切り開くことができるのよ」

「アンタはあの方を知らないわあ…。分かったように言わないで欲しいわん…」

ああ!!もう!!卑屈になったらなったで面倒ね!!

「アンタ!!完璧な兵器なのでしょう!!私はアンタの実力は認めているのだから!!」

「!?!?!?!?! え?」

毎乃葉は驚くように私を見つめている?なんというか?少し元気になったみたいだけど?

「認めて... くれるの?」

「は?何をよ!?!」

「アタシの事... 認めてくれるのよね?」

何か様子が変わったわね?... 何でか知らないけど... 思ったこととは言うべきかしら?」

「... アンタの実力が認めているわ... これは嘘ではないわよ」

「... そう」

毎乃葉は後ろを向き、体を震わせた後、煙を吐いて私の方に振り向く...

「悪かったわね... これからアンタ達を全力でサポートするわ...」

「... ?ええ... 頼むわよ」

「まさか... 霊夢が説得するとは思わなかったわ... 貴女にしては珍しい事をするわね」

紫が私の横に来る。

「気まぐれよ... 次行くわよ...」

「気まぐれねえ... 確かに毎乃葉が入ってくれたら異変が楽になるけどね...」

私達が話していると、毎乃葉が竹林の奥に進み始める。

「永琳様の所へ案内するわん... ついてきなさい!」

さつきとは打って変わって毎乃葉がイキイキとしているわ... 何がそんなに嬉しかったのかしら?」

「足は引っ張るんじゃないわよ?」

「五月蠅いわねえ... これからは本気で行くわ... アンタの言う通

り、自らの運命は自分で開く…。」

ぼん…

鈍い音がしたと思ったら… 私達の前を歩いていた每乃葉の姿が消え、そして変わりに大きな落とし穴が一つ出現する。

「いやあああああああ!!!へふ!!!」

そして… 穴の中から每乃葉の悲鳴と派手な落下音が響く…

…これが彼女が言っていた運命に逆らえないという事なのかしら？

私と紫は落とし穴の淵にしゃがみ込み中を覗く…

深い穴の中では、痛みに悶絶している每乃葉の姿があった…

「…た… たす…。」

「霊夢…。」

「分かっているわ… これからも前途多難ね…。」

「これからの道が大変ね…。」

運命とは時に厳しいわん

欠けた月光が照らす迷いの竹林の景色にて…

竹林にある永遠亭の外では、八意永琳が夜空を見ながら溜息をつく… 第0部隊の全滅、そしてリーダーである天逆每乃葉の反旗には彼女は気づいていた…

彼女は自身の頭脳をフル回転させ、策を練る… 大切な者達との未来を繋ぐために！

side 永琳

「… 每乃葉… まさか貴女が齒向かうとはね」

正直彼女の性格からして、あり得る事とは思ったけど… まさか本当に齒向かうとは思わなかったわ…

… 彼女には、あの子の能力が効いている… この行為はデメリツトしかないと彼女も理解しているというのに… どういう風の吹きまわしかしら？

何か… 彼女の意志を変えることでもあったのかしら？

「師匠〜！本当にこれで大丈夫なんですか？」

「うどんげ… 貴女は貴女の仕事をしなさい… それ以外のことを気にする必要はないわ」

私の後ろには、不安気に私を見つめている鈴仙・優曇華院・イナバの姿がある…

こちらの戦力がない以上、彼女にも戦ってもらわなければならないけど心もとないわ…

幾ら月で戦いの経験のある彼女とはいえ、第0部隊と天逆を倒した幻想郷の住民に勝てるかどうかは微妙なところね…

「あと… うどんげ… 悪い知らせよ… 天逆每乃葉が反旗を翻したわ… 悪いけど次の足止めお願いね」

「わ… 私がですか!？」

うどんげは青い顔をするが、これは仕方ないことよ…

天逆の裏切りは予想外… 第0部隊もフルメンバーだったら、こん

なこと起きなかったとは思うけど…彼女達が居ても少し楽になつたくらい…うまくいかないものね…

「仕方ないわよ…第0部隊も全滅何だから…」

「うう…あの怖いヒト達まで…元々あのヒト達は何ですか!?あんな物騒な傭兵みたいなヒト達！私は月にいた時は知らないですよ！」

うどんげはヒステリック気味に私に質問をする…そういえばこの子には教えていなかったわね…

「第0部隊は…元々存在しない組織なのよ…貴女が知らないのは当然よ」

「元々…存在しない？」

「ええ…第0部隊のメンバーは元々…月の国家に反逆を行おうとした大罪人よ…メンバー全員がリーダーである天逆毎乃葉に倒されて入隊した結果になっているわ…」

「月を相手に!?幾ら何でも無謀ですって!!何でそんなことを!？」

「…うどんげの言う通り、確かに無謀なことね…でも彼女達のそうさせたのも…月なのだからね」

「え？」

うどんげは首を傾げる…この子は知らないみたいね…月の国家の違法なことをね…

「…人造神霊プロジェクト…第0部隊はそのプロジェクトに関わっていたのよ…」

「人造…神霊?それは…一体?」

「…神霊…月の有力者にも何人かは居たと思うけど…その驚異的な存在を人為的に誕生させようとしたのが…このプロジェクトの内容よ…予算との折り合いがつかなくて頓挫してしまったけどね…」

「神を…人為的に?そんなの無茶です!!幾ら何でも…」

「出来たのよ… 短い期間だったけど… 人造神霊は確かに誕生したわ… 彼女達の存在こそが何よりの証拠となるわ」

「そんなことって!」

うどんげは信じられないような顔をするが… 事実なのだから仕方がないわ…

… 実質… 第0部隊のメンバーとはある神霊を元に造られたクローン… 本物には力は程遠いけど、高い戦闘能力を秘めているわ。

「かいつまんで話したけど… それが第0部隊の事なのよね…」

「じゃあ?天逆ってヒトもですか?」

急に天逆の事を言われて私は口を閉ざす… 彼女の事は説明がしにくいわね…

「… 彼女は… 別の意味で違うわね…」

… 天逆も人為的に創られた存在だけど、彼女の場合は特殊過ぎるわ… とある神霊を作ろうとしたら別の存在が出来てしまったという感じだもの…

… おかげで失敗作の烙印を押されて、誰からも相手をされなかったのだから… 初期のあの子はやさぐれていたし、何と言うか可哀想だったわね…

「… 話はここまでにしとくわよ… うどんげ行って来なさい」

「え… でも… 勝てるわけ」

「大丈夫よ… 天逆が貴女に危害を加えることはできないわ… あの子の言葉によって私には逆らえないようになってるもの… 貴女もこちら側だから対象にはなるでしょうね…」

「あの子って… 誰ですか?」

「…」

私はうどんげの耳元でとある名前をつぶやく…

「え?あ… あの方が?」

「そういうこと… だから問題はないわね」

「それなら何とかなるかもしれないね!!行って来ます!!」

うどんげはさつきとは打って変わって意気揚々と部屋を出る…

「さて… うどんげに止められるかしらね？」

一方その頃… 永遠亭近くの竹林にて…

博麗霊夢十八雲紫と途中参加の満身創痍の天逆每乃葉が永遠亭に向かう…

敵は少なく、スムーズに進む道ではあるがそうもいかない… 待ち受ける罠の数々が彼女達を待ち受けていた…

落とし穴に落ちた回数×9・ブービートラップに引つかかった回数×10・金タライが直撃した回数×8…

全てピンポイントに每乃葉が被害を被る結果になってしまった… 運命に逆らうのは、容易いことではないということなのだろう… 苦難の数々が彼女に降り注いでいた。

そして身も心もすり減らした彼女が歩を進めた先には、誰かが捨てたであろうガムが地面に落ちており、彼女はそれを踏み… そしてとうとう崩壊する…

side 霊夢

「もう嫌あああああああ!!」

自分のブーツの底を見た每乃葉が膝から崩れ落ち泣き叫ぶ…

とうとう崩壊したわね… 先程から色々罠にかかっていたし…

「每乃葉… 先に進みなさいよ」

「嫌あああああ!! やっぱりアタシは!! 運命に逆らうことなんてできやしないわあ!!! あの方の言葉には逆らうことなぞ出来ないのよンー!!!」

每乃葉の目から噴水の如く涙が流れている…

さっきの威勢はどうしたのよ… いつもとは違って一気に弱気になっただわね？

でも… 每乃葉に障害が起きているのも、また事実ね…

さつきから毘にかかっているのは每乃葉本人のみ…彼女に何の能力がかかっているかは分からないけど、彼女の言う通り運命に悉く嫌われているみたいね…

「霊夢…每乃葉を置いて先に進んだ方が良いと思うわ…このままでは何と言うか…」

紫も苦言を発する…

足手纏いと言わなかっただけ、彼女の有情なのかしら？でも…彼女の實力を考える限り、足手纏いということはないわね…

「待ちなさいよ…置いていくこともできないわよ…」
私はザメザメと泣き叫んでいる彼女に近づく…

「ほら…泣いている暇はないわよ…」

「だってー!!!」

每乃葉は子供のようにくずついている…こうして見ると、實力は兎も角…中身は子供みたいね…

今考えてみれば、所々子供っぽい所があるし…

「アンタ…自称最恐の完璧な兵器なのでしよう？こんなことで挫けてどうするのよ？それじゃあ認めてもらうのは…」

「嫌あああ!!アタシをもつと認めてよ!!!」

每乃葉がピタリと泣き止む…

その顔は青くなっており、どことなく恐怖を感じているみたいだ…

…何となく每乃葉の扱いも分かって来たわ。

認める…という言葉に彼女の過剰に反応しているのは確かね…さっきの話の時だって何で急に心変わりして私達に同行したのか、理由はこれみたいね…

「承認欲求の塊ね…」

紫がつぶやく…

「承認欲求？」

「…簡単に言うとは者から認められたいという欲求が每乃葉は強い

みたいね… 彼女の過去に何があったか分からないけど、余程寂しい
思いをしたのじゃないかしら？」

他者から認められたい… か…

「… 每乃葉… 立ちなさいよ… まだ終わってはいないわよ」
「うう…」

泣き止んだものの每乃葉は、不安気に辺りを見つめている…

「運命に勝つんでしょう？これ位でへこたれてどうするのよ？」

「…」

「アンタが完璧ならそれを証明しないと!!」

私は彼女の背中を押す…

「待って… って!!」

每乃葉が踏み出した先には、大きな落とし穴が開ける！

落ちそうになる彼女ではあったが、体勢を変えて何とか踏みとどま
る…

「… あ… 危ないわね!!アタシではなかったら落ちていたわ!」

「だからよ… アンタは今… 運命に逆らったじゃないの!アンタは
運命に逆らう力がある!!怯えていたら異変は終わらないわ!!」

「え?今のが?... このアタシが運命を?... うう…」

每乃葉はキセルを出して火をつけ一服する…

その表情は目を泳がしながら、考え事をしているような顔をしてい
るわ… 必死に頭の中を整理しているみたいね…

「… そうよね!!このアタシがこの程度でへこたれるわけないじゃな
いの!!!おほほほ!!!」

彼女はさつきとは打って変わって高笑いをしている… さつきの
弱気な態度からいつもの強気な態度にまでになるとはね…

「霊夢…」

紫が私に話しかける？

「何?」

「さつき… 每乃葉が落とし穴に落ちなかったから良かったけど、落
ちていたらどうするつもりだったの?」

「落とし穴の件はたまたまよ…今は気にすることはないわ…」
正直…落とし穴は私としても予想外の事だったけど、良いようになつてくれて助かったわ…
このままうまくいけばいいのだけどね…

「待ったー!!!そこまでよ貴女達!!!」
「!?」

竹林の奥から聞こえてくる声に、私達はその方向を見る。

竹林の向こうには、紺色のブレザーを身に着け、薄い紫色の髪をしたうさ耳の少女がいた…

見た目を見る限り、向こう側の者みたいね…

每乃葉も気づいたのか彼女を驚いた顔で見つめている…

「あら?アンタは確か…永琳様の…」

「鈴仙・優曇華院・イナバよ!!!天逆!!!何で師匠を裏切ったのよ!!!アンタこの先にある運命が怖くないの!?!」

鈴仙と名乗る兎は每乃葉に対して苦言を発するが、每乃葉は涼しい顔をするだけ…

「このアタシを認めてくれたから…協力をしただけよん?裏切りも糞もないわ…」

整然と返答している彼女だけど、私が立ち直さなかつたらどうなつていたのかしら?

鈴仙はワナワナと震えている…

「裏切りじゃないの…それにアンタの主の○○様は!!」

「主は関係ないわよん?…それ以上余計な事を言うなら…アタシも手を出すことになるわん!」

每乃葉は私達を見つめる。

「この子アタシがやるわ… 先に行つてて頂戴…」

「… 頼んだわよ」

「すぐに終わるわ…」

每乃葉はそれだけを言うと言つて鈴仙の方を向く…

… ここは任せた方がいいかしら？ 幾ら每乃葉とはいえ、この子に苦戦は強いられないでしょう…

「紫… 先へ行くわよ」

「ええ… 時間は無いわよ」

私達は、彼女達を置いて先へ進む…

任せたわよ… 每乃葉…

side 每乃葉

「あ… 他の行っちゃった」

「…」

靈夢達は永遠亭へ向かうみたいね… それは結構よ… 残りは任せたわ

玉兔は追いかける気はないみたいだし、あくまでアタシの足止めだけに来たのかしら？

少々お粗末だとは思うけどね…

「… ふう」

… しかし… このアタシも少々崩壊しすぎたわね… 色々弱い所を見せてしまったわん…

認めてもらいたいのには事実だけど、心の中に閉まっておくべきだったわ…

「まあいいわ!! 来なさい!! 每乃葉!! 今の貴女だったら私で充分よ!! か

かって来なさい!!」

玉兎は自信気に何か言っているわ…

… 少々調子に乗っているわね… アタシが矯正してあげようかしらん?

「いいわよお… その代わりに簡単に潰れないで欲しいわね」

アタシは力を放出させて彼女へ向かう。

… 運命ね

この子がアタシに課せられた運命なら… アタシも全力を持ってやらないとね…

… そうですよね? 主?

月の兎

幻想郷…… 迷いの竹林、永遠亭近くにて…… 異変の黒幕の刺客である、鈴仙・優曇華院・イナバが博麗の巫女一行十天逆の前へと立ちふさがる。

最後の妨害ではあったが、時間は余り残されてはいない…… 天逆は博麗霊夢・八雲紫を黒幕の元へと向かわせ、鈴仙と対峙する。

side 鈴仙

私の目の前には、反旗を翻した天逆每乃葉がいる……

他のは永遠亭へと向かってしまったけど、師匠からはコイツを止めおけばいいと聞いていたから問題はないわね……

でも…… 師匠からの話は聞いたけど、このヒトも何かしらの神霊なのよね？ 見た目は天狗だけど明らかに力を持っているみたい……

…… 正直逃げたい

每乃葉はキセルの煙を吐きながら笑みを浮かべている……

「さあ玉兎…… このアタシが相手してあげるのよ？ 遠慮なく来なさいよ……」

挑発のつもりかしら？…… このヒト相手に策も無しに突撃するのは愚の骨頂ね……

力では絶対に勝てないのは確定…… でも私には私の力がある!!
その前に下準備を……

「ふう…… そういうけど、アンタだってあの方の従者をやる前は色々あったみたいじゃない…… 色々とやさぐれていたと聞いているわ！」

私の言葉に每乃葉の顔が歪む……

「なっ!? 何を言ってる……」

「失敗作の烙印を押されたとか？ 随分悔しかったんじゃないの？」

「うう…… ぐうううううう!!!」

彼女は爪を噛んでいる…

こつちも軽い挑発だけど… うまくいったみたいね…

明らかに每乃葉の奴は顔を強張らせているし、動揺が見えるわ… このヒト見た目とは違ってかなり単純みたいなのよね… こういうのが良く効くわ…

「永琳様からの情報かしら？ヒトの過去をバラシタみたいね…」

「ええ… それにやるべきことはやるわよ！アンタほどの実力者を相手するなら当然じゃないの！」

「…ぐ… このっ！玉兎があ!!!」

每乃葉の顔が紅潮し始めている… 確実に怒っているわね… 隙だらけにはなつたけど、これは早期に決着をつけた方がいいかしら？「来るんじゃないの？」

「言われなくてもボコボコにしてやるわよ!!」

每乃葉が飛びかかる！

… 凄い怖いけど！隙だらけね!!

「私の能力の虜になりなさい!!」

私は彼女の目を見る…

「うっ？」

每乃葉は僅かによろめき、彼女の攻撃は私の眼前で空を切る…

効いたわね!!残りは詰めていくだけよ!

私の能力は狂気を操る程度の能力… 簡単に言うとな相手の波長を操って幻覚を見せることが出来る。

これが効くなら私にも勝機はあるわ!!

「どうしたのかしら？私は…」

「成程… 妨害戦術ね… このアタシにはあまり意味がないわん！」

そう言う每乃葉は私から飛びのくが、遠近感が掴めていないのか後ろにあった竹にぶつかる…

「…っ！」

「…効いているじゃないのよ」

動きが鈍いわね!!このまま一気に畳みかけた方がいいわ!

「波符! (赤眼催眠)」

スペルを発動し、每乃葉へと光弾を放つ!!

このスペルは私の得意技!!単純なブレ弾だけど、私の幻術が効いている每乃葉にとっては弾が何重にも見えるはず!!

「ち!!何よ!!このスペルは!!?」

案の定每乃葉は目を凝らして危なげに回避し、私から距離を取る…

普通の奴だったら被弾するんだけど… しぶとい…

「どうかしら? 元玉兔に翻弄される気分は?」

「目が疲れるわね… アンタの弾幕は… バットコンデイションで戦うのはベターではないわん…」

每乃葉は目頭に指を押し当てた後、私を色の違った双眼で睨む…

「あんまり調子に乗らない方がいいわ… 玉兔風情が!!虚偽(ライヤーライヤー)」

彼女がスペルを発動し、体を軽く光らせる…

そして刹那… 彼女が私の目と鼻の先に現れる!!

「な!」

「フーン！」

彼女が指を弾くと小さな振動弾が私の頬を掠める!!!速い!!それに狙いが正確になっている!!!私の幻術にかかっているはずなのに!

私は急いで彼女から距離を取る。

「あら? 狙いが甘かったわ」

「な… 何で!? 私の幻術が聞いていたはずなのに!!」

「おバカさん! いつまでもアンタのお遊びには付き合ってもらえないの

よん!!このアタシにかかれば...この程度の状態異常は簡単に元に
戻すことができるのよね...このアタシの(情報を操作する程度の能
力)があれば...ね♪」

每乃葉のもう1つの能力か...その能力を使って...幻術を受け
る前のコンデイションに戻したのね!!

戦闘向けの能力に...それを補助する能力まで持っているなん
て...ずるい!!

このままじゃ...また幻術をかけても元の状態に戻される...あ
れ?この状態って...まずいんじゃない?

每乃葉は手の骨を鳴らしながら私に近づいてくる!!

「さ・て・と... 作戦とはいえ、このアタシに無礼なことをした兔ちゃ
んにはお仕置きの必要よね?」

「ま... 待って!!幾ら何でも暴力は!!」

「い・や・よ♪調子に乗ったアンタが悪いのよん♪いいから黙って...
消え失せろ!!!」

彼女が掌底を放つと大きな振動波が竹林を破壊しながらミサイル
のようにこつちに来る!!

「どえええええ!!?」

私はそれを避けるが每乃葉は次のモーションに入っている!!

「何発でぶつ飛ぶかしら♪」

また!!大きな振動波が飛んでくる!!

「待って待って!!死ぬー!!!」

私は次々と飛んでくる振動波を避けながら、竹林の奥へ逃げる!!!敵
うはうはがないわ!!

「オーホホホ!!!どこへ逃げるのかしら!?!」

後ろからは高笑いしながら追ってくる每乃葉が!!!あいつ私をボコ
るまで追いかけるつもりだ!!!ああ!!どうすれば!!

「と... とりあえず永遠亭まで戻って... へぶ!!」(ガン!!!)

金属音と共に頭に衝撃が走り私は盛大に転ぶ...

そして目の先には金ダライが転がっている!!

「てるの奴!!!こんなものを仕掛けてー!!!

「オホホ!!これはラッキーね!」

「!?

後ろを見ると攻撃に入ろうとしている毎乃葉の姿が!!

「う…うわああああ!!!」

私は彼女へ向けて弾丸を乱射する!!一発でもいい!!彼女に一矢向くことが出来れば!!

「弾は良く見て撃ちなさいよ…」

「うう!!」

全弾… 毎乃葉に当たることなく飛んでいく!!

「覚悟はいいわね♪痛くしないわ♪」

毎乃葉は悪意に満ちた笑みを浮かべている… この顔は… 痛くするに決まっている!!

「うわああ!!」

私は目を閉じる!!せめて殺さないでー!!

ズボ…

「ふぐおおお!!!」

「!?

何かの異音と毎乃葉の声に私は目を開ける…

目の前には攻撃を中止し、涙目で跳ねている毎乃葉の姿があった…

彼女は自らのお尻に両手を当て… そのお尻の部分には… さつき私が放った私の座薬弾が刺さっている…

「何で!?!当たってなかったのにー!」

彼女の後ろを見ると、1本折れ曲がっている竹を発見する… まさかさつき撃つたのが跳弾して毎乃葉のお尻に!?

「うわあ…痛そう…」

お尻に銃弾はやばいと思う…あの暴君の毎乃葉が半泣きになっているのだから相当だと思う…

でも…これはチャンス!!!

「うわあああ!!!貫け!!!私の弾ー!!!」

私は追い打ちで彼女のお尻目掛けて発砲する!!!

痛みで動きが鈍っている毎乃葉は、避けることが出来ずにお尻に再度被弾し叫び声をあげる!!

「うぎゃあああああ!!!痛い痛い!!!待ちなさい待つて!!!」

懇願するような声上がるけど…攻撃を中止しない!!!これが彼女を倒すチャンス!!

「発射ー!」

駄目押しの一撃が彼女のお尻を捕らえる…

「ぎよええええええ!!!え…え…え…」

叫び声をあげた毎乃葉はそのまま崩れ落ちて動かなくなる…

「…勝った?」

念のため彼女へ警戒して進む…

彼女は私への戦意を喪失したのか…嗚咽を漏らしている…

「ひぐっ!!!うううっ!!!」

まさか…月の兵器を泣かせるとは…少しやり過ぎたかしら…

でも!これで私の仕事は完了!!とりあえず…毎乃葉はどうかになったわ!!!流石私ね!!

「さて!!永遠亭に戻って…師匠にこの戦果を♪」

戻ったら褒められるかな?それは褒められるに決まっている!!私一人で倒したんだもの!!!どんなご褒美が!

ズボ…

「…ふえ?」

下を向くと奈落の穴が…私の体は重力に逆らうことが出来ずに
落下する!!

「てるー!!!ふぎゃああ!!!」

衝撃が走り…私は意識を手放す…

そして…重傷の毎乃葉は…しばらく泣いた後お尻を守りなが
ら身を起こす…

充血した目で辺りを見回した後、彼女は地面に拳を打つ!

「ふぐっ!!…あの玉兎!マジ許さないわ!!どこ行った!!!アタシの拳
骨を食らわしてやるー!!!」

すぐ近くの落とし穴に気づかず…彼女は永遠亭の方へと歩いて
いく…

まだ運命は…進み続けようとする彼女に試練を与え続けてい
る…

彼女は無事にこの異変を終えることができるのだろうか?

欠けた満月の夜に

歪んだ月が照らす幻想郷にて… 迷いの竹林に存在する建物こと永遠亭に急速に近づくものが一人いた…

「待ち受ける運命なんか知ったことではないわ!!! このアタシはアタシよ!! 打倒八意永琳!! うどん!!!」

竹林を猛スピードで走っている者こと… 第0部隊リーダーの天逆每乃葉…

前回… 鈴仙・優曇華院・イナバと戦い、尻に大ダメージを受けた彼女は、怒り心頭で永遠亭に続く道を走っている。

「あのお方の言葉も覆して見せるわん!!! このアタシは！天逆每乃葉様よん!!!」

先程まで運命を恐れていた每乃葉ではあったが、今の彼女には恐れなど存在しない… 恐れよりも先ほど受けた屈辱が勝ってしまった… いた… もはや八つ当たりしたい者を探しているみたいだ…

「わよん!!!」

永遠亭に着いた彼女は飛び蹴りで永遠亭の扉を破壊して中へと侵入する… 完全に今の彼女は復讐の鬼化している…

「どこよ！八意永琳!! うどんなんたら!!! このアタシが纏めて仕留めて…」

彼女が振り向いた先には、こちらへ飛んでくる光弾の数々… そして光弾が出てくる先には幻想郷の巫女こと博麗霊夢が驚愕した顔で彼女を見つめていた…

「每乃葉!!! 射線上に入るんじゃないわよ!!!」

どおおん!!!

霊夢の言葉も空しく… 每乃葉は爆発に巻き込まれて永遠亭の庭へとフェードアウトする…

side 每乃葉

「げほお!!?」

光弾が炸裂しアタシは永遠亭の庭へと叩き付けられていた…

… 永遠亭に入ったと思ったら… 味方に撃たれていたわ!!! 何でこうなったの!?

「つたく!!そこでオトナシクしてなさい!!」

「意外に早かったわね?」

「あら? 每乃葉が戻って来たみたいね…」

霊夢達の方を見ると、彼女達は蓬萊山輝夜と弾幕ごっこ中みたいだ… アタシはあの中に入ってしまっただみたいね…

「貴女が乱入するからよ… 大人しく見ていなさい」

「あ?」

声がする方を向くとそこには八意永琳がいた!!! ターゲット発見!!!

だけど… 今の所為で余力がないわ…

「こら… 反逆者… 一発殴らせなさいよ…」

アタシが立ち上がると彼女は壁に寄りかかったまま息をつく…

「ごめんこうむるわ… 私も余裕はないもの…」

永琳を見ると… 着ている服がボロボロだ… もしかして霊夢達と戦ったのかしら?」

「ふん!! 天罰が下ったのよ」

「… 受け入れておくわ… 今回は貴女達にも迷惑をかけてしまったしね…」

… 随分と聞き入れが良いわね… 気味が悪いわ…

「… それはそうよ… アタシの部下は怪我したし… アタシは怪我と敗北と屈辱を味わったんだからん!!!」

「悪いとは思っているわ… せっかく貴方達の力を借りたのに… この異変は輝夜が負ければ… 終わってしまうわ…」

「輝夜姫がねえ?」

「くらいなさい!!」

「ぐ… まだまだ… って!もう最後のスペルカード?」

向こうの戦いを見ると確かにこちら側が劣勢を強いられているみたいね… これは勝負が見えたわね… 博麗の巫女+aいるとなると戦況を変えるのは骨が折れるわね…

「あの状況をどうにかしろという命令は受けないわよ…」

「そんな無茶は言わないわ…」

永琳は諦めたかのような顔をする… 月の賢者である彼女の頭なら、この状況はいかに無理かを理解できるでしょうね…

「今回は見事にこちらの負けみたいね… 幻想郷の住民を甘く見ていたわ…」

「… それに関しては同感よ」

アタシはキセルに火をつけて観戦する…

本気を出していないとはいえ、アタシも自分の力を過信していた部分はあるわ… 本当にこれに関しては昔からの悪い所ね… 直していかないとまた同じ目に遭うわ…

「そういえば… うどんなんたらは?このアタシを乏した上に… お尻に大変なダメージを負ったからデコピンの一発くらいはやりたいたんだけど?」

「うどんげのこと?いえ?見てないわ?」

あの玉兎もいないのね… これではストレスの発散もできやしない… 何か本当に萎えたわ… 異変には巻き込まれるし、敗北はするし、色々と被害は被るし… 踏んだり蹴ったりよ…

「これが終わったらアタシ帰るわん… やる気もなくなつたし… 傷も癒したいし…」

「その方がいいわ… 輝夜もそろそろね…」

戦っている彼女達の方を見ると、輝夜姫の最後のスペルカードが消滅する…

「あ!?嘘でしょう?」

「これで!この異変は終わりよ!!」

「うげええええ!」

チユドーン!!!

霊夢の一撃が輝夜姫を捕らえ... 輝夜姫が落下する...

やっと... 長かったこの異変に終止符が打たれたみたいね...

「これで完全敗北ね...」

「ふふーん♪... 明日の朝刊が楽しみだわん♪これでアタシの役目も
終わりね...」

永琳は残念そうな顔をするが、アタシにとつてはどうでもいいこと
よ... 異変の後片付けは彼女達に任せましょう... 巻き込まれない
うちに退散するのが一番よ... 短いようで長かったわ... 帰って
シャワー浴びて寝るに限るわ... 明日は予定はないし、傷ついた体を
休めるには丁度いいわ...

「悪かったわね... 巻き込んで...」

永琳から離れようとすると後ろから彼女の声が響く... 謝罪の言
葉かしら?

「... 別にいいわ... 元々使われるのがアタシの役目だもの...」

「私は貴女との関係は悪くしたくないの... そのうちお礼をさせても
らうわ...」

... お礼ね?報酬をもらうのは悪くはないけど... これといって
欲しい物もないのよね?... でも貰える物は欲しいかも

「アタシに対しての報酬かしら?今のところは間に合っているのよね
ン?何をくれるの?」

軽く考えていたのだけど... 次に彼女が発する言葉はアタシの思
考をフリーズさせる...

「望むのならば... また月に戻してあげる... あの子との一緒の生活

に戻してあげられるわ…」

「…は？」

side 永琳

「…どうかしら？」

私は彼女に対して話を持ち掛けるが、毎乃葉は顔を真っ青にして頭を抱える…

「な…何を言っているの!! 反逆者である今のアンタにそれを出来る訳は…」

「出来るのよ…一応はね」

「っ!」

毎乃葉は私の言葉に怯んでいるみたいだ…

彼女の言う通り過去の行いで月に追われる身にはなってしまったけど、でもそれは0%ではないわ…私でもそれを自在に実行できるパイプはあるのよね…

「これは貴女が望むかどうかだけだね？」

「お断りよ!!! 今更戻ったって居場所なんてないわ!!!」

毎乃葉からは即答で断られてしまう…

「良いお礼だと思うけどね? 貴女は月面戦争で戦死しているという身分だし、うやむやになった今密かに戻るのも手よ?」

「い…今更無理よ!!! あ…アタシはあの方の中では死んでいるの!! 今更ノコノコ戻ってくることなんてできないわん!!!」

毎乃葉は怯えるように私から距離を取る…気高い彼女がここまですで怯えるのは疑問になるわね? 何を恐れているのか?

「結果がどうであれ…あの子が…」

「いいって言っているの!!! いいから余計なことをしないで頂戴!!!」

毎乃葉の鋭い眼光を前に私は口を紡ぐ…これ以上は余計なお世

話みたいね…

「じゃあ…これ以上は何も言わないわ…」

「ふう…とりあえず今回の異変はこれで終了でいいかしら？このアタシもそろそろお眠だし…お話はこれくらいにしておきたいわ…」

毎乃葉は疲れ切ったような顔をして翼を伸ばす…

「じゃあ…また今度ね…」

「ええ！失礼するわ！」

彼女は竹林から飛び去り消える…

…まあ…彼女のことは後回しでいいわ…今はこの異変の後片付けをしないといけないもの…

私は勝利の余韻に浸っている博麗の巫女へと向かう。

不老不死の喧嘩騒ぎ

迷いの竹林の異変が片付き3日という時が経過する…

歪んだ月の異変は何事もなく終わり、それといった被害もなく幻想郷は再び平和な日々を取り戻すのであった…

ここは迷いの竹林…

ヒトが立ち寄らない竹林が茂る所ではあるが、美味しそうな匂いが立ち込めていた…

その匂いを辿っていくと、一件の屋台に辿り着く…

屋台は夜雀である、ミステリア・ローレイが経営している屋台…美味しそうな匂いが立ち込める屋台には大きく鶏肉を使った料理はありませんというお品書きが書いてある…

屋台の客にはとある4名の者達がいた。

「ほら！今日はアタシの奢りよ！！じゃんじゃん頼みなさい！！」

「今日は夜喪妓の復活会ですからね… こういうのもいいでしょう」

「ははは！！すまん！同志達よ！！」

「夜喪妓さん！何飲みます？」

そこには第0部隊の天逆美羽・柚神、そして隊員の夜喪妓・睡煉が揃っていた…

今夜はどうやら第0部隊のパーティーが開かれているようだ…

side 夜喪妓

… ああ… 楽しいなこの時は…

かつての部隊のメンバーを見ながら、私はつい笑みを浮かべてしま…う…

もう揃うことは無いと思っていたが… 集まって本当に良かった！

お互い信じられる仲間同士… 背を預けられる数少ない仲間でもある… 昔のように出来て本当に…

「これにしますか？オススメの日本酒ですよー♪」

「ああ！すまん！」

同志睡煉から酒を注がれて私はそれを飲む…

久々だな… 酒を飲むという感触は… 遭難生活は生きるのが精一杯だったな…

毎日の食事がタケノコ… タケノコ… タケノコ… タケノコ… タケノコ…

「… ぐす!!!」

何故か涙が止まらない!!毎日の食事がタケノコ… もう一生分は食べた… 本当に辛かったな!もう!!

「何泣いているのよん?ほら… これで顔を拭きなさい」

同志美羽からおしぼりを渡され顔を拭う…

「すまん!同志!!」

せつかくの会だというのに!主役の私が泣いていては駄目だ!!昔のことは忘れよう!!今を楽しまなくては!!

「… ふう!!夜喪妓復活だ!」

「ふふ!!まだ宴会は終わらないわよん」

「そうですねーワタン達以外は貸し切りですからね」

同志美羽と柚神は麦酒を飲みながら、銀杏を剥いている…

「そういえば… 何故姿を分けている?」

「ん?元の姿だと胃袋1つじゃないの♪姿を分ければ胃袋2つよん!これでなら色んな物が食べられるじゃないの!」

「右に同じく… 力は分散しますが… 唯一のメリットでもありますね…」

「… そうか」

本当に良いリーダーの下につけて良かったな… 私も睡煉も忌梗も… 同志毎乃葉が居なければ遙か昔に朽ち果てていただろうな…

同志がいるから私達が存在するか…

「…」

私は屋台の空席を見る…。そこには1つのグラスに酒が注がれて置いてある…

忌梗…第0部隊の生死不明の残りはアイツだけとなった…。八意の話では死ぬわけがないと言ってはいたが…。心配にはなるな…
「どうしました？夜喪妓さん？」

「… いや？何でも」

同志睡煉は野菜スティックを齧りながら私の杯に酒を注いでいる…

まあ…。一番弱いコイツがいるのだから…。あいつも多分生きているだろうな…

「あら？懐かしいメンバーがいるわね…」

… 突如響く声に私達は動きを止める…。この声は!!
「っ!!」

後ろを振り向くとそこには八意永琳とその使いの玉兔がいた!!たしか麺類に似た名前だった気がするが忘れた!!

「あら永琳様…。貴女も来るとは…」

「あ!!アンタうどん!!よくもアタシらのお尻を!!」

同志柚神と美羽はそれぞれの反応をするが、好意的なものではないな…。それもそのはずだ…。第0部隊が散り散りになったのも反逆者八意のお陰でもあるのだからな!!

「ふん！あれはちゃんとした勝負の結果でしょ？恨まれる筋合いはないわ！」

突如うどんが反論するが、同志美羽が黙っていない…

「あ… アンタ!!!アタシがただけ痛い目に遭ったと思っているのよん!!玉兔風情が… アタシにこのようなことをして良いと思ってるの!!!」

「アンタこそ… 私にそんな口は叩けないわ… 私は月の都の有力者の元ペットだったんだから… あの方の使用人風情にとやかく言う筋合いはないわ!」

うどんの言葉に同志美羽が顔を真っ赤にする…

「この玉兔があ!!!アタシをどこまで乏せば気が済むのよ!!!」

… まずいな… このままでは喧嘩になってしまう… ここは私がまとめるか?

「落ち着け!同志と麺類!!」

「アンタは黙ってなさい!!!」

「ぐう!!?」

両者の一喝により私は口を閉ざす…

何故私が怒鳴らねばならんだ…

パンパン!!!

突如響く手拍子に彼女達の口が閉ざされる…

音の発生源は同志柚神だ…

「はいはい… 討論はそこまで… このままでは話が進みませんよ?

美羽… しばらく黙ってなさい…」

「ううう!!ぐううう!!!」

同志柚神の声で同志美羽が爪を噛みながら俯き、そして八意も麺類の方を向く…

「うどんげ… 貴方も調子に乗らないで… 立場がどうであれ… 今のは失礼よ…」

「うう…」

うどんげと呼ばれた玉兔は黙って後ろを向く… これで話し合い

の場が作られたか…

「で？何です？わざわざ貴女が来たという事は…何か用で？」

「ええ…少し永遠亭が困ったことになってね…貴女達がすぐ近くにいたから来たという訳…」

「困ったこと？異変はもう付き合いませんよ？」

同志柚神の言葉に八意は首を横に振る…

「いえ…そういうのではないわ…うちの姫がちよつとね…」

八意は言葉を濁す…何とか言い辛そうだが…何があったというのだ？

「…ぎりぎり」

同志美羽は黙ったまま、爪を噛みながら不服そうな顔をしている…その眼は早く要件を言えとでも言いたそうだ…黙っているのは同志柚神が黙っていると云った所為か？…仕方ない…代わりに私が…

「要件を言え…同志の血圧が高くなってしま…」

同志に助け舟を出すと、八意が口を開く…

「…姫の因縁の相手が永遠亭に来てね…今2人が喧嘩しているの…流石にも止めるのに骨が折れるから手を貸してもらいたいのよ」

…姫？確か蓬莱山輝夜のことか？アイツに因縁がある相手か…誰だ？

「貴女の戦闘能力で止められると思えますがね？」

「普通の喧嘩ではないのよ…普通ではね…」

ドーン！！！！

近くで爆発音が鳴り響く…何でこんな竹林の奥で爆発音が？

「ひえ！」

音で店主が屋台の下へと潜り込む…

「…こっちに近づいているわね？」

「はあ…巻き込まないで下さい…ワタシ達はここでお食事中だったのですから」

「…!!!」

同志柚神と美羽が抗議するが、八意は涼しい顔をしている…

「私…あの子の師匠…」

「あー！もう!!!何でそれを持ち込むのよー!!!卑怯よ卑怯!!!…少しだけよん…」

同志柚神・美羽がハンカチを噛んで痲癩を起こしながら了承する…

そして私の方を申し訳なさそうに見つめる…

「夜喪妓…ごめんなさいね?…言う事を聞かないといけないみたい…」

「構わん…喧嘩を仲裁すれば良いのだろうか?すぐに終わるだろ?」

私了承すると同志柚神・美羽の体が光り出し、同志每乃葉の姿へと戻る…

「…案内してもらえるかしら?このアタシの部下のための宴に水を差したんだから…後で何か請求してもいいわよね?」

同志每乃葉が憎々し気に八意を見つめるが、彼女は満面の笑みを浮かべる

「ええ!では行きましょう!」

八意先導の下…私達はその場を後にする。

近くの竹林にて…

「輝夜!!!」

「妹紅!!!」

そこでは2人の少女が争いを行っていた…

1人は過去の罪人こと…蓬萊山輝夜…

もう一人は白い長い髪に白のブラウスに赤い札のついたモンペに身を包んだ少女…こっちの方は分からないな…

だが、しかし…輝夜の方は兎も角…何だ？あの少女は…見た限り私達を同じ力を感じる？

「ふうくん？あの子何なのよん？永琳様？」

同志每乃葉も少女の力に気づいたのか、八意を見る…

八意は少女の方を見ながら溜息をつく…

「彼女の名は藤原妹紅…輝夜と因縁の相手と言うべきかしら？」

八意が答えるが同志每乃葉は首を横に振る。

「アタシが聞きたいのはそっちの事ではないわん…何であの子からアタシらと同じ不死の香りがするのよん…」

同志の言う通り、あの妹紅と呼ばれる少女からは私達と同じ不死者独特の力を感じる…だが何であの子がその力を？あれは…八意が作った蓬萊の薬によるものしか考えられない！

八意は肩を竦める。

「私にも分からないわ…確かに私の作った薬によるものだけども…妹紅がどうやってそれを手に入れたか分からないわ…」

製作者でも分からないのか？…だが不死なのは分かった…そしてこの喧嘩も普通のものではないという事も…

「おらあ!!死ねー!輝夜ー!!!」

「ごほお!!!ぐっ…やったわね!!妹紅ー!!!」

「かはあ!!!むきー!!!」

両者の戦いはお互いの急所を捕らえてばかりのものだ…血が飛び、肉片が舞い、鉄の香りがする赤い景色…喧嘩ではない…殺し合いだ…余り見ていて良い気分になるものではない…大分オブラートに包んでいるが、一般人がこれを見たら卒倒するだろうな…

同志每乃葉はハンカチで口を押さえている…

「うう… スプラッター… さっきまでアタシら… ごはん中だったんだけど…」

「悪いとは思っているわ… でも止めなくては貴女達も被害を被ったかもしれないのよ?」

彼女達は目の前の殺し合いを静観している… 割って入る者ならば、下手をすれば自分が巻き込まれるだろうな…

「… はあ」

私はキセルに火をつけて眺めることにした… 止める気が全く起きない… この殺し合いの終わりが見えないと判断したに過ぎない… どっちも不死… 受けた傷は瞬く間に回復しているし、決着がいつまで経っても見えないのが明白だからだ…

「夜喪妓さん? どうします?」

「見ているだけでいいだろ? 奴らは兎も角、私達の方は完全な不死ではないだろ?」

私は同志睡眠を止める… 流石の不死崩れの私達でも命が惜しいのも事実… ここは完全な不死である八意に任せるのが良いだろ?

「はあ… 仕方ないわねン… アタシが止めに入るわよン…」

何故か… 同志每乃葉が前へ進む!?

「本気なのか! 同志!」

「アンタの宴が途中じゃないの… さっさと終わらせて戻るわよン… 大丈夫よ… このアタシ一人でいいわ」

同志は頭を掻きながら彼女達の下へと向かい… 割って入って来た同志每乃葉に彼女達も気づく…

「あ… 貴女… 每乃葉!」

「何だこのヒト!?!」

「喧嘩を止めに来たわ… アンタ達いい加減になさいな… 近所迷惑

よ…やるなら誰もいない所に行きなさいよ…」
同志が苦言を発す…

「邪魔をするな!!!」

何故か2人は激昂する!?

「引っ込んでなさい!!」

「へぶ!?」

輝夜がどこからか持ってきた金色の板で同志の頭を殴る!!!

「焼けこげろ!!!」

「熱い!!!」

続いて妹紅の方が、炎を同志に飛ばす!

同志每乃葉のお尻に火が着き…同志は転がりながらこっちへと

戻ってくる…速い帰りだったな…早くもズタボロだ…

「早い帰りだったわね…」

地べたの這いずっている同志に八意が冷たく言い放つ…

「ぐぐぐ!!!」

同志每乃葉は立ち上がり、お尻を擦りながら爪を噛んでいる…

…不味いな?同志が爪を噛んでいる時はブチ切れる一歩手前の

サインだった気がする…このままでは…

ブチ…

「…ふ…おほほほ…全く世の中暴力で解決するしかないことだらけね…あのおバカ二人に教えてあげようかしら?本物の暴力というものをね…」

同志每乃葉は鉄扇を取り出す…

目が笑っていないな…これは…同志の本気が見られるかもしれないな…

「巻き込まれるな…：下がった方が身のためだ」
私は後ろに下がり、ボーっとしている同志睡煉と八意・うどんげに注意を促す…：

同志每乃葉は鉄扇をブラブラさせながら再度彼女達の方へ向かう…：

「ん！また来たの每乃葉!!」

「おい！天狗!!私達の邪魔をするな！」

「ほほほ…」

同志は不気味な笑みを浮かべた後、目を見開く

「無礼者の愚者どもが!!^上符（龍牙鉄扇波）」

同志每乃葉が叫び鉄扇を振ると、衝撃の波が彼女達の体をいともたやすく巻き上げる！

「…は…」

二人は何が起きたか分かっていないみたいだ…：気づくのが遅すぎるな…：怪我で済むといいんだが…：

無防備に巻き上げられた二人を見て同志每乃葉が笑みを浮かべる…：

「ほらほら…：ボーっと浮かんでいる暇なんて無いわよ…：こんな風にねん!!」

彼女が鉄扇を振ると、光弾と振動波が反射しながら彼女達へと向かう!!

「げほ!!」

「かはっ!!」

まずは輝夜が振動波に被弾…：次に妹紅だ…：きついのが一発か…：

大量の光弾は彼女達の上へと通過するが…：同志は立てた親指を下へ向ける…：

「このアタシにひれ伏せ!!」

同志が言い放つと宙に舞っていた彼女達が強力な重力に従い落ちてくる…

「え？待って飛べない!？」

「そんな何で！体が重…」

ズドーン!!

彼女達は地面へと落下するがまだ終わらない…

まだ…宙へと飛んだ大量の光弾が強力な重力と共に雨の如く彼女達へと降り注ぐのだから…

「待って!!私達が悪かったわ!!」

「すぐに他でやるから勘弁して!」

彼女達から命乞いのような悲鳴がするが、同志每乃葉はそれを見て満面の笑みを浮かべている…

「む・り！幾らこのアタシの力を持ってしても…止めることは出来ないわねン…ほほほ…」

「いやあ!!!」

ドーン!!!

同志每乃葉が鉄扇を閉じると、宙の光弾が彼女達へと降り注ぐ…

「…けほ！全く…相変わらずだな…」

目を開け、目の前の光景を見つめると、そこにはズタボロの状態で気絶している輝夜と妹紅の姿…

同志每乃葉はキセルに火をつけながら、こちらへと来る。

「終わったわ…これで良いかしら？永琳様？」

「…ご苦労様ね…每乃葉…うどんげ…輝夜をお願い」

八意はうどんげに指示をし、うどんげは気絶した輝夜を担ぐ…

「じゃあアタシに戻りますわ…」

「ええ…： ありがとうね…： お礼の方はまたの機会にやらせてもらうわね」

八意・輝夜・うどんげが竹林の奥へと消える…

同志は彼女達を見送った後、煙を吐きながら、私と同志睡煉を見る…

「さあ…： 宴に戻るわよん！お腹空いたし♪」

「はいはい！行きましよう!!」

同志たちは屋台へと続く道を歩いていく…

「…： しかし…： 彼女は どうする？」

私は遠くで倒れている妹紅を見る…： 幾ら不死とはいえ放置はできないだろう…： かと行って彼女が住んでいる場所も知らんし…： どうすれば？

「さて…： 私はどの選択をすれば…： ん？」

気配を感じ、私はその方向を見る…

「妹紅…!!大丈夫か!？」

竹林の奥から何かが飛び出し、妹紅を守るように立ちふさがる…： 緑色のワンピースのような服に身を包み、白い長い髪をした女性…： その人物は私の姿を見て目を見開く…

「お…： お前は確か!!」

「…： ああ…： あの時以来か…」

よく見たらこのヒト…： 異変の時に私を手当てしてくれた人里の守護者ではないか…： 確か…： 上白沢慧音とか言ったか？

「夜喪妓か…： 何でお前がここにいるんだ？まさか！お前が妹紅を！」

彼女は私を警戒するように見つめている…： おいおい…： 冤罪は困るぞ…

「勘違いするな…： やったのは私ではない…： 輝夜姫と喧嘩をしていたから私の上司が喧嘩を止めたまでだ…」

「輝夜姫と喧嘩？本当か？」

「嘘を言っただけでどうする？それにだ…あまり殺気を出すな… 幾らお前が人外の力を持つていたとしても、私に敵うはずがないだろう？」
「な!？」

慧音は驚くように体を震わせる…彼女の体にはとある特徴がある…牛のような2本の角が頭に生えており、尻にはフサフサの尾が1本…見ただけで分かる特徴だ… 先天的か後天的かの違いまでは分からないが…

「お前の体の秘密は兎も角… さっさと彼女を安全な場所へ連れて行った方がいいぞ… 幾ら不死とはいえダメージが大きいだろう…」

「…」

慧音は私から視線を外し気絶した彼女を背負う… 私は彼女に傷薬を渡す…

「少し強力なものだ… 量には気を付けろ」

「… 恩に着る」

「礼はいらん… あの時の手当の礼だ取っておけ…」

彼女は私に頭を下げ竹林の中へ消える…

「まさか… 半妖だとは思わなかったな…」

竹林の中… 私はキセルに火をつけて夜空に浮かぶ月を眺める…

この世界は何でもありだな… 妖怪に月の民・同志を倒した人間までいる… ある意味興味の尽きない世界ではあるな… ふふ… 竹林で数百年を無駄にした… か… その分を取り戻さないと…

「ふふ… それに第0部隊が完璧に戻るのも… そう遠いものでもないな…」

「おーい！夜喪妓さーん!!何をやっているんですかー!？」

遠くで私を呼ぶ同志睡煉の声が聞こえる…

「すぐに行くー！待っているー!」

… これからは頼もしい仲間と共にこの世界に住むんだ… 楽しい生活になりそうだ… 同志忌梗よ… お前が戻ってくるのを待っているぞ…

私は同志たちがいる屋台へと向かう…

神社にて

とある日… 博麗神社にて…

「れ… 霊夢… どういうことよん…」

「おい… 嘘だろ？」

「あらら〜？これは酷い…」

そこには顔を真っ赤にし、涙目で訴えている天逆每乃葉の姿と後方で青い顔をしている睡煉・夜喪妓の姿があり、彼女達が見つめる方向には、神社の縁側で座りながら笑みを浮かべている博麗霊夢の姿があった…

「何って… アンタらのお仕置きみたいなものよ？この前の異変で、私達を妨害したんだから当然じゃないの…」

「だって！あれは仕方がないことなのよん！！大体このアタシが体を張って最後の方は戦ってあげてじゃないの！！幾ら何でもこんな仕打ち嫌よ！！」

「駄目！私が決めたから！」

每乃葉は抗議するが、霊夢に一蹴される…

「お… おい… 何故同志だけでなく私達まで？幾ら何でも… 上司の命令に従っただけ… 関係ないし…」

「そうです！！部下の責任は上司が取るものですよ！！」

夜喪妓・睡煉が苦言を漏らすと每乃葉が彼女達を睨む…

「夜喪妓！！睡煉！！アンタ達！このアタシを売る気なの!？」

「夜喪妓・睡煉！アンタらは連帯責任よ!!」

霊夢の一喝で夜喪妓達は肩を落とす…

「ぐう!!!」

「あはは… 笑うしかありませんね… この状況は…」

彼女達の視線は縁側に置いてある物に注がれている…

ど…これは年相応ではないわ…それにこのアタシがこのような仕打ちを…」

「文句言わない!!」

毎乃葉はブツブツと不平不満を言うが霊夢が一蹴する…

「丈が短いぞ…このままではパンツが見えてしまう…」

「細かいことは気にしない!!」

夜喪妓の愚痴を霊夢は一蹴する…そして霊夢は残された睡煉を見る…

「アンタの方は何か不満でも!？」

「あははは…特にないです…」

「良し!!なら境内の掃除から頼むわよ!!」

そのまま霊夢は、神社の中へと消える…

残された3人は、大人しく箒を持って境内の掃除を開始する…色々と言いたいことはあつただろうが、決まってしまったことは仕方がない事だ…

「…掃除何て…あの方に仕えていた時以来よ…」

「…同志はまだ経験があるから良いだろう?私は生まれてこの方掃除かやつたことがないぞ!!」

「いやいや…夜喪妓さん…胸を張って言えることではないですからね?」

不平不満を言う2人に対し睡煉は黙々と塵取りでゴミを回収していく、何やかんやで真面目であるのがこの子である…

「落ち葉は一か所に集めて下さーい!!私が回収しやすいですからー!」

睡煉は2人に指示をする…

「はいはい…」

「何でお前は真面目なんだ?」

1時間後…

渋々2人は落ち葉を一か所に集めていき… 境内に大きな落ち葉の山が完成する…

「やればできるじゃないですか！御2人方！」

「当然よ… 残りはアンタが回収なさいよ!!」

「とりあえずこれで終わりでいいだろ？睡煉… 早く回収しろ…」

夜喪妓が睡煉を急かすと、彼女は塵取りを持って落ち葉の山へ近づく…

「はいはい!!早く仕事を終わらせて帰りましょ…」

びゅー!!!

急に吹きすさぶ突風…

その一陣の風は落ち葉の山を桜吹雪の如く舞わせ、再び博麗神社の境内に散らせる…

その様子を見た3名は絶叫を上げる。

「いやああああ!!せっかく終わったのにー!!!」

「待て!!頑張ったのに!!!何故こんな仕打ちを!!」

「風のバカヤロー!!!」

絶叫を上げている3名をよそに、境内に突風と共にとある人物が現れる…

「あややや!!?どうしたんですか?第0部隊の皆さま方?」

そこに降り立ったのは、幻想郷の文屋こと、射命丸文… 彼女は境内に着陸し意気消沈している3名を見つめる…

「!」

「!」

「!」

そして3名からは鋭い視線が彼女に突き刺さる…。それを見て文は青い顔をして退く…

「あや!?何です!行き成りそんな敵意に満ちた目で見るんです!」

「今の突風…。アンタの所為でしょ!?よくも人の仕事を邪魔したわね!!」

「邪魔!?一体何です!」

「アンタのお陰でまた落ち葉の集めなおしよ!!!悪戯に突風巻き起こしてー!!」

「あやや…。わざとではないです…」

文が後退するが、その方向には夜喪妓・睡煉がいる…

「おい…。同志…。こいつはハチの巣にするか?」

「いえいえ…。今回は手羽先にしましょうよ!!!」

ガトリングガンを持つ夜喪妓と手術刀を取り出す睡煉を見て文は固まる…

「殺意に満ちたご対面!?今のはワザとではないです!!只の事故です!!」

「文…。今のはワザとでもワザとではなくても…。事故でもコラテラルダメージでもないわ…。アンタのお陰で仕事がやり直しになったわ…。ねえ?どう責任もつ?」

毎乃葉の濃い殺意に文はドンドン顔を青くしていく…

「…。あややや…。これは不味いです…。ですが!!!只で終わる私ではありませんよ!!!」

文はカメラのシャッターを切る!カメラのフラッシュが第0部隊の目を眩ませる…

「っ!!」

「おい!!!フラッシュはやめろ!」

「って…。写真!」

困惑する3名に対し文はカメラのフィルムを見る…

「…。どうせボコボコにされるぐらいなら…。第0部隊のお仕置き姿を今日の新聞の一面に飾って見せます!!」

文は自殺行為ともとれる行動をし、そのまま尻尾を巻いて逃げる…

「はあ!? ふぎけないで! あのおバカー!」

「どんどん離れる文に対し、每乃葉は夜喪妓の方を向く…」

「夜喪妓ー!! 撃てー!! 撃ち落とさなさいー!!」

「ああ! 分かって…」

夜喪妓はライフルを構えるが… すぐに構えを解く…

「どうしたのよ!？」

「… 射程範囲外だ… 目で見えても届かん…」

「そんなー! 私達の痴態が幻想郷中に広まってしまいますよー!!!」

文はすでに空の黒い点と化している… 夜喪妓のライフルよりも

遠くに行ってしまった以上どうすることもできない…

「ええい!! 情けないわねン!! これで撃ち落とすまでよ!!」

每乃葉は境内にあった石を手に取り、文が飛んで行った方向へと遠

投する… 石は既に遥か彼方の空の下… 黒い点と化した文へと

真つすぐ飛んでいく…

それを見て睡煉は苦笑いをする。

「每乃葉様… 幾ら何でも当たる訳が…」

「… いや? 着弾を確認した」

「うそん!」

遠くを見つめている夜喪妓の言葉に睡煉は飛び上がる… 遥か彼

方の空の黒い点は落下していくのが分かる…

「カメラ及びフィルムの破損を確認… 射命丸文の撃墜は成功だ…

どうする? ここへ連行するか?」

夜喪妓は眼帯を付けなおしながら、每乃葉に尋ねるが彼女は首を横

に振る…

「その必要はないわ… カメラの破壊が確認出来ただけ充分よ…」

「とりあえず… 証拠隠滅は完了だ… 残りは…」

彼女達はまた境内に散らばった落ち葉を見つめる… 突風の所為でかなりの範囲にまで広がっている…

3名は溜息をつきながら、再度掃除を開始する。

1時間後…

再度落ち葉拾いを終了させた3名… 2回目というだけあり、疲労の色を隠しきれないようだ…

「ふう… これで良いわね！」

「ああ… これでいいはずだ… 睡煉!!早く回収を！」

「分かっていますよ… お二方… そんなに警戒しなくても… さっきのはたまたまですって…」

呑気な事を言う睡煉だが…

ビュー!!!

再度突如の突風により落ち葉が舞い上がる… さつきよりも広い範囲で…

またさつきと同じ事が起きてしまったのだ…

「… うそん？」

「あああ!!!何でこうなるのよ!!!」

毎乃葉はハンカチを噛み… 夜喪妓は辺りを見回す…

「おい…どこの回し者だ!!!」

そして夜喪妓はこちらへ近づいてくるとある人物を発見する…

「よーす！お前ら！異変以来か？」

夜喪妓が見つけたのは、白黒の魔法使い事霧雨魔理沙… 彼女は箒から降りて境内に着陸して第0部隊の面々を見つめる…

「ん？どうしたその格好？それに何だか殺気染みているような？」

「文の次はアンタとはね… このアタシの邪魔をどこまですれば気が

済むのよ?」

每乃葉の言葉に彼女は境内を見回し、散らばっている落ち葉・そして每乃葉たちが持っている掃除用具を見つめ、そして自分がしてしまったことの全てを察する…

「… 悪い♪ワザとではない!」

「それがヒトに謝る態度かー!!!」

悪びれもなく謝罪する魔理沙に每乃葉の堪忍袋の緒が切れる!!

そして背後にいる夜喪妓・睡煉が武器を構える…

「… 殺すようなことはしない… だが痛い目にはあつてもらおう!」

「えーと… 流石にも人肉を使った料理はやったことがないですね…」

殺気立つ3名に魔理沙もスペルカードを構える…

「おっ!やるのか?」

「やるに決まっているわよ!!!少しズルいけど三人がかりで行かせてもらうわよ!!」

「それでもいいけどよ?怪我するなよな!」

魔理沙はスペルカードを構えて箒に乗り旋回する… 第0部隊の面々は各自のスペルカードを取り出す。

「土符 (ヴァイオレンス・ウエブ)」

「狙撃 (チエイイス・ショット)」

「斬撃 (ランセット・ダンス)」

衝撃波・銃弾・飛び交う手術刀…

それぞれの光弾が魔理沙へと飛ぶが、彼女はそれらを掻い潜る…

「おー?殺意に満ちた弾幕だな…」

「ちい!!!すばしっこい!!!」

「当てる気でやったのだから?」

「うーん… これはやるのに時間が掛かりそうです…」

再度第0部隊は魔理沙に向けて弾幕を放つが、それを見切った魔理沙は、それを躲して每乃葉へと狙いを定める…

「見切った!!まずはお前からだ!」

彼女が光弾を放ち光弾が彼女へと迫る…

いつもの毎乃葉なら被弾待ったなしだが、今日の彼女は違う…

「このアタシにそれはお粗末よ!!!」

毎乃葉は鉄扇で光弾を弾く…油断せずに攻撃を処理する…いつもの彼女には出来ない行動だ…彼女なりに成長した証であるう…

しかし…それは戦闘での事…やはり詰めが甘いのが彼女であつた…

毎乃葉が弾いた光弾は…博麗神社のお賽銭箱へと向かう…そして…

バゴン!!!!

光弾はお賽銭箱に直撃し、大きな破碎音が神社内に鳴り響く…そして境内にいた全員が顔を真っ青にする…

side 毎乃葉

「…え?」

破碎音が響いた方向を見ると、そこには破壊された賽銭箱があつ

た…

待って… この状況すごいヤバいんじゃないの？確かアレって霊夢が大切にしているものよね？

え…もしかしてアタシの所為？いや…待って!!アタシの所為じゃない!!魔理沙が放ったものを弾いただけだもの!!アタシが悪い訳ではないわ!!

魔理沙を見ると、彼女は罰の悪い顔をして帽子を目深にかぶる…
「あー… やっちまったな… 毎乃葉…」

何故か彼女からはアタシが悪いような発言が飛び出す!!!

「ま… 待ちなさい!!このアタシが悪い訳ないじゃないの!!元はアンタがアタシに光弾を撃たなければ…!こんなことには!!」

「結果論だ… 結果的に賽銭箱を破壊したのは… お前だろ？悪いが霊夢に怒られてくれ… じゃあな!!」

魔理沙は、そのまま逃げるように飛び立つ!!

あ… あ… あいつ… このアタシの仕事を妨害した上に!!このアタシに罪を被せるなんて!!… ゆ… 許さない!!!

「よ… 夜喪妓… 睡煉!!ど… どうすれば… あ?」

後ろを向くと、居たはずの部下が影も形もない…

あいつら… このアタシを見捨てたわね!!!ひ… 酷い!!!このままじゃ… このままじゃ… アタシは…

「… ことこの… は…!!!」

「ひびく!!!?」

突如後ろから響く殺気に満ちた声にアタシは慄き後退する!!!

神社の方を見ると、そこにはユラリと神社から出てくる霊夢の姿が

!!!!

「れ… 霊夢!!まず最初に言っておくけど… アタシは悪くないわ!!
だ… だって!魔理沙がこっちに光弾を撃ってくるのが悪いのよん!!!
!!!だから… アタシは悪くないわよね… ン?」

必死の弁明はするけど、結果は… 分かり切っているわ!!!

データによると… あ… アタシは…

「魔理沙がどこにいるのよ!! 毎乃葉ー!!!」

「ひぎい!!!?」

霊夢からの怒号が響き渡る!!… 許されないということが分かっているわ!!! 魔理沙も逃げたし!! 物的証拠がないわ!!

「う… うう!! でも!! アタシは悪くないわ!!! 魔理沙は逃げたのよん!!! その所は調べて貰えばわかることよ!!」

「その他に!! アンタ… 落ち葉は最初と変わっていないわ!? 幾ら何でも時間が掛かり過ぎよ!! サボっていたでしょう!? 後! 夜喪妓と睡眠は何処へ行ったの!!!」

「だって! 妨害されたし! 部下は逃げちやつたのよん!!!」

部下がいないのは、アタシの所為じゃない!! 仕事が終わらないのは文の妨害と魔理沙の妨害があったのだもの!! アタシは悪くないわ!!

「だ… だだ… だって!! それは文と魔理沙の妨害で仕事が進まなかったのであって!!!」

「… アンタには失望したわ… 賽銭箱は壊すわ… 掃除はしないわ… はあ…」

霊夢からは冷たい視線は浴びせられる…

何でアタシがこんな目に遭っているの!? 何で… アタシ… 何やかんやで頑張ったのに!!!

side 霊夢

「… はあ…」

私の目の前にいる毎乃葉はガタガタ震えている… 彼女がここまですで怯える姿を見るのは初めてね…

まあ… お賽銭箱は毎乃葉の能力を使えば元通りになるわね…
後で彼女にやらせれば問題ないわ… お仕置きとかはしないわ…
この子相手に折檻は流石の私でも骨が折れるし無駄なことはしたくないもの…

「…ふう…待った」

でも… よく考えてみると、毎乃葉が一人だけいるのも、おかしい話よね？サボっているんならこの場にはいないはず、夜喪妓・睡煉が逃げたという事は… 彼女は約束通り残って掃除をしていたということよね？それに彼女の性格上… 与えられた仕事はちゃんとこなすみたいだし、もしかして文と魔理沙の妨害で仕事が終わらなかったという話は本当の事を言っていたのかしら？

… これは確かめる必要があるわ!! 私も彼女の話が聞けなかったし… 少しキツク当たってしまったわ…

「… 毎乃葉」

「う… ふえ… うわああああん!!!」

私が声をかけると毎乃葉は、その場にへたり込み子供のように泣き叫ぶ!!

「!?」

「何で失望されないといけないのよー!!! アタシ頑張ったのにー!!! ちゃんとお仕事はやったのに!!! 何で責められなければならないのよー!!!」
「え？毎乃葉！泣かないでよ…」

「だって!! アタシの事信じてくれない上に!! 失望したんだものー!!!」

「失望?… あ…」

そういえば、毎乃葉は紫の話を聞く限り、承認欲求が強いんだったわね… 他社に認めてもらいたいというのが強いから… 失望は禁句だったわね…

「悪かったわよ!! 泣かないでよ!」

「だってー!! うわああああ!!」

「だから泣かないでー!!!」

「うわあああん!!!」

毎乃葉はぐずつき…彼女の泣き声は音波のように周りに反響している!!

石段は音波によりヒビが入り、周りにあつた落ち葉は跡形もなく吹き飛ぶ!!!

掃除は何とかなつたけど!!私が持たないわ!!!

「だから!泣き止んで!お願いだから!!」

この後、その騒音騒ぎは2時間続き… やつと落ち着いた彼女を妖怪の山へと帰す…

そして事の発端となつた文と魔理沙は私の手で裁く結果となつた…

毎乃葉… 悪かつたわ…

暗殺者と狙撃手の一日

とある日、人里にて…

人里の甘味処には、第0部隊の夜喪妓・睡煉が茶菓子を食べて一息をついていた…

彼女達は茶菓子を食べる度に、頬に手を寄せている…

それもそのはず…彼女達の頬には赤く染まった手のひらの跡…
真っ赤な紅葉が咲いていたのだから…

side 夜喪妓

「痛っ!!!」

羊羹を口に運ぶたびに口に激痛が走る… いてて… 同志每乃葉に殴られた後がまだ痛む…

「あはは… 夜喪妓さんも痛みますか？ソレ？」

同志睡煉の頬にも真っ赤な紅葉がある… 奴も目の前の大福を食べようとする度に顔を渋くしている…

「… 仕方がないだろ… 敵前逃亡をした罰だからな…」

… これは私達が悪い… 2日前の博麗神社の件… 私達は同志每乃葉を見捨てて逃亡を謀った…

流石にも、年相応ではない服装とトラブルに関しては私達とはいえ、キツイ物があった…

お陰で同志每乃葉から手厳しい鉄拳制裁を受けたというものだ…

あの時の同志は… いつも以上にヒステリック気味だったな…

「… ううう… 口の中に大ダメージです」

「私も同じだ…」

睡煉は頬を抑えながら食事をしているが、姿がブレ始めている…

「姿を維持できないなら、ノーメイクに戻ったらどうだ？」

私の言葉に睡煉は私を睨む…

「… 余り私の姿は晒したくないんですよ… あまりにも地味だし… 痛っ!!!」

そう凄む彼女ではあるが、大福を口にして飛び上がる…

「無理をするな…やるだけ努力の無駄だぞ？」

「…ううう…じゃあ少しだけ…」

睡煉の姿が変化し始める…メイク姿ではない…彼女の本当の姿をな…

うさ耳が消え、睡煉の真っ白な長い髪は肩までの長さへと成り、茶色く変色なる…

赤い軍服は真っ白になり、顔も変化していく、真っ白な雪のような顔の鼻のところには雀斑が現れてくる…

「随分と地味顔になったな同志睡蓮…」

「喧嘩売ってます？…もう…しばらく休憩です…」

同志睡煉は不機嫌そうに窓の外を見つめている…

ああ…拗ねてしまったようだ…冗談のつもりだったが…悪い子とをした…

「悪い悪い…ここは私が奢るから勘弁しろ！」

「…本当ですか？」

睡煉がジト…と私を見つめる…うう、ネチッコイ奴だ…疑ることはないだろう？

しまったな…この状態のコイツが面倒なのを忘れていた…さっきの姿の陽気な性格から打った変わって元の性格の陰気になるんだったな…

その後…私は不機嫌になってしまった睡煉と甘味を食べて甘味処を後にする…

甘味処を出た私達は人里を観光する…同志睡煉はノーメイクのままだが…

「メイクはいいの？」

「メンドイんでいいです…どうせ知りあいが今の私を見てもバレはしませんよ…」

睡煉は次の角を曲がる…

ドン！

「きゃ!!?」

「いて!!!?」

案の定誰かとぶつかる… 彼女は尻餅をつく… よそ見をしているからこうなるのだ…

「あひい!!!すみませーん!!!!」

同志睡蓮が逃げ帰るように私の後ろに隠れる…

「たく!!謝る態度ではないぞ!… すまん!大丈夫か?」

睡煉がぶつかかった相手に手を伸ばそうとするが、相手が私に気づく…

「あ!!アンター!第0部隊の!!」

「ん?」

相手をよく見ると、何時ぞやの逃亡玉兎こと… 何たら麺類… 確か… うどんげだった気がする…

そのうどんげが私達の前にいた…

「永遠亭の玉兎か… 何故お前がいる?」

「お仕事よ!人里で置き薬を販売しているの!そういうアンタらも何をしているのよ!夜喪妓に睡煉!!」

うどんげの言葉に同志睡煉は驚きの表情を浮かべる…

「ええ!!?何でこの姿の私に気づいたんです?」

… 私も驚きだ… まさか睡煉の姿を見破るとは…

「夜喪妓が居れば、その相方が睡煉だって予測はつくわ!それにアンタの玉兎の姿は元のモチーフは見たことがあるのよ… 随分と地味になったじゃないの…」

うどんげの言葉に睡煉が懐から手術刀を取り出す…

「おい… 麺類… 私の容姿をデイスつたら兎鍋にすんぞ… コ
ラ… こちとら連続殺人鬼なんだよ… お前をバラすことくらいは
簡単にできるんだよ…」

殺気駄々洩れの睡煉に負けじとして、うどんげの方も身を乗り出
す…

「ふん!! 幾ら凄んでもアンタ自身はさっきの行動を見た限り、虚勢に
過ぎないわ! 幾ら自分を偽りで固めてもアンタの弱さは隠せないわ
!!!」

うどんげの言葉に同志睡煉は顔を真っ赤にする… どうやら凶星
だったようだな… 今のこいつは分かりやすい…

「黙って聞いてれば!!」

「… やめろ… ここでは問題を起こすな…」

同志睡煉を後退させ、うどんげと対峙する…

「お前もここでは問題を起こさせてくれるな… 八意に叱責させられ
るぞ…」

「… 分かっているわ… まだ仕事は残っているもの… じゃあ失礼
するわ」

うどんげは、荷物を持って消える…

まさか… 知りあいに出会ってはな…

「行くぞ… 睡煉」

「うう… あいつ… 覚えてろ…」

私は睡煉を宥めながら、再度人里を探索する…

side 睡煉

「… はあ」

… 最悪だ… 私のノーメイクを、知っている者に見られるとは思
いもしなかった…

それも… あのうどんげ… 言いたいことを言いやがって… 何

が私が弱いだ…虚勢だ…好きで偽りで身を固めている訳ではないというのに…

(…ダメだ…及第点以下だ)

(…せっかく生きて成功例だというのに…戦闘能力が皆無に近い…)

(悪いけど…こいつは廃棄だな…どうせ兵器としては役に立たん…)

…失敗作か…確かに言えているかもね…

「…同志…どうした？さつきからボーつとしているぞ？」

「気分が悪いだけですー！」

…夜喪妓さんには悪いが、今日はもう何もする気が起きない…帰ってベットの途中で眠りたいくらいなんですから…

「む！おーい！夜喪妓じゃないか!!」

突如響く声に私達は足を止める…声のする方向には、青い服に身を包んだ、白い長い髪をした女性がこちらへと近づいてくる…

…確か夜喪妓さんの話では、人里の守護者…上白沢慧音とか言っていたな？負傷した夜喪妓さんの手当をしてくれた人らしい…

「…ああ…慧音か…この前ぶりだな」

夜喪妓さんは、こちらへやってくる慧音に向けて、にこやかな笑みを浮かべている…

「ああ…で？お前たちはどうしたんだ？人里に何か用なのか？」

「只の息抜きだ…別に問題は起こしたりしない…人里の守護者様の厄介にはならないさ…」

「別にそういう風に言う気はなかったのだが…」

夜喪妓さんの言葉に慧音は不服そうな顔をする…夜喪妓さんも不味いと思ったのか、顔を強張らせている…

「冗談だ…そういえば…この前の、あの子は元気になっているか？同志毎乃葉にズタボロにやられたんだ…後遺症でも残ってない」と

良いのだが…」

「後遺症何か残らないよ…こちとら不死だからな…」

誰かの声が響き、その方向を向くとそこには、店から出てくる長い白髪をした赤いモンペを身に着けた少女が出てくる…

このヒトには見覚えがある…毎乃葉様にボコボコにされた蓬萊人だ…確か名前は藤原妹紅だっけ？

夜喪妓さんは妹紅を見て、笑みを浮かべている…

「ほう？流石は私達よりも良い蓬萊の薬を使っているだけはあるな！同志にボコボコされたとは思えない程だ！元氣そうで何よりだな！」

「ちっ…褒めているのか貶しているのか分からねえ奴だ…」

「ははは!!これに懲りたら復讐なぞやめることをオススメする！」

夜喪妓さんの言葉に妹紅は目を見開く…

「お前にとやかく言われる筋合いはない!!」

「妹紅!やめろ!」

慧音が夜喪妓さんに掴みかかりそうになる妹紅を抑えるが、夜喪妓さんは戦闘態勢にならない…

「ん?何か不味いことでも言ってしまったか？」

「ああ!見事に言ってくれた!お前に私の気持ちなぞ分からないってことがな!!」

「…訳アリか?それは済まない…私は思ったことは口にするタイプでな…こればかりはどうすることもできないな？」

「夜喪妓さん…少しお口チャックしましょうか？」

私は夜喪妓さんに、口を閉じるように言い聞かす…このヒト地味にドストレートで物事を言うからな…今回みたいにトラブルになりかねない…

妹紅は少し落ち着いたので、慧音を振り払う…

「ちっ…」

「妹紅!!…すまん!夜喪妓!」

慧音が頭を下げるが、夜喪妓さんは手を振る…

「いや…こちらの落ち度だ…頭を下げるのはこちらかもしれん…」

夜喪妓さんは、妹紅に頭を下げる…

「こちらの非礼だ… 申し訳ない」

「ふん…」

妹紅は不機嫌そうに、そっぽを向く… 空気が悪いな… ここは退散するのがベストかと…

私は夜喪妓さんに耳打ちをする。

「… 夜喪妓さん… そろそろ人が集まって来そうですし… この辺で撤退しましょう?」

「確かに… この位にしておくか… 帰る頃には日が落ちるだろうしな…」

夜喪妓さんは辺りを見回す… 誰に見られているか分かりませんからね…

「では! 私達は失礼する! ではな! 慧音に妹紅! 次回は茶菓子でもつまみながら談話でもしよう!」

「… 失礼するね?」

「ああ! 今回は済まない!」

「…」

私達は彼女達と別れて、妖怪の山へと帰還する…

妖怪の山へ帰ってきた私達は、封印牢を開けて毎乃葉様の牢をそつと見る…

「… すう… すう… うーん… メ… さま…」

毎乃葉様は部屋のベットの所で寝息を立てており、完全に寝に入っているみたいだ…

私達はホッと胸を撫でおろす…

「とりあえず… 朝になればいつもの同志になるな…」

「… 帰ってからも折檻とか勘弁ですよ」

… とりあえず、今日一日は平和に終わりそうです… 残りは、自

室のベッドで寝に入るだけですわね！

私は自分の牢の前に立ち、夜喪妓さんに会釈をする…

「じゃあ！また明日です…」

「ああ！またな！」

夜喪妓さんに挨拶をし、私は自室へと入る…

「…はあ…疲れた」

私はベッドの上に倒れこむ… 任務はないとはいえ… 色々なことがあった… 頭が疲れた… そんな一日かもしれない…

「…」

だけど… 少しだけど… 嬉しいこともあったかな？

これは胸の奥にしまっておくことにしよう…

「…」

睡魔に襲われ… 私も寝に入る…

今日はいい夢を見れそうかも…

健康診断と話し合い

迷いの竹林にて…

永遠亭の病室には、八意永琳と天逆每乃葉の2名がいた…

「はい！每乃葉… 我慢なさい！」

「ひぐう！」

「はい！力を抜いて！！うまく刺さらないわよ！」

「もう無理!!!痛いもの!!!」

「はいはい… 残りは抜くだけよ… 辛抱なさい!!」

「はあ… はあ… はあ…」

永琳が施しているのは、每乃葉の腕に刺さる注射器による採血…
每乃葉は、涙目でじんわりと来る痛みに耐え忍んでいた…

side 每乃葉

「はい！お疲れ様… これで大丈夫よ」

「… 痛い!!もう!!!何で、このワタシが健康診断なんか受けなければ
ならないのよ!!」

アタシは、もらった脱脂綿で注射されていたところを抑える…
急に呼び出されたかと思ったら、まさかの健康診断を受けろ？

つたく!!注射なんて、月で兵器として働いていた時以来よ!!あまり
良い思い出はないというのに…

永琳様はアタシから抜いた血を試験管に詰めている…

「貴女の健康状態を見る必要はあるわ！あの子の従者だもの… 私が
担当する以上、責任はちゃんと持つわ！」

「余計なお世話よン…」

「もう一回注射されたいかしら？」

「… 勘弁してください」

永琳様から離れて、アタシは窓を開けてキセルに火を灯そうとす
る…

「駄目!!病室は禁煙よ!」

「... そうでした」

大人しく火を消す... 帰ってから吸うべきね... これはアタシが悪いわ... どうしてもイライラすると、無意識にやってしまうわ

「ソレ... やめたらどう?健康に悪いわよ?」

「ワタシから... 楽しみを奪うというのですか?」

... 禁煙?そんなことできるわけがないわ!!一回... 試したことはあるけど、一日... いや半日持たなかったわね...

「試しに一日やってみたら?あの子に合わせる時には健康体で送る必要があるからね...」

... 会わせるねえ?たとえ... それが可能だったとしても、このアタシが会うことはないでしょうね、それに、幾ら月の賢者とはいえ、月を裏切った以上難しい問題よ...

「無理を言うじゃないの?無駄な努力はしない方がいいわ... アンタも... このアタシもねン...」

「出来るか、出来ないかは私が決めるわ...」

「無理だと思うけどお... まあいいわ... じゃあこのアタシはここで...」

アタシが病室を出ようとすると、彼女が止める...

「待ちなさい... まだ終わっていないわ」

「今回は採血だけでしよう?これ以上何を?」

「その左腕の外傷も見ておく必要があるのよ...」

永琳様の言葉に、このアタシは無意識に左腕を隠す... ちっ... やっぱりコレもか...

「あまりこっちの腕は見せたくないのだけとお...」

「いいから!!」

永琳様の強い語気にあタシはしぶしぶと椅子に座りなおし、手袋を取る...

アタシの左手首には、見慣れた雑な縫合の痕が残っている... 永琳

様は傷を見て顔をしかめている…

「酷い処置ね…」

「仕方ないでしょう？月面戦争で負傷して重傷で能力は使えなかった上に、月から地上へと逆戻りをしてサバイバル生活・そして封印よ？」

… 正直傷を治すことに専念できれば、こんな傷残るはずはなかったのだけど… あの時のアタシは美羽だったし、柚神の方は消滅してしまっただけからどうしようもない… 柚神を戻すのにかなりの時間が掛かったし仕方がないわ…

「… 昔並みの力は難しいかしら？」

永琳様はアタシの傷を観察している…

「戦闘は… 無理ね… 力は入らないし、負荷がかかると傷が疼くのよん…」

アタシの体… 色々な任務で無事な箇所が無い位傷ついたけど、この傷とは一生背負っていかないといけないくらい分かっている… 日常生活は困らないけど、こつちが利き腕だから少し不便なのよん…

「触診だけど… 一応は傷の方は完治しているみたい… 少々の後遺症を除けばだけどね… でも傷を消すくらいは出来るわよ？何回か通院してくれれば…」

「必要はないわん… 見慣れたモノだし… ないと逆に違和感を覚えるのよん…」

何百年、この傷とともにしていると思うているのよん… 別に直したところで、時間が無駄になるだけよん…

「貴女個人の事は聞いていないわ… あの子にこの傷を見せたら、悲しむことくらいわかるでしょう？」

「…」

痛い所を突くわね… それくらい想定範囲内よ…

睡眠・夜喪妓とも再開した時も、彼女達はこのアタシの腕を見て驚いていた… いえ… 悲しんだというべきかしら？これがのちに再

開する忌梗・あのお方も同じ反応をすることは予測できるわ…

「… って!!… 会うことを前提に進めないでくれない!? このアタシは戻らないと何回言っているのよ!!」

「強情ね…」

危うく口車に乗せられる所だったわ… このヒト相手だと油断できないわん… いつ嵌められるか分からない…

「当たり前でしょう!? あのお方は月では位が高いの!! 月の負の遺産であるアタシが戻ったら立場が危うくなるわ! それくらいわかるでしょう?」

「…」

永琳様は、それ以上の追求をしなくなる… これでもいいわ… アタシが本来存在してはいけないモノだっということくらい分かっているはず…

「では… 日が沈むし失礼するわね… とりあえず傷は兎も角… 禁煙の方は考えてみるわん…」

アタシは永遠亭を後にする…

外に出ると、すでに日が沈んでおり、三日月が幻想郷の夜を照らしている… 竹林の風景も静かで荒んだ心が落ち着くわ…

「良い… 雰囲気… 煙が欲しくなるわん」

月での生活も、それなりにやりがいはあるけど、こうやって風景をのんびり眺める時間はなかったわね… 毎日が生きるのが精一杯な死と隣り合わせな生活だったもの…

「… まあ… 月で暮らすよりも… ここの方が良いってものもあるけどね…」

アタシは、翼を広げて妖怪の山へと向かう…

生きていくことができれば充分… これ以上は求めないわ… これは欲求のようなものだけど、静かに生活できれば… アタシは…

妖怪の山…封印牢

牢についたアタシは封印牢の戸を開けて中に入る…

牢屋の廊下には、キセルを吹かして座っている夜喪妓の姿が目に見える…

「ん？同志？遅い帰りだな？」

「…」

夜喪妓は口から煙を満足気に吐く…これはアタシへの当てつけかしら？

「夜喪妓…アタシは今…健康診断後…禁煙を頑張ろうとしているのよ？見せびらかさないで欲しいわ…」

「ああ…失礼…禁煙とは…頑張ってもらいたいものだ…」

彼女はキセルの火を消す…だけど…他人ごとね？

「…ねえ？アンタも禁煙やってみない？」

アタシの言葉に夜喪妓は、不服そうな顔をする…

「健康診断がどうであれ…私は関係のないことだろう？自分の事は自分で頑張れ…」

「…分からない？禁煙は大変なのよ？一人より二人がいれば頑張れると思わないん？」

「道連れだど!?私は関係ない!!やるなら一人で頑張れ!」

「駄目!一緒に頑張りましたよ!」

「ふ…ふざけるなよ…」

アタシは夜喪妓のキセルを取り上げて、禁煙に専念する…どこまでできるか…楽しみね…

5時間後…

「やっぱ無理…吸おう…」

「我慢が一番のストレスよねン…」

短い禁煙宣言…前回よりも持たなくなったわ… やっぱ無理だったわん…無理のない生き方…それがいいわ…

第6章 : 5th ミッション 華の季節を取り戻せ!! 四季折々の華

長い冬を越え、幻想郷に春がやってくる…

春を告げる妖精ことリリーホワイトが春を告げ、桜が咲く時期へと到来する…

桃色の景色に満たされる光景だが、そうは問屋が卸さない…

ここは幻想郷…何かしらの問題が降り注いでくるのだから…

ここは妖怪の山…お昼ごろ…

封印牢では、第0部隊の天逆每乃葉・夜喪妓・睡煉の3名が真昼からの軽い宴会を行っていた…

既に異変は起きているというのに、のんびりとしている暇はないのだが…

side 每乃葉

「ん♪中々やるじゃないの夜喪妓…このアタシについてくるなんてね?」

「ふん!同志の背を見つめるだけの私ではない!!」

夜喪妓がアタシと同じ数…19杯目の御猪口を空にする…

軽いサシ飲みだけど、アタシについてきているとは感心よ…

まだ始まったばかりだけど、油断はできないわね?部下に負けたとかなつたら隊長の肩書を破棄しないといけないわん…

「はい…夜喪妓さんも19杯目と同点です…はいはい上げていきましよう〜」

やる気のないジャツジをしているのは睡煉(素)だわ…彼女は部屋でアタシ達の戦いを見ながらサラダスティックを齧っている…

素のこの子は… どうもとつつき辛いのよねン… アタシを慕ってくれる数少ない一人なのだけれど、言葉に少し棘があるのよねン…

「ふん！同志よ！このまま限界までやってみるか!？」

「いいわよ♪アタシも勝負には負けたくないもの！」

アタシと夜喪妓は20杯目の御猪口を持つ…

どたどたどた…

「…はあ… 良いところだというのにン…」

とある足音を聞いてアタシたちは杯と下げる…

聞き覚えがあるわね… この歩調・音の音響を考えるに… この持

ち主は射命丸文…

当然彼女が持つてくることは決まっているわン… どうせ… いてもどおり…

バン!!

「毎乃葉！お仕事の時間ですよー!!!」

… 異変のお知らせという訳よン

本日はどういうものかしら？

「異変かしら？今度は何をすればいいのよン？」

文に尋ねると彼女は、植物を数本アタシの前へと置く…

「今回の異変も厄介ですよー！これを見て分かりませんか？」

「… 只の現存の植物にしか見えんが？」

「桔梗に野菊… これに何の問題が？説明してもらわないと分かりませんねえ…」

夜喪妓と睡煉が首を傾げるが… アタシはそれを見て理解する…

確かに文の言う通りおかしいわね？本当にこの世界は何でもありなのね…

「言いたいことは分かったわん… もう何も驚かないわよ…」

「毎乃葉は気づいたみたいですね！御付きの方々とは違うようで！」

「…」

「むう…」

文の言葉に気でも障ったのか、夜喪妓達は不服そうな顔をする…
まあ… パツと見て気づくはずがない… それなりの知識がないと分からないものだもの…

「ふん！このアタシを誰とと思っているのよん!!それとこのアタシの部下を貶さないでくれないかしら… 怒るわよ…」

「別にそういう意味ではないですよー!!」

文が慌てて訂正する…

「で？頭の悪い私達でも分かりやすい説明を頼むぞ… 同志諸君」

夜喪妓の言葉にアタシは桔梗を手取る…

「… 時期が問題なのよん… 時期が」

「時期？それに何か問題でも？」

睡煉が聞き返す…

「問題大有りよ… この花は秋に満開になる植物よ… となりの野菊も同じく秋… ここまで言えば分かるわよね？」

「成程!!今は春だから咲いているのはおかしいというわけか!!!」

夜喪妓が手をポンと鳴らす… だがすぐに首を傾げる…

「その何が問題がある？あまり異変と呼ぶにも… 大したことがないと思うがな？」

「右に同じく… 只の植物の開花の勘違いでしょう？…この環境ならあり得ない話ではないと思いますか？」

… 彼女達の言う通り、異変と呼べるものではない… ここだけ見

ればね…

アタシには薄っすらと見えるわあ… この植物たちに潜む力をね？

「… 人為的なものなのかしらコレは？良いわ！アタシが調べてあげる！」

「頼みますよ!!毎乃葉!!」

文の頼みを了承すると、夜喪妓達が振り向く…

「正気か!?こんな大したことのない物を？」

「事件性がありません！」

「いいから！お仕事には地味も糞もないわん…」

一見地味な物に見えるけど、調べる必要があるわ…

(オオオ…)

「…」

この植物… 霊的なものが憑りついている… 一見分からないものだけど、これが人為的なものだったら脅威になるわ…

なぜ起きたか… 何故こうなったか理由が分からない、これを使ったテロ… そういう心配が出てくるわ… 脅威の芽は早く間引くに越したことはない…

「… とりあえずだけど協力してもらえるかしら？終わったら食事でも奢るわよん♪」

夜喪妓達は満面の笑みを浮かべる…

「よし来た！」

「がんばりまーす…」

お仕事をする際は、部下のモチベーションを上げていかないとね♪ これをするだけで物事がスムーズに進むというものよん…

「まあ… 早く終わらすわよ…」

アタシはキセルに火をつけて、とある人物を思い出す…

幻想郷危険人物… 風見幽香…

… 植物Ⅱ彼女を思い出すわね… 絶対この異変に関わってもおかしくないわ…

以前本気で相手して、追い払うことは出来たけど… 彼女の相手はしたくないわね… 無傷で戦うのが難しいわ…

アタシ達は封印牢を後にする…

その頃… 幻想郷の太陽の畑…

幻想郷で唯一向日葵が大量に自生しているこの場所… 一見平和そうな場所に見えるが、最強の妖怪… 風見幽香が管理している幻想郷で危険な部類の地域である…

その向日葵畑の中にある建物の戸が開く…

side 幽香

「… 何か変な感じね？」

外に出て私は辺りを見回す… 見目からして特に異常はないけど… 向日葵達の成長が少し… 良くなった気がする？

私の目測ではこうはならないと思っただけど… これは何かあるわね…

「少し調べたほうがいいかしら？」

私は傘を手に取り、周囲の力を確認する…

「… あら？」

周囲の力を巡らせると、とある者の力を感じ取る…

私に黒星を付けた者こと、天逆美羽の力を…

あの時以来ね… この異変ついでにちよつかいをかけてみようかしら？

「ふふふ… あっちの方向かしら？今度は負けたりしないわよ…」

私は彼女の方向へと向かう…

この異変も気にはなるけど… まず最初は彼女よ… 今度は勝たせてもらうわ!!

鈴蘭畑とお人形

時期外れな四季の違う植物達の開花…その異変を任命された天逆一行達は幻想郷を探索する…

天逆每乃葉は、この事態を単純な問題とは思っていない…
物事には何かしら裏がある… 今回の異変もそう… 偶然が関与しているのだから…

side 每乃葉

「… 今回の異変は… 少々場所が分からないわん」

上空を飛びながらアタシは次の目標を考える… 植物だけとなる
と情報が少ないわ… 闇雲に幻想郷を飛び回る訳にもいかないし…
どうすればいいかしら？

「同志？まずは何処へ向かう？」

「隊は別々で散策しますか？それとも？」

夜喪妓・睡煉がアタシに質問する… アタシもどうしようか考えて
いる所なのよね…

「とりあえず… 太陽畑方面は行かないようにするわん…」

「… 何故？」

「何でもよん…」

あの向日葵畑は、風見幽香のテリトリーね… 以前美羽の時に戦ったけど、しんどかったのを覚えている…

今回の異変は彼女が関わっている可能性もあるけど、アタシが思うに、こんな大々的に動くタイプではないと思うのよね…

それにこの植物達… 何か霊的な物が憑いているし、幾ら幻想郷最強の妖怪でも霊は専門外のはず… 消去法になるけど、彼女は今回の異変から除外しておきましょう…

「じゃあ？どこへ？」

「ん… 霊的な所かしら？」

「じゃあ白玉楼か？」

夜喪妓が提案するが、とりあえず保留というべきかしら？

白玉楼の主である西行寺幽々子は、以前異変を起こした時、西行妖という桜化け物を開花させようとしたことがあったわ…

何となく怪しい気もするけど、手口が違うのよね…

「保留よん… とりあえず少し待ちなさい… 今幻想郷のデータ見るから…」

アタシはホログラムを開いて幻想郷の情報にアクセスする…

人里・博麗神社・紅魔館・魔法の森・霧の湖・白玉楼・迷いの竹林・妖怪の山・太陽の畑・無縁塚・三途の川…

「…んふ♪見つけたわん♪」

無縁塚は良く分からないけど… 三途の川があるとは驚きね…

死者が最後に渡る、渡し舟が流れる黄泉への入口…

存在は知ってはいたけど、本当に存在するとはね… アタシのデータにも編集が必要ね？

「三途の川… そこに行きましようか？」

「は？」

2人は口を揃えて首を傾げる…

「…今から無理心中ですか？」

「勘弁しろ… 幾ら同志とはいえ…」

部下がアタシを避けるように後退する… 別に死ねと言った訳ではないのだけど…

「違うわよ!! 幻想郷に存在する三途の川に行くのよん!! 自刃しろとは言っていないわ!!」

アタシの言葉に2人は胸を撫でおろしている…

酷いわね… アタシ… 部下には優しくしていたはずなのだけど…

「ふう…」

アタシはキセルを啜えて考えを纏める…

あの植物には、霊的な物が存在したし、魂を管理する場所が怪しいと判断しただけよ…

しかし…三途の川ね…変なのがいるのは確定みたいね…それにあタシとしても危険な場所に行きたくないのも事実…

出来る限り…お仕事は平和に終わらせたいわん…

「早くお仕事を終わらせるわよん!!」

「承知した…」

「了解です…」

アタシ達は三途の川方面へと向かう…

三途の川へ向かう途中…大きな鈴蘭畑へ到着し一度着陸する…

「この場所も初めてかしら?」

「あらあら…これは随分とすごいですね?」

「自生しているのか?でもこの規模は誰かの手が加わっていても…」

睡煉と夜喪妓は独自の感想を述べているわね…

まあ…そうよね…太陽の畑だって…幽香の手が加わった向

日葵畑なんだし…探せば色々とありそうね…

アタシ達が鈴蘭畑を観察していると、奥の方からドタバタと足音が聞こえてくる!?

「人間?私のテリトリーに人間が来たー!!!」

アタシ達の目の前に現れたのは、金色の髪をした少女?

黒い服に、赤いロングスカートに身を纏っているわね?

「敵襲か?」

夜喪妓がライフルを構えるがあタシが手で制止させる…まだ敵か分からないもの…余計に仕事を増やすわけにもいかないわん…

それにパツと見、無害そうだし大丈夫でしょ♪

アタシは少女に近づいて視線を合わせる…

「こんにちはン…」

「ん?…こんにちわ!!」

少女は無邪気にアタシに挨拶をする…素直なのは良い事ねン!

…でもこの子…人間ではないみたいね…かと言って妖怪でもない…いや…生物ではないというべきかしら?

「…」

良くは出来ているけど、この子人形みたいね?付喪神という奴なのかしら?でも…付喪神のデータにも該当はしないわね?

「貴女お人形ちゃんかしら?」

「うん!名前はメデイスン・メランコリー!スーさんの毒で動けるようになったんだー!」

メデイスンと名乗った人形は辺りの鈴蘭畑を指さす…

スーさん?何かしら?お友達かしら?そして…毒?

「…毒?それって」

「…だから普通の人形よりも強いの!」

メデイスンの口が開いてアタシに向けて紫色の煙を吐き、辺りが煙に包まれる!?

sideメデイスン

「よし!まずは1人!!」

…思ったより警戒心が無くて助かったわ!只の人形から幾数日!ついに私は狩られるものから狩る者へとなったんだー!!

とりあえず…スーさんの力を使って手あたり次第の相手を屈服させてやる!残りの2名もすぐに!!

他の2名を見るが、彼女達は私に向けて肩を竦めている…

「はあ…無謀な奴だ…」

「あーあ…死にましたね…あの子…」

な…何よ!!まるで私が可哀想な子とでも言うかのような反応を

している!!

「何よ!!何よその反応は!!アンタ達のリーダーは毒で終わったの!!」

「じゃあ... 後ろ見てみる...」

「後ろ?」

「ふうん... 幾多の毒物の混じった毒ガスと言うべきかしらん?でもまだ青いわねン?」

私の後ろには、全く動じていないリーダーの姿が!!嘘でしょ!!普通の奴なら昏倒しているというのに!!

「な... 何で?」

「今後に期待というべきかしら?生まれたばつかみたいだし... 可能性はあるわねン!」

「わっ!?!」

リーダーは私を御姫様抱っこする?あ... あれ?怒っていないみたい?

「でもお痛は駄目よン!そおい!!!」

リーダーは力を込めて私を胴上げする!?!私の体が重力関係なしに打ち上げられる!!

「うぎゃああああ!?!」

ああああ!!地上が!遠くなる!!私はどこまで飛ばされるのよー!!!

キラーン...

幻想郷の星となったメデイスンを眺めながら、每乃葉はキセルに火をつける…

「他界他界って奴かしら？これで赤ちゃんをあやすのよね？」

「いやいや… 力加減を考えろ… 幾ら何でもやり過ぎだろ？」

每乃葉の行いに夜喪妓は苦言を言うが、彼女はフンと鼻を鳴らすだけだ…

「若いうちに苦勞しておくのがいいのよん… それに…」

每乃葉は煙を吐きながら後方を見つめる…

「次のお客さんがお出ましのだわん…」

「は？」

夜喪妓が每乃葉の視線の先を見るとそこには…

「久しぶりじゃないの… 天逆…」

そこには緑色のショートヘアをし、白のブラウス・チェックのベスト・スカートに身を包んだ人物…

風見幽香がそこにいた…

「お久しぶりねん… 出所以来かしら？」

「何だこいつは…」

「何か… 殺気がすごいですかね？」

挨拶をする每乃葉とは違い、他のメンバーは濃厚な殺気をこちらに向けている幽香に驚いているみたいだ…

「前とは違い… おまけがいるみたいね？それなりに強そうだけど…」

「おまけとは心外よん… このアタシの部下なのよん？言葉を選んだらどう？」

幽香の言葉に每乃葉はイラツとした表情を浮かべるが幽香は気に

せず次の言葉を紡ぐ…

「少し姿が変わったみたいね？それが貴女の本気なのかしら？」

「まあ… そうね？以前は美羽の姿だったし？今の方が強いわよん？
だったら何だというのよん？」

ゴツ!!!

急な幽香の拳を每乃葉は素手で止める…

「少し相手しなさいよ？負けっぱなしというのも私にとっては精神衛
生上良くないのよ！」

「… あの時のリベンジかしら？別にいいわよ？そっちがその気なら
？」

每乃葉の承認に夜喪妓が慌てて振り向く…

「おい！同志!!やる必要がないだろう！」

「そうですよ！仕事なんですよ？」

彼女達の言葉に每乃葉は手を振る…

「お仕事だからよん… 彼女の相手はアンタ達には手に余るわん…
今回の異変… 任せたわよ？」

まさかの每乃葉の言葉に夜喪妓達は口を開けたまま…

「お… おい？正気か？まだ異変の内容も確実に把握していないのに
!？」

「そうですよ！これ失敗したら始末書ですよ!!」

始末書という言葉に每乃葉は僅かに体を震わせるが、すぐに平静を
保つ…

「アンタ達を信じているからよん？これ以上は言わせないで…」

「… 信じているか… ならそれに応えるのが私達の役目だな」

每乃葉の言葉に夜喪妓は背を向ける…

「夜喪妓さん!?良いのですか!？」

「仕方ないだろ… 同志睡煉… 上官からの命令だ… 私達は出来る

ことをやるまでだ…。」

「あー待ってくださいよー!」

夜喪妓が飛び立つと睡煉も遅れて飛び立つ…

そして鈴蘭畑には天逆每乃葉と風見幽香の2名が残る…

「良いのかしら?別にまとめて来ても良かったのに?」

「部下に怪我はさせたくないのよん…それに心置きなく戦えるものじゃないの…。」

每乃葉はキセルを消して妖力を高め、幽香も負けじと力を高める…

「では…あの時のリベンジマッチをさせてもらおうわ!」

「結果は変わらないわん!!!」

2名の拳が鈴蘭畑にて炸裂し、決戦のゴングが鳴り響く!

サンズリバー

風見幽香との戦闘により、天逆每乃葉と別れた第0部隊のメンバー
夜喪妓・睡煉は指定された通りに三途の川方面へと向かう…

まだ異変の原因であるという証拠には確定していないが、彼女達にはやるしかない… 上官である每乃葉の命令は絶対なのだから…

side 夜喪妓

「…」

「夜喪妓さん？ 本当に良いんですかね？」

同志睡煉が先程から私に尋ねてくる… 全く… 何回聞けば気が済む？

「くどい… 同志の命令だぞ!! 私達は僅かな手がかりの三途の川に向かうしかないんだ!」

「… それで情報がなかったら？ 次はどこへ？」
「…」

それは最悪の場合だ… 考えたくもない… 同志がいない以上… 情報操作を使った異変の調査が出来なくなっている…

それに私は幻想郷の事も把握できてはいないし、私の目もそこまで探索には向いていない… 次の調査が難航するかもな…

「同志睡煉… 先の事は考えるな… 目先の事だけに集中しろ」
「… うう… 当たってくれば」

私達はとりあえず目的地へと急ぐ… 当たってくれよ… 同志の命令を無碍にしたくはないんだ…

しばらく進むと目的地である三途の川に到着する… 第一印象としては何か嫌な場所だ…

霧に覆われた暗い大きな河が広がる空間……。これでは昼か夜かも判別がつかないな……。それに私の目には見える……。幾多あまたの霊達がこの空間を漂っている……。あまり私としてもこの空間は好きではない……

「陰気な場所ですねえ……」

「ああ……」

同志睡煉の言葉を聞きながら私はキセルに火をつける……

霊的な場所はあまり得意ではない……。私の殺めた者達が私を狙っているような錯覚を見せる……。同志睡煉もそうだろうな……

「……で？来たはいいのですが……。この後どうします？」

「……」

……。見た限り殺風景な風景しかない……。情報を得ようにも現地の者がいない以上どうしようもないな……。恐れていた事態が発生だ……

「どうします？次はどこへ？」

「待て……。まだ手がかりがないと決まったわけでは!!」

私は眼帯を取って辺りを見回す！誰でもいい!!誰か……。いれば!!

「……？」

辺りを探索していると、10メートル先の岩場の影に人を発見する!!

「ビンゴだ……」

第一現地人発見だ!!残りは情報を聞き出すのみだ!!!

「見つけたぞ！同志!!10メートル先の岩場の影に隠れている！捕縛しろー!」

「はいはい……。分かりましたよ」

睡煉の姿が消え、しばらくすると叫び声が響き渡る……

「ぎゃああー!!?何だい!!?もう勘弁しておくれよ!!!アタイはもうボロボ

口なんだからー!!!」

… ふむ… 速い御手前だな… 獲物は声からして女性か… 私はその方向に歩を進める…

「夜喪妓さーん!!捕まえましたよー!!」

「助けてー!!」

私の目の前には、同志睡煉と羽交い絞めにされている第一現地人…

現地人の方は赤い髪を二つに纏め、薄紫色の着物を身に着けている…

ふむ… 只の人ではないようだ… まあ… この場にいるのだから何かしらの種族だろうな…

私は第一現地人に近づく…

「… まずは名前を聞こうか?」

「は!?何だいいきなり不躰な連中だね!!名乗るならお前から名乗れ!!」

… 反論されてしまう… だが彼女が言っているのも確かのようにだ…

「失礼… 私の名は夜喪妓… そして君の後ろにいるのは私の同志睡煉だ… これで満足か?」

「… やっぱり仲間だったのかい… 早く解放しておくれ!!アタイは紅白と白黒にボコられて消耗しているんだよ!」

現地人は解放を望むがそうもいかないな… 紅白に白黒… 霊夢と魔理沙か…

「… ふむ… 情報提供感謝する… 幻想郷の巫女がわざわざ来ているとなると… 今回の異変はこちらでビンゴのようだな?」

「… あ」

現地人はしまったと言った顔をする… 異変に対して何か知っているようだ?

「何か異変について知っているようだな? 私達の仕事もその調査な

んだ……教えてくれれば助かる……」

「し……知らないね!!異変?何のことだい!!」

「……はぐらかすのか?博麗の巫女が来たという事は100%ここは異変に関わっているということだ……あまりしらばつくれるのはオススメしない……私自身も気が長い方ではないからな……」

「う……ううう!!」

「現地人よ……名前を聞こうか?君の名前が分からないと交渉が辛いのでな……前にも言ったが……あまり時間をかけるな……私の気は短いのでな……」

「分かった分かったよ!!名前は小野塚小町!!今回に関しても教えるからアタイを助けておくれ!!」

陥落……第一現地人の名は小野塚小町……覚えておこうか……どうやら勝利の風はこちらへ向いているようだ……残りは情報を貰って帰還するだけだ……

「ああ……助けてやるとも……では……聞こうか?今回の異変に関して教えてくれ」

「その言葉嘘はないね?……季節外れな花の異変だね?あれはアタイ達が悪いんじゃない……周期的に起こるものなのさ……」

「周期的にですか?私は長年この世界にいましたけど……今回の事は知りませんよ?」

同志睡煉が言うが小町は口を開く……

「まあ……60年に一回程度の事だから普段生活している分には気にはならないさ……でも今回はアタイら死神のキャパを越えるものだったから……長引いているんだよ……」

「ふむ……君が死神か?ではそのキャパの内容を聞こうではないか」

小町は少し考えた後口を開く……

「……思ったより……今回は死神の許容量を超える幽霊達が出現したのが原因だ……処理できなかった幽霊が幻想郷中に広まって、そこらへんの花に憑依して咲き乱れた……それで今回の異変が起きたんだよ……」

「本当ですかあ？」

「嘘は言っていない!!!だからそのナイフを下ろしておくれ!!」

「…同志… 武器を抜くな… 穏便に済ませろ」

… 原理は不明だが… 瞳孔の開き具合で嘘は言っていないようだ… 彼女の話が本当なら今回の事は只の事故ということの間違いはないだろうな… 報告書には書ける分には情報が集まったというものだ…

(夜喪妓? いいかしらん?)

… 頭の中で同志毎乃葉の声が響く… 連絡してくるということは幽香との鬪いは終わったのか?

「… ああ… 聞こえている… そちらの問題は終わったのか?」

(… ええ… 問題なくねん… それよりも情報を掴んだのかしら? アタシに教えてよん!)

「ああ… 実は…」

私は聞いた情報を同志毎乃葉に教える…

くくく

(んん… ええ… 把握したわん! つまり一定周期で起きる事故みたいなものなのよねん?)

「そんな感じだ…」

(おほほほ!! ご苦労様♪ 残りは情報を纏めるだけねん! では帰還してOKよん!… アタシはちよつと休んでから戻るわ…)

… 急に同志からの通信が途絶える?… 何となく想像はつくが… 無理はしないでもらいたいものだ…

「… 分かったとりあえず情報提供感謝する… ではこれで失礼を」

私と同志睡煉はその場を後にする… 長居は無用だ… 残りは本拠基地に戻って書類の準備を…

「待つて!! アタイを助けてくれるんだろ!!?」

小町が私の脚にまわりつく!?

「何だ!?もう終わっただろ?もう帰っていいぞ?」

「駄目だ!!このまま紅白と白黒をほっておいたらアタイが映姫様にお仕置きを受けちゃう!!アタイを助けて!!」

何だ?何か嫌なお使いを頼まれそうだ?

「... 私がする必要はない... 諦めてお仕置きを受けろ...」

「さつきアタイを助けてくれるって言っただろ!!?約束は約束だろう!!」

「約束っていつ?... あ」

(分かった分かったよ!!名前は小野塚小町!!今回に関しても教えるからアタイを助けておくれ!!)

(ああ... 助けてやるとも... では... 聞こうか?今回の異変に関して教えてくれ)

(その言葉嘘はないね?)

... ああ!!交渉で頭がいっぱいだったから、そういえばそういうことを...

「... 確かに言ったが... それとこれは...」

「世の中ギブアンドテイクだろう!!!だからアタイは情報を教えた!!だから頼むよー!!!」

「だから... それは私達に関係のない...」

「嘘をいうのか!!!お前たちが死んだら三途の川に叩き落としてやる!!!」

... 死後の脅しなのか?そういえばこいつ... 死神だったな... やろうと思えばやれるのか?

... しまった... 道理で交渉がうまい具合に進むと思ったら... この為か... 今度は私が押されている... いう事を聞く義理はないが... これでは私のフェアプレイ精神に反する...

同志睡眠を見るが、彼女は肩を竦めている...

「あらら... これはうまいことやられましたね... 夜喪妓さん」

「ううう... すまん... ぬかった...」

「仕方ありませんよ… すんなりと情報を話してくれましたし… これ位しても良いでしょう？… それに私と貴女は荒事には慣れているでしょう？」

… やることは決まったか… なら仕方あるまい…

「向かうぞ… 早く仕事を終わらせる！」

「ええ… 分かっています」

… 私達は三途の川の先を進み、博麗の巫女一行を追う…

最終的に交渉失敗だ… 次回は気を付けていこう…

一行… 鈴蘭畑にて…

「げほ!!」

そこにはボロボロの状態の風見幽香と天逆每乃葉がいた…

両者とも地に伏せており… 勝負は引き分けになったようだ…

「なかなかのパワーね… 貴女… 組織の中間管理職で収まっているタマではないでしょう？」

「… アタシはこの状態で満足しているのよ… 権力は望んでいないわ」

每乃葉は木に寄りかかりキセルを咥え指から火をつけようとするが、それは不発に終わる…

「力を使いすぎたかしら？」

「… それはそうよ… 残りの妖力は残っていないのでしよう？」

幽香が力なく笑うのを見て彼女はキセルをしまう…

「貴女とは二度と戦いたくないわん… このアタシでも手に余るわ…」

「それはどうも… 次は私が勝つわ！」

「… 勘弁してよん… はあ… 夜喪妓・睡煉… 後は任せたわん…」

こうして鈴蘭畑の戦いは幕を閉じる…

だがまだ異変が完全に終わっていないことを彼女は知らない……

観察にて

三途の川にて、死神である小野塚小町と会った夜喪妓と睡煉は異変の内容を知る……

今回の異変は誰も悪くない只の自然現象に過ぎないことを知った彼女達は帰還しようとするが、小町に博麗霊夢と霧雨魔理沙をどうかしろと止められ渋々異変探索の為三途の川の奥へと向かう……

本来なら仕事上関係のないことだが……一体どうなる？

side 夜喪妓

「……全く時間の無駄だ」

私達は三途の川の奥へと進む……

本来関係のないことだが、あの死神に脅しをかけられてのだからしょうがない…… 私としても三途の川に沈められるのはご免被る……

「つまり…… 霊夢と魔理沙の2名を止めろってことでいいんですね？…… どうします？ 闇討ちしますか!」

同志睡煉が手術刀を鳴らす、私としては気が乗らない…… 戦うことは簡単だが私自身のモチベーションが落ちているのも事実だからな……

「とりあえずは…… 霊夢と魔理沙の一行を止めれば良いのだろうか？ 話し合いで解決できればそれでいい…… 私達はこの異変の内容を知ることができた…… それを説明すれば納得はしてくれるだろう？」

「…… まあ…… 確かにそれは理想論ですが…… 大人しく退いてくれましかね？ あの方々には観察した限り我が強いですからね……」

ここで正論を言うんじゃない…… 私だってそれくらいは分かっている……

私達はそのまま会話をせず先を進む……

来て早々霊夢の口からは非難の言葉を受ける…。非難される謂れはないのだがな…

「私達の仕事は異変の調査に過ぎない…。そういう解決は貴様らの役目だと思うがな？」

「ふん！似たようなものでしょうが！アンタらが前もって来てくれるとこつちが楽なのよ!!」

…おい…。博麗の巫女の仕事を押し付ける気か？勘弁してくれ…。私達は何でも屋ではないのだぞ…

「…はあ…。勘弁しろ…。本来こちらの仕事は、とうの昔に終わっているんだ…。これ以上の労力をかけないでくれるとたすかるのだがな…」

「…」
霊夢は私達の方をジロジロ見た後、辺りを見回している？

「…そういうえば…。毎乃葉はどうしたのよ？一緒じゃないのかしら？」

「…ああ…。同志毎乃葉か…。途中までは一緒だったのだがな…」
「残念ながら…。風見幽香に戦いを申し込まれて離脱した感じですよ…。今頃は本拠基地に戻って療養していると思いますよ？」

同志睡煉の言葉に魔理沙が反応を示す…

「げ…。幽香かよ…。怪我で済むのか？」

「へえ…。幽香の奴も動いていたのね…。気づかなかったわ」

2名はそれぞれの感想を口にする…

「…とりあえず戦いの方は終了して帰還するということしか受けていない…。勝ったか同士討ちになったかのどちらかだろ？」

…正直、同志毎乃葉が遅れをとるとするのは考えもつかん…。あの妖怪も相当な手練れのようなだが、本気の状態の同志が離脱する結果になると、相当激しい戦いだっただろうな…

霊夢の方を見ると少し詰まらなそうな表情を浮かべている…

「…ふーん…。そう…」

…？少し機嫌が悪くなったか？理由は分からんが…。同志の奴も私達以外の仲間が出来たらしいな…

「…で？その引きずっている閻魔はどうします？」

同志睡煉が霊夢の足元でもがいている閻魔を一瞥する…

ああ…話の所為で忘れていたな…

「このー放しなさい!!あ!!貴女達は！每乃葉の手下達!!この問題が終わったらすぐに！是非曲直庁に来るように！貴女達にはやるべきことがあるのです!!」

閻魔は私達第0部隊に向かって言い放つ… 私達がやるべきこと？

「…一体何のことだ？閻魔にお世話になることはしていないはずだが」

「貴女達は！輪廻の輪から外れている!!だから!!…ぐえ!!」

「はいはい…彼女達との話はまた今度よー！とりあえず目の前の異変の仕事をするわよー」

「待って！まだ話の途中です!!待ってー!!!」

閻魔の話が途中だというのに、霊夢は閻魔を引きずり、その場を後にする…

「待てよ！霊夢!!じゃあな！お前ら！」

「…ああ」

魔理沙も彼女の後を追い、その場を後にする…

全く…話の途中だというのに…時間を浪費しなかっただけマシなのか？

「帰るぞ…同志睡煉…」

キセルを火をつけて同志睡煉の方を向くと彼女は不安そうな顔をしている…

「ねえ？夜喪妓さん…さっきの閻魔…私達の事を輪廻の輪から外れているって言っていましたけど？」

「… ああ… 確かに言ったが？」

「面倒なことになりませんか？ 私達って… あの方の薬で生きながらえていますし…」

「… 寿命関連か… 専門ではないが… 魂と取り扱う連中にとっては私達の存在は看過できないか…」

死神に閻魔か… 確かに私達は紛いなりに不死の体を手に入れている… そのお陰で生きているというものだ… 元々の寿命を無視しているのだから輪廻の輪からは私達の魂は外れている… それに関して何か連中にとって不都合があるのだろうか？

「… ちっ… 話を殆ど聞けなかったのが痛いな… 何か言われるのか？」

「… 言われるだけならいいですけど、武力行使されるかもです」

… 物理的に私達を亡き者にしようとする考えも出てくるな… 冗談じゃない… まだ見てみたいことは沢山あるというのに…

「… 念のため同志毎乃葉にも伝えておいた方が良いな… 帰還するぞ睡眠」

「… うう… 何が起きるんでしょう？」

私達もその場を後にする… せつかく異変が終わったというのに余計な心配ごとで出ってしまった…

地獄の連中か… 勘弁してもらいたいものだ… 私達はまだ生きていたいというのに…

役所と書類

博麗の巫女一行の活躍により、季節外れの花が咲く異変が終わりを迎え、幻想郷にいつも通りの平和が訪れる…

しかし… 異変が終わったとしても安全ではない… 妖怪の山の封印牢の中では閻魔に目を付けられた第0部隊達が警戒を行っている…

まだ本当の意味での平和は訪れてはいないようだ…

side 睡煉

「… はあ〜」

重い空気が漂っている封印牢にて私は深いため息をつく…

「夜喪妓… 辺りの様子は大丈夫かしら？」

「オールクリアだ… 同志每乃葉… 連中はまだ来ていない!!この場所もまだバレてはいないはずだ!」

牢屋では、忙しく辺りを警戒する每乃葉様と夜喪妓さん…

前回の異変で閻魔に目を付けられてから私達は日々警戒態勢に入っています…

永琳様の薬により寿命という概念が無くなった私と夜喪妓さんと、長年生き続けている每乃葉様の存在は魂を管理している連中にとつては喜ばしいことではないみたいです… 本当に面倒なことになりましたね…

「ちよつと!睡煉!サボってないで!警戒なさい!」

ボーっとしていた所為か每乃葉様からのお叱りを頂きました… これはいけない…

「サボってないですよ〜!お昼ご飯を考えていたんです!!あまり警戒しすぎると方が一の時に疲れますよ〜?」

「… お昼かしらん?」

每乃葉様が時計を見る… すでに正午は回っています… 早朝か

らこうやっていれば疲れも来ますよ…

「… それもそうだな… 何かフライ系な物が欲しいな！私は！」

「… アタシはサラダ系が欲しいわん」

メニユーを言われました… ちゃっかり私をパシリに使っていきすね… まあいいですけど… とりあえず天狗の里の食堂に向かいますかね…

「はいはい… 分かりましたよー！… 私は何にしよう… ん… 人参も悪くないですが… 地味に値段高騰しているんですよ…」
私は考えを巡らせながら、封印牢の戸を開く…

「ちわーす！お迎えに上がりましたー！第0部隊のー！」

「… え？」

戸の向こうには、赤い髪の死神こと… 小野塚小町がいた！！出待ちしてやがった…

小町の姿を見た毎乃葉様達も戦闘態勢になる…

「き… 来たわねん！死神！！このアタシ達の命を奪えるものなら奪ってみなさい！！」

「動くな！近づくな！！筋1つでも動かせば頭をぶち抜く！！」

毎乃葉様達は… かつてない程の狼狽えようですね…

そんな毎乃葉様達を見て彼女は青い顔をする…

「いやいや… 待ちなよ… 別にそこまで警戒しなくても…」
「しゃべるなー！！頭をぶち抜くぞ！！」

… 話が通用しませんね、これはいけないかもです…

「まず落ち着きましようよく話が進みませんよー！」

小町の間に入ってとりあえず仲裁する… 少なくとも敵意は感じられませんし…

小休止…

「…で？何のよんなのよん!!わざわざここへ来たということはアタシらの…」

「いやいや… お前さん達の内容だけどそんな物騒なことはまだしない！」

小町は慌てて毎乃葉様を止める… まだという事は事前警告ですかね？

「まだという事は… 何なんです？」

私の言葉に小町は味方を見つけたかのような顔をする…

「正直… お前さん達第0部隊の魂を取るのはアタイとしても面倒な業務が増えるんだよ… だから一回是非曲直庁に来てもらって手続きをしてもらわないといけなくてね…」

「是非曲直庁？何よそれ？」

「アタイのボスがいる役所みたいなものさ… そこで手続きをすれば終わり!!そして定期的に更新に来てくれればアタイ達とのイザコザを避けられるってもものさ！」

向こうが出した要求… 何というか、こつちにデメリットもない、つまり受ければOKということでしょうかね？

「他に何かアタシ達に隠してないかしら？」

毎乃葉様が疑いの目で小町を見るが、彼女は首を横に振る…

「無いよ!!とりあえずさ！それさえやればアタイの仕事はほぼ終わりなんだよ！」

「ふむ… 同志少なくともこいつは嘘は言っていない… この情報は信じてもいいはずだ…」

夜喪妓さんの言葉に毎乃葉様は口を閉ざす…

「… 信じていいのよね？」

「私は嘘は言わん… 残りは彼女次第だ…」

「だから！アタイはさつきから本当のことしか言っていないよ!!さつ

さとしておくれ!!時間が惜しいんだよ!!」

「タイムイズマネーです… とりあえず彼女について行きましようよ…」

小町は封印牢の戸を開き… 私達はそれについていく…

「… え?」

目の前の光景を見て私は目を擦る…

… 確か… 封印牢の先は天狗の里のはずだったのですが、目に映るのは、里の景色ではなく… 役所のような無機質な空間?

外に出るはずなのに… 中にいるってどういうことですかね?

「… ねえ? 罨だったら殴るわよん?」

毎乃葉様が拳を鳴らすのが、小町は必死に首を横に振る…

「罨じゃないよ!!時間が惜しいからアタイの能力で距離を詰めただけさ!!何事も暴力で解決しようとするな!!」

「へー… 能力ですか… ちなみにどんなもので?」

小町は私を見つめる… まるで唯一の常識人と思っただような目です… コレ…

「アタイの能力は、距離を操る程度の能力だ!これであの牢屋と是非曲直の距離を詰めてやったんだ!すごいだろう!」

… 意外に便利な能力です… これがあれば遅刻しなくて済むかもです…

まあ… 遅刻なんてしたことはありませんがね?

「ご… 御託はいいから!!早くしろ!!早く終わらせて帰りたんだよ!!」

… 夜喪妓さんが喚いている… ヒトの目もあるから役所でライフルを構えるのはやめてもらいたいです…

「分かった!分かったから!!ついてきな!書類を書けば終わりだからさ!… まあ… また来ることになりそうだけどね?」

小町は夜喪妓さんを宥めながら、背を後押しする… 何とか申し訳ないです…

「お前さん達もついてきておくれ！」

「早く帰りたいわあ…」

「同感です…」

私達は小町の後続く…

「…」

「…」

「…」

私達は窓口に通されて、目の前に一枚の書類が置かれる…

「はい！そこに本名・年齢・生年月日・血液型・利き腕・目の色・その他etcを記入をして印鑑をいただくよ！」

「… え？それだけでいいんですか？」

「それだけでOKさ!!あくまで対象者の体の特徴が分かればいいのだから、こつちに不便はないからね」

何というか… 拍子抜けです… 書類を書くって言われたから、もつと多いと思っていたのですがね？

「… まあいいです… 早く終わらせて帰りましょう」

「思ったより単純だな… これでなら時間をかけることはないだろうな…」

でも毎乃葉様の方を見ると、何やらペンが止まっているようです…

「ねえ？年齢が分からないんだけどお？」

「… あ」

そういえば… そうです… 長い年月を生きている私達にとって年齢なんて数える必要がありません… まずいです… 書類に書くことが…

「ああ！いいよ別に… そこは備考だしアンタらの特徴が分かればい

いんだからさ…そこは適当でいいよ」

小町はまさかの回答をする…適当でいいのですかね？仮にも役所ですよ？まあ…これ以外なら別に困ることは…

「…えーと…では本名…睡眠…っと」

「ストップ!!!赤いのストップだよ!!!」

「え？」

早くも止められました…何で？

「どうした？何か問題でもあるのか？」

「睡眠つてのは本名ではないだろう？せめて本名くらいは書いてくれないと困るんだよ…ちなみに緑色の…アンタも同じくだよ…コードネームが書類に通る訳ないだろう？」

「本名は長く使っていないんだがな…」

「むう…」

私も夜喪妓さんも本名を書類に記入する…まさか、この名を書くことになるとは思いませんでした…

「ねえ？アタシの場合は天逆每乃葉で良いのかしらん？状態によっては名前が変わるだけど…」

每乃葉様は小町に再度質問する…一番進んでいませんね…

「今の状態でいいよ…」

色々と四苦八苦しながら私達は書類に筆を走らせていく…

…一時間経過し、何とか全員書類を書き終える…もつとも每乃葉様の書類が終わらなかつたのが原因ですが…

「…終わりましたね」

「早く帰るぞ…」

「…」

私達をともかく、每乃葉様は疲弊していますね…デスクワークが不得手といっても…ここまでとは思いませんでしたよ…

「同志よ…本当にこういうの苦手なんだな…」

「…当然よ… こういう細々としたのは苦手なのよん… それに… 能力使って処理したら後々面倒なことになりそうだし…」

毎乃葉様は机に突っ伏している… こういう変なところで真面目なんですよね… このヒト…

小町は私達の書いた書類を見ながら笑みを浮かべている…

「… よし！これで全員の書類は完了だね！お疲れさまだよ！！」

小町は書類を指で弾きながら私達を見つめる…

「…これで完了よね？アタシ達としては帰りたいのだけど？」

「ああ！アタイの仕事はほぼ完了だ！これで帰っていいさね！！残りは後一人の書類を提出してもらえれば完全完了なんだけど…」

「後一人ですか？… 誰？」

小町は私の顔を見て不思議そうな顔をする…

「あれ？あの場所にいなかったから連れてこなかったけど… アンタらのメンバーでいたよな？もう一人？」

「… もう一人？それってまさか？」

私が聞き返す前に毎乃葉様が小町に詰め寄る…

「な？何だい!？」

「ねえ？聞きたいんだけど… もう一人ってどういうこと？現存のメンバーはここにいただけよん？」

「あれ？そうなのかい？でも映姫様から4人分持ってこいとかしか言われてないし…」

小町は困惑した様な反応をし、毎乃葉様は嬉々とした表情で小町を見つめている…

「ねえ？アンタの言い分だと… 忌梗の申請書類が必要のようね？何で必要なのかしら？彼女は遙か昔に亡くなったというのにねん？」

「え？そんな話は聞いてないよ!？アタイは只4人分の書類を作成しろとしか言われてないけど…」

忌梗の死が伝えられていませんか… おかしいですね？魂を扱うこの役所がそれを知らないわけないというのに…

「…小町…無駄話をしている暇があるのですか？貴女にはまだ仕事が残らんまりと残っているでしょう？」

「!?」

声のする方を見ると、そこには緑色の少女がいた…確かこの前の異変で霊夢に連行された映姫とかいう閻魔だった気がする…

「映姫様!？」

「早くそれを提出して持ち場に戻りなさい!このペースだと定時に上がることもなぞ不可能になりますよ?」

「はいー!!!」

小町はすごすごと書類を持って役所の奥へと消える…ああ…話の途中だったのに…

毎乃葉様も話を遮られたことに表情を曇らせている…

「もう!今大事な話をしていたというのに!!」

「仕事中に私語は慎むものです…それに情報漏洩なぞ許されるわけがないでしょう?」

映姫は手を叩きながら私達を見回す…

「はい!貴女方もお帰りを…書類は書いてもらいましたし、後の期間中は好きになさって結構です」

「随分と勝手ねン…そつちから呼び出したというのに!」

「本来はお茶でも出したい所なのですが…私達も暇ではないので…異変後処理+20分後には通常の裁判がありますのでね」

映姫は腕時計を見ながら踵を返す…

「あ!ちよつと待ちなさいよ!まだ話の途中でしよう!？」

「…失礼」

映姫はそのまま、役所の奥へ消える…

「役人も忙しいようだな?」

「…まあ?お仕事ですし、しょうがないですよ」

毎乃葉様の方を見ると、さつきとは打って変わって彼女は満面の笑

みを浮かべている…

「おほほほ… 全くいけないわね、お役人は… このアタシに隠し事なんてつける訳ないのにねン！」

「それってどういう？」

「… 貴重な情報提供ありがとう… っと言ったところかしらねン？」

毎乃葉様は、手元に小さなホログラム画面を出してそれを眺めている…

… ああ… 能力使ったんですね…

「おい… 同志… お前まさか？あいつの思考を読んだのか？」

「まあ… それに近いことかしら？このアタシの能力は知っているでしょう？（情報を操作する程度の能力）」

… 忘れかけていましたが、今の毎乃葉様は2つ能力がある状態でしたね… どうも脳筋… ごほん！こういうまどろっこしい力は使えないと勘違いしてしまいます…

「で？分かったんですか？」

毎乃葉様は首を横に振る…

「残念だけど、時間がなかったから一部分しか侵入できなかったわねン… あの閻魔の頭の中膨大な情報が入っていたから… 本当に全体の2%くらいよ」

「？… じゃあ情報は得られなかったのか？」

「おおざっぱな情報だけど充分よ… 連中は忌梗の死を本当に知らないということだけよン！魂を管理する連中が知らないということは生きているということでしょう？」

… まさか、そんなはずは？夜喪妓さんが、生存は絶望的だと…

「… 生きているのか？この世界でアイツの認識ができないというのに？」

夜喪妓さんの言葉に毎乃葉様は考える素振りを見せる…

「問題はそこなのよねン… 何で死んでいないのに、アンタの目で認識できないのか、通信機の電波を認識できないのか… 謎だらけねン…」

ぐう…

「…」

私のお腹の虫が鳴る… しまった… お昼抜いていたから鳴っちゃった!!

「あはは… 失礼しました…」

「… ふふ… そういえばご飯まだだったわねン！話は今度にしましょう？今日はアタシが奢るわよン！」

「感謝する…」

「楽しみですよー！」

「じゃあ！人里で済ませましょう！色々あって疲れたし、今日はいいでしょうねン！」

毎乃葉様は入り口へと向かい、私達も役所を後にする…

忌梗の生死がとりあえず、絶望的ではないことが分かっただけでも貴重な情報ですね… しかしアイツ… そこにいるんでしょうか？

新聞の大暴落

とある日… 妖怪の山のとある民家にて…

「… あや？… あやや!？」

そこには机の書類を見て愕然としている射命丸文… 彼女が持っている書類は、今月の新聞の売り上げと言う文字が記載されている…

文文。新聞… ○月週… 右肩下がり…

文文。新聞… ×月週… 右肩下がり…

文文。新聞… △月週… 右肩下がり…

と… 散々なデータが書類に掲載されている…

「オーマイ！ニユースペーパー!!!」

妖怪の山に文の叫びが響き渡る…

そして… ここは妖怪の山の中にある封印牢… 文はそこに赴き、第0部隊のメンバーに大量の新聞を手渡す…

「さあ！皆さん！文文。新聞の勧誘を宜しくお願いしまーす♪」

「「ふざけんな!!!」」

そして第0部隊の叫びが響き渡る…

side 每乃葉

「あやや？つれませんか？どうしました？」

文は不思議そうに首を傾げている… よくもいけしやあしやあと
!!

「こんな早朝に来て戯言とは良い身分ね文!!アンタは前に！このアタシに新聞の雑用させて上層部に怒られたの懲りてないのかしらあん
!!!」

「それどころか、同志每乃葉だけでなく、私達まで雑用をさせると言うのか!!」

「バラシて… 手羽先ですかね？」

アタシ達が殺気を向けるが文は慣れたのか怯むことなく前へ進む…

「もうこの際… 手段は選べなくなりました… 私の新聞の部数を上げることができるなら！ 幾らでも上層部に怒られる道を選びます!!」
「うっ!？」

つい… 氣迫に押されて後退してしまったわ… このアタシが何てこと…

「さあ！ 第0部隊！ 私の脚となつてください!!」

まさか命令… この子ガチなの!?! 幾ら何でも命知らずでしょう!?

「良し！ 同志… 止めてくれるな… ハチの巣にして剥製にしてやろう…」

「剥製づくりなら手伝いますよ!」

… 部下達は殺る氣満々ね… 私用での殺生は始末書何枚分になるのかしら？

だが文は懐から写真を取り出す…

「私は暴力には屈しません!! ペンは劍よりも強いです!! 万が一私の身に何か起きたら、これが幻想郷中にばら撒かれますよ!!」

「…」

写真を見てアタシ達は硬直する…

それには①博麗の巫女の服を着て神社の掃除をしているアタシ達…

②公共浴場で湯浴みをしているアタシ達…

③酔っぱらって一糸纏わず牢屋で爆睡しているアタシ達が映っていた…

②・③は隠し撮りとしても… 何で黒歴史の①が写真として残って

いるのよ!!

「はあ!?何でこれがここにあるのよー!!」

「馬鹿な!?あの時確かにカメラの破壊を確認したというのに!!」

夜喪妓の言葉に文はフンと鼻を鳴らす…

「ふふふ!!バックアップは重要ですよ!?おかげで貴重な一枚を残すことができました!!」

文は得意げな顔をするが、睡煉が彼女の背後に周り羽交い絞めする…

「あや?」

「要するに… 貴女を亡き者にすれば流出はしないということですよ?じゃあ!さっさと… 逝きましようか?」

睡煉が文の首に手術刀を当てるが、文は顔を真つ青にしながら口を開く…

「あやや!?そんな暴力は認めませんよ!!ここで私を亡き者にしても!!写真の流出は止まりません!一定時間以内に私の連絡が無かったら自動的に新聞入りするようになっていきます!!あまりこのようなことはオススメしませんよ!!」

「…ぐっ」

…この子… 保険をかけていたのね… このまま文をボコつても流出は免れないみたいね… 何てこと…

「… 睡煉… 解放しなさい…」

「ええ!?でも!!」

睡煉からは反論に近い言葉が出てくるけど… ここは従った方が身のためよ…

「いいから… 大人しく頑張りましたよ?人の記憶に残ってしまったデータこそ… 隠蔽は途方もない作業になるのよん…」

このことには身に覚えがあるわ… 実験だけ… あの方に仕えていた頃… 着せ替え人形にされた時があつて… それが知っている人にそのことが知れ渡ってしまったことがあつた… 全員の記

憶を改ざんするのに苦労したわ…

「あややく♪毎乃葉は物覚えがあつて助かりますよ〜」

「今回限りよン… とりあえず今あるデータは没収させてもらうから… それと… アタシ達も何かしらの報酬があつても罰は当たらないわよねン！」

「報酬ですか？何です？」

アタシは写真を見る… 前々から気にはなっていた問題だけど… 思い切つてやつてもらおうのもいいかもねン！

「封印牢にお風呂つけてもらえるかしら？イチイチ公衆浴場へ行くのは面倒なのよ…」

「… それくらいならOKですね！」

文から手を差し出されアタシはそれを握り返す… 取引は成立ねン！！

「おほほほ！！嬉しいわ！文！」

…
メキメキ

思いつきり握つた文の手からは不穏な音が聞こえ始める…

「うぎやああああ！！折れる折れる！手が折れます！！暴力反対ですー！！」

「はいはい…」

文を解放し、アタシは部下達を見る… 彼女達は不服そうな顔をしている…

「おい！同志！！いいのかこれで！！」

「そうですよ！！これはちよつと悔しいですよ！！」

「落ち着きなさいよン… いいじゃないの… お風呂が出来ると思えば…」

部下達を宥めてアタシは文が持ってきた書類を纏める… 内容は、新聞の契約書みたいね…

アタシは手拍子をして、辺りを落ち着かせる…

「はいはい… とりあえず各自契約を頑張つていくわよン！！」

「えー！」

「納得できませんよー!!」

「ごねる部下達の背中を押して封印牢を後にする… とりあえず、やるべきことはしまししょうかねん？」

side 睡煉

「はあ… どうしてこんな面倒なことを…」

私は紅魔館へ向けて足を運ぶ… 私の担当はあそこですか… あまり気が乗らないのですよね… あまり見知った関係でもありませんし、契約を取れるかどうかですら微妙です…

紅魔館の門の前に着陸すると、門番の美鈴が私の存在に気づく…

「… あら？ 貴女は… 確かあの天狗の？」

「どーもです… ちよつとお時間宜しいですか？」

私の言葉に美鈴は首を捻る…

「うーん… 今はちよつと… 図書館の方で立て込んでまして…」

「うん？ 図書館？」

何かあったのでしょうか？ せつかく来たのに契約が取れないのは少し嫌ですね…

「ええ… いつもの泥棒退治ですよ…」

「泥棒退治？」

私が聞き返すと、美鈴は困ったかのような顔をする…

「白黒もとい… 霧雨魔理沙… 彼女がパチュリー様の図書館の本を盗んでいくのですよ… それも複数回… お陰で図書館の方でパチュリー様達が応対中なのです」

「へー… それは困りますね」

… 霧雨魔理沙… 確か竹林の異変の時に相手した方ですね… まさか手癖が悪いとは思いませんでしたよ… これでは新聞の勧誘どころでは…

「… いや… これはチャンス？」

この状況をネタにすれば勧誘できるかも!!ここで魔理沙を撃退すれば・・・新聞の勧誘を受けてくれるかもしれないね!戦闘は・・・まあ何とかなるでしょう?

私は美鈴に向き合う・・・

「じゃあ!!私も手伝いますよ!!私もそれなりに戦えますし!」

「え?良いのですか?」

美鈴は驚いた顔をするがすぐに不審そうに私を見つめる・・・

「うーん・・・ですが何か企んでいませんか?貴女の気が真つ黒なのですが?」

「あらら・・・まあ怪しむのも当然ですか・・・でも心配は無用ですよ・・・ちよつとした取引をしていただければ私は満足なんです!」

「私の一存では決められないですよ・・・そういうことなら咲夜さんに言つてくださいね?」

美鈴は大人しく門を開く・・・あのメイドか・・・まあ何とかなるでしょう!

「じゃあ!頑張つてきまーす!」

私は門を通り、図書館の方へ向かう・・・

図書館の戸を開けて中に入ると私は足を止める・・・

「うひゃあ・・・これは酷い・・・」

床に散乱する本の数々・・・破壊しつくされた本棚の数々・・・黒焦げになってしている使い魔らしき人・・・激しい戦いの後のようです・・・

奥に進むと破壊音が更に響き渡る・・・そこに足を運ぶとそこには魔理沙と咲夜の戦いが行われていた・・・

「はは!!随分と疲れているみたいだな!」

「ぐぐ・・・この白黒!!」

咲夜は負けじとナイフを投げるが、魔理沙はそれを避けて彼女に向けて八卦炉を向ける・・・

「これで終わりだ!!」

光弾が咲夜に向けて放たれ、彼女は避けることが出来ず被弾す

る…

「きゃあああ!!」

被弾した彼女は私の近くに吹き飛び地面に臥す…。どうやら決着はついたみたいですわね…

「んー…。出番はなさそうですね…」

「ん？あ？お前…。毎乃葉の部下か？」

魔理沙は私に気づいたのかこちらに向けて笑みを浮かべる…

「ええ…。どーもです…。新聞の勧誘に来たのですが…。どうやら強盗の現場に立ち会わせたいで…」

「強盗とは失礼だな!!私は死ぬまで借りていくだけだ!パチュリーにはいつかは返すさ」

魔理沙は奥の本の山を指さす…。本の山の中からは誰かの左腕が飛び出している…。恐らくこの図書館の主のパチュリー。なんとらが埋もれているのでしようね…。どうやら負けてしまったみたいです…

「はあ…。せつかく契約がとれると思ったのに…」

「契約？文のところでバイトでもしているのか？」

「ちよつと…。色々ありましたね…。新聞の契約が取ればと思つて来たのですが…。丁度泥棒騒ぎがありましたし…。退治すれば契約取ってくれるかな〜と思つたのですがね？」

ガシ…

脚を掴まれる感触がして私は足元を見る…。そこには咲夜が荒い息を吐きながら私の脚を掴んでいた…

「え？何です？」

「新聞の契約…。取つてあげるわ…。だから…。あの白黒を…。退治してくれるかしら？」

…んふふ!!少し話せば反応すると思つてましたよ!!ここまで私のシナリオ通り事がうまく運んでいるようです!!…。でも念のため確認を…

「嬉しいですね!!...でも本当に良いのですか？」

「...この際手段は選べないわ...だからさっさと！仕事なさい!!」

私のごねた質問にじれったく思ったのか咲夜が声を荒げて了承する... 契約確定ですね!!

「了解ですー！」

咲夜の了承を得た私は手術刀を回しながら魔理沙へと向かう...

「おいおい!!そんなのありかよ!!」

「あはは... 目的が一致した感じですよ... 大人しく狩られてもらえる
と助かりますよ♪」

私の言葉に魔理沙は不服そうにスペルカードを構える...

「お前には前の戦いでは勝ったからな... もう小細工は私には通用しないー！」

「小細工何て使いませんよー... 今日の本気でやらせてもらいますから...」

私は姿を元に戻し、髪をかき上げる... 魔理沙は急な私の変化に驚きの表情を見せている...

「なっ!!お前... その姿？」

「... 私にこの姿をさせるんだ... 悪いけど仕事は確実に遂行させてもらうから...」

私は手術刀を持って彼女へと向かう...

軽く... 20分あれば上々だろ...

同時刻... 人里にて...

side 夜喪妓

「... はあ... 契約ってどうとればよいのだ？」

人里の甘味処で私は緑茶片手に溜息をつく...

全く同志毎乃葉め... こんなことを承諾しやがって... 確かに牢

屋に風呂がつくのはありがたい…。イチイチ公衆浴場へ行く手間が省けるからな…。だがこんな雑務は私は不得手なのだ…。全く余計な仕事を振ってくれたものだ…

「同志睡煉は紅魔館に行ってしまったし…。私はどうしたものか…。あまり知りあいがいないのだが」

博麗神社に向かっても契約は無理だな…。あそこには金の匂いがしない…

かといって妖怪賢者のところに行くのも気が引ける…。どちらかというと敵対勢力だからな…

永遠亭は…。論外だ…

「せめて一件さえ取れば帰還することができるとは…。どうしたものか…」

私が途方に暮れていると甘味処に新たな客が来店する…

「ん!? おい! 夜喪妓ではないか!!」

「あ?」

声のする方を向くとそこには、買い物籠片手の人里の守護者こと上白沢慧音がいた…

「… 久しぶりだな慧音…。この前ぶりか?」

「ああ!! あの時妹紅が済まなかった!」

慧音は私に頭を下げる…。別に気にしてはいないのだが…

「別に構わない…。気にするな…。向こうも悪気はないのは分かっている」

「… そうだな…。で? 今日は1人か? 何でここに?」

慧音は単刀直入に聞いてくる…。かなりストレートに聞いてくるのだな?

「… 何…。仕事の一環だ…。新聞の契約を任されてな…。どうしようか途方に暮れていたところだ…」

私が契約書を見せると慧音は笑みを浮かべる…

「ははは!! 軍人が文屋の真似事か?」

「… 不本意だが…。同志毎乃葉の命だ…。断るわけにはいかんから

な…」

「仕事熱心だな… それは感心だ…」

慧音は契約書を眺めた後、私の方を向く…

「契約結んでもいいぞ！私でも良ければな！」

「本当か!!」

まさかの行幸!!これはありがたい!!これで胸を張って帰還できるというものだ!!

…だが?無理強いは…流石にも気が引けるな…向こうは大人なり小なり私に氣遣っている…このことを弱みに付け込むのは頂けん…

「契約はありがたいが無理は言わないぞ?」

「構わないよ!今度の授業での内容として使わせてもらえれば私も助かるからな!」

「うむ…それは助かるというものだ!」

…ふふふ…どうやら杞憂だったか…では改めて…交渉を!!

「ちよつと待ったー!!」

「?」

声の方を向くと、そこにはいつぞや同志毎乃葉にボコボコされた者こと藤原妹紅が現れる…

彼女は私と慧音に割って入り私を睨みつける…

「お前!!慧音に何をしようとしているんだ!?!」

「妹紅?ちよつと何を?」

「慧音は黙って!ここは私が何とかする!」

何か言おうとする慧音を妹紅は黙らせる…どうも私はこの子に敵対されているようだ…

「…別におかしなことをしようとはしていない…少し新聞の契約について話し合っていただけだ」

「新聞だ?!?どうだかな!!海賊みたいな目をした奴の話信用できる

わけないだろ！」

「…私の目のことか？」

…全く無礼な奴だ…好きでこんな目になったのではないのだから…

(やめろ!!まだ私は使える!!まだ鍛冶はできるはずだ!!だ…だから!!手術はやめてくれー!!!)

(私の目…私の目があ!!!)

…嫌なことを思い出してしまった

この子は…少々痛い目をみないと分からないようだな…余りヒトの気になっていることをストレートで物言うのは宜しくない…

「何ボーっとしているんだ!!」

妹紅は私を煽るように言葉を発するが…問題ない…

「…」

すでに彼女は私の射程圏内…残りはライフルを構えて彼女の頭に照準を合わせてトリガーを引くだけという簡単なお仕事だ…

大丈夫死にはしない…私も彼女も不死であるからな…軽い喧嘩になるだけだ…

「ふん!!!」

ごっ!!!

私はライフルを構えると同時に妹紅が地面に沈む…?まだトリガーは引いていないのだが?

「…妹紅は無礼を働いて済まない」

慧音の方を見ると額を摩りながら、倒れた妹紅を抱えている…妹紅の方を見ると額に大きなたんこぶが出来ている…

「別に構わないが…何が起きた？」

「教育的指導だ！」

慧音は自身の額を指さす…ほう?まさかの頭突きで不死者を仕留めたというのか?能力を抑えているとはいえ、私の目でも追えない

とはな…

「とりあえず… 新聞は良い方向で検討させてもらう！すまん！妹紅を家まで送らなくては」

慧音は書類に判子を押して、妹紅を背負って寺子屋へと帰っていき…

「… 紆余曲折はあったが、契約はとれたか？」

… だが頭の火が消えて助かった… 同志たち程ではないが… 私も熱くなるタイプだからな… ここは人里… 問題を起こす訳にはいかないからな…

「感謝するよ… 人里の守護者」

私はライフルをしまい、書類を持って妖怪の山へと帰還する…

迷いの竹林… 永遠亭にて…

side 每乃葉

「永琳様！新聞の契約をお願いします!!」

医務室にてこのアタシは永琳様に土下座をする… 正直新聞の契約を取れるのはここしかないわん!!仕事を了承して契約が取れましたー!!になれば部下に示しがつかなくなる!!

永琳様は私を呆気にとられた様子で見えていたがすぐに我に戻る…

「え… ええー！いいわよ！一部くらい！だからそういうのやめなさい!!」

彼女は無理やりアタシを立たせる…

「ありがとうございます!!感謝するわん!!」

早くも契約完了ね… 残りは結果を文に知らせて今日の仕事は終わり!!

「ああ… でも条件はあるわよ?」

「条件?」

心の中でウキウキになっていたアタシは永琳様の方を見る… 条

件って何？変な条件でも付けられたらとんでもないことになるわ
ン…

「少し進んだ話になるけど… そのうち貴女に頼み事をする時が来る
かもしれないわ… その時に私の手となり足となってくれるかしら
？」

頼み事？何か面倒なことではなければいいけど？

「…この前みたいなの異変は嫌よ？」

「そういう類ではないわ… 安心なさい」

永琳様はきつぱりと言い放つ… まあいいわ… そのくらいな
ら…

「…ええ！では契約成立ねン！」

アタシは書類を纏めてその場を後にする…

妖怪の山…

妖怪の山に帰還したアタシは、文の家のポストに書類を投函す
る… これでお仕事は終わり!! 黒歴史は闇に葬られ、封印牢にはお風
呂が作られていい事づくめよ!!

「おや？同志毎乃葉も終わったのか？」

「ン？」

後ろを見ると、そこには夜喪妓と睡煉の2人がいた… 睡煉の方
は… 珍しく素の姿ね？

「どうしたのよン？睡煉… アンタがその姿でいるのは珍しいわね
？」

「泥棒退治を頼まれましたので…」

「泥棒退治？」

… 新聞の勧誘に行ったはずなのに… 何でそんな依頼を？

「ええ… 某白黒の魔法使いに少々お灸をすえただけです… ちゃん
と契約はとってきましたとも…」

睡煉はポストに書類をねじ込む… 白黒って魔理沙のことよねン
？あの子泥棒やっていたの？怖いわねン…

「ご苦勞様かしら?で?夜喪妓の方は?」

「同じくもらってきた...少々喧嘩になりそうだったが問題ない...」
彼女もそのままポストに書類をねじ込む...喧嘩ねえ?とりあえず...怪我らしいものはしていないみたいだし...無事に仕事は終えたようね...

まあ...文に言われた通り契約は持ってきたし、文句は言われないわね!!これで足りないとか言ったら焼き鳥の刑に処すわん...

「...んふ!!有能な部下を持って幸せだわん♪...そうだ!!今日はアタシの奢りでご飯に行くわよん!!」

「良し来た!!」

「...感謝です」

アタシ達はそのまま妖怪の山を後にして、この前の屋台へと向かう...

「...」

でも永琳様...アタシに頼み事とか言っていたけど...何なのかしら?

永遠亭にて...

八意永琳は誰もいない診療室で独りアルバムを眺めていた...

アルバムの中には、かつて彼女が月の賢者だった時にいた弟子たちの日常写真が並べられている...

「とりあえず...毎乃葉には言質をとったわ...残りはあの妖怪の賢者が変なことを考えなければいいのだけどね...」

彼女が思い浮かべるは、幻想郷の母こと八雲紫、神出鬼没の彼女に對して何らかの警戒を持っているのだろう...

「...杞憂ならいいけど...こういう時は絶対何か起きるのよね...」
彼女はアルバムから写真を2枚手に取る...

1つは月にいる弟子の写真...もう一つはとある者と並んで映つ

ている天逆每乃葉の写真…

これを見て彼女は笑みを浮かべている…

「…でも既に手ごまは揃っているわ…残りは私の采配次第ということね…」

彼女が写真をアルバムに戻すと診療室に入る者がいた…長い薄紫色髪をしたうさ耳少女こと…鈴仙・優曇華院・イナバだ…

「師匠！夕ご飯できましたよ！」

「ええ…すぐに向かうわ」

永琳はアルバムを棚に戻し、診療室電気を消してその場を後にする…

誰も予測のつかない水面下で起きている戦い…その火蓋が切って落とされるのはいつの日か…

太陽畑のティータイム

とある日の青空が続く幻想郷にて…

多数の向日葵自生する太陽の畑には、とある者達がいた… 向日葵に囲まれた民家の前には傘を刺したテーブルがあり、そこにはこの太陽の畑の主の風見幽香と天逆每乃葉がいた…

「…」

「…はい… できたわ」

幽香は每乃葉の前にハーブティーが入ったカップを置き、每乃葉はそれを怪訝そうな顔で見つめている…

「… ねえ？ 何でこのアタシを呼んだのかしらん？」

「独りでお茶会も飽きてしまったから… 今回は貴女を呼んだだけよ… 偶々に過ぎないわ」

每乃葉の言葉に幽香はハーブティーの香りを確かめながら返答するが特に気にするような素振りはない

幽香の反応が薄い事に每乃葉はコートの中から封筒を取り出す… 封筒には大きな字で每乃葉・太陽の畑で待つとのことしか書いていない…

「偶々ねえ？ こんな果たし状のような手紙を出しておいて… 何が目的なのよん？ このアタシに隠し事は効かないわよ…」

「頭が悪そうに見えて… 随分と鋭いのね…」

幽香の言葉に每乃葉は笑顔を浮かべて拳の骨を鳴らす…

「要件は何かしら？ このアタシは気が短いから単刀直入に言ってもらわないと分からないわん！」

「今回は戦いの気分ではないわ… いいから座りなさいよ…」

「むうー… 何なのよ…」

每乃葉は大人しく席に座り、幽香はテーブルに置いてある彼女の分のティーカップを指さす…

「冷めるわよ…」

「…」

每乃葉はティーカップを目に着いたスコープのスイッチを入れ眺

めている…

「… 変なのは入っていないようね？じゃあ頂くわ！」

彼女がハーブティを口に含むと、幽香はクツキーの入った皿を置く…

「好き嫌いはあるかしら？」

「… 肉類以外なら何でもOKよん」

「力任せな戦いかたなのに肉がダメなのね…」

幽香はティーカップを口につけながら、彼女を観察するように見つめている…

「…」

「…」

そしてしばらく沈黙の時間が過ぎる…

「… って！話をはぐらかさないでくれるかしら！いい加減要件を言いなさいよ！！アタシこっに見えて忙しいのだけど!!!」

「… 文の情報なら貴女は今日一日非番だと聞いているけど？何か用事でも？」

「ぐうう…」

幽香に凶星を突かれて言葉を切る每乃葉… そんな彼女を見て幽香は溜息をつく…

「そんなに急かさなくてもいいじゃないの… せっかちなね…」

幽香はティーポットを手に取りカップにハーブティを注ぎながら口を開く…

「… 単純に貴女について興味が出ただけよ… そのためにわざわざ呼び出したのよ… 私と実力は同格だし認めてはいるのよ… これでいいかしら？」

「!!このアタシに興味ねえ… いいわよ！さあ！何が聞きたいのかしらんー！」

幽香の言葉にさつきまで不機嫌だった每乃葉は打って変わって笑

みを浮かべ、そして彼女の変わりように幽香は首を傾げる…

「あら？良いのかしら？」

「質問は受け付けるわん!!! 一部例外はあるけど… 何でも聞きなさいよんー!」

毎乃葉の言葉に幽香はティーカップを口につけながら少し思考し… 口を開く…

「まず最初に思ったのだけど… 貴女… この前の戦いの時、本気出していなかったわよね？」

幽香の言葉に毎乃葉は首を捻る…

「本気よん？ 上からの指示で本来は100%の力は出していけないのに、今回は例外で100%よ？」

「… 利き手を使わないの？ 貴女は確かに力こそは出していたけど、全部の攻撃が利き手とは逆だったわ… バレないと思ったかしら？」

「あ… そういうことねん…」

毎乃葉は左手の手袋を外して幽香に左腕を見せる… 彼女の左腕には痛々しい縫合の痕が残っており、幽香はそれを見て眉を顰める…

「怪我かしら？」

「ずっと昔に受けた傷よ… 今は何とかなってはいるけど、戦闘に支障をきたすのよねん… あまり力が入らないし… 細かい作業は苦手なのよん…」

毎乃葉は苦笑いしながら手袋を再びつける…

「なるほどね… それは能力で直せないのかしら？ 貴女の能力なら隠蔽はできるでしょう？」

幽香の言葉に毎乃葉は座ったまま椅子を倒して天を仰ぐ…

「無理よん… このアタシの能力も万能ではないわ… アタシの左腕は兵器としてはもう死んでいるのよん…」

「？」

幽香は疑問を浮かべ、每乃葉が口を開く…

「アタシの能力… 生物に関しては体の機能が停止したところには作用しないのよん… 左腕以外の部位だったら隠蔽はできるけど、兵器として機能が停止してしまった箇所に関してはどうしようもないわん…」

「すぐ治せばよかったのに…」

幽香は不服そうに言うが、每乃葉も不服そうな顔をする…

「諸事情あつて能力が使えなかったのよん… あの時のアタシ… 弱っていたし切断された左腕を戻すのだけで精一杯だったのよん…」

「残念ね… 完全での貴女の戦いは拝めそうにないわね…」

「ふん… この話はもういいでしょう？ まだアタシの機嫌が良いから質問には答えてあげるわん…」

每乃葉は手袋をつけて椅子を座りなおして幽香の方を向く…

「次ねえ… この前の戦いの違和感がなくなつたから… 次はどうしようかしら？ これは流石にも貴女の機嫌を損ねるかも…」

「何でもいいわよん？」

每乃葉の言葉に幽香は口を開く…

「貴女… 天狗ではないでしょう？」

「…」

幽香の質問に每乃葉は口を閉ざしたままになる… そしてホログラムを出してデータを眺めている…

「… 貴方からは人為的に創られた力を感じるわ… そして…」

「… やはり貴女は頭が良いようね… 妖怪の山の連中はアタシが危険度の高い天狗だと思つていただけだねん」

幽香の言葉に每乃葉は返答する… 彼女はホログラムを消して幽

香に笑みを浮かべる…。幽香は言い残した言葉を紡ぐ…。
「…貴女からは妖怪の気というよりも神に近い気を感じるのよ…
書物を確認して貴女の正体に気づくことが出来たわ…。」
「このアタシの正体ねえ？わざわざ確認までするとはご苦労なことね
ン…。」

每乃葉は別にどうでもよさそうな反応を示し、幽香は口を開く…。

「貴女の正体は天逆每…。天狗や天邪鬼の祖先とされる女神…。
でしよう？」

幽香が言葉を言い切ると、每乃葉はパンパンと彼女に向けて拍手を
する

「おほほほ!!!正解よー！このアタシの正体に気づくとは貴女見どころあ
るわあ!!!」

每乃葉の反応に幽香も確信を持てたのか余裕の笑みを浮かべ始め
る…。

「私も驚いたわよ…。そんなものがこの幻想郷にいるとは思わなかつ
たもの…。」

「生きていると何が起きるか予測がつかないのは当然でしょう？アタ
シのような存在がいてもおかしくは無いわん！」

每乃葉はキセルを啜えて満足そうに煙を吐き、辺りにはお香のよう
な香りが漂う…。

「でも一つだけ疑問が残るわ…。貴女の正体は分かったけど、人為的
に創られたような違和感があるのよ…。それに関して…。」

「その質問にも答えてあげ…る♪確かにこのアタシの正体は天逆每だ
けど…。天然物ではないのよね？」

「天然物？」

每乃葉の言葉に幽香は疑問を浮かべる…。

「その書物に書いてあったか不明だけど、天逆每はとある神霊の闘気

から生まれた存在…。そっちの方がオリジナルの方なのよね…。でもアタシの方は貴女が言う通り人為的に創られた養殖物…。こういう風に言えば理解できるかしら？」

「女神を人為的に創ることができるのね…。」

「理論上は可能よ…。でももう無理でしょうね…。とづくに研究は頓挫してしまったし、この世にいる天逆毎は2人ということになるわね…。」

「その研究って何よ…。」

「…。」

幽香の言葉に毎乃葉は言葉を切る…。

「…。その質問は答えられないわね…。少々ペラペラ話過ぎたかしら？」

毎乃葉は懐中時計を取り出して時間を確認し、席を立つ…。

「お茶の方はご馳走様ねん!!そろそろ時間だから失礼するわ」

「お粗末様…。暇つぶしにはなつたわ」

「おほほ…。紫とかには言っては駄目よん!このアタシを認めてくれたヒトにしか教えないのだから!」

毎乃葉はキセルの火を消し、その場から消える…。幽香は毎乃葉がいたところをボーッと眺める…。

「いつの間にかに懐かれたのかしら?悪くはないけど…。」

彼女はポツリと一言洩らして、その場を後にし、太陽畑のティータイムも終わりを告げる…。

危険予知

時が流れ幻想郷の季節は秋へと突入し始め、妖怪の山の木々も紅葉に包まれる頃、天狗の里にある封印牢ではご機嫌な鼻歌が響いていた…

封印牢を覗くと、そこには新たな施設こと第0部隊専用の大浴場が増設されていた…

side 美羽

「んふふ〜♪良い気分だわ〜」

アタシは現在独りで浴槽につきり至福の時を味わっている…ついに第0部隊専用の浴場が完成した… 共同浴場だと他の天狗の目があるからどうしても長くはお風呂に入れないのよねン… ここでなら好きだけ浸かれるというものよ！

「やはり交渉して正解ねン！」

本来は仕事のご褒美ではなく、文の新聞の購読数を上げたことによるご褒美というのは少し微妙だけど、お仕事はちゃんと頑張っているのだもの！これくらいのご褒美は貰っても罰は当たらないわ！

「睡眠と夜喪妓も仕事でなければ来ることが出来たのですがね…」
「!？」

後ろを振り向くとそこには、アタシの半身である柚神が浴槽に浸かっていた…

「アンタ… いつの間に？」

「貴女の（んふふ〜♪良い気分だわ〜）の時には既にいましたよ？」

柚神は満足そうに深く温泉に浸かっている…

「アンタ仕事終わっているのよね？そのために半身状態なのだけど？」

「無論です… 仕事を他人に振ってサボっている貴女とは違うので」

「ちゃんと仕事は終わっているわよン!!」

…至福の時間が崩れた気がするわ…ん？というより元の状態
というべきかしら？

アタシは桶に入れた日本酒とお猪口を柚神の方に流す…彼女は
御猪口を持って中に入っていた酒を呷る

「まあ…悪くないです…仕事終わりのご褒美と思えば」

「ふふん！そうでしょう!?で？あの子達の仕事の進み具合はどの
よん？」

「いつも通りの警備ですし、そのうち交代の時間ですよ…」

「じゃあ！すぐに来るわね！あの子達も楽しみにしていたし！楽し
くなりそうだわ！

お仕事がないのは暇だけど、平和な事が続くのは良い事よん!!出来
ることならば続けてもらいたいわね！

ゾク…

「…っ!？」

…ん!?何よ急に…一瞬だけど…体が震えたわね?この状況
で体が冷えたわけではないというのに…

「…ん?...ん!？」

でもこの感覚には覚えがあるわ…戦争の数刻前…強敵と戦う
前に感じる震え…まさに危険予知というべきかしら？

「どうしたんです？」

柚神がアタシに尋ねてくる…この子は何ともないようね？

「逆に聞くけど…アンタは何も感じないの？ちよつと嫌な予感を感じ
ただけよ…」

アタシの言葉に柚神は察したのか辺りを見回す…

「周囲は特に問題はないようですが…嫌な予感ですか？一体何を
？」

「さあ？見当がつかないわね」

アタシの勘が鋭いのは自慢にはなるけど…今回は外れてもらい

たいわねン… 力を持っているアタシが震えるということとは…

ガラガラ!!

「只今戻りましたよー!」

「私達も登場だ!同志諸君!」

急に引き戸が開いたかと思うと、外から裸の状態の睡煉と夜喪妓がやってきたわ…

「ご苦労様です… お仕事は無事に終わりましたか?」

柚神の言葉に2人は頷いて洗い場へと向かう

「退屈ですよー!どうせ妖怪の山に用がある人何て滅多にいないというのにー!」

「確かに手持ち無沙汰になった気がするな… 警戒に越したことはないが…」

2人はそれぞれ感想を発した後シャワーを浴びる…

「まあ… そうよねン…」

内心溜息をつき、アタシは大浴場の天井を見つめる…

平和というのはあつという間に崩れてしまうのかしら?今度の異変の警戒が必要なのかしら?... 願わくば何もない事を祈るだけよ…

その頃… 幻想郷の外の世界

日ノ本に存在するとある神社では… あることが水面下で行われていた…

夕暮れ時の神社の境内には、参拝客の姿は見えぬ無人と化している…

(移転準備は完了だよ！)

(ご苦労)

突如2人の人影が神社の境内に現れて本殿に向かう…

(さて？次の世界はどうなるのかな？あつという間に私達の天下になつたりして？)

(油断するなよ… 次の場所は特殊な場所だ… 私達並みの力を持つ者が存在するかもしれないぞ)

2名は何やら話をしながら歩を進めている…

(深く考えすぎだよー！)

(逆にお前は甘いんだよ… だから私に負けるんだ)

(何だとー！)

何やら少しずつ口論に発展し始めている…

その2名の声を聞きつけたのか、神社から1人の少女が飛び出してくる…

「御2柱方！近所迷惑になりますからー！喧嘩はやめてください！」

長い緑色の髪に巫女服に身を包んだ少女は2名を注意をする…

怒られた2名はシユンと肩と落とす…

(喧嘩も何も… こいつが昔の事を持ち出すから…)

(それに普通の人間には私達の声は届かないし… 意味がないというか… 近所迷惑にならないというか…)

「… うう」

その2名を見た少女は戸惑うような仕草を見せるが、すぐに持ち直してパンパンと手を叩く…

「それももうすぐで御仕舞ですよ！御2柱なら次の世界でも信仰を獲得できますよ！さあー！ご飯が来ていますし！行きますよ！」

(はあい！)

(すまん…)

3名はそのまま神社の中に入り、境内には静寂が訪れる…

幻想郷に新たな異変の火種が持ち込まれる… 未知の未来はどうなるのか… それは誰にも分からない…
人でも妖怪でも神でも仏でも兵器でも…

第7章 : 6th ミッション 守れ! 山も同志モ!
救難信号

時は流れ秋になり、木々は紅葉に包み込まれ幻想郷の景色は赤・橙色に染まる…

そしてとある早朝、妖怪の山の封印牢にて…

「zzz」

「ぐぐ」

「むにゃ…」

第0部隊のメンバーは昨日酒盛りがあっただろうか… 一糸まとわぬ姿で一室で雑魚寝をしている…

全員深い眠りについており起きる気配はない… だが運命の時が刻一刻と近づいてきている…

第0部隊のメンバー夜喪妓の脱いだ軍服についている装置に赤い光が灯る。

僅かにピ…ピつと機械音を繰り出す装置は、その音の音量を徐々に高め速度を速めていく…

そして…

メーデー!メーデー!!!メーデー!!!!
封印牢にて爆音が響き渡る…

「ふぐおお・・・」

突然の爆音にアタシは耳を塞ぐ!!!

あ・・・頭がガンガンする!!昨日飲み過ぎたかも!!!

「夜喪妓さん!!!目覚まし時計かけないで下さいよ!!!」

睡煉が抗議するが、夜喪妓は耳を塞ぎながら首を横に振る・・・

「違う!!!そんなのかけてない!!!」

夜喪妓は耳を塞ぎながら、自分の軍服をあさる・・・

そして彼女の手には、装置が握られている・・・

「ん?通信機みたいな奴よね?何・・・誤作動かしら?」

「・・・いや・・・違う!救難信号が発せられている!!!」

「・・・それって?」

睡煉が尋ねると夜喪妓がアタシの方を振り向く・・・

「同志忌梗が助けを求めている!!奴が生きているという事だ!!」

彼女の口から朗報が飛び出してくる・・・忌梗が生きている!?

「ン!!?それマジ!!!んふふふ!!!」

「・・・でも?変ですね?確か呼びかけに応じないって前に言っていましたよね?」

「確かに・・・急に何で連絡を?」

確か・・・夜喪妓から連絡を寄こしても、返答はなかったらしいわね?それに彼女の居場所も知ることでもできなかったみたいだし今更ね・・・急に救難信号を送ってくるとはどういうことかしら?

「でも・・・急に呼びかけが来たということとは・・・忌梗が助けを求めているということよね?夜喪妓・・・今なら彼女を捜査することできるんじゃない?」

「承知した・・・」

夜喪妓は着替えを済ませて、外へと向かい、アタシ達も着替えを済ませて後を追う・・・

「あらっ？」

封印牢から出ると、夜喪妓が首を傾げて山頂を眺めている？

「どうしたのよん？ポーツとしちゃって？」

「いや…通信反応が山頂を示しているみたいだ？」

山頂に？…あそこには特に建物のような物はなかったと思うけど、どういうこと？

「ええ？思ったよりも近いところにいるってことですか？」

「反応が示しているから間違いないだろう…とりあえず向かうか？」

「何が起きているのかしら？」

アタシ達が山頂へ向かおうとすると、背後からドタバタと足音が聞こえてくる…

「あややや!!待ってくださいいよ!第0部隊!!」

「!？」

その方向を見ると、こちらへとやってくる文の姿…手には書類のようなものを持っている…

「何よ文…今忙しいのだけど？」

「忙しいところ申し訳ないですが!!緊急事態なのですよ!!貴女達のお仕事が無い込んで来たのです!!」

「何だ騒々しい…貴様の新聞配達はやらんぞ…」

夜喪妓がイライラと睨むが文は首を横に振る…

「違いますよ!今回はこの妖怪の山に異変が起きたのですよ!!」

「…異変？」

妖怪の山に異変?そんなものは感じていないけど…忌梗のこととか関係があるのかしら?少しでも情報が欲しいわね?

「…いいわよん?話を続けて」

「良いのですか?毎乃葉様？」

睡煉がアタシに言うが、止める必要性はないわ…メリットがある可能性があるなら時間は割いてあげるわよ

「いいから…」

「…では話を続けていいのですね？」

文はアタシが了承したのを確認したのか再度口を開く…

「妖怪の山の山頂に妙な神社が出来たんです… 天狗上層部はそれを警戒しています…」

「神社？」

… 神社？何でそんなものが出来たのかしら？でも急にできたというのは変ね？

「どこかの変わり者が神社を建てたって話でしょう？何で上層部がそれを…」

「それだけではありませんって！山頂には今までなかった湖まで出来たんですよ！只神社を建てただけでは私達もここまで動きませんって！地形まで変動していれば警戒はしますよ！」

「… 湖ねえ？」

… 湖は確かに今までの情報ではなかったはずね？… 地形まで変わったとなると… これは… 何者かの力が働いているか…

ならアタシの仕事は決まったわね…

「話は理解したわ… このアタシの力を貸してもらいたいというわけでしょう？じゃあ… さっさと神社へと…」

「あ！違いますよ！毎乃葉は！… ここに来るであろう博麗の巫女を止めることが今回の仕事ですよ！」

「… は？」

… 今何て言ったのかしら？アタシも耳が遠くなったみたいね？

「… もう一回お願い… アタシの仕事は？」

「だから！博麗の巫女を止めることです！」

… ああ… 今回の異変のお仕事は厄介になりそうね

「… 何で？何でアタシが霊夢を止める必要性があるのよん!!」

「上層部は博麗の巫女が山で暴れることが一番の危険だと判断してこ

のような結果に確定した次第です…。神社の件は後程進めていくと
のことで…」

…最悪だ…。何でアタシが彼女を止める必要性が出てくるのよ
ン!!!あの子強いから戦いたくないのよン!!

「へ…。平和的解決はないのかしら?まだ霊夢が来るとは決まってい
ないし…」

文は書類をめくりながら首を振る…

「残念ですが…。多分来ると思いますよ?今回の神社の者が博麗神社
に喧嘩を売ったとか?」

「…ぐうう」

…最悪の結果になってしまったわ…。霊夢の相手をするものが
確定してしまつた以上…。忌梗の搜索が困難になるわね…。ここは
最善の策をやるしかないわ…

「夜喪妓!睡煉!!神社の探索は任せたわ!!」

「え?」

「私達にか!?!」

両者は驚きの声を上げるが、これは最善ことなのよ…。霊夢が来た
ら探索の妨害をされるかもしれないからね…。アタシが時間を稼ぐ
しかないわン…

「頼んだわよ…。アタシが霊夢を止めるから…。アンタ達は忌梗をお
願いするわ…」

両者は少し迷つたような素振りをするが、夜喪妓が山頂へ続く道へ
と向かう…

「夜喪妓さん?」

「同志睡煉…。向かうぞ…。これは同志每乃葉の命だ…。忌梗の奴が
助けを求めているのだ…。ことは迅速を急ぐのだぞ」

「うう!!…。分かりましたよ!!」

両者はそのまま山頂への道へと進む…

後は任せたわよ…

「では！毎乃葉!!今回のことは任せましたよ!!」

「はいはい…今回ばかりは本気で行くわよ…」

アタシは博麗神社方面へと飛び立つ…

… 霊夢との戦いね?… やり辛いけど… 今回ばかりは人命が

掛かっているから… 本気で行くわよ?

潜入と現人神

妖怪の山の山頂にできた謎の神社と湖…。その調査を任せられた第0部隊のメンバーである夜喪妓と睡煉は、かつての第0部隊のメンバーである忌梗からの救難信号を受け、リーダーである天逆每乃葉の命令で調査に向かっている…

リーダーである每乃葉の不在による彼女達だけの任務…。この任務は無事に成功するのであろうか？

side 夜喪妓

「山頂までもう少しだ…。気を抜くなよ！同志睡煉！」

「分かっています！夜喪妓さん!!」

私達は山頂へと続く道を急ぐ…。まさか同志每乃葉が博麗の巫女を止めるために別任務に向かわされるとは予想外だ…

だが…。同志忌梗が助けを求めている…。何としてでもこの任務は確実に成功させなくては!!

「…。進軍やめだ…。同志睡煉」

私は睡煉を止めて物陰に隠れる…

「どうしました？」

「身を低くしろ…。目的地だ」

私の視線の先には、大きな神社の境内が目映る…。ここが目的地だ…。随分と立派な神社のようだ…

「あら…。立派な神社ですね？」

「ああ全くだ…。こんなものよく気づかれないで建てたものだ…」

私は眼帯を取り、ズームアップで神社を観察する…

建物は材質からして年季の入ったものようだ…。新築というわけではないようだ…。ここに来て建造したわけではなく、まるで元からあった物をどこからかレポートしてきたかのように…

「実力者の本拠基地というべきか？」

「それで…。忌梗の居場所はわかります？」

通信機を確認すると、救難信号はこの神社の裏から来ているよう

だ… 神社の内部ではないからある程度侵入が楽になるな…

「神社の裏からだ… 場所からして湖か？内部ではない以上この神社は関係ないようだ…」

「なるほど… 大体の場所は絞り込めたみたいですね… これなら助け出すのも時間はかかりませんって!!」

「どうだろうな… 見張りがいる…」

境内の方を見ると、そこには緑色の髪をした巫女らしき少女が境内の掃除をしているのが目に付く…

明らかにこの神社の関係者… こういう輩は油断しないほうが良い… 何かの力を持っているのは間違いないだろう…

「… やりますか？」

同志睡眠が手術刀を構えるが私が手で制す… 今回の任務は忌梗の救出であり、殺してはない…

「やめておけ… とりあえず裏へ回るぞ…」

… この神社の主は私たちの手には余る… 正体がわからない以上警戒するに越したことはない…

私達が裏へ回ろうとすると、神社の巫女が急に私達の方に振り向く…

「む!!そこにいるのは誰です!!」

「…」

「…」

まずいな… 気づかれてしまうとは… こちらは気を付けていたはずだが…

「どうしますか？」

「見つかった以上やるしかないだろう…」

私はライフルを巫女に向け、巫女はライフルを驚くような顔で見つめている…

「泥棒ですか!!神社への狼藉は許しませんよ!」

「泥棒ではないのだが… 少々そちらへと用があるのでな… 大人しくしてくれると助かるというものだ」

巫女は負けじと私へ向けて一步踏み出す…

「そんな脅しには屈しませんよ!!」

強気だな… 見目からして戦いを経験していない一般人の割には
頑張ったほうだろうな

だが… 勇気と無謀を履き違えているようだ…

「大人しく寝ている!」

彼女に向けて発砲する… 私の能力で弾丸は生き物のようにグネ
グネと動く… これで避けられるはずがない…

「…ふう」

巫女は避けようともせず、その場にいるだけだ… ?

ふ…

私の弾丸は巫女の横を避けるように通過する!?

「な?」

馬鹿な… 狙いは決めていたはず… なんて無防備な相手を的に
して外すのだ?

巫女はこの機会を逃さんとするばかりに私へと近づく…

「これが奇跡の力です!!泥棒さんにはお仕置きが必要です!!」

巫女は袖の中からスプレーを取り出して私へと向けて噴射する…

「… 何だこれ?水?… っ!!?」

あ… あれ?何だ!!?目が染みる!!顔がひりひりする!?

「い… 痛い痛い痛い!!お… おま… 私に何をかけた!!ごほ!!」

「暴漢撃退用催涙スプレーです!!持っておいて正解でした!」

くそ!!なんて物を持っている!!目が痛い!!涙が止まらない!!涙で視
界が!!息が辛い!!

ま… 待て!!このぎまでは私は力を発揮することが!!

「さて！お覚悟を！！」

巫女は攻撃に移っているようだが！！こんな状態では無理だ！！

「撤退ですね！夜喪妓さん！！」

「っ！！」

同志睡煉に抱えられて事を何とかする…

「ああ！！もう一人！！」

「すみませーん！！撤退しまーす！！」

同志睡煉は私を抱えたまま撤退し… 彼女は神社から離れて下山する…

「おい！！同志睡煉！！このままでは同志忌梗の助けが！！」

「出直しですよ… 夜喪妓さん… 貴女の目が使い物にならなくなつた今… これ以上は徒労になります… 今は撤退して… こっそりと別のルートから侵入しましょうよ」

「…」

使い物にならないとは酷いな… だが彼女の言葉にも一理あるか…

それにあの巫女… 何かの能力者だな… 私の弾丸を回避するとは… 少し考える必要性が出てきたな…

「うう… 目が痛い…どこから水洗いしたい…」

「神社の裏手から参りましょうか？目的地の水辺もありますし… ここでなら巫女も気づかないはずですよ」

私たちは裏へと向かう…

一方その頃… 妖怪の山の中腹では博麗の巫女を止めるため、天逆

毎乃葉が待ち伏せていた…
彼女は切り株に座りキセルに火をつけて只彼女を待つ… もつともその顔色は優れないが…

side 毎乃葉

「…ふはあ〜」

妖怪の山の景色に向けてアタシは紫煙を吹かす…

とりあえず忌梗の救出は夜喪妓と睡煉に任せただけ… アタシの仕事がハードなのは変わらないわん…

博麗霊夢の相手… 幾らこのアタシとはいえ、彼女の相手をするのは手に余るわね…

「ふう〜」

それにやりづらいのよね… アタシを認めてくれる数少ない子だし… 本気を出すのは気が引けるわん…

「…っ…げほ!!」

…でも…今回は人命が掛かっている以上手は抜かないわ!!心を鬼にして!今回は本気で行くわ!!

アタシはホログラムを出して辺りの空間を確認する…

…予想通り…ここへ急速なスピードで来る生命体達がいるわね?1つの色は紅白…ターゲットの登場ね…

「座標確認つとねえ…それじゃ…不意打ちと行くかしら?」

アタシはその座標へと飛び立つ!

「そおい!!!」

「!?くっ!!!」

突発攻撃を仕掛けると…ビンゴ♪

アタシの目の前にはこちらの攻撃を弾いて後退する霊夢の姿があ

る… それなりに速かったはずだけど？… このアタシの攻撃を見切るなんて油断できないわね？

「あ… アンタ毎乃葉!!」

「はあい♪霊夢… お久しぶりねえ？」

彼女へ向かって手を振るが… 彼女は怒りの表情を浮かべている…

「お久しぶりじゃないわよ!!急に襲い掛かって何のつもりよ!!」

「… 怒らないでよう… このアタシもお仕事で忙しいのよね…」
「仕事？」

霊夢はアタシに聞き返す… なんとなく察しはつくと思ったけど… 鈍いわね？怒りで頭が働いていないのかしら？

「ここをどこだと思ってるのよん！ここはアタシらの本拠地である妖怪の山… 部外者が急に来たら当然でしょう？それに… 山の住民も酷い目にあっているみたいだし」
アタシはホログラムを周囲に出す…

その画面に移っているのは… 霊夢にやられた者の姿の数々…

秋神姉妹… ひな人形… 河童… その他 e t c の悲惨な姿が収録されているわね…

「だからアンタが駆り出されたというわけ？アンタを相手している暇なんてないのに！」

「喧嘩売られたんでしょお？新しくできた神社に？」
「… 知っていたのね」

霊夢は僅かに狼狽えている… 案外効果的かもしれないわね？相手の動機を先出すのは？

「まあ… お仕事だからね… まあ… 後でアタシも神社には用があるから目的は違えど同じかもしれないわね…」

「目的が同じなら協力しなさいよ！」

「今回は駄目ね… 人命がかかっているから幾らアンタでも通すわけにはいかないわね…」

「人命？」

「これ以上の情報漏洩はしないわん… 大人しく退いてくれると助か

るわねン！」

アタシの言葉に対し霊夢はお祓い棒を向ける…

「退くわけ無いでしょう！… アンタまた退治されたいの!？」

「ほほほ!!」

… また退治ねえ?… この際だしハッキリさせておくべきかしら?このアタシの本気の戦いをね?

「… いいわよン♪今回は本気で遊んであげる… 来なさいよ♪2人まとめて相手したげるわ!!」

「2人?」

霊夢は不思議そうに辺りを見回す… あら?説明不足だったかしら?

「ほほほ!!出てきなさいよ… 魔理沙… アンタもいるのでしょうか?」

アタシが言うと、下の木の陰から白黒の魔法使いこと霧雨魔理沙が霊夢の隣に現れる…

「まさか私の気配に気づいているとはな…」

「もちろんよ♪ここに来る者を全て警戒していたもの… 当然よ」

… 本来の仕事は博麗の巫女を止めることだったから放っておいてもよかったのだけど、忌梗の救出を邪魔されると本末転倒なのよネン… 手間は増えるかもしれないけど誤差の範囲よ

「魔理沙?アンタまで?」

「ああ!妖怪の山に神社ができたと聞いたからな!侵入したまではよかったんだが… まさか毎乃葉がいるとは予想外だった」

「本拠基地だもの… 当然よ… さて?念のため聞くけど?退くつもりはないと捉えてよいのよね?」

「当たり前よ!!」

「当たり前だ!!」

2人は同時に答える… これで確定したわね…

「ほほほ!!分かったわ… では… 潰されないように気をつけなさいよン!!!」

霊力を高めてアタシは2人へと向かう… 今回は本気… 加減は

できそうもないわね？

とりあえず・・・寝てもらおう感じになるかしら？

本物の暴力

妖怪の山の頂上に新たな神社ができた異変…

それに向かう博麗の巫女を止めるため、天逆每乃葉が駆り出された
今回の状況…

本来霊夢だけを止める予定であったが、いつものメンツ…霧雨魔
理沙の介入により每乃葉の仕事に狂いが生じている…

2名をまとめて相手をすると決めた每乃葉は最大出力で彼女達に
挑む…

side 霊夢

「さて… 2人纏めてかかってきなさいよん…」

每乃葉は腰に手を当てて挑発するように私達を見据える…

彼女からは以前とは比べ物にならない力が溢れている… 今回が
彼女の本気だというの？

「每乃葉か… 今回は厄介だな… こいつの本気は戦ったことがな
い」

「私も同じくよ…」

前に歪んだ満月異変の時に每乃葉の半身である… 美羽と柚神と
戦ったことはあるけど… あれは彼女の本気ではないわ… 今回ば
かりは油断はできないわ…

「おほほほ… どうしたのかしら？二人とも？そんなに警戒してい
は、このアタシの暴力に負けてしまうわよん？… 土符（オーバ
ーチャージ）」

每乃葉は笑いながらスペルカードを発動する…

特に変化はなく… 彼女の体に電気のようなものを纏っただけ
だ… 特に攻撃らしいものは仕掛けてこない…

「!？」

「おほほほ… さあ… どこからでもどうぞ… 今のこのアタシは無

「防備よん！」

彼女は攻撃することもなくキセルを吹かしているだけだ…
彼女の性格からして、これはないわ…明らかに攻撃を誘っている…
毎乃葉の攻撃パターンは…美羽と同じく力ずくの衝撃波攻撃と柚神の嫌らしい情報操作の混じった物を得意としている…

これはどうするべきか？

「ならーお言葉に甘えてやらせてもらうぜー！」

魔理沙は箒に乗ったまま毎乃葉まで突撃する！

「あ!?ちよつと!!」

毎乃葉相手に突撃は幾ら何でも無謀すぎるわよ!!!

「あらあら…そうくるのかしらん？」

「お前も悠長に構えている暇があるのか!？」

魔理沙は毎乃葉に急接近する…

ガシ…

「!？」

魔理沙の突撃は毎乃葉に決まったと思ったが…魔理沙の攻撃は
毎乃葉の手前で止まる…

「な!？」

「ん〜!?いい感じねえ…でもこのアタシ相手にこれはないわん！」

よく見ると魔理沙の箒の先を毎乃葉は摘まんで止めている!!彼女の
の右手1本で魔理沙の突撃を止めるなんて!!

「ぐ!!…うごかねえ!!なんて馬鹿力だ!!」

魔理沙は離れようとしているみたいだが、全く動いていない…完
全に抑え込まれているわね…

「馬鹿とは何よん!馬鹿とは?全く…このアタシに対する礼儀が
なっていないわね…」

毎乃葉はそのまま魔理沙ごと、箒をブンブン振り回す…

「おほほほ!!」

「おま!!うぎゃあああ!!」

振り回されている魔理沙が叫び声をあげている…。やはり每乃葉相手には直接攻撃は無理みたいね…

「さ・て・と・… 霊夢！相棒をお返しするわよん!!」

每乃葉は魔理沙を私の方へと投げつける!!

「うわああああ！霊夢止めろー!!」

魔理沙が飛んでくる…。私のとるべき行動は…

「… 二重結界」

「ぐはああああ!!」

私はスペルを発動し、飛んでくる魔理沙を弾いて事を対処する…。流石にも無理ね…。優しく止めるのはできないわ…

「れ… 霊夢… 私のことを考えていないのか？」

ボロボロの魔理沙が恨み言を言うが私は悪くないわ…

「元々はアンタの油断が招いた結果じゃないの!!反省しなさいよ」

「げほ…」

魔理沙は咳をしながら立ち上がる…。さっそくのダメージか…

これはどうするべきか？

「ほほほ… 相棒は満身創痍みたいねん？張り合いがないわん…」

每乃葉は右手を放電させながらキセルの煙を吐いている…

さっつきよりも力が増しているわね…

「悠長に構えている暇はあるのかしら？アンタの悪い癖じゃないの？」

「エンジンが温まるのに時間がかかるのよん…。でも？そうね…。今

度はこのアタシがやらせてもらうわー!」

每乃葉がさらに放電を開始する…

「!？」

每乃葉の力が急激に高まってきている？幾ら何でも速すぎるわ!!

「おほほほ!!!トップギア入れさせてもらったわ!!それでは2人も… ところで引導を渡してあげるわん!!!」

毎乃葉は右腕を引いて狙いを定め始める…

「！来るみたいだね！！魔理沙こつちに来なさい！！防ぐわ！！」

「分かった！」

魔理沙を近くに寄せて私は結界を張る…

「ないわあ…このアタシを相手にその程度…」

毎乃葉が腕を振りぬくと、衝撃波がこちらへと飛んでくる！！

「くっ！！」

衝撃波が結界に直撃する！！結界の維持に集中するけど！！これは！！

「霊夢！！」

「黙ってみてなさい！！」

衝撃波の威力が予想以上よ！！このままでは私達二人！！

「…残念ねン…このアタシの実力を理解していなかったのね…

これで終わりよン…」

毎乃葉は両手を腰に当ててため息をつく…そして…

びし！

「!?」

結界にひびが入る！！

それと同時に全てが弾け飛び私達は問答無用で吹き飛ばされる…

「…ん？」

…目を開けると青い空が見える…意識が飛んでいたかしら？

横を見ると、目を回した魔理沙が倒れている…これを見てすぐに

状況が理解できた…

私達は毎乃葉に負けたのだと…

「目を覚ましたのかしらン？随分と速いお目覚めねン」

声のする方を見るとそこにはキセルを吸いながら、こちらを眺めて

いる毎乃葉の姿が見えた…

「毎乃葉！・アンタ!!っ!!」

体に痛みが走りその場に蹲る… だめ… これ以上は無理よ…

「あらあら… 無理はダメよん?それなりに手加減したとはいえ… このアタシの一撃を食らったんだもの… これ以上の戦いはおすすめしないわ」

「アンタ… よくも!」

毎乃葉を見るが、彼女はこちらの視線を気にせず煙を吐く…

「そっちのお仕事の邪魔をしたのは悪いとは思っているわよん… でも… 今回ばかりはこのアタシも目を瞑ることはできないのよねん」

「… 確か人命救助だったわね」

「ええ… 貴女に邪魔されるのは目に見えていたからねん… 止めさせてもらったわん… 今頃アタシの部下達が救出をやっているはずよん…」

毎乃葉は満足気に煙を吐く…

人命救助… 彼女が他人にここまでするのは自分の部下でしか考えられない… わざわざ部下に救出に行かせるのだも… 確定ね… 夜喪妓・睡煉の他にあと一人いるのかしら…

毎乃葉を眺めていると彼女の目の前に画面が現れる

(毎乃葉様!!)

画面には睡煉の姿が映し出される…

「あら?どうしたのよん?霊夢達の処理は終わったわ!そっちはどうよん?」

(すみません!救出失敗です!)

「げほ!!!」

睡煉の言葉に彼女は咽る…

「撤退?」

「何があったのよん!!失敗って何よ!!」

(神社の巫女に夜喪妓さんが催涙スプレーかけられて使い物にならなくなってしまうんです!ただいま神社の敷地内に隠れています)

何時までもつか分かりません！」

「うそン…」

毎乃葉の口からキセルが零れ落ちる…。流石の彼女でも予想外だったのかしら？

画面が消えると、毎乃葉は気まずそうにこちらを見る…

「ほほ…。とりあえず失礼するわねン？ちよつと急ぎの用事が」
「待ちなさい!!」

去ろうとする毎乃葉を私は彼女の脚をつかんで止める

「ちよつと！このアタシは忙しいの！」

「私と魔理沙を治していきなさい!!そして神社へ連れて行きなさいよ!!私達の邪魔をした以上只で済むと思っっているわけ!!」

「知らないわよ！アタシはお仕事なの!!」

「毎乃葉く!？」

私の言葉に毎乃葉は急に委縮し始める…

「な…。何よン？アタシは悪くないわ！」

「次の警告はないわよ？早く私と魔理沙を回復しなさい！」

「…」

毎乃葉はしぶしぶと私達に力を与える…

「…ふう」

…。回復が早いわね？彼女の能力が効いているのかしら？

「んあ？」

気絶していた魔理沙も目を覚まして何とか元通りになったわね…

「もうこれで良いでしょう？じゃあアタシ行くから！」

「待ちなさいよ！まだ終わってないわ!!次は神社に案内しなさい!!」

「このアタシは看護師でもツアーガイドでもないのよン!!!それ位は自分で何とかしなさいよン!!!」

流石の毎乃葉も堪忍袋が切れたのか怒鳴り始める…

「次はないと言ったわよね？」

「…わ…。分かったわよ!!!だからそんな目で見るのはやめなさいよ

!!!
「每乃葉はしぶしぶと私達の前を先導する…彼女の扱い方と考えれば楽になるわね…」

「うまいこといったな…」

「ええ…残りは異変の黒幕の相手だけよ」

魔理沙に返答するが彼女は渋い顔をする

「…しかし、あいつもやっぱり実力者だよな？本気を出されると手も足もでないとは…」

「…そうね」

…確かに每乃葉は強いわ…今回戦ってみたけど、力をセーブしていた前回とは丸で違ったわね…

今回は彼女を威圧して何とかなかったけど…万が一成功しなかったら…

「次があるわ…へこたれている暇はないわよ」

「分かっている」

私達は每乃葉の後をついていく…今はこのことを考えている暇はない…目の前の異変をどうにかしないとね…

侵入

博麗霊夢と霧雨魔理沙の迎撃が起こった同時刻…

妖怪の山の頂上にて睡煉・夜喪妓はその巫女の襲撃により、近場に潜伏していた…

かつての仲間を助けるためだが、夜喪妓は目を負傷し、あまりにも分が悪い… 毎乃葉が来るまで持ちこたえるのだろうか？

side 睡煉

「… はあ… いつまでそうしているつもりですか？」

妖怪の山の頂点にある湖にて私はため息をつく…

「… ぷくぷくぷく」

目の前には、湖に顔を突っ込んで伏している夜喪妓さんの姿… 相目が痛いのでしょうか？一向に治る兆しがないです…

謎の神社の調査にて夜喪妓さんが神社の巫女により使い物にならなくなってしまった以上… これ以上の任務の遂行は厳しいというのに…

「夜喪妓さん？聞いてますか？」

「聞いている… ある程度はましにはなった…」

湖から夜喪妓さんが顔をあげる… 目がすごい充血していますが、何とか目を開けることはできたようですね…

「これからどうします？とりあえずは毎乃葉様に連絡したので救援には来てくれると思いますか？」

「できる限りは同志の手は煩わせたくなかったのだが…」

夜喪妓さんは不服を言いますが、もう遅い… 正直私達の侵入はバレていますし… いつまで持つか分かりません…

「とりあえず… 目的地はどこだ？それが分からんことにはどうする事もできません？」

「もう近いとは思いますが…」

… 私は受信機を手取る… 忌梗からの救難信号… だいぶ近づいてはいますが… ここは神社から離れています… あるのは大きな湖ですし… 一体どこに？

「本当に後少しというところですね… ですがここ湖ですよ？どこに忌梗がいるのか？」

「案外すぐ近くかもしれないぞ… この湖の中とかな…」

夜喪妓さんは湖を指さす… 何という頓珍漢なことを…

「この中に水没しているというんですか？不死崩れな流石の私達も長期間の息止めはできませんよ…」

「馬鹿か… 同志睡煉… あいつの能力を忘れたのか？あいつの能力は過酷な環境でも耐えることはできるのだぞ…」

「… ああ… そういえば… そうでしたね…」

… 忌梗の能力を完全に忘れていました… 確かにあれなら何とかありますが…

「でも？能力使う必要ありますか？泳いで出ることが出来るはずですよ…」

「…？のっぴきなならない状況にでもなったか？しかしだ… 探すところは大体は絞れたはずだ…」

夜喪妓さんが湖を指さす

「さあ！行け！！」同志を見つけるのだ！

「急な無茶ぶりを言いますね… 私は鮎を釣る鵜ではないのですよ？」

「適材適所だ… お前の能力を使えば何とかなるだろう？」

「はいはい…」

私はエラを作り出して潜水に備える… これでなら水の中の探索もできるというものです…

「ふう… では行きますね」

「ああ… 朗報を期待するぞ…」

夜喪妓さんを別れて私は湖の中へと入る…

さて… 忌梗はいますかね？

side 夜喪妓

「頼むぞ同志睡眠…」

とりあえず… 救出には行ってもらえたか… とりあえずは上々…

残り私の仕事をするべきだけか…

「いつまで見ている？こちらは気づいているぞ？」

何もない空間に言う…

「… あはは！気づいてた？気配は消したと思っていただけだねー？」

辺りに少女のような声が響く…

「それでも… それなりには勘が良いのでな…」

同志睡眠は気づかなかったようだが… 嫌な視線は感じていた…

「へえ？そうなの…」

何もない空間から一人の少女が飛び出す…

金色の髪に青色の着物のようなものを身に着け… 頭には… 目

のついた帽子？のようなものをかぶっている…

「侵入者が誰かと思えば… 2名とはね… ここに何の用？」

「ただの人探しだ…」

「人探しねえ？何でうちの湖に入ってしまったのが分からないし… 随

分と妙なものが侵入してきたものだね…」

少女は私を怪しむかのような目をする…

「妙とは何だ？私は只の兵士にすぎん…」

「只の兵士な訳ないでしょう？とある神霊と同じ霊力を出してよく言うよ」

「…!？」

「そして… さっき飛び込んだのもとある神霊と同じ霊力を持っていた… 懐かしいものだけ… 君たちは見た目は丸で違う… 丸で同じものを複製したような感じだよ」

一目見たただけで見破るとは恐れ入る… やはり只者ではないよう

だ…

「…何者だ」

「ん？この神社の関係者だよ？さつきも言ったけど…妙な2名が侵入したから確認しにきただけ…うちの敷地に侵入してきたんだ…私もある程度のことはしないといけなからね」

少女は鉄の輪のようなものを取り出して私に向ける…今回の任務の関係者…つまり…あの神社を出現させた者ということか…明らかに実力者のようだ

「…できる限り戦闘はしたくないのだがな」

…目がまだ完治していないし調子も宜しくないがやるしかないか…

「それじゃ行くよー」

「時間稼ぎ位はさせてもらおうぞ!!」

私は少女に向けてライフルの発射する！

一方その頃妖怪の山神社付近にて…

「毎乃葉!!まだなの!？」

「早く案内しろって!!」

「…」

博麗霊夢と霧雨魔理沙…そして無理やり妖怪の山を案内させられている天逆毎乃葉の3名が妖怪の山の頂上を目指す…

side 霊夢

「はあ…」

私達を先導する毎乃葉が大きいため息をつく…

「何よ？不満なの？」

「それはそうよん… 何でこのアタシがこんなことを… それに… 今回のお仕事は貴女達を妖怪の山に入れないことよ？ それどころか真逆なことをやっているのがバレたら後が怖いわよお… 下手したら始末書だし…」

每乃葉は不平不満を言う…

「妖怪の山の頂点にある神社が今回の異変だろ？ お前たち妖怪の山だってあの神社には困っているはずだ別にいいだろ？」

「私はあの神社に喧嘩を売られた… アンタの方は仕事ともう一つ理由がある… 今回のことはお互いに利害が一致しているからいいでしょ？」

「それはそれよお… お仕事は〜！ 着実にこなさないと駄目なのよん… もしこんな状況誰かに見られでもしたら… あ…」

每乃葉が急に足を止める…

「何よ？ 急に止まって？」

「何だ？」

私達が每乃葉の顔を覗き込むと彼女は顔を青くしている…

「嘘でしょう？ 何で予定通りにいかないのよ…」

「…？ 何を言ってる…」

ビュウー!!!

言葉を言い切る前に突風が辺りに吹き渡る…

「あやややや?! 何で貴女達がここにいるんです？」

「每乃葉様が止めてくれたのではなかったのですか？」

目を開けるとそこには、天狗である射命丸文とその部下の犬走権の2名が佇んでいた…

每乃葉は目を泳がせながら、額の汗を拭っている…

「えーとね… やっぱり今回の件は協力してもらった方が色々利があると思ってる」

「每乃葉… 貴女のお仕事の内容は何ですか…」

文が每乃葉の言葉を一蹴する…

「…博麗の巫女とその他侵入者の排除です」

每乃葉は大人しく答える…

「それとは真逆なことをしていますよね？もしかしなくても…天狗の組織の命令に逆らうというのですか？」

「いやいや!!アタシとしても不本意なの!!戦闘で勝ったのに無理やり言うこと聞かされたのよ!この子達を止められる訳ないでしょう!!この威圧に逆らえないわ!!貴女だって今回のミツシヨンが無理難題だってこと分かるでしょう!!?」

每乃葉は文の肩をつかんで揺さぶるが、文は毅然とした態度のままだ…

「…気持ちはわかりますが…お仕事はお仕事です!!每乃葉!今回の貴女は命令違反を起こしました!今回の反省文を今すぐに提出…」

「…ちっ」

每乃葉は軽く舌打ちをした後、目に付いたスコープを取り外して文の目をジーつと見つめる…

「…」

「な…何です!私は暴力には屈しませんよ!!仮に私に暴力を振るつたら更に罪が…」

「更に罪が重くなる?このアタシが…何の罪を犯したというのかしらあん?」

「な…何ってそれは…?あ…あれ?…確か?」

文は頭に手を当てて考え始める…

「何をしたというの?何か罪でも犯したというのかしら?このアタシに教えてもらえる?」

「えーと…あれ?何でしたっけ…」

…?何か文の様子がおかしいわね?何か急に度忘れでもしたのかしら?さつきとは打って変わって大人しくなっている…

「每乃葉… アンタ何を…」

「…！」

每乃葉は私の方をにらむように一瞥し、また文の方を向く…

「… 通してもらえるかしら？アタシたち… まだ仕事中原のよ… そろそろ眠くなってくる頃じゃないかしら？いい加減休んだらどう？」

「… ええ… そうしま… す」

「文さん!!」

文の方はフラフラしており、椀が文の体を支える…

每乃葉は椀の方に近づく…

「ねえ？もみちゃん？今回の件は黙ってくれるわよね？」

「え？でも…」

「ね？」

每乃葉は椀に更に近づく… 彼女の言い方は優しいものだが、体から出る威圧感がすごいわ… 心なしか… 椀の方は怯え始めている…

「は… はい…」

「お利口さんで嬉しいわね… じゃあ文を連れて戻ってもらえるかしら？」

「は… はい!!!」

椀は文を抱えて逃げるようにその場から去る…

「… じゃあ進むわよ」

每乃葉は何事もなかったように進み始める

「いや！待て！お前文に何をした？あの状況普通ではなかったぞ！」

魔理沙が流石にも止める…

「アンタの情報操作能力かしら？」

「まあ… それに近い能力かしら？催眠術に近い感じね… もみちゃんの方は軽い脅かしら？少し可哀そうなことをしたけど時間がなのよねン」

暴力的で脳筋のイメージがあるけど、毎乃葉にはこれがあるから厄介なのよね・・・

「てつきり暴力で解決すると思っただけど？」

「それも候補の一つだけど・・・文達の相手をするのは時間がかかるわ・・・今回ばかりは時間はかけれないわ・・・アタシの部下達がいつまで持つか分からないし・・・」

彼女はキセルを吹かして頂上へ行く道を指さす・・・

「お目当ての神社はこの先・・・こうなったら一蓮托生よん・・・目的はお互い違うけどこの異変を終了しましょうか・・・」

「ええ・・・」

「ああ・・・」

私達は神社へとつながる道を進む・・・

何とかここまで来れたけど・・・まだ先は長いわ・・・今回は毎乃葉が味方になってくれるから何とかかなると思うけど・・・

奇跡の軌跡

博麗霊夢・霧雨魔理沙・天逆每乃葉の異変解決組が、やってくる中…

妖怪の山の湖の中では、每乃葉の部下である睡煉が湖の中を散策する…

水面の外では夜喪妓が戦っている中、彼女のできることは一つ…湖の中から発せられる救難信号へ向かうこと…

異変の外で、彼女は任務を達成できるのだろうか？

side 睡煉

「むー！」

湖に潜った私は辺りを見回す…

澄んだ水だから視界は安定していますが、如何せん広いです…これは一人で探すとすると苦戦を強いられてしまいます…

「あーもう…」

とりあえず…奥深くまで潜ってみましょうか…とりあえず救難信号の発生場所へと近づければ何とか…

事は早急に行わないといけませんね…何か嫌な予感がします…

「每乃葉様・夜喪妓さん…お願いしますね」

私は更に奥深くへと潜っていく

一方その頃…妖怪の山の山頂付近にて、妖怪の山へ殴り込みに来た博麗霊夢と霧雨魔理沙…そしてなんやかんやで巻き込まれてしまった天逆每乃葉の3名が妖怪の山の天辺に現れた神社へと辿り着く…

神社に喧嘩を売られた霊夢と部下の救難信号によつて呼び出された每乃葉…互いに当初の目的の場へとたどり着くことができたの

だ…しかしこのままうまく事を運ぶことはできるのだろうか？

side 每乃葉

「…」

アタシたちの目の前には大きな神社が目映る… 思ったよりも立派な神社ね？

「よし!!このようだな!」

「やっとたどり着いたわね… やつとたどり着いたわ」

アタシの後ろでは人の気持ちも知らずに意気込んでいる2名がいるがどうなることやら… これからが本番だっというのに…

「はあ…」

とりあえず… 考えなくてもこれからのやることは激務になることは確定ね…

これだけ大きい神社だし何がいるかは予測ができないわ… それに夜喪妓を倒したとかいう巫女もいるようだし油断はできない…

それにこちらは忌梗の回収もしてはいけないわ… 迎撃と救出… 2つ同時にしないといけないから今回のことはミスはできない…

「はあ… とりあえず入るとしましょうか… お邪魔するわよん…」
アタシは神社の鳥居をくぐる… とりあえず奥へ進む必要が…

「次の侵入者見つけ!!!」

「!?!」

突如神社の奥から弾幕がこちらへと撃ち込まれてくる…

アタシたちはそれぞれその弾幕を回避して体勢を整える

「随分と手洗い歓迎だな…」

「ええ… そうみたいね… 出てきなさいよ!」

「やはり不意打ちではダメなようですね」

霊夢の言葉に神社の柱の影から一人姿を現す…

緑色の長い髪をし、白い服と青のロングスカートの少女…手にはお祓い棒を持っているし、この神社の巫女かしら？

「この神社の巫女で間違いないわよね？」

「ええ！侵入者さん！私こそこの神社の巫女・そして現人神の東風谷早苗です!!」

自分を早苗と名乗った少女は胸を張って不敵な笑みを浮かべている…

「現人神？」

魔理沙が首をひねっている…ふーん…理解できていないようね…

「現人神はこの世に人間の姿で現れた神のことをいうわね…まあ本当のことか分からないけどね…」

「むっ!!その目は信じていませんね!!これでも強いんですよ!さつきだって変な侵入者を撃退しましたし甘く見られては困ります!」

早苗はアタシの方を不機嫌そうな顔で見つめている…

ただの人間にしか見えないけど、警戒が必要なようね…夜喪妓を倒したのはこの子のようだし…事を慎重に運ばないと…

「さて…どうしようかしら…?」

「…御託はいいわ…とりあえずこここの巫女だつてことが分かれば私は充分なのよ…」

アタシの前に霊夢が立ちふさがり、早苗と対峙する…

「何ですか?やる気ですか?」

「私の神社に喧嘩売ったことは後悔させてあげるわ…毎乃葉…ご苦労様…ここは私がやっておくからアンタはアンタの仕事をしなさい」

「ん?…ん?…」

何かしら?霊夢からすごい怒気を感じるわね…もしかしなくても相当怒っているのかしら?ちよつと怖いんだけどお…

アタシがまごついていると、魔理沙がアタシの軍服を引っ張りなが

ら耳打ちをする…

「おい… さつきと行け… 私は霊夢がやりすぎないようにここで見張っておくからさ…」

「ん…？そしたらお願いしようかしら？」

アタシは3人から離れて神社の奥へ向かおうとする…

side 霊夢

「とりあえず… アンタの相手は私… いいわね？」

毎乃葉を下げさせて私は早苗の方を向く… どんな実力があるかは分からないけど… とりあえずやることはやっておくべきね

早苗は私の方を一瞥した後、毎乃葉の方を向く

「貴女もここから先へは通しませんよ!!」

ここから離れようとした毎乃葉だったが… 早苗からの弾幕が彼女の方へ来る…

「毎乃葉！」

「悪いけどお… アタシの方は関係ないのよん…」

彼女は弾幕を掻い潜り早苗の後ろへと着地し彼女の両肩に手を当てる…

「な？速い？」

「このアタシに簡単に後ろをとられるんだから… 実力の差くらいは分かるでしょう？」

彼女は笑みを浮かべながら、顔を青くしている早苗の首に手を当てる…

「毎乃葉… 遊んでいるんじゃないわよ… こいつは私の相手だって言っただわよね？」

「そんなの分かっているわよん… 余計なことほしなけれど… これは没収させてもらうわねん！」

毎乃葉の右手には何やら小瓶のようなものが握られている… 早苗はそれを見て驚きの表情を浮かべている

「あ!!それは私の防犯グッズ!!」

「こんなもので夜喪妓の奴が撃退されるとは… あの子も鍛えなおしが必要かしら？」

每乃葉はその小瓶を握りつぶし、境内にその残骸がボロボロと落ちていく…

「では…ごゆっくり」

そのままヒラヒラと奥へと進みいなくなる…

「早苗はしばらく茫然としていたが、我を取り戻したのか、私達の方を向く」

「むー!!あの鳥みたいな人には逃げられましたが貴女達を倒して追いかければ問題は…」

「悪いけど…アンタには彼女を追いかけることはできないわ…ここで私に退治されるんだからね…」

私は夢想封印のスペルカードを展開して、周囲に光弾をばらまく…

「な？何ですかこれはー!!!」

早苗は辺りを見回しながら狼狽えている… もうすでに彼女は囲まれた… これで詰みよ

「おーい… 霊夢… 退治はダメだからなー相手人間だからなー」
魔理沙が遠くに逃げながら私に苦言を呈す…

「大丈夫よ… この子に幻想郷のルールってやつを体で教えるだけだから…」

「ちよっ！ま」

ドカーン!!!

第一爆発が炸裂し辺りに黒煙が舞う… とりあえず本気でやらしてもらったわ… 早い幕引きだったけどこれでいいわね…

「さて… 每乃葉を追う…」

黒煙の中から光弾が私の方へと来る！

「!？」

体を捻りそれを回避するが…これは！

「負けるわけにはいかないですよ!!」

黒煙の中から早苗がこちらへと突っ込んでくる！馬鹿な直撃したはずなのに!!

私は距離をとり、彼女から離れる…何かの能力かしら？下手な真似はできなくなったわ…

「何かの力かしら？確実に仕留めたと思ったのだけど？」

「日頃の行いが良いんですよ私…流石にも危ないかなと思つたのですがうまく回避できましたね、奇跡の力に守られている私にはこれは朝飯前です」

「奇跡？」

「ええ…私は奇跡を起こす程度の能力を持っています…だからいい方に事が運ぶことが出来るんですよ…今の避けられないような攻撃にも何事もなく回避することもね」

能力で回避？さっきの攻撃は本気でやったんだけど…これは本物みたいね…

「さて…幻想郷の巫女さん!!貴女に神の加護がある私を倒すことができますかね!」

早苗はお祓い棒を私に向ける…

「霊夢よ…」

「…え？」

「私の名前よ…博麗霊夢…覚えてかしら？これからアンタのいう奇跡って奴をぶっ潰す者の名前よ…魔理沙!!」

「何だ!!私も加勢するのか!」

遠くで魔理沙が言うが、私は首を横に振る

「逆よ…手を出すんじゃないわ…アンタは先に行つて毎乃葉のサポートでもしてやりなさい」

「…あいよー!」

魔理沙は箒に乗り神社の方へと飛んでいく…これでサシの勝負になったわね

「1対1ですか… 悪くはありませんが… 私を倒せますかね…」

「アンタが何回奇跡を起こそうが… 全部叩き出すまでよ！」

お互いにスペルカードを構える… 時間がかかりそうだけど… やるまでよ！

「夢想封印」

「大奇跡（八坂の神風）」

お互いのスペルがぶつかりあう!!

上には上がいる

妖怪の山のとっぺんにできた神社に天逆每乃葉・博麗霊夢・霧雨魔理沙は辿り着き、その神社の巫女こと東風谷早苗に勝負を挑まれる…

霊夢と魔理沙に早苗の相手を任せた每乃葉は、神社の奥へと急ぐ…

かつての部下からの救難信号は近い… 目標まであと少しとなっているが…

side 每乃葉

「… 目標が近い… 忌梗の場所までもうすぐね」

救難信号の座標はここ… この場所にあの子がいるのね…

神社を通りこし、眼前には大きな湖が広がってくる…

「あれ？また新手？」

「!？」

突然の声にアタシは辺りを見回す… 馬鹿な… 気配を感じなかったのに…

「ど… ど… ど…?」

「ここだよここ…」

コートの背を引っ張られ後ろを向くと、そこには金色の髪をし、青い着物のような服を身に着けた少女がいた…

… 変な目玉のついた帽子を被っているけど… 何か嫌な力を感じるわね…

「この神社の主かしら？悪いわねえ勝手にお邪魔しちゃって…」

「んにゃ… 別に構わないよ… 主はあいつの方だし…」

少女は帽子を被り直し、アタシをじっと見つめる…

「今日はよく客が来る日だね… 神もどきと天逆每かぁー… この世

界は向こうの世界とは違って色々なものに会えるんだね…。」

「は？」

アタシの正体を見破った？何なのよこの子… 神もどきというのは… 夜喪妓と睡煉のことか…

「アナタ何者？」

「名乗るほどではないよ… 理由はどうであれ敵地で無警戒で来るのはいただけないね… 先ほどのスナイパーの方がよく見えていたというのに」

「夜喪妓のこと？」

「うん… あそこで伸びているよ…。」

少女が指さす方向には地面に突っ伏して倒れている夜喪妓の姿が！

「な？」

「それなりに強かったかな？大丈夫く軽くのしただけだし…。」

「… ほほほ」

ブン!!!

少女に向けて鉄扇を振る… だけどアタシの攻撃は空を切り、代わりに灯籠が一本破碎音を立てて倒れる…

「いきなり攻撃とは乱暴者だな…。」

少女がゆらりと別の場所から現れる…

「このアタシの可愛い部下を痛めつけたのだから当然でしょお？」

「だって人の敷地内に勝手に入っている方が悪いでしょう？」

「言い返すようだけど… こっちのテリトリーに勝手に神社を立てたのは貴女達よん… それに貴女のところの巫女が更に面倒な仕事を増やしたせいで本来の目的を行うこともできやしない」

「目的？」

「ちよつとこちらの話よ… この敷地内に部下が一人遭難していて

ねえ…その救助が本来の目的なのよん…」

「部下？さっきの片割れのこと？自分から湖に入っておいて遭難はないんじゃない？」

「そっちではないわ…湖の方でもそこで伸びている方でもない、もう一人のことよん…」

少女は辺りを見回す…

「…いや…まさかあゝ？この敷地内はこっちの範囲だけど…それっぽい生命反応は感じない…出鱈目いうんじゃないよ」

「出鱈目ではないわ…貴女でも能力を発動したあの子を感知することできないわ…」

…あの子の能力は強力なもの…その気になれば永遠に存在すらできるかもしれないわね…

「何を遊んでいる？諏訪子？」

「!?」

突如声が響き、神社の方からこちらへと向かう人影を確認する…紫色の髪をした女性、長さはセミロングぐらいで、赤い服に茶色のスカート姿…背には常連縄のようなものがついている…

「あ！神奈子！遊んでないよ！この天逆毎の相手していたんだ！」

諏訪子と呼ばれた少女は神奈子と呼ばれた女性に抗議している…

「…確かにアタシは天逆毎だけど…正式名称は天逆毎乃葉っていう名前があるんだけどお」

アタシも僅かに抗議するが、神奈子はじつとアタシを見つめるだけだ…

「見目は違うが確かに天逆毎のようだ…偶然にできた産物か？それに？」

今度は倒れている夜喪妓を見つめる

「そっちの方も見目は違うが、ある神霊の力を感じる…お前ら何者だ？」

「答える義理はないわ…用が済んだらこっちから消えるわよ」

「無礼な奴だ… 少し力量を確認した方がいいのではないか？」
神奈子から少しづつ力が溢れだしてくる…

「あら？やるの？このアタシはそこらへんの奴とは違…」

ズズズズ…

な… 何？この力？彼女達から、このアタシよりも濃い力が溢れてくる…

というより… 何で神力が？

「驚くことはないだろう？私は外の世界から来た山の神、八坂神奈子！真正正銘の神である！」

「神!?そんなのって…」

「嘘ではない… そこにいる洩矢諏訪子も土着神… 崇り神と言えば分かるだろう？」

「はい！どーもー！」

諏訪子がアタシの方を見て手を振る…

2名の神？なんてことよ… アタシよりも格上が2名この場にいるなんて…

冷や汗が体中を伝う… このアタシが力の差で気圧されるなんて… そんな…

「さっきの威勢が消えたな？每乃葉？今なら見逃してやることもないが…」

「さあ？どうする？」

2柱が好き勝手に言うけど、アタシの選択は決まっている！

「誰が逃げ出すかー!!! そんなもの関係ないわ… 2人纏めてかかってきなさいよー！」

全力の霊力を纏って2人に対峙する… 撤退なんてことは絶対し

ない!!部下を置いていく位なら散ったほうがマシよ!!!

ザバーン!!!

「ふいー!!回収完了つと...」

突然の水しぶきにより、アタシたちはその方向を見る...

そこには湖から出てくる睡煉... 彼女は何やら泥やら枯れ葉の塊のようなものを引きずっている...

こんなバツトタイミングで現れるなんてっ!!

「あら?残りが来たか?」

「こいつも...そこで伸びているのと同じか...」

2柱の方は睡煉に集中しており、睡煉はアタシの存在に気づき手を振る...

「毎乃葉様ー!忌梗見つけましたよー!汚いけどこれですよー!」

睡煉がアタシの方に泥の塊を投げる!!

アタシはそれをキャッチするが、あまりにも原型を留めていないわ!

「ああもう!!」

能力を使い、表面の泥などを落としていくと、次第に泥は人の形に変わり始めてくる...

「!!」

泥を落とすきると、そこ現れたのは、黒い長い髪の少女... 長い髪を一本にし、青い軍服に身を包み顔半分には赤紫色のガスマスクを着けている... 正真正銘... 忌梗!!

でもアタシの腕の中の彼女は、眠っているかのように停止している... 動く気配を見せない...

「忌梗!!忌梗!!起きなさい!!」

「……こんな事ってないわ……せつかく見つけたのに……こんな……」

「……」ぱち!

「!!」

腕の中の彼女は目を開けて体を僅かに起こす……

「しゅこー……しゅこー……」

ガスマスク越しの彼女の吐息が辺りに響き、彼女はボーっとした目でアタシを見つめる……

「……幾千年ぶりの再起動……忌梗戻りました……隊長」

「っ!!もう!!すぐに起きなさい!!」

腕の中で……彼女の温もりを感じる……この子も生きてる……良かった!これで全員生存が確定した!

「……」ほ」

忌梗が咳をし、彼女のつけているガスマスクの隙間から血が流れる!!?

「ちよー!どうしたのよ!!」

「今頃になって……あの時のツケが来るとは」

彼女はお腹を押さえる……よく見ると腹部から血が溢れている!

「な……何なのよー!」

「あの時の……宇宙船の爆発の時の怪我が進行した……だけです……タイミングよく体全体を停止させたのですが……能力を解いたらこうなる……」

「こんな怪我のままっ!!ずっと待ってたのねっ!」

本当に待たせてしまっ!!ずっと助けがくるのを待っていたのに!!こんな怪我のまま!!ずっと!

「あ……でも大丈夫です……死にくい体ですので……」

忌梗はすくつと立ち上がり、アタシから離れて辺りを右往左往する。血がドバドバ出ているというに!!

「ふむ… 空間がおかしい… 昔とは違う… 道理で私の通信機が幾ら経過しても繋がらない訳だ… 大方何かの妨害にあっていた… いや… まさにバリアのようなものにシャットアウトされていた…」

忌梗はぶつぶつと何かを呟いている… 待って… 怪我しているのに…

「忌梗ちよつと…」

忌梗は睡煉の方を見つめる

「ふむ… 久しぶりだね… 睡煉… 相変わらすその玉兔の姿をしているのか… ちなみに夜喪妓はどうした… 君がいるんだ… 彼女もいるのだろうか…」

「えーと… いるけど… 今は確か？」

睡煉も夜喪妓を探す… そして伸びている夜喪妓を一緒に見つめる

「何で伸びているんですかー!？」

「ふむ… 大方ボコられたのだろうか… 彼女をここまでやるということは… つまり… あそこにいる2柱のうちのどちらかに敗北したのだろうか…」

未だに血がドバドバ出ているのに、抑揚のない声で彼女は長文を述べている…

「あの… 安静にして? ね?」

彼女はアタシの言葉が耳に入らないのか、困惑している2柱の方へ向かう…

「えーと?」

「何だ? こいつは?」

「ふむ… 神か… 流石の隊長でも2柱の相手は分が悪い… ここは私も復帰祝いとして盛大に花火をあげるとしよ…」

彼女は懐からグレネードを取り出す!!!

「安静にしろー!!!」

ドグシャー!!!

アタシは彼女を頭から地面に叩きつける…

「え?ちよつと!毎乃葉様!!」

「睡煉!!忌梗と夜喪妓を連れて撤退なさい!!」

「え?でも!!」

「いいから!!!ここはアタシがやるから!!怪我を治させなさい!!いいわね!!」

「はいー!!!」

睡煉は忌梗・夜喪妓の両名を引きずりながら撤退する…

これで… いいわ… これに収まったわ…

アタシは2柱と再度対峙する…

辺りに気まずい空気が流れている気がするけど… アタシは悪くないわ!!

「え… えーと?感動の再開だよな?いいの?」

「ええい!!うるさいうるさい!!哀れみの目でこのアタシを見ないで!!!」

「… 一緒に帰っていいぞ?さっきの奴が無茶しかねんし」

「うううう!!うるさいうるさい!!!情けをかけるなー!!!」

2柱から哀れみのような目で見られているわ!!!何でこのアタシがこんな!!

アタシは能力を最大限まで引き上げる!!

「え?やるの?」

「ボコられたいなら!かかってきなさいよ!!!」

「いや… もういいだろ?」

「来ないなら!こちらから行くわよー!!!」

アタシはヤケクソ気味で2柱へと走る!手あたり次第に暴れてやるわんー!!!

暴れた結果

妖怪の山の頂上にできた神社の異変と部下からの救難信号を受けた今回の事…

それを解決に向かっていた博麗霊夢・霧雨魔理沙・そして天逆每乃葉が率いる第0部隊のメンバー・睡煉と夜喪妓…

霊夢達が神社の巫女である東風谷早苗を相手にしている中、第0部隊はメンバーの1人である忌梗の救出に成功したが、その神社の神である八坂神奈子・洩矢諏訪子の2柱の相手をする事になった…

每乃葉は部下を逃がし、やけくその状態で2柱と相手する事になったがどうなる事か…

「これで終わりよー！」

「きゃあ!!」

霊夢の放った光弾は早苗に命中し、彼女は石段に倒れて動かなくなる… どうやらこちらの戦いは終わりを告げたようだ…

「ふう… 手間取ったわね」

「おい… 大丈夫か？あいつ伸びているけど？」

息を切らす霊夢に魔理沙が指を指すが、彼女は気にしていない…

「軽く手加減したから大丈夫よ… それよりも今回の黒幕がいるんでしょ！こんなところで油を売っている暇はないわ」

霊夢は奥に見える湖を見つめる…

每乃葉が向かった先… あそこからは何やら強い力が発せられており、それはここにいる彼女たちにも確認ができる程だ…

「每乃葉が向かった方だよな？何かここからでも変な力を感じるな」

「ええ… 彼女の実力は認めているけど今回は嫌な予感が…」

「どいたどいたー!!」

突然声が響き彼女達はその方向を見ると、そこには第0部隊の一人である睡煉が夜喪妓と忌梗の2名を抱えてこちらへと走ってくる姿を確認する…

「どうしたのよ睡煉!」

「つか… パワフルだな1名を抱えたまま背負って…」

「撤退しまーす!!道を開けてくださーい!!」

睡煉は2人の言葉に返答せずに横を通り過ぎ神社からいなくなる…

彼女の慌てようを見た霊夢は湖の方を走り出す

「霊夢!」

「睡煉のあの状況!毎乃葉の奴が苦戦しているみたいね… 助けに行
くわよ!」

2人は湖へ向かう…

湖につくとそこは激戦地の後というべき惨状であった…

地面にはクレーター木々は薙ぎ倒され、あたりの灯籠は全て破壊されていた… 丸で何かがここで暴れまわったようなことになっている…

「何があった?」

「…」

2人が警戒して進んでいくと、急に足を止める…

湖の前に2人、こちらを見つめて佇んでいる姿を確認したからだ…

この2人こと2柱は八坂神奈子・洩矢諏訪子… 2柱はボロボロの
満身創痍であり、霊夢・魔理沙を手招きしている…

「ん?来いってか?」

「畏かしら?」

2人は警戒するが、神奈子が疲れ切ったような絞り出すような声を

あげる…

「その2人… こちらの負けでいいから帰って」

「は？」

「どういうことよ？」

「あとさ!!!この子も連れて帰って!!」

諏訪子が叫ぶ

「は？」

「あ… あれって」

よく彼女の足元を見ると、そこにはボロ雑巾と化した每乃葉が彼女の脚にへばりついていた…

着ている物はボロボロで泥だらけであるが、彼女からはまだ闘志が消えていない…

「まだだ… まだ終わって…」

「いい加減沈め!!」

どごお!!

諏訪子が每乃葉の頭を地面に叩きつける

「むぐおお!!」

しばらくその場でジタバタしていた每乃葉だったが、とうとう力尽きそのまま動かなくなる…

そして神奈子が彼女の襟首を掴み霊夢達の方へ来る…

「こいつを連れていけー!!神域が滅茶苦茶だ!!!」

「帰って!帰って!!」

「ちよ…」

「おい!引っ張るな!!おい!!」

2柱に無理矢理每乃葉を押し付けられ、2人は押し出されるように神社から追い出される…

「…」

「…」

神社の前に佇んでいる2人は足元に転がっている每乃葉を見つめた後、お互いの顔を見る…

「異変終わったんだよな？」

「多分ね？… 毎乃葉どうする？」

「… 放っておくわけにはいかないし、そこらへんの適当な天狗捕まえて持って帰らせるのが一番じゃないか？」

「… そうね」

2人は毎乃葉を引きずりながら守屋神社を後にする…

こうして今回の異変は毎乃葉が暴れた結果、尻切れトンボが如く終わることになった…

そして天逆毎乃葉は後日今回の命令違反が案の定バレ… 重傷の状態のまま始末書の提出を迫られることになったのであった…

苦手な物と時間の経過

妖怪の山の天辺に出来た神社の異変と救難信号の件から3日経過する…。いつもの異変通り普段通りの日常がやってくるはずだがそうもいかない

妖怪の山の封印牢では、包帯グルグル巻きの姿の天逆毎乃葉が机の前におり…。机の上は今回の異変での始末書が溢れている…

彼女は最後の書類を書き上げ、手にした筆を片手でへし折る…

「や…。やっと終わった…」

彼女は最後の書類を机の引き出しに入れ机に突っ伏す…

「やっと終わったのか？同志よ？」

「お疲れ様です毎乃葉様！」

「相変わらずデスクワークが苦手なようだ…。隊長…」

牢の戸が開くとそこには、第0部隊のメンバーである夜喪妓・睡煉・忌梗の3名が牢に入り、それを確認した毎乃葉は3名を不機嫌そうな顔で見る

「むー!!手伝ってくれてもいいじゃないのよん!!!」

「同志の始末書だ…。手伝うわけにはいかないだろう？」

「射命丸文に対する能力の使用…。犬走権に対する恫喝…。命令違

反…。山の一部損壊…。まだ何かありますよね？」

「もうない!もうないわ!!!これ以上の余罪なんてないわ!!!」

睡煉の言葉に毎乃葉は顔を青くするが…。何かまだあるのだろう…。とりあえず始末書を終わらせた彼女が体を振る…

「でも…。何でバレたのかしら?できる隠蔽はやったし…」

毎乃葉は空間にホログラムを出そうとするが、出たホログラムは画面に砂嵐のようなものとノイズが走っている…。調子が悪いようだ

「駄目…。演算できないわ…。今回ばかりはボコボコにされたし休憩が必要ねン…」

「しかし今回の異変…。私達は早急に撤退したが…。まだ世界という

のは広いものだな…。私達よりも強いやつがいるとはな」

「仕方ないですよ！今回の異変には神がいたんですから！！相手は太古の神…。私達は複製品…。実力には差があるのは当然でしょう」

「実力には差があるとはいえ…。隊長は善戦したし結果はよい…。十分」

ばあん！！

個々に今回の異変の感想を述べていると封印牢の戸が開かれて誰かが入ってくる

「はい！お仕事は終わりましたか？！」

「お疲れ様です」

入ってきたのは射命丸文と犬走権の2名…。彼女たちの姿を見て毎乃葉は頭を掻く

「…さつき終わったところよん…。酷いわねえ…。怪我人に始末書を書かせるなんて」

「それは命令無視をした貴女が悪いんです！！反省してください！」
文は反論した後、忌梗の方を見つめる

「あやや…。また1人増えましたか…。ここも賑わいそうですね」

「この子で最後よん…。このアタシの部下は少数精鋭なのん！」
「…」

忌梗の方は入ってきた文と権を目を見開いて見つめている…。その視線に気づいたのか権の方が忌梗に近づくと

「貴女が新しい人ですね！私は犬走権といいます…。よろ…。」

「ひびく！！！！」

忌梗は権から一気に距離をとる…。ガスマスクの所為で表情が読み取り辛いが顔は真っ青で冷や汗ダラダラである

「どうした？同志忌梗？椀が自己紹介しているのだ…失礼だぞ？」
「忌梗？どうしたの？そんなに狼狽えて？いつもの貴女は冷静だとい
うのにな？」

「!!!」
夜喪妓・睡煉が言うが、忌梗は言葉を発することなく首をブンブン
と横に振る

「…？どうしました？お体でも悪いのですか？」
「!!!」

椀が近づくが、忌梗はとうとう尻もちをつく…そして

「い… 犬を私に近づけないでー!!!」
とうとう叫び始める…

「い… 犬？」

夜喪妓が首を傾げるが、忌梗は半泣きになっている
「無理無理!!イヌ科だけは昔から無理なんだ!!助けて!!!いやああああ
ああ!!!」

普段抑揚のない話し方をする彼女が珍しく発狂するのを見て夜喪
妓と睡煉はお互いの顔を見る

「こいつが犬を嫌いなもの知っていたか？」

「いえ… この豹変ぶりを見る限り… そうとうかと」

2人は椀の方を見るが、椀の方はショックを受けたかのように部屋
の隅で体育座りをしている

「… あ」

「ああもう!!こっちもダメージが!!」

「犬じゃないです… 狼ですもん…」

そんな椀を見て毎乃葉が立ち上がる

「ちよつと!!忌梗!!もみちゃんに謝りなさいよん!!もみちゃんは!G
OD GIRL!GOOD GIRLなのよん!!!」

自然に椀を犬扱いする毎乃葉に椀の涙腺が決壊する

「うわあああん!!! 每乃葉様のバカー!!!」

椀は泣きながら牢を飛び出し

「NOOOO!!! もみちゃん!! カムバーク!!!」

自分の失言に気づいた每乃葉は手を伸ばすが時すでに遅し…

「椀に対するハラスメント… これはまた始末書物ですね」

「普段からセクハラしているアンタに言われたくないわん!!!」

「セクハラではありません!! 愛の鞭です!!」

每乃葉と文が口喧嘩をしている隣で夜喪妓は忌梗を起こす

「ほら! 立て!! い… 椀はいなくなつたから」

「うぐぐぐ!!!」

忌梗は何とか立ち上がるが、足はガクガクである…

「動物実験していたのに… 犬が苦手とは驚きです…」

睡煉が何気なく口を開くが、それを聞いた忌梗は顔を俯かせる

「…」

「あ… ごめん」

自分が禁句を言ったことに対し睡煉が頭を下げるが、忌梗は首を横に振る

「いや… 事実」

いつも通りの感じに戻つた彼女だが、牢の空気が重くなつてくる

「あやや… 空気が重い… 私はお暇しましょうかね…」

文は逃げるようにその場から立ち去り、每乃葉は溜息を洩らしながらコートを羽織る

「飲みに行くわよ」

「え?」

急な每乃葉の言葉に睡煉が驚く

「忌梗の歓迎会やってないじゃないの… アタシも始末書を片付けたし問題ないわ」

「私は構わんが?」

「隊長……」

忌梗が每乃葉を見つめるが彼女は忌梗の頭に手をのせる

「気にする必要はないわ……これからをどう生きるかが大切なのよ
ン……ほら！行った!!」

每乃葉はメンバー3名を後押ししながら封印牢を後にする……

これで無事にメンバーが揃った第0部隊ではあるが、まだやることは多い……メンバーもリーダーである每乃葉も……